
どたばた！オーズ兄弟

ハルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どたばた！オーズ兄弟

【Nコード】

N7628T

【作者名】

ハルル

【あらすじ】

仮面ライダーだけが暮らす世界。この物語は、ある家に住む兄弟の愛と笑いと友情と仕打ちとタジャドル不遇とヤンデレと笑いとツッコミと笑いと不憫とツッコミの物語…！

コンボ兄弟設定（前書き）

随時更新する可能性があります。

コンボ兄弟設定

皆仲良し(？) コンボ兄弟。
その設定の一部を紹介！

長男・タジャドル(19)

基本的に不憫。特にプトティラには嫌われている。

大河ドラマをよく見る。

料理を作っても、ほぼ炭火料理。というか、炭。

主にシャウタとプトティラからの扱いが酷い。ただし、父親関係ではシャウタと組む。

兄としての威厳を回復させたい一方で、やはり家事面でシャウタには頭が上がらなかったりする。

父・ブラカワニにはシャウタ共々、金銭関係で頭を抱えている。

母親との手紙のやり取りが唯一の癒しだったりする。

プトティラとは出会ったその日から敵対関係だが、シャウタ関係だと連携を披露。

高校時代は弓道部、大学のサークルではアーチェリー部に所属。

プトティラとお風呂は火曜日担当。しかし、まともにこなした例がない。

実はブラコンで厨二病患者。

大抵、プトティラからはタジャ××と呼ばれ、作者からは不憫と呼ばれている。

次男・ガタキリバ（18）

ツツコミが主。ただし、ラトラーターと徒党を組むことも。

アニメが好きだがビデオ録画をしなければならない時間帯にしかない。

料理を作ってもゲテモノ料理にしかない。

分身能力で用事を一気に済ませようとしたこともあったが、全員が全員自由行動すぎて結局終わらなかった過去（例題：夏休みの宿題）も。

ラトラーターとは双子の関係だが、まったく似ていない。しかし、扱われ方は似ることもある。

ラトラーターが父親と同じニオイを醸し出しているのに、ガタキリバが似ていないのは奇跡かもしれない。

バスケット部に所属。

プティテラとお風呂は木曜日担当。

実はアニオタだけでなく肉級マニア。

語呂がいいのか、周囲や作者だけでなく、読者からも「バカキリバ」と呼ばれる。

三男・ラトラーター（18）

基本的に余計なことしかない。

音楽番組が好きだが時間帯の都合でシャウタ・サゴーズに負ける。

料理は作れないせいか、適当に買ってきたレトルト食品で済ませる。恐らく、第二の不憫。主にタジャドルとガタキリバからの扱いが酷い。

最近ではシャウタ・タトバからの扱いも不遇で、拳句サゴーズにマウントポジションで殴られたことも（原因：バナナパイ独り占め）ガタキリバとは双子の関係。ただし、扱われ方以外は似ていない。

【実は一番、あのチャランポラン親父の血を継いでいる】疑惑が浮上中。

陸上部に所属しており、短距離走の選手。

プトティラとお風呂は日曜日担当。

いい加減な性格なので、彼を好く者と好かない者の差が激しい。

プトティラは当初そのいい加減さ（雑に扱う）でタジャドルの次に嫌っていたが、プチトマトの件で和解。現在はブラカワニの次に懐かれている。

読者・作者・周囲から「アホライター」と呼ばれる。

四男・サゴーズ（17）

苦勞人というか常識人。ここテストに出ます。

時代劇が好きでマツケンのオーズ乱入に歓喜した。

料理が作れないのでバナナ。たまにリンゴ。最近ではシャウタにバナナを使った料理を教えてもらっている。

まともな人が兄弟にいないため、タトバとよく肩身狭く暮らしている。かもしれない。

でも怒らせると怖いのは確かで、一回、ライター辺りが本気で殴られた。参考はクウガ35話。

ちなみに、シャウタとはチャンネル争いをすることもあるが、笑点だけは仲良く見る。

柔道部に所属している。

プトティラとお風呂は土曜日担当。

最近では、スイッチ関係で余計なことをするせいで、「押すーゾ」が定着しつつある。フォーゼ、逃げろー！

五男・シャウタ（16）

炊事・洗濯・掃除・財政管理、家の総てを担う。

サスペンス劇場が好き。昼ドラも好き。とりあえずドロドロしたのが好き。

一番料理が作れる。弁当も朝食も夕飯もおやつも総て彼が担っている。いないと死活問題。

究極に近いぐらい闇が深い。愚痴は溜まりっぱなしであり言わない。タトバとはたまに愚痴りあうが、それでもほんの一部しか解消されていないらしい…

プトティラへの貴重ストッパー。プトティラが来た原因も彼だが、止められるのも彼。

頭に血が上りやすいし怒りやすいが、同時にかなりの泣き虫で寂しがり。

父親から溺愛されているものの、シャウタご本人は「どうでもいいから働いて金返せ」との弁。

Gと呼ばれる台所の生物、蛇、幽霊など苦手な物が意外と多い。

中学までは水泳部に入っていたが…？

プトティラとお風呂は水曜日担当（ブラカワニが戻るまでは金曜も担当）。ただし、実際は火・水の連日担当でもある。

実はクッションやぬいぐるみのようにもふもふしたものが好きで、もふモードに入ると語尾が「もふ」になる。

相当のファミコンで、タジャドルのブラコンと核融合すると大変なことになる。主に双子が辛い。

ペガサスとはフラグが立ち、下手をすればドラゴンを「義兄さん」と呼ばなくてはならなくなることに、シャウタも周囲も一部の読者も（きっと）気付いていない。

もはやあだ名はオカン。Xと合わせると、Wオカン（ただし互いに運がないのか不幸と不憫の相乗効果で大変なことになる）

六男・タトバ（15）

末っ子で貴重な“普通”。普通はこの家では貴重スペック。

バラエティー番組が好き。

料理は作れるが、見た目も味も個性がない（by・プトティラ）
タトバキックの不遇さに拗ねる毎日。たまにシャウタに愚痴って二人で地獄兄弟ごっこすることも。

個性がない上に普通、と言うのにコンプレックスを持っている。

パンツへの執着は人一倍で、語り始めると止まらない。

サゴーズと一緒に突っ込みをすることが多い。

サッカー部に所属。べっ、別にタトバキックを決める為の練習じゃないんだからねっ！

プトティラとお風呂は月曜日担当。

ペット兼居候・プトティラ（？）

ある日、（シャウタが美味そうだったから）家の壁を壊してやってきたトンデモペット。

テレビ？何それ美味しいの？

料理は出来ません。食べれば生肉でも何でもよし。ただし人の手を加えた料理に関しては煩い。

基本的に「食」にしか興味がなく、飯を与えないとプトティラ自体も腹の音も煩い。

それどころか、下手をすれば暴れたりする。

飯をくれる人（「シャウタ」の言うことは結構聞く。最近ではサゴーズとタトバ、ガタキリバにラトラーターの言うことも聞く。パパンは約1週間、龍騎に至っては短時間で好かれた。

ただし、タジャドルは嫌い。

やってきた当初は無口あるいは短絡的に喋ることしかなかったものの、騒がしい兄弟と暮らすうちにユーモアが発達した模様。原因は、ご飯争奪戦。

Gを唯一恐れずに撃退できる。

自分では上手く体を洗えないので、他の兄弟と一緒にお風呂に入っ

ている。

性別はふう。

シャウタとパパンとライダーマンが大好き。

意外と頭はいいのか、三馬鹿以上の優秀さを垣間見せる。

最近では、V3との「プト介」「プト介じゃないもん」がテンプレとなりつつある。

プトちゃん、プト介、ぷーちゃんと、色々なあだ名が存在。

ペット兼防犯装置・トライドベンダー(?)

とある世界から貰ってきた、ペット兼バイク兼防犯装置。

テレビの好き嫌いはない。

バイクが料理できれば、それこそ器用すぎる。むしろ、太陽光発電なので飯自体が(r y

クロックアップ・ハイクロ・フリーズ使用可能、

登録外の人間には容赦なく攻撃(緑で認証・解除可能)し、

あるスイッチでカンドロイドを口から大量放出という、ハイテク機能満載。ただしハイクロとフリーズはスーパー1先生のお遊び。

Gは余裕のよっちゃん。勿論登録外なので、防犯機能が作動。

プトティラとラトラーターが交互に風呂に入り、日曜は3人で入る。ちなみに、ラトラーターはプトティラかトライドがいないと長風呂しない。

オーズ家では珍しい完全ツツコミポジションだが、トライド語を理解できる者がいないせいで誰にも分からず…

プトティラからはベンちゃん、作者やラトラーターからはトライドと呼ばれている。

父・ブラカワニ(45ぐらいで)

放浪癖の激しい親父。殆ど思いつきで行動する。

テレビは意外と、ニュース関係をよく見ているとか（特に天気情報）。

料理？毒物レベル。

ピンポイントでタジヤドルかシャウタ関係の金を無断で使って、旅に行ったりパチンコに行ったり、たまにお土産と証して変な物を買ってきたり。

そのため、何故か狙われる長男と五男に酷く恨まれている。他の兄弟は「あーまたやったのか」ぐらいにしか思っていない。

子供の中では結構五男にべったり（溺愛的な意味で）。五男本人はゲンナリ。

Gは別に怖くないし、倒せるが、面倒なので放置。

プトティラとのお風呂は金曜日担当。彼が戻るまでは、シャウタが金曜を担当していた。

就職面ではおちゃらけた性格で損をしているが、プトティラにはその性格が好印象で好かれている。

しかしそんなパパンにも、ブレイド仏様のお陰で就職先が見つかることに。

もはや、兄弟以外からは「パパン」と呼ばれることのほうが多い。

001：タトバキックを決めたい！

タトバ「…うおおおおお！」

『スキヤニングチャージ！』

タトバ「セイヤアアアアー！！！」

ずどおおおん！

ガタキリバ「なあ、タトバの奴何してるんだよ」

ラトラーター「タトバキック決める練習なんだと。一回目はカザリのせいで邪魔され、二回目はバースと同時にだったから決まった扱いにされず」

サゴーズ「だから、パワーとスピードを高める為の特訓をしているんだって…俺もやろうかな、バゴーンプレッシャーの練習…」

シャウタ「だからといって、…カザリの人形なんてどっから持ってきたんだよ。まさかとは思うけど、買ったとかじゃないよ…？」

タジャドル「あ、それ、俺の大学の友達（ライア）が作ったらしい。何でも、ストレス発散用に使えたとか…」

サゴーズ「それ、明らかにシャウタ用のつもりでくれたんじゃない？」

タトバ「…駄目だ！急降下スピードが速くならない…一体どうすれば…！」

タジャドル「本気で頑張ってるな…」

ラトラーター「正直、残り12話でタトバキックが決まるとは到底…むぐっ!？」

ガタキリバ「バカ、お前、タトバの前でそれを言うな…『ラスト12回でシャウタの歌出るはずねえ』と同義だぞ」

シャウタ「 プトティラー、よかったな。今日ガタキリバの奴…夕飯要らないってさ……」

プトティラー「…！」 尻尾ふりふり

ガタキリバ「…うわああああ！ごめんなさい、ごめんなさああああい…！」

タジャドル（シャウタの前でそんなこと言うお前も迂闊だよ…）

タトバ「くそおお！こうなったら、急降下するときだけゾウレツグに変えるか…!？」

サゴーズ「いや、それ、もう既に『タトバ』キックじゃなくなってる！」

タトバ「なあ、誰かさ、必殺技必中！って言える奴いる!?どうやったら決まる…!？」

ガタキリバ「うわああああ…」 大泣き中

ラトラーター「まず、ガタキリバは無理だな。あの状態だと…」

サゴーズ「俺も無理。バゴーンプレッシャー、外れる以前の問題だから」

タトバ「ラトラーターあああああ…！」

ラトラーター「分かったって。……うーん、俺の場合、チーターレグを生かして加速し、敵の眼前で一旦停止して一気にって技だから」

タジャドル「正直、その“一時停止”って要らないよな」

サゴゾ「やるなら一気に走り抜けるって感じ？」

ラトラーター「ちよっ、全否定やめて!？」

タトバ「そうか……チーターレグで加速をつけて、一気に決めるのも……」

サゴゾ「いや、それじゃタカトラーターだから。タトバじゃないから」

タジャドル「俺は二つあー」

シャウタ「ギガスキャン禁止」

タジャドル「……まあ、スキヤニングチャージの方だと……あれだな。コンドルレグを展開し、クジャクウイングで一気に急降下してからの蹴りだから……」

タトバ「うーん、トラとバッタをリストラして、クジャクとコンドルにするのも……」

サゴゾ「いや、それ、タトバですらないから! タジャドルだから!」

タトバ「スキヤキャン必中率の高いシャウタ、お願い、秘訣教えて!」

シャウタ「俺の場合はなあ……まず、ウナギムチで相手を捕縛・逃げられなくした後にタコ足ドリルアタックだから」

ラトラーター「冷静に考えれば、えげつないよなお前のオクトバニツシュ……」

タトバ「……そうか、ウナギで拘束して……」

タジャドル「だから、それはタカウバだろうが!」

プトティラ「まず、肩にある角(?)を伸ばして、串刺し」
タジャドル「…」

プトティラ「次に、羽で風を起こして凍らせる」

ラトラーター「……」

プトティラ「そして最後に、凍った相手に尻尾でバーン……」

サゴーズ「うん、えげつない。えげつないよそっちの方が!」

タトバ「…タカトリティラ……!」

シャウタ「紫メダルの亜種はないぞ、タトバ」

タトバ「……駄目だ、どう足掻いてもタトバキックを決められる要素がまったくないorz」

ガタキリバ「…しくしく……」 まだ泣いてる

ラトラーター「オースバツシュは必中必殺じゃん。それでも駄目?」
タトバ「駄目!タトバキックを決めたいの!」

タジャドル「こりゃ、映画に期待するしかないな……」

ラトラーター「でも、映画も映画で序盤にコアメダル全部奪われるって聞くからな」。タトバキックなんて、決めてる暇ないんじゃない?」

タトバ「……orz」 再起不能

シャウタ「 プトティラ、ラトラーターの分も食べていいぞー」
プトティラ「シャウタ今日優しい!」

ラトラーター「嫌ああ!今日のシャウタえげつないいいーツ!」
?」

ガタキリバ「…」 とつくの昔に再起不能

サゴーズ「余計なこと言うところだけ、同じなんだから……この双子

は
…
)

ちなみに今日の夕飯は、皆大好きハンバーグでした

002：シャウタは苦勞人

プトティラ「めしーめしー」 本棚ガサゴン

タトバ「何してんの、あれ」

サゴーズ「シャウタが、『おやつはどこかに隠してあるからそれ食べなさい』って言うってね…」

タジャドル「正直あいつの性格だと、作るまでの時間稼ぎに言ってみただけって気が…」

プトティラ「…あだっ」

ガタキリバ「おい、何してんだプトティラ」

プトティラ「…頭の上に、何か落ちてきた」

ラトラーター「あれ、これ、アルバムじゃん。懐かしー」

タトバ「えっ、見せて見せて!」

プトティラ「アルバム……食べれる?」

サゴーズ「食べたら駄目!」

タジャドル「うわー、これ、俺が7歳のときのじゃん」

ラトラーター「ってことは、俺とガタキリバは6歳か」

サゴーズ「俺、5歳だ」

ガタキリバ「シャウタは…4つか」

タトバ「俺は3つってことになるなあ」

プトティラ「皆、ちっちゃい」

タジャドル「そりやお前、12年前なんだから小さいに決まってるだろ」

ガタキリバ「12年前か…」

く回想く

タトバ（当時3歳）「さーにーちゃ、だっこー」

サゴーズ（当時5歳）「ほーら、高い高いー」

タトバ「きゃっきゃっ」

シャウタ（当時4歳）「…ぶわあああああ！」

タジャドル（当時7歳）「こらー！誰だ、シャウタの布団の中にトカゲ入れたのー！！」

ラトラーター（当時6歳）「逃げろー！」

ガタキリバ（当時6歳）「いや、俺のほうに逃げてくるなあああ！」

タトバ「しゃーにーちゃ？」

シャウタ「えっぐ、ひっぐ…ぐずっ」

サゴーズ「あー、大丈夫かー？」

タジャドル「あの二人、後で焼いとくからもう泣き止めって。な？」

シャウタ「ぐず…」

サゴーズ「ほーら、泣かない泣かない」

く回想終了く

タジャドル「昔は、シャウタの奴泣き虫で…ガタキリバやラトラーターにいつも泣かされていたんだよなあ」

ガタキリバ「いやッ、大抵ラトラーターだから！俺巻き込まれただけ…！」

ラトラーター「えー、そうだったけ？」

サゴーズ「思えば、よく俺やタジャドルに泣きついていたっけ……そういえば12年前から兄の威厳がなかったよな双子は」

ガタキリバ「酷ッ！」

タトバ「あー、思い出してきた。よく、一人じゃ寝れないってタジャドル達と一緒に寝ていたんだっけ？」

プトティラ「ふーん」

タジャドル「…昔のシャウタといえば、甘えん坊で」

ガタキリバ「泣き虫で」

ラトラーター「よくタジャドルの後ろをついていった」

サゴーズ「臆病で」

タトバ「人見知りが激しくて」

タジャドル「でも今は、随分と怒りっぽくなって…」

ガタキリバ「兄である俺らにすら惨い扱いをするわ…」

ラトラーター「タジャドルへの扱いが酷いわ…」

サゴーズ「口悪いわ…」

タトバ「クラスメートの王蛇をぶん殴るほど強くなったわ…」

タトタジャガタラトサゴ「…どうしてこうなった…」

シャウタ「お前らのせいだよ！」 チェリーパイ持ってきたから

タトバ「え、なんで!？」

シャウタ「そもそも、俺一人に料理・洗濯・掃除・拳句の果てには金の管理を任せて…いや、お前らに任せると大変なことになるから自分で立候補したんだけどさ!少しはしっかりしてくれよ!!」

タジャドル「でも、もう少し優しくしてくれても…」

ガタキリバ「小遣い上げてくれない…」

ラトラーター「夕飯の量多くしてくれない…」

サゴーズ「昔のように甘えてくれない…」

タトバ「怒らないでくれない…」

シャウタ「……全員おやつ抜きがいいか？」

タトバ「ジャガタラトサゴ」「ごめんなさい」「」

003: Regret nothing兄弟Ver.

歌を流しながら読むと楽しさ倍増の作品です

シャウタ「くどいつ!!」

タトバ「えええ!？」

タジャドル（でも、分かる気がする…）

タジャドル「あの時、俺がもっとしっかりしていたら…」

シャウタ「俺がもう少し、注意していれば…」

タジャシャウ「あのクソ親父のせいで苦労しなくて済んだのにいい!!」

プトティラ「どしたの？」

ガタキリバ「昔の話」

ラトラーター「懐かしいな。確か、親父がシャウタの給食費から1万円がめたせいで、問題になったんだっけ」

タトバ「タトバキックが決まらない、タトバキックが不発…タトバキックタトバキックタトバキックタトバ（ry）」

ラトラーター「諦めたらそこで試合終了だ！」
サゴーズ「試合って何!？」

プトティラ「……お腹空いたああ」 タジャドルの足噛み付き中
タジャドル「ぎゃああああ!だからっ…俺を齧るなああ!」
タトバ「…俺、電王(プラット)と遊んでこようっ」と…
ガタキリバ「あー、俺、部活あるんだっただ」
ラトラーター「俺は…学校に宿題忘れてきたんだっただ」
サゴーズ「……く、クウガ(タイタン)と遊んできまーす」
タジャドル「無視しないでえええ!」

シャウタ「プトティラ! タジャドルは不味いからペツしなさい!」
タジャドル「じゃあ何でいつも俺を食わせるような発言するわけ!?!」
プトティラ「…ペツ!!」 吐き捨てる
タジャドル「そして解放されたらされたでムカつくな!？」

シャウタ「俺、親父が帰ってきたら…オクトバニツシュ無限拷問するんだ」
タジャドル「いいな、それ。俺もプロミネンスドロップで殺つていいか？」
タトバ「…二人とも、親父を殺ろうとする時だけ仲良しだよねえ…」
サゴーズ「仕方ない気もするけどな」

ラトラーター「あー、よかった。蚊取り線香あって…これでどんな

蚊も、一網打尽!」

ガタキリバ「死にかけ

タジャドル「ガタキリバアアア!」

シャウタ「だから殺虫剤の類は使うなとあれほどおお!」 水流
放出

ラトラーター「ぎゃーっ!?!」

プトティラ「シャウターどこー(ぐるるるるる」

タトバ「ぶ、プトティラの腹の虫が…」

ラトラーター「ど…どうするんだよ。シャウタの奴、まだ学校…!」

サゴーズ「…ここは、ラトラーターを縛り付けて盾にして、プトティラの腹を…」

ラトラーター「で、お前は何で俺を食わせる算段立ててるわけ!?!」

プトティラ「シャウター……(ぐぎゅるるるるるるるる」

タトバ「サゴーズ!しっかり持つてろ!」

サゴーズ「タトバ!早く縛れよ、長くは持たない!」

ラトラーター「やあああめろおおおー!?!」

シャウタ(帰宅)「……何してんだよ……」

ガタキリバ「…うぜえええええっ!」

タトバ「俺に文句言っなよ!」

サゴーズ(でも、正直くどい……)

ないとシャウタに首絞められるううう!!」
ガタキリバ「…!? (ゾクツ)」 何か感じた

シャウタ「ラトラーター、お前だけなんだけど…給料明細出してないの……」

ゴゴゴゴゴ…

ラトラーター「ひいっ!? ちよつ、探すから待っ…ガタキリバ何処行つたああ!？」

プトティラ「凄い勢いで家の塀飛び越えた」 スルメもぐもぐ
タトバ「…今頃、龍騎先輩の家に駆け込んでいるだろうな…」

シャウタ「ラトラーターアアアアッ!!」

ラトラーター「ぎゃあああああ!？」

シャウタ「いやー、包丁の研ぎ石をリュウガに貸したのを忘れててさー」

ガタキリバ「……いや、別に、いいんだけど…」 カマキリソードで大根カット

タジャドル「あ。ガタキリバ、リング剥いてくれない？」

プトティラ「むにー」 一口でスイカ食べようとした

サゴーゾ「プトティラ、ガタキリバに切ってもらえよ…」

タトバ「あ、それから、このプリント…切り取り線の所を切ってくれる? 鋏が見つからなくて」

ラトラーター「この32点のテスト、シュレッダーにしてくれない?」

ガタキリバ「何でもかんでも俺に頼むなあああ!」

タジャドル「後ラトラーター、その点数について…後でちよつと個人的に話そうか?」

タトバ「うわあ、すっかり暗くなっちゃったよ……」
シャウタ「ああ、こんな時、タジャドルがいたら……」
タトバ「炎出せるもんねえ」
シャウタ「いや、あいつを燃やして松明に出来たのに」
タトバ（よかったタジャドル不在で！）

〈幼少期〉

シャウタ（当時4歳）「うわああん、ラトにいがシャウタのケーキ食べたああ」
ラトラーター（当時6歳）「食べるの遅いのが悪いんだよー」
タジャドル（当時7歳）「こら、ラトラーター！……あーもー、俺のケーキ食べていいから泣くなって」

〈現在〉

シャウタ「 ラアアトラアアアータアアアーツ！俺のショートケーキ食べやがってえええええー！」
ラトラーター「ひーっ、ごめんなさ……ぎゃああああああああ」
オクトバニツシュ直撃
タジャドル「……力関係、逆転してるなあ……」
ガタキリバ「それでも、自分のケーキを（お供え用に）取っておく分、お前はまともな兄貴だよ……」

タトバ「……タトバキックが決まらなくても泣かないもん」
ガタキリバ「予算の都合で出番がなくても挫けないもん」
ラトラーター「（ガンバライドで）ライオディアスが誤植されても負けないもん」

サゴーズ「二度に渡って人質取られても頑張るもん」

タジャドル「プトティラに空中特化フォームとしての利点を奪われ
ても諦めないもん」

シャウタ「歌が出なくても生きていけるもん……！」 涙ボロボロ

プトティラ「……シャウタごめんなさい」 土下座

シャウタ「待てよ、待て、待て、」

プトティラ「……」

シャウタ「……」

プトティラ「がっつ」 目の前のクッキーに飛びつく

シャウタ「『待て』って言うてるだろ！『よし』って言うまで食べ
るなって……」

タトバ「何してるの、あれ」

サゴーズ「ペットとしてのしつけ訓練中」

タジャドル「……今更いるのか（シャウタに関しては）？」

シャウタ「歌が……出なくても、……生活には支障がないもん……」
泣きまくり

タジャドル「体は正直なんだから、お前はも……」

タトバ「これで拭いて！」 お気に入りのパンツ出す

ラトラーター「大丈夫か、ほらこれ」 雑巾出す

サゴーズ「常識の問題だよ！誰かバスタオル、それじゃないと間に
合わない……！」

ガタキリバ「バスタオルで間に合うか！？シャウタを浴槽の中にぶ
ち込めばいいんじゃないか！？」

プトティラ「あうあうあうあうあう」 プテラの凍結能力発動5秒前
タトタジャガタラトサゴ「……凍らせるのはやめなさい！……」

ラトラーター「…いつまでこうしてればいい？」
タジャドル「洗濯物が乾くまで、だろ」
シャウタ「恨むんなら、天気を恨むんだな」

（正月の話）

タトバ「今年の目標：タトバキックを決める！」
ガタキリバ「今年の目標：宿題早く終わらせる！」
ラトラーター「今年の目標：シャウタに怒られない」
タジャドル「（無理だろ）……今年の目標：単位落とさない、って
いうかそれ以前に大学合格」
サゴーズ「今年の目標：胃薬の消費を抑える！」
シャウタ「今年の目標：とりあえず出番」
プトティラ「シャウタ食べたい！」
シャウタ「プトティラとラトラーター、お前ら…おせち無し」
ラトプト「やだああああー！」

タジャドル「　だああああつ、蚊が煩い！蚊取り線香、蚊取
り線香何処だ！？」
タトバ「ガタキリバが撃沈するからないよ。ほら、虫除けスプレー」
タジャドル「お、ありが…ちょっと待て、【虫除け】って」
ガタキリバ「　死屍累々」
タジャドル「…ガタキリバアアア！！」

005・リュウガは親友

リュウガ「 38・5度、完全に高熱だなこりゃあ」
シャウタ「…ごめん」

リュウガ「お前はこの時期になると、必ず体調壊すからな。無理はしないで、安静にしてろよ」
シャウタ「……うん」

タトバ「どうもすみません、うちのシャウタを運んでいただいて…」
リュウガ「小学校からの付き合いだ、慣れた。……で、」
タトバ「はい…」

タジャドル「…シャウタが倒れた！？本当なのかそれは！」

プトティラ「あうあうあうあう」

サゴーゾ「訳：今シャウタ寝てる」

ガタキリバ「あちゃー、やっぱり夏が近くなると、あいつすぐバテるんだよねあ…」

プトティラ「あうあうあう」

サゴーゾ「訳：初めて知った」

ラトラーター「そりゃ、プトティラが来たのって去年の…秋ごろじやなかったっけ？知らなくて当然だって」

プトティラ「あうあうあうあー」

サゴーゾ「訳：今日のご飯どうなるの…あー、そうだよねえ…」

タジャドル「…俺が腕によりをかけて作ろう！」 炭化料理の天才
ラトラーター「ひとつ走りして、何か買ってこようか？」 レトル
ト王子

ガタキリバ「いや、お前らじゃ駄目だって、俺が作る！」 見た目
ゲテモノ料理が得意

プトティラ「がんばる」 丸ごと&生のまま

サゴーゾ「……皆駄目じゃない？」 バナナ安定

リュウガ「俺が夕飯を作るパターンなのは読めた」

タトバ「すいません…」 見た目も味も個性がない料理

リュウガ「もう慣れた。どうせなら、アホ兄貴（龍騎）も呼ぶか…
できるだけ食材持つてこさせて」

（10分後）

龍騎「お邪魔しまーす！」

ガタキリバ「おー、いらっしやい！」

ラトラーター「って…何、その食材!？」

龍騎「リュウガが持って来いって言ってるさー。とりあえずこっちの
卵は病人の雑炊用でー、こっちの鳥モモ肉は夕飯用」

サゴーゾ「わざわざすいません…気を遣わせていただいて」

リュウガ「作ってる間に、溜まっている洗濯とか食器とか片付けて
くれ。あー、兄貴はプトティラと遊んでろ」

龍騎「っしや。…プトティラー、俺としりとりして遊ぶか！」

プトティラ「ん」 頷く

タトタジャガタラトサゴ「……」

タトバ「……………うわあああああああ！」

…ガッシャーン！

ガタキリバ「ちょッ、何してるんだよタトバ！」

タトバ「だ、だって、つい手が滑って…うわあああ、これ、タジヤドルの皿なのに…」

ガタキリバ「そのまま拾うな！待ってる、塵取りと箒が何処かに…」
積み上げた皿に腕のカマキリソードが当たる

タトガタ「あ」

…ドンガラガッシャーン！

タトバ「うわーっ、うわーっ、うわーっ！？……………どうしよう、このコップ、シャウタのお気に入りなのに…」

ガタキリバ「いつ、急いで箒！ちりと…ぎゃーっ！」 飛び散った破片の一部を踏んだ

ラトラーター「なあ、洗濯機から泡が大量に出てるんだけど」

サゴーズ「うわっ、どれくらい洗剤入れたんだよ！」

ラトラーター「…一箱？」

サゴーズ「その発想が既に酷い！」

タジヤドル「とりあえず、このままだと壊れるかもしれないぞ！？」

サゴーズ「って、運転している状態で開けたらー！」

…ぶくぶくぶくぶく…

サゴーズ「……………泡が大量に流れ出ちゃうじゃん」

ラトラーター「あーあ」

タジヤドル「いやっ、お前が分量間違えなければなあ…！」

リュウガ「シャウタの友達として言う、…お前ら後で説教」
タトタジャガタラトサゴ「…ごめんなさい…」頭に一発
ずつ貰った

プトティラ「イチゴ牛乳」

龍騎「うわー…大変なことになってるな。いつの間にか」

プトティラ「カレーライス」

龍騎「凄いよな、シャウタって。家の仕事一人で全部してるんだから」

プトティラ「ラッキョ」

龍騎「よく考えると、ガタキリバ達の家ってシャウタがいないとマズいんだな…」

プトティラ「納豆」

龍騎「うん。本当に凄いよ、あいつ」

プトティラ「ツクシのおひたし」

龍騎「…シャウタにあまり苦労かけさせるなよ、プトティラ？」

プトティラ「ラズベリーパイ」

龍騎「いよっしゃ、そろそろ夕飯できた頃だな！……唐揚げ、つまみ食いに行こっか」

プトティラ「唐揚げ…行く！！！」尻尾ふりふり

全員纏めてリュウガに怒られました（シャウタも体調管理の面で）

006：小ネタその1

・映画情報公開に基づき親父解禁

タトバ「いやー、遂に映画情報が出されたね！」

ガタキリバ「みんな出番があるようでよかったな！」

ラトラーター「でも、あの揃い踏みの謎って一体」

サゴーズ「…ここでは兄弟集結扱いぐらいにしておこうか！」

プトティラ「鷗って食べれる！？」

シャウタ「食べません」

タジャドル「いや、それはいいんだけどさ」

タトガタラトサゴシャウ「…鷗が！？」「」

タジャドル「違う！…俺的にはな…」

ブラカワニ「よう！ただいま、マイ息子達！！」

タジャドル「再びこのクソ親父がうちの敷居を跨ぐことだあ

ああああ！テツメエどの面下げて帰ってきたああああ！！」

シャウタ「給食費の恨みはまだ消えてねえぞおお！」

ブラカワニ「あーっ、ごめんなさい、すいませんでした、………だから殴るのやめて縛るのもつとやめてえええ！！」

プトティラ「誰？」

サゴーズ「うちの親父。放浪癖が激しくて、しかもことあるごとに

タトバ「うん。思えば親父のせいで、生活費切り詰めてるんだよ」

ブラカワニ「いや、ちよつとそこからそこまで旅行してるだけじゃん!?!」……後、たまにパチンコ」

「タジャドル「っざけんなよ、それでどうして俺かシャウタの授業料
or給食費orバイト代（シャウタに関しては内職での賃金）をピ
ンポイントで狙うんだボケエエエ！」

「シャウタ、ただでさえ生活していくギリギリのお金しかないんだから、好き勝手してねえで働けエエエ！」

ブラカワニ「働いたら負けかと思っている！」

タジャシャウ（ブチツ）

「ガタキリバ、プトティラ、餡蜜食べようか！」

「ラトラーター、確か、シャウタが作っておいでたはずだぞ！」

プトティラ「食べる！」
尻尾ふりふり

サゴーズ「よし、じゃあさっさと行こうか……恐ろしい物を見る前に」

タトバ「……うん。……逃げようか」

「タジャシャウ」「いっぺん死に晒せええええ！」

スキャニ

ングチャージ

ブラカワニ「アーツ！」

・これで記念写真だったら切なすぎる（参考 映画の予告）

ラトラーター「カッコいいポーズ！」

ガタキリバ「こうやって剣を突き出せばカッコよく見えるか？」

タジャドル「ちょっ、ガタキリバ俺見えないから！？」

タトバ「えつと、えつ、これでいいの！？」

ブラカワニ「セーフ！」

プトティラ「おなかすいたー（ぐきゅるるる）」

シャウタ「後で作ってやるからしっかりしなさい！」

サゴーズ「あつちよつと待って、俺なんか変！取り消させてえええ！？」

タジャドル「結論：ラトラーターが親父の血を引きすぎ」

シャウタ「ホント殺意抱く組み合わせだよな？」

ガタキリバ「…あいつの双子の兄でもある俺を代わりにいたぶるのはやめてくれよ？」

・38話でコアメダルが奪われるフラグについて

シャウタ「……」 いじけた

タトバ「ごめんなさい！トラが、トラが……！」

サゴーズ「俺も奪われるフラグ立ったなあ……」

ガタキリバ「大丈夫、これで一層ラトラーターにフラグが立ったZ

E

ラトラーター「ちょ」

タジャドル「でも正直、クジャクとタカが取られたらアंकが追い

詰められるし…カザリの中にコアが残っている場合を除いても、白と青はリーチ掛かる危険性があるだろ、……安全圏は緑と黄色じゃないのか？」

ブラカワニ「いや、黄色も確実にアウト近いんじゃないの？」

タトバ「でも、ガタキリバだってカマキリはカザリの手元にあるらしいけど、他が…ねえ？」

ラトラーター「でも、なんかタトバはしぶとく生き残る気がする！」

タトバ「しぶとって言わない！」

ガタキリバ「でも、タジャドルもそろそろ戻ってくるだろ…どっかの雑誌の最後のページ（次巻予告とも言う）でタジャドルいたんだから」

タジャドル「…だけどメダガブリューは出ないと言う！」

プトティラ「タジャドル嫌い」

シャウタ「いいんだようせ…どうせ俺なんて、歌の初出しがWebラジオと言う扱いさ…二度と目の目を見ることがはない液状化さ…」

…！」 ビール一気飲みする3秒前

サゴーズ「お前ら少しはシャウタを気遣ええええ！？」

タトタジャガタラトブラ「…ごめんなさい！」「」「」

・シャウタの歌はwebラジオのほうで出るみたいです

タジャドル「来週だな」

ラトラーター「よかったじゃん！これで、歌ネタ全員分出せるぞ！
」

シャウタ「いいいいいようせ俺は二度と目の目を見ることはないんだメズール復活の時から思ってた差最初から歌がなかった地点で分かってた何この扱いあいっただけちゃんと活躍してるときに歌が流れてるって言うのに俺ばかり俺が何をしたんだ何をホント献身的に尽くしても見返りは存在しないってこのことだわあのクソ親父死ねばいいのにああもう生きる気力失せた泣きたくなくてきたもう料理作りたくない家事したくない何もしたくないこのまま海に還りたい永久の眠りに就きたい」

ガタサゴタト「「「馬鹿タジャラータアアアアー！」「」」
タジャドル「なんだその変な略！？」

ラトラーター「えっ、喜んでいただけなのになんで！？」

ブラカワニ「そして、何気に俺まで責められていた件について！？」

プトティラ「……タジャドル達のせいで、ご飯、ない……」 メダガ

ブリュー持ちながら前進

タジャラトブラ「「嫌ああああー！？」」「」

・シャウタの機嫌の直し方

その1【プトティラ無言の圧力】

プトティラ「……（うるきゅー）」

シャウタ「……何」

目を潤ませながら

プトティラ「ご飯食べたい……」

シャウタ「ない」

プトティラ「あうあうあうあうあうあうあう」 目に涙を溜めながら

シャウタ「…あーもー、分かったから泣かない。出来るまでの間、親父達殺戮してな」

プトティラ「あい」

タジャラト「「やめてええええ！俺達のライフはもう0よおおおおー！！」」

ブラカワニ「再生能力あるからって、そんな扱いやめてー！」

その2【おやつ献上】

ガタキリバ「…期間限定発売のレモンタルトです」

シャウタ「これ全員分？」

ガタキリバ「買ってまいりました」

シャウタ「…じゃ、皆で一緒に食べようか……おいプトティラ、1個確実に余るからそれ食べるか？」

プトティラ「食べる！」

ブラカワニ「いや、その余る1個って俺のだよね！？ちよつ、マイ息子！？」

ガタシャウ「「プトティラのだ！」」

人数分揃えて買ってこないと、「全員食ってないのに俺だけ食べるか」と逆ギレされる可能性があるため、人数関係を把握して買ってきてしよう

その3【ストレスの発散】

サゴーズ「…さあ！親父は縛り付けておいたから！！」

タトバ「思う存分、殺っちゃってください！」

シャウタ「……っしやあああああああ！16年間の恨みをその身に受けるおおおおー！！」

ブラカワニ「うわっ、解けない、……ちよつ待ってシャウタお前そ

んな子だっけ！？」

シャウタ「知らん過去は水に流した！」

タジャドル「…参戦OK？」

ガタキリバ「あ、俺も」

サゴーゾ「俺も」

タトバ「タトバキックの練習しよつと」

プトティラ「殺る」

ブラカワニ「えーちよつと何これ、味方いないの！？ラトラーター
！」

007：三男×3Ⅱ親父

ブラカワニ「おはようマイ息子達！」

シャウタ「失せろ」

ブラカワニ「シャウタ酷い！」

シャウタ「煩い」

タジャドル「まだいたのか」

ブラカワニ「いちや駄目なの！？」

タジャシャウ「じゃあ金返せ」

ブラカワニ「…俺、今度の宝くじで一山当てるんだ…だからその時に」

ぎゃああああああゝ…

ブトテイラ「タトバー、メダガブリューがない…」

タトバ「あー。多分、今、シャウタが使ってるんじゃない？」

サゴーズ「貸してあげなさい。シャウタだから壊さないよきつと」

ガタキリバ「しっかし、俺達…って言うかラトラーター以外、何をどうしたらあの親父から生まれたんだろうか」

ラトラーター「俺への言い分はどうでもいい。親父“から”は生まれてないよ！？」

ブラカワニ（包帯ぐるぐる）「…なー、俺顔見せてないのって何年ぐらいだっけ？」

サゴゾ「シャウタが中学校2年の時に、シャウタとタジャドルに『もう帰ってくるな』って追い出されたから……3年ぐらい経ってんじゃない？」

ブラカワニ「だからなのかなー、よそよそいって言うか、特にシャウタが酷い……」

ガタキリバ「いや、シャウタの給食費ガメておいてそれは……」

タトバ「タジャドルのバイト代拝借しておいてそれは……」

ラトラーター「シャウタの怒る原因なら、まだあるぞ？……例えば……あいつが内職して稼いだ金を、受け取ってそのまま使って……」

ブラカワニ「その時はホント反省してます！」

タトガタ「こつちのも反省しようか！？」

ブラカワニ「でも、たった3年で子供ってあそこまで変わる物なのか……？」

サゴゾ「……シャウタに関しては、5年ぐらい前からほぼあんたが発端で口が悪くなって言ったような……スレちゃったような……」

ガタキリバ「早い話、……シャウタの性格の大部分はあんたのせいだよなっていう」

ラトラーター「ホント、泣き虫で弱虫だったあの頃のシャウタ返してよ」

タトバ「お陰様で、多少捻くれちゃった上に（若干俺達も悪いとはいえ）家の総てを担っているから苦労も多いわ、自由はないわでストレス溜まって、口に出さないからどんどん心の闇が深くなる一方で」

ブラカワニ「思春期？」

ガタキリバ「平然とそんなことを抜かすあんたの口を引き裂きたい！」

タトバ「ガタキリバやめろ、こんな人でも殺したら犯罪！」

ブラカワニ「そして殺す前提！？」

タトバ「うん」

ブラカワニ「だが…確かに、俺も父親らしいことはしてこなかったからな…これからは父親としての責務を果たす！」

サゴーズ「主に何を？」

ブラカワニ「まずは…おい二人とも、遊園地に行かないかー？」

タジャドル「あ？失せろ」

シャウタ「まだいたんだ」

プトティラ「シャウタご飯」 お座り待機

ブラカワニ「…親子の溝が、深まる一方なんですが…！」

ガタキリバ「遊園地に行く程度で埋まると思った…あんたの頭の中を知りたいよ、俺は」

ラトラーター「しかもその金は、どこから出すんだ？」

サゴーズ「まずはお金を返そう。それからだ」

ブラカワニ「返しても埋まらないと思うのは俺だけ？」

タトバ「皆そう思ってるよ？」

ブラカワニ「くううつ、かくなる上は…」

サゴーズ「何する気！？」

ブラカワニ「 シャーウター」 背後から抱きつき

シャウタ「」

タトガタラトサゴ「」 何してんだあんたああ！？」」「」

タジャドル「……何気に、【父親としての責務を果たしたいなら、働き口を見つけて、金を稼いでから帰ってこい】って言っているんだがなあ」

タトバ「素直じゃないよねえ」

ガタキリバ「シャウタが口より手を出す性格だから、果たして伝わっているのかどうかすら」

ラトラーター「親父って、マイペースだからねえ。寝耳に水なんじゃない？」

サゴーズ「…一番その血を受け継いでいるラトラーターが、言うか…？」

シャウタ「ゼーはーゼーはー…、……ホント…あの馬鹿親父……」

プトティラ「？」

シャウタ「なんでもない、…昼食の準備でもするか」

プトティラ「おー」

008：寝不足に衝撃発言は禁止

ガタキリバ「…ぐがああああ…があああ……」
ラトラーター「ぐぴゅーぐぴゅーぷひえー」

サゴーズ「すごおおおおお……」
タトバ「…きいいいつく、たとばあああきいいいーつく……」
鼾です

プトティラ「むにゃーむにゃーむにゃー、…あうー」
ぎゅるるるるるる… 腹の音

ブラカワニ「うへへへへ…、……ぐううう…むひよおおお」

タジャドル「……眠れない…つか、親父なんで俺の部屋に上がり込んでるんだよ…」

シャウタ「…親父の部屋、プトティラが使ってるししょうがないだろ…」

タジャドル「お前も起きたのか…」

シャウタ「ラトラーターとガタキリバの部屋、サゴーズとタトバの部屋…これらの部屋に挟まれて、安眠が出来るか？」

タジャドル「その気持ち分かるわ…俺なんて、親父の部屋…つかプトティラの小屋が隣の上に、親父が部屋に無断で入ってきて……」

タジャシャウ「…眠れねえ」

タジャドル「…あーくそ、何で一斉に皆して早く寝るかなあ…！」
シャウタ「もー、何で皆こんなに酄が凄いんだろっ…ふああ」
タジャドル「もはや安眠は出来ないだろうし、来週提出のレポートでも纏めておくか…」

シャウタ「じゃあ、俺は、…予習でもするか…」

タジャドル「…」

シャウタ「…」

タジャドル「……………」

シャウタ「……………」

タジャドル「　なあ」

シャウタ「どうした？」

タジャドル「…別に急ぎのレポートでもないのに、眠れないからつてやるうとするのが、虚しくなってきた」

シャウタ「……俺も」

タジャドル「せめて、せめて夜食食べながら何か話さないか…！？
寂しすぎる………！」

シャウタ「駄目。食材勿体無いし、太るぞ」

タジャドル「ぐあー！…せめて、コーヒー………コーヒーが…」

シャウタ「水にしろ」

（結局水を飲んで会話となりました）

タジャドル「お前、最近どうなんだ？学校の方」

シャウタ「ホッパ―兄弟がやさぐれ、王蛇が喧嘩を始め、オーガが落ち込んで掃除用具入れに閉じこもったり、歌舞鬼先生が何の前触れもなしに大学受験レベルのテストを出したりすること以外は、まあ」

タジャドル「そうじゃなくて、水泳だよ。…この間リュウガに聞いたんだけど、お前、水泳部入ったけどすぐ退部したって」

シャウタ「…家の仕事とか、内職とかで、時間が取れないし…部活やめたからってどうこうはないだろ」

タジャドル「でも、部活やっているのといないとじゃあ、面接の時のウケも違うぞ？進学にしろ、就職にしろやっておいたほうがいい。…家の事はまあ、…頑張ります」

シャウタ「……この間、皿を派手に割っておいて…？洗剤を一箱入れた挙句、洗濯中に洗濯機を開けたのに…？？」

タジャドル「うっ！…目、目が怖いです！！」

シャウタ「…それに、……なんかもう…中学のときみたいな熱意がない、って言うか…」

タジャドル「？おい、それってどういう…」

プトティラ「あみゅー」 徘徊

タジャドル「…おかしいな、俺、頭の眠さで幻覚でも見たのかな」

シャウタ「俺にも見えた…」

プトティラ「ごーはーんー…むにゅー」

ぎゅるるりるり

タジャドル「間違いない、…実態のあるプトティラだアレは！」

シャウタ「こらっ、プトティラ！朝まで待ちなさい！！プトティラ
アアア！！！！」

ブラカワニ「……」

翌日。

タトバ「あれ？どうしたのタジャドルにシャウタ、目の下の隈が凄
いよ？」

タジャドル「ああ…ちょっと、な」

シャウタ「…結局、プトティラを部屋に押し込むのに2時間強…更
にその後、寝ぼけて分身したガタキリバ軍団が部屋からあぶれ、押
し込めるのに3時間……そのせいで眠れなかった」

タジャドル「休日だったのが救い、だな…」

シャウタ「…ああ…」

ラトラーター「あー、だからプトティラとガタキリバはあそこで正
座してるのか」

ガタプト「…ごめんなさい…」

サゴーズ「で、親父は何してるの？」

タジャドル「つか、まだいたのか…」

ブラカワニ「いやー、布団が恋しくなつて。まあ、それよりも、4

0代のおっさんでも雇ってくれそうなバイトを探して」

タトタジャガタラトサゴシャウ「……親父が、仕事探し……!？」

「
ブラカワニ「俺、何か変なこと言ったかマイ息子達!？」

タトバ「あつ、いや、……子供としては喜ぶべきことだと思う、……
思うんだけど……」

ガタキリバ「……信じられないって言うか、何だろう、……明日……こ
の家だけ爆発するような気がしてきて……」

ラトラーター「オーズ38話でシャウタの歌が流れる並みに、奇跡
的かと……」

サゴゾ「ど、どういう風の吹き回しなんだ?……何を企んで……」

タジャドル「どうしよう、もしかしたら母さんの身に、何かあった
んじゃない……」

シャウタ「お、おや、親父、……熱でも……あるのか……?」

ブラカワニ「いや、旅も飽きたし3年間の溝を埋めるいい機会かな
あって思っただよ。特に、タジャドルには迷惑かけっぱなしだっ
たし、シャウタも家のこととかで自由な時間がなかつた」

タジャシャウ「……」 卒倒

ガタキリバ「タジャドルウウウ!？」

プトティラ「シャウタアアア!？」

サゴゾ「お、親父が『働く』なんて言っただから……!」

ラトラーター「だ、駄目だ、完全に気を失ってる!」

タトバ「そんな……親父が今更真面目に生きようとしたせいでえええ
!」

ブラカワニ「そんなに言うなら一生働かないぞお前ら!？」

タジャドル「いや金は返せ…ぐう」

シャウタ「ビールは1ヶ月に1本な…すぴー」

タトガタラトサゴ「…寝てる…」

プトティラ「シャウタおやすみ、タジャドル永遠におやすみでも羽根はブランケットにちょうだい」

ブラカワニ「えげつないなこのペット!？」

009：プトティラ居候秘話

プトティラ「ZZZ…」

ブラカワニ「なー、ガタキリバ」

ガタキリバ「なんだ、履歴書なら右の戸棚だぞ」

ブラカワニ「俺の横に威圧的に平積みされている履歴書の山見て分からない？そうじゃなくて、あそこで丸まって寝てる奴」

ガタキリバ「あー、プトティラ？」

ブラカワニ「あいつって、何時ぐらいからいるんだ？つか、……居候？ペット？？」

ガタキリバ「ペットだな…ああ、そういえば、親父は知らないんだっただな…」

（9ヶ月前）

シャウタ（中学3年）「さーて、夕飯の買い物も済んだし…特売の牛乳も買えたな」

タトバ（中学2年）「ねえ…なんで、俺まで…？」

シャウタ「お一人様1本限りなんだ。お前、どうせ暇だったんだろ」
タトバ「うー、確かに今日は、サッカー部の練習は休みだったけどさー…！」

???「……じゅるり」

シャウタ「ただいまー」

ガタキリバ（高校2年）「おー、おかえり」

ラトラーター（同上）「なんだ、タトバ、お前また特売セールに巻き込まれたのか」

タトバ「分かっているなら…身代わりになってくれよ…！」

サゴーズ（高校1年）「無理」

タジャドル（高校3年）「……あーっ、静かにしてくれー！勉強が

捗らない…！」

タトガタラトサゴシャウ「…タジャドルが一番煩い…！」

タジャドル「…ハイ」

ラトラーター「今日の夕飯は？」

シャウタ「ラトラーターの煮物と、タジャドルの唐揚げ」

タジャラト「…ちょ…」

タトバ「…じゃなくて、カボチャの煮物だよ。カボチャも安かったから」

サゴーズ「カボチャ、かあ…」

シャウタ「嫌ならサゴーズだけ水でもいいんだぞ？」

サゴーズ「いえ、食べます。食べたいです！」

…ゴゴゴ…

タトバ「ん？」

ガタキリバ「なんだ、この音…」

タジャドル「まるで、これから世界が崩壊する為の序曲のような…」

サゴーズ「ええ？そんなアホな…」

ラトラーター「そうそう。シャウタの逆鱗に触れない限り、こんな音なんて…」

プトティラ「　　うがああああ！」

バツコーン！！

タトタジャガタラト「「ぎゃああああああ何か来たあああああああ！！？」」

サゴーズ「何あれえええ！？」

シャウタ「壁えええ！？」

プトティラ「……ぐるるるるるるる」　よだれ出まくり

タジャドル「ホントに何だあれ！？珍獣か…珍獣なのか！！？」

ラトラーター「誰か、サファリパークに連絡を！」

タトバ「変身ソングがサファリパーク疑惑に言われたくないよ！」

プトティラ「……たこ焼き…タコの酢の物…タコの丸焼き…寿司…
お好み焼き、うな重…蒲焼…ひつまぶし…刺身……！」

サゴーズ「なんかメチャクチャ限定的な何かを呟いているー！！」
ガタキリバ「つか、そのワードで思いつくのって、シャウタしか…
！」

プトティラ「…生でも可あああ！！」

サゴーズ「うわっ、速い！」

ラトラーター「シャウタに向かって…」

シャウタ「　　長男ガード！」

タジャドル「ぎゃああああああ！！？」

プトティラ「がぶっ」　タジャドルの頭噛み付き

タジャドル「…ぎゃー！ぎゃー！！ぎゃー！！？」

プトティラ「がうがうがう…プッ！」 吐いた

タトバ「あ、タジャドル吐いた」

ガタキリバ「てつきり、あのまま食べるかと思ったんだが」

タジャドル（歯形ついてる）「…タトバ、ガタキリバ、……お前らな…」

プトティラ「クソまずい」

タジャドル「…んだとおおお！？18歳のピチピチ健全男子高生の頭を食っておいで、まずいだあああ！？」

ガタキリバ「タジャドル！自分でピチピチって言っているのはシャウタまでだ！！」

サゴーズ「極論を言えば、ピチピチが通用するにはあと6歳ぐらい若返って！」

ラトラーター「ところでピチピチって、太もも的な意味ですかそうですか」

タジャドル「次男と四男は後で殴るとして、…ラトラーターアアアアアー！人が何気に気にしていること言うんじゃない、鳥の足舐めんなよおお！！？」

ラトラーター「いや、それなら水泳やってるシャウタのほうが…」

サゴーズ「つか、もっと言わせて貰えば、この中で一番ピチピチなのは年齢的にタトバだと思います！」

タトバ「やめてサゴーズ、ここは新鮮なシャウタを推奨して！」

プトティラ「タコー！ウナギー！！…なんか分かんないけど魚ー！！」

タトサゴ「シャチです！」

ガタキリバ「とにかく、シャウタ危ない！」

シャウタ「……」 特売の牛肉取り出す

プトティラ「！！！」

タトガタ「あ、止まった」

ラトラーター「やっぱ牛＞豚＞鳥か…」

タジャドル「何気に俺（と、タトバ）に失礼なこと言ったなお前？」

シャウタ「食べたいか？」

プトティラ「ぐるるるる」　よだれのストレインドウム

シャウタ「そうかそうか、どうせ今日は、俺の逆鱗を恐れ太ももが
どうか言ったラトラーター…新鮮とか言いながら俺を差し出そう
としたタトバ…タトバと同レベルな上に失礼なことを思ったガタキ
リバ。こいつらの分の夕飯はないからな」

タトガタラト「…」　しまったああああーッ！？」「」

サゴーズ「あーあ…」

シャウタ「でもな？」

プトティラ「ぐるるるるる」

シャウタ「　壁壊しといてタダ飯食えと思うなよ、この馬鹿
タレええええええ！！」　踵落とし

プトティラ「きやうん！？」

サゴーズ「　中間フォームでもないシャウタが最強フォームに蹴り
入れたあああ！？」

シャウタ「…サゴーズお前も夕飯抜き」

サゴーズ「アッ！」

タトガタラト「…サゴーズいらっしやーい…！！」「」

くそして現在く

ガタキリバ「…で、プトティラは泣きながら必死に壁を直して…俺ら4人分の夕飯を食った拳句、居ついちまったわけ」

ブラカワニ「食費とか大丈夫だったのか…？」

ガタキリバ「あいつのせいで、思えば食事争奪戦が激しくなっていたんだよなあ…そうそう、シャウタの用意した朝食を一人で食べた時なんか、凄かった」

ブラカワニ「…どんな？」

ガタキリバ「…鎖で縛って夜中まで放置だよ。…お腹すいたー、って泣き叫んでも…腹の音が近所迷惑レベルになるほど鳴っても…無視し続けてさ」

ブラカワニ「…ああ、成程、それでシャウタの言うことは聞くんだな…あのペット」

ガタキリバ「逆らったら飯が貰えないのは擦り込み完了したし、逆にいい子にしているとある程度は貰えるからなあ」

シャウタ「プトティラー、親父とガタキリバの分のアイス食べるかー」

プトティラ「食べる！」 起きた

ガタキリバ「ぎゃーっ!？」

ブラカワニ「そして何で俺も巻き込むんだマイ息子!？」

歌を流しながら読むと楽しさ倍増の作品です

ガタキリバ「 ラトラータアアア！何処行つたああああ！
？」

インペラー「ラトラーターなら、お腹が痛いからって部活早く帰つ
たッスよ」

ガタキリバ「あの野郎…俺の鞆の中にエロ本入れやがって！お陰で
女子に変な目で見られたんだぞ！？」

インペラー「えっ、…お兄様、宜しければそれ俺に…」

スーパー「インペラー、お前校庭427周終わるまで帰宅禁止。

…ラトラーターは明日37564周やらせる」

ガタキリバ「先生…それ、ナイス判断」

インペラー「ぎゃーっす！」

シャウタ「…くそっ…隣町は牛乳の特売、近場は卵、二駅離れた町
は人参とジャガイモ…俺一人じゃとても回れない……！」

ラトラーター「ただいまー」

プトティラ「ラトラーターだ」

シャウタ「……」

ブラカワニ（あ、なんか読めた）

シャウタ「…ラトラータアアア！逃げるなあああ！！」

プトティラ「がうがうがう！」

ラトラーター「ひーッ！ちよ、勘弁して、タジャドルに買わせればいいじゃんタジャドルに！！」

シャウタ「大学の講義が終わる頃には、特売終わってるわああ！いいから走って行ってこい！！」

プトティラ「飯ー！！」

ラトラーター「いやああああシャウタお前スペック詐欺にもほどがあるううう！」 全力で逃げてる

ブラカワニ「走りすぎて床燃やして、シャウタに怒られる前に行けよー」

ガタキリバ「ラトラーター…」

ラトラーター「あー！ガタキリバ、ちよっ助けて」

ガタキリバ「……スーパー1先生からの伝言だ。無断サボりとエロ本持って来た罪で、明日お前、校庭37564周走るまで帰れないぞうだ…」

ラトラーター「えーっ、ちよ、それ何拷問！？」

ガタキリバ「そして俺の案で、国語の時間、エロ本の内容を大声で音読することになった…勿論、V3先生に許可は取った！明日が楽しみだなあ、ラトラーター！！」

ラトラーター「ぎゃーっ、俺に安住はないのー！？」

ガタキリバ「ふふふふ…はははははははははは！」

シャウタ「ラアアトラアアアータアアアアアー！」

ラトラーター「嫌ああやめてええええ！」
タトバ「ただい…うわあ、騒がしいなあもう」

タジャドル「ただいまー。親父、特売の牛乳買って来たぞ」

ブラカワニ「おーおかえりマイ息子」

タジャドル「あと、…19歳にグラビア雑誌買わせるその根性を殴り飛ばしていいか？」

ブラカワニ「それヤン ヤンだからむしろ、健全な漫画の方が多いぞ」

タジャドル「立ち読みしろよ！」

ブラカワニ「おーいシャウタ。タジャドルに牛乳買ってきてもらっただぞ」

シャウタ「牛乳だけ…？つか、隣町の特売が終わったってことは…もう全部終わってんじゃんorz」

ブラカワニ「ヤ ジャン呼んで元気出せよ。な？」

シャウタ「…そして漫画は立ち読みで済ませると言ってるだろうがああ！」 パンチ

ブラカワニ「ゴフツ!？」

タトバ「……特売に間に合わなかった怒りを100%ラトラーターに向けたいとはいえ、親父、…ドMだろ」

ブトティラ「わあああん！」 ラトラーター腹パン

ラトラーター「ごっふう!？」

サゴーズ「ただい…うわーラトラーター何やったの」

タトバ「エロ本ガタキリバの鞆に仕込んで、シャウタに逆らって、明日拷問食らうらしいよ」

タジャドル「プトテイラに関しては、特売間に合わなかった」シャウタのテンションだだ下がり「もう飯作らない…の危険性があるからだろ」

スーパー1「…どうしたああ！まだ5364周しかやってないぞおおお！！」

ラトラーター「……あの、普通に、考え、て、…万単位、って、酷く、ない、ですか…！？」

ガタキリバ（休み時間なので来た）「スーパー1先生、そろそろV3先生の授業の時間ですよ」

スーパー1「よし、続きは昼休みだ！昼食食べて来いよ！！」

ラトラーター「吐きます、それ、絶対、吐きます…！」

ラトラーター「……俺も…気持ち良くて溶けそうだ…」…「いつちやうつ…あつ！ああんっ！」……」

V3「どうしたー、声が小さいぞー」

クラスメイト（（聞いているほうも拷問だ…）（））

ラトラーター「ぜえ、はあ、ぜえ…！」 目が死んだ魚

カプト「不埒な本を持つてくるからだ」

アギト「でも、正直、読ませる先生も先生だけどね」

V3「ほほう、アギト、貴様も朗読したいか？」

カプト「それはやめてください。主にアレの親父が泣く」

ラトラーター「ってか、あの本、……BLだし…ガタキリバのクラスの子のってファムから聞いたから、返そうと思って入れた鞆が…ガタキリバだっただけなの…に…！何が悲しくて野郎同士のエロ本朗読しないといけないんだよおおお」

アギカブ「…ファム？」
ファム「……」 無視

アギト「そういえばラトラーターって、昼食食べた後に…」

ラトラーター「……俺、陸上の選手になって稼いで、皆に楽な暮らしさせるのが夢だったんだ…」

カブト「待て！死亡フラグを立てるな、ラトラーターッ！！」

ラトラーター「げろっば」 律儀に昼食食べて残り走った

アギト「生きてますかー」 背中擦る

カブト「吐き気止め飲むか？」

ラトラーター「は、はは…なんだろう、目の前が…霞むよ……」

カブト「待て、昇天するな、フラグ回収するな、…陸上の選手になるのが夢だったんだろう！ラトラーター！？」

アギト「カブトもフラグ回収しちゃってるよ？」

歌を流しながら読むと楽しさ倍増の作品です

ラトラーター「濃いし、くどっ」

サゴーズ「変に難しい歌の奴に言われたくないよ!？」

V3「皆、明日はテストだからな」

全「「えええええ!？」」

クウガタイタン「うわぁー!全然勉強してないし」

サゴーズ「ガクガクブルブル」

キバドツガ「どうしたの?サゴーズ」

クウガタイタン「お前、点数それなりにいいじゃん。何をそんなに……」

サゴーズ「今度のテストで50点以上取らないと、……タジャドルとシャウタに殺されるんだ……!」

キバドツガ「あー、タジャ先輩、三年連続学年トップだっけ」

クウガタイタン「そりゃあプレッシャーだな」

プトティラ「ごーはーん……」

タトバ「ひーッ、どうしよう、シャウタ帰ってきてないよおお!」

サゴーズ「こうなったら、親父を食べさせるしか……」
 ブラカワニ「酷くないマイ息子サゴーズ!？」

「タトサゴ、親父イイ！食べられてえええええ！」

ブラカワニ「イヤアッ!?! あー!」

サゴーズ「よしっ、抑えたぞタトバ！」

タトバ「えーと、ロープ！ロープ！」

ブラカワニ「きゃあああああああああああああ」

シャウタ（帰宅）「…何やってんだよもう」

プ
テ
イ
ラ「
シャ
ウ
タあ
あ
あ
あ
飯
ち
よ
う
だあ
あ
あ
い」

「シャウタ「そんなにすぐ作れるか!」…タトバも米ぐらい炊けよ!」

タトバ「だって台所の周辺を徘徊していたんだもん……！」

「サゴゾ……うわあああああー！うわあああああああー！！」

「ちよ、ごめ、……ゴフツ！？がつ、げふつ！」

「ガタキリバ、おい、またマウントポジションでサゴーズに殴られてるぞ！？流石クウガ系が友達だけあるな！」

タトバ「今度は一体何したの……」

シャウタ「時代劇撮ってたビデオに気付かず、自分の音楽番組を上書きしちゃたんだと」

ライター「だってあれどうせ、再放送……ぎゃー！」

サゴーズ「うがああああ！」

シャウタ「とりあえず謝つとけ馬鹿！」

サゴーズ「マツケンサンバー！」

シャウタ「お前本当に時代劇好きだな」

サゴーズ「だって…だって、徳川吉宗と共演だよ！？盛り上がらない方がおかしいって！」

シャウタ「そこで興奮するお前もどうかと…」

サゴーズ「はっ、そうだ、親父！親父にサイン貰ってくるように言わないとー！」

シャウタ「まあ、お前より親父の方が徳川吉宗と絡みそうだけだな…？」

サゴーズ「どうしよう！色紙買ったほうがいいかな、『サゴーズへ』って書いてもらうように言っておかないとー！」

シャウタ「落ち着け！」

ラトラーター「えー、そんな簡単には貰えないと思うぞ？俺だって、鳴海さんのサイン欲しかったけど貰えなかったし…それに親父に頼んだら、むしろガラからサインを貰いかねな……」

ガタキリバ「おい、馬鹿…！」

サゴーズ「うがあああああああ！」　ゴリバゴーン発射

ラトラーター「ぎゃーっ！？」　直撃

ガタキリバ「…不用意なこと言うから」

サゴーズ「親父…貰ってきてくれるよなあ…？」

シャウタ「自分の明日の為に、忘れない方がいいぞ」

ブラカワニ「…イエッサー…！」

シャウタ「ところで…ガタキリバ、今日国語の抜き打ちテストあったってアギト先輩から聞いたぞ？」

「ガタキリバひッ!？」

シャウタ「…何点だったのかなあ…？」

ガタキリバ「さ、32…点…」

「シャウタ……」

常人には見えてはいけないうーら

サゴーゾ「プティラお願い、シャウタを止めて……！」

プティ「やだ逆らったら飯抜きだもん」

サゴーズ「お願い：ガタキリバが未来の自分を見ているようで、耐えられないんだああ！」 明日テスト

プティラ「あー。……シャウターボール遊びしよ」

シャウタ「今それどころじゃありません」

「プティラ……」
目を潤ませながら

シャウタ「……ああもう、分かった。……ガタキリバはタジャドルに焼いてもらうか」

サゴーズ「あれ状況悪化した？」

ガタキリバ「いや、…あのシャウタ相手だと焼かれた方がマシなん
で…これはこれで」

「タジャドル」

俺こゝでしか喋つてねえええええええ！？」

タトバ「どんまい！」

012：小ネタその2

・ガタキリバとタジャドルエ…

シャウタ「ウナギイイイイ！」

ガタキリバ「バツタアアア！」

プトティラ「ちっ」

タジャドル「おい。今舌打ちしただろ。タ力取られなかったのがそんなに悔しいのか」

（20分後）

ラトラーター「いやああああ復帰って何それどんな虐めえええええ（プトティラの世話的な意味で）」

シャウタ「っしやああああ！」

タトサゴプト「わーいシャウタ復帰したああ！」

ラトラーター「待て、俺は無視か俺は！？」

ガタキリバ「バツタ戻ってきた？」

タトバ「いや、多分あれ、カザリか誰かの所持物…」

タジャドル「って言うか…」

ガタキリバ「俺達の復帰はいつ…？」

プトティラ「戻ってこなくていいよ、むしろラトラーターあげる」

タジャガタラト「おまつ！」

・あれ、これってむしろ…

ブラカワニ「なあ、ちょっといいか？」

シャウタ「ビールは昨日飲んだろ」

ブラカワニ「違う違う。…バツタとウナギが奪われたと思いきや、今回でカザリ（かと思われる）やメズールから奪い返し…」

タジャドル「そうだな」

ブラカワニ「その上、タコとライオンを奪取…シャウタとラトラーター復帰」

ラトラーター「…うん」

ブラカワニ「でも、敵に関してはウナギとバツタは保管されているから手出し無用（金庫はマッキーしか鍵を知らない）」

サゴーズ「だね」

ブラカワニ「…これって、むしろ、オーズ側に大損と見せかけた…敵側大損じゃない？特にメズールとカザリ…」

タトバ「…あー…だねえ」

・カッターウイングの勇姿

ラトラーター「いいぞ、カッターウイング！」

タトバ「蹴散らせー！」

タジャドル「後藤愛してる！」

サゴーズ「今だー！」

シャウタ「…何してるんだ、あれ」

ガタキリバ「【不遇メダルの会】が、カッターウイングの初単体お披露目で感動してるんだってさ…」

シャウタ「不遇…ああ、トラとタカとゾウか…」

プトティラ「カッターウイングって食べれる？」

タトタジャラトサゴ「…食べるな！」

プトティラ「…」 拗ねた

・次回のヤミーって…

タトバ「ニワトリでしょ」

ガタキリバ「いいや、ハゲタカだ！」

ラトラーター「違うって、コンドルだよ！」

サゴーズ「タカでいいじゃん…」

タジャドル「あれがタカとは断じて認めん。…ワシだ！」

シャウタ「グリフォンでいいじゃん…」

ブラカワニ「いや、グリフォンって幻獣だろ…ここはいつぞ、アヒルとかカルガモなんてどうだ!？」

プトティラ「…おいしい？」

タトバ「…ニワトリならおいしいかもね」

タジャドル「どうするんだ、誰か食べる気あるか？」

ガタキリバ「プトティラ以外ねーよ……」

タトバ「登場確定しているのは、タカトラーター？」

サゴーズ「公式行くと、シャゴリーターなんていたね」

プトティラ「……」 期待のまなざし

シャウタ「どうせ2話完結やミーなんだから無理！」

サゴーズ「いや、でも、意外とユニアルマジロ・クロアゲハの件を考えると……」

ラトラーター「一つだけ分かったのは、俺とシャウタのどっちが先にメダガブリューを使うかだと思う」

プトティラ「……使ったら消毒しろ」 ラトラーター警戒しながら
ラトラーター「なんだよその扱い！サゴーズとタトバには優しいくせに！？」

・ Webラジオで出ましたね

タトバ「シャウタの唄」

ラトラーター「ちよつと待って、『うた』違う。……そっちだと、知り合いのやつてたグロゲー脳内再生された」

ガタキリバ「（脳内再生した）……うわあ、……シャウタのタコ足が直視できない……！」

シャウタ「お前ら三人とも飯抜き」

タトラトガタ「……ごめんなさああああい！？」「……」

ブラカワニ「うん、……シャウタなんでお前だけ女性バックコーラス

ついてんのおおお!？」

シャウタ「知るかア!!!」

サゴーズ「何も怖くはない」……」

タジャドル「……もう、何も怖くない」

タトバ「やめて!そのセリフ聞くと、マスケツト乱射したどっかのシャウタが出てくる!!!」

タジャドル「それに、何気にシャウタが頭から何かに食われる図が脳内再生……」

タトバ「シャウタなら、いつでもメダガブリュー持ち出して『皆死ぬしかないじゃない!』ってやりだしそう……」

シャウタ「タジャドルも飯抜き、ただしタトバは明日の朝食もない
と思え」

タトタジャ「ぎゃああああああ」

ガタキリバ「Wake Up……だと……」

ラトラーター「ウエイクアップ!」

タジャドル「運命さだめの鎖を解き放て……か」

シャウタ「お前らも朝食抜きにしようか?」

タジャガタラト「……すいませんでした……」

・ロストアंकが

タジャドル「本格的にウザくなって来ました」

タトバ「アंकモード入ってきました、でしょ」

ガタキリバ「やっと喋ったのにな……」

ラトラーター「最初の頃が可愛げある、って思っのは何処も一緒な
んだろ」

シャウタ「……………」

サゴーズ「プティラ、ボール遊びする？」

プティラ「う」 頷く

サゴーズ「じゃあ、行こうか…できるだけ遠くに」

タジャドル「…あ、今度のレポートの為に図書館行かないと…」

ガタキリバ「…………ガタツクに借りてた漫画返さないと」

ブラカワニ「職安いくか…」

タトバ「じゃあ俺、その見張り…」

シャウタ「…………ラアアトラアアアータアアアアー!!」

ラトラーター「あつ、ちょ、やめ…ぎゃああああああああああ
ああああああ」

・そもそも19日は

タトバ「…………ゴルフだったね…!orz」

シャウタ「ゴルフいらんだろ」

サゴーズ「ゴルフを潰したい欲望、かぁ」

ガタキリバ「質より量だ。メズールに期待しよう」

ラトラーター「カザリやガメルはあまり効果ないしねえ」

タジャドル「ロストアंकもなぁ…人間1人につき1体じゃどうし
ようもない」

プトティラ「ゴルフって？」

タトタジャガタラトサゴシヤウ「「スーパーニチアサタイムの敵」

「」

ブラカワニ「ちなみに、この中には夏の高校野球も含まれるぞ」

013: Shout out 兄弟Ver.

歌を流しながら読むと楽しさ倍増の作品です

ブラカワニ「マイ息子ー」

シャウタ「失せろ」

ブラカワニ「最初から酷くない!？」

ラトラーター「すげえ、くどいゲフォアッ!？」 タコ足ビンタ
シャウタ「貴様が言うかサファリパーク」

ブラカワニ「あ、G」

タトタジャガタラトサゴシャウ「!?!?!」

プトティラ「あう?」

タトバ「嫌ああああ殺虫剤!殺虫剤どこおおお!？」

ガタキリバ「やめてくれ!探すな、叩いて仕留めろ!」

ラトラーター「ぎゃあああああ熱光線OK!？」

サゴーズ「やめて他の物も焼ける!...うわあああ重力操作、重
力操作あああ」

タジャドル「焼かせろ！焼かせてくれえええ！！」

シャウタ「ぎゃーっ！ぎゃーっ！！ぎゃあああああっ！！！！」

ブラカワニ「お前ら、相変わらず嫌いなんだな…G」

タトバ「やめて！あの【黒い弾丸】の名前を言わないで！」

ガタキリバ「【漆黒の脅威】を…」

ラトラーター「【疾走する悪意】を…」

サゴーズ「【台所の宝石】を…」

タジャドル「【スキマより這い出る闇】を…」

シャウタ「やあああああめろおおおおお！厨二的な言い方をしても嫌な物は嫌ああああ！！」

プトティラ「あう」 G 氷結

タトタジャガタラトサゴブラ「「あ、プトティラが仕留めた」」

プトティラ「シャウター」 凍ったGを持ちながら

シャウタ「プトティラ！外にポイしなさい！！…俺に見せなくていいからああああ！！！！」

タジャドル「なあ、そろそろ水泳部に」

シャウタ「一回辞めたのに戻れるか馬鹿」

タジャドル「そりゃあ、家のこととか色々あるだろうけど…中学まではあんなに熱心にやってたのに」

シャウタ「…」

タジャドル「親父も、お前にもう一回水泳やつてもらいたいからって仕事真面目に探してる…って、この話はガタキリバから又聞きしただけなんだけど。とにかくk」 ストレインドウム直撃

プトティラ「…ぷひゅ（嘲笑）」

タジャドル「……ぐおらああああッ！おま、今日という今日は許さねええええええ！！」

プトティラ「やーいやーい後回し」

タジャドル「そんな裏事情は要らん、あとお前だって後回しだろう

がツツツ!？」

シャウタ「……」

タトバ「……たすけてえええ」

ガタキリバ「うわっ、お前、何で壁から頭が生えてるんだよ!」

タトバ「いや、実は、タトバキックの練習をしようとして…標的（ストレス発散用人形）に当てようとしたら、ずれて壁に突っ込んでしまったんだ」

ガタキリバ「部屋の中にするなよ!？」

タトバ「だって、ほら、外は雨だったし…」

ガタキリバ「…馬鹿だろ。しかも、何気にプトティラが前に壊した所だし…もしシャウタにばれたら」

シャウタ「親父、コンクリートってあるか？」

ブラカワニ「倉庫にあったんじゃないのか？」

シャウタ「プトティラ。前に使ったコンクリートって、全部使ったのか？」

プトティラ「ちよつと残った」

シャウタ「今すぐもってこい。足りない分は…タトバで補強する」
ブラカワニ「…タトバー!今すぐ逃げろー!!」

タトバ「嫌あああ!シャウタ、本気、…ガタキリバ抜いて!抜いて
ってばあああ!？」

ガタキリバ「うおっ、っ…詰まってる!何が引つかかって…トラ
クローか!？」

シャウタ「…たあーとーばあああー?」

タトバ「やめて、早く、早くしてエエエ」

ガタキリバ「無理言うな…！ちつくしょおおトラクローのバカヤロー！！」

タジャドル「……外に出て、足から引つ張ればいいだろ？」

ラトラーター「今考えたんだけど、液化化するときのシャウタにライオディアス使ったらどうなるんだろう！」

サゴーズ「あつ……」

シャウタ「俺もちよつと気になっていたことがあるんだ」

ラトラーター「え、何…って何でサゴーズ猛スピードで逃げた」

シャウタ「液化化した状態で…誰かの体内に入って液化化モードを解除したら、どうなるのかってなあああ！」

ラトラーター「嫌ああああ！ごめんなさい、やらないから許してえええ！？」

シャウタ「もう、何も怖くない」マスケット銃構えながら

タジャドル「シャウタ、お前がそれ持つと、何処かの重火k」 撃

たれた

ラトラーター「海より深い俺の心も、ここらが我慢の限界よ！」

ブティラ「キモイ」

ラトラーター「ちよおつ」

サゴーズ「ウェイクアップ！運命の鎖を解き放て！！」

シャウタ「…お前の時代劇のビデオ、粉々にするぞ？」

サゴーズ「ごめんなさいそれだけは！」

プトティラ「ところで、Gって食べれる？」

シャウタ「いやああああ折角忘れてたのにいいいいいいいい」

タトバ「とりあえず、食べないでね！食べたらその時点で、シャウタによって追い出されるよ！！」

プトティラ「やだ！」

014：Tが厨二に行き着く会話

タトバ「……俺は、あることに気付いてしまった」
タジャドル「どうしたんだ急に」
タトバ「まずは、これを見てくれ」

<恐らく共通>

メダジャリバー使用時 オーズバツシュ
メダガブリューAM使用時 グランドオブレイジ

タトバコンボ タトバキック

ガタキリバコンボ ガタキリバキック

ラトラーターコンボ ラトラータークロス（暫定）

サゴーズコンボ サゴーズインパクト

タジャドルコンボSC時 プロミネンスドロップ

タジャドルコンボGS時 マグナブレイズ

シャウタコンボ オクトバニッシュ

プトティラコンボSC時 不明

プトティラコンボメダガブリューBM使用時 ストレインドウム

ブラカワニコンボ ワーニングライド

タジャドル「それがどうしたんだ？」

タトバ「どうもこうも…俺からサゴーゾまで非常に適当だとは思わないかー!?」

ガタキリバ「しかも、キック被ってるし!」

ラトラーター「俺とプトティラは正式名称不明だし!」

サゴーゾ「そしてタジャドル無駄にカッコいい名前だし!イロモノコンボと名高いシャウタと親父ですらまともな…」

シャウタ「サゴーゾお前々飯海苔だけね」

サゴーゾ「ないよりはマシだけど海苔だけって惨めすぎる!」

タトバ「もうさ、せめて皆…自分の名前必殺技につけようよ!? プトティラのあれは…【プトティラフルコース】とかそういう感じで!」

ラトラーター「いや、串刺しにされて…凍らされて…砕かれる。そんなフルコースは要らんって」

タジャドル「…タジャドルドロップ…?」

シャウタ「…シャウタバニッシュ…」

ブラカワニ「ブラカワニ…ライド」

タジャシャウブラ「…だっせえにも程があるわ!!!」
タトガタラトサゴ「…うわああああださいって言うなああああ
ああ
」

プトティラ「フルコース…!」 よだれ

シャウタ「ちなみに今日の夕飯は、今のところ麦ご飯と焼き魚と味噌汁と海苔とリンゴだぞ!」

プトティラ「…トマトでもいいから野菜がつけばフルコース完成?」

シャウタ「よしだったらピーマン(生)で完成だ!」

プトティラ「わーい!」

タトタジャガタラトサゴブラ「…それでフルコースって言えるの

かプトティラ!?」「」

タトバ「だったらせめて、もう少しカッコいい名前にしよう!そうしよう!」

ガタラトサゴ「」おおっ!」「」

タジャドル「なあ、あいつら」

シャウタ「ほっとけそれより飯だ飯」

プトティラ「タトバ達のも食べていい?」

シャウタ「サゴーズのは海苔以外よし、他は…30分経っても来なかったらな」

ブラカワニ「お前ら!せめて15分以内に話は終わらせるよ!?!」

サゴーズ「俺、どうせないに等しいから別にどうでm」

タトガタラト「」よし早めに終わらせるぞ、夕飯のために!」「」

サゴーズ「裏切り者!ツ!?!」

タトバ「例えば…そうだな、タジャドルとかの例を見るとドロップとかスライドとか…ただのキックでも個性的な名称なんだよなあ」

ガタキリバ「見た目的にも、なんか開いたり地すべりしながらだしラトラーター「シャウタは?」

タトバ「ぶっちゃけ、飛翔斬」

シャウタ「 プトティラ、タトバの飯は魚の小骨と目玉だけ残して、後は食べていいぞー」

プトティラ「あい!」

タトバ「」orz」

サゴーズ「ふふふ…こっちに來たな、兄弟…！」

ラトラーター「そうだなあ、タトバの場合は…三つのリングを潜るキックだから、【タトバクリムゾンスマッシュ】とか」

ガタキリバ「それ、なんてファイズだよ!？」

ラトラーター「駄目?だったら、【タトバエクストリーム】」

ガタキリバ「ジョーカーエクストリームからジョーカーを失くしただけだろ！」

サゴーズ「三色繋がりで【タトバシュート】とか…」

タトバ「アギトリニティ!？」

ガタキリバ「俺の場合は…うーん」

サゴーズ「いつそ、シャウタみたいに動物名称使ったら？」

ラトラーター「あー、オクトバニッシュの“オクト”って、オクトパスからか…全然知らなかった」

シャウタ「 プティラ、ラトラーターの飯は味噌汁椀にワカ

メ1枚残す程度に食べていいぞ」

プティラ「やたー」

ブラカワニ「いつも気になってたんだけど、プティラってあんなに食べて太らないわけ？」

タジャドル「太りにくい体質か、胃の働きがいいんだろ」

シャウタ「それに、眠たい時間に『お腹すいた』って泣きつかれて夜食作ったりするのも困るし、夜に徘徊されても困るしなあ…」

ラトラーター「なん、で…どうして…orz」

タトサゴ「いらっしやーい」

ガタキリバ「うーん、クワガタはスタッグビートルだから…【スタッグキック】?…なんかアレだな」

タトバ「【ホッパークック】でいいんじゃない？」

ガタキリバ「逆にしたらシャウタのクラスメートだな、それは」

ラトラーター「仮に“クロス”は採用するにしても、ラトラーターを抜かすとしたら何がいいんだろう」

ガタキリバ「【光るしか脳のないライオンクロス】」

サゴーズ「【コンドルとじゃないと活躍しないトラクロス】」

タトバ「【トップスピードからの制御がしにくいチータークロス】」

ラトラーター「虐めだろ！」

タトガタサゴ「「そうですが何か？」」

ラトラーター「orz」

サゴーズ「俺も、“インパクト”はいいんだけど…残りが」

タトバ「【クエイクインパクト】」

サゴーズ「今のご時勢それは自主規制ですが！」

ガタキリバ「【ヘッドバットインパクト】」

サゴーズ「何だよそれ！」

ラトラーター「【タツミインパクト】」

サゴーズ「誰だタツミって!？」

ガタキリバ「じゃ、俺、そろそろ飯食べに行くわ」

タトラトサゴ「「うがあああああ！」」

シャウタ「ちっ」

ガタキリバ「「ちっ」って何だ!？食べさせない気だったのかお前！」

タトバ「でもまあ、正直考えてさ…【マグナブレイズ】とか【プロ

「ミネンスドロップ」は厨二的なネーミングだと思うんだ」

ラトラーター「厨二じゃない必殺技名って、あまりないだろ」

サゴーズ「ディメンションキックとか、ライトニングソニックとか、ファイナルザンバット斬とか？」

タトラトサゴ「…厨二ねえ」「」

～三人の妄想～

タトバ「今だ！【キングダムシュート】！！」

ガタキリバ「うおおおお！【インセクト・クラッシュ】！！」

ラトラーター「受けてみる！【ライオネルストリーム】！！」

サゴーズ「食らえ…【ガイア・ジ・インパクト】！」

タジャドル「劫火に吞まれる！【ピーコックスマッシャー】！！」
クジャク弾

シャウタ「【サウザンド・オクトパス】！」 あばばキック

プトティラ「【エターナル・フォース・ブリザード】！」 氷結能力使用

ブラカワニ「これで終わりだ…【ブライン・ロンド】！」 ブラインギーでコブラ操り中

〔妄想終了〕

ラトラーター「……ねえわー、メツチャねえわー」

サゴーズ「厨二ネーミングって、それっぽい奴しか似合わないんだよ……!」

ラトラーター「そうだわー、厨二ネーミングってもうタジャドルの代名詞でいいよー大声で言うのキツイわー」

サゴーズ「だよねえー」

タトバ「よし、この話はもうお開きにしよう」

タジャドル「…お前らな…」 右拳プルプル

ガタキリバ「プトティラ、俺、『タジャドルが怒ってプロミネンスドロップ』にリング賭けるわ」

プトティラ「じゃあ、『タジャドル達が喧嘩してシャウタがオクトバニッシュ』にラトラーターのリング」

ブラカワニ「よし、じゃあパパンは間を取って『全員明日の朝飯抜き』にリング賭けるわ」

シャウタ「やってもらいたいのか親父？」

ブラカワニ「…イイエ」

シャウタ「とりあえず、プトティラに朝から泣かれるの面倒だから…オクトバニッシュな」

ガタキリバ「それじゃ賭けの意味ないえー!どうぞお願いしますシヤウタさん!!」 殺気感じ取った

ブラカワニ「うむガタキリバ、それが正しい！」　プトティラにリ
ンゴあげながら

015：閲覧注意ホラー

ラトラーター「あ、テレビでホラー映画やってる」

シャウタ「……！」

ガタキリバ「んーなにに、【レイドラグーンの啼く頃に・戒】？

…ホラーって言うかグロ映画だろこれ！」

タトバ「うわっ、こういうのって普通深夜枠じゃないの？」

サゴーズ「いや、友達が見に行ってたけど、“戒”は無印や“災”と違って、過激なグロ描写はなかったらしいよ。それでも誰か死ぬけど」

タジャドル「俺はライアと見に行ったから別に。確か…四肢断裂とかがなくなつて、裂かれた腹から内ぞ」

シャウタ「
いやあああああああああ……！」
逃げた
逃

ブトティラ「シャウター！？」

ブラカワニ「あー。あいつ、ホラー系とかグロテスク系駄目だっけ

……」

サゴーズ「…火曜サスペンスは見てるのに？」

タジャドル「それでも、ちゃんとしたゴールデン枠に放送されるレベルの奴だから…この映画ほど過激表現じゃないだろ」

シャウタ「…ぜえはあぜえはあ」
プトティラ「シャウタおかえりー」
タトバ「どこまで行つてたの？」
シャウタ「……トイレ」
ガタキリバ「いや、さつき扉が思いつきり開く音聞こえたし…」
シャウタ「ト・イ・レー！」
ガタキリバ「はあ…（こいつ気を失うほどこういう系嫌いなのに、強がつて見続けるからタチ悪いんだよなあ）」

ラトラーター「お、始まつたぞ」
シャウタ「ー！」
サゴーズ「シャウタ、まだオープニングだから」
ブラカワニ「つていうか、部屋で宿題したほうがいいんじゃない」
シャウタ「だいじょうぶいけるいける」　ガクガクブルブル
ガタキリバ「メチャクチャ震えてるじゃないかよ！ラトラーター、チャンネル変えろー！」
ラトラーター「はいはい。…つて、……あれ…」
タジャドル「どうした？」

ラトラーター「　電池切れてる」
タジャドル「なんだとおおお！？」
ガタキリバ「直接変えるぞ！…つて…」
ブラカワニ「残念ながらこのテレビ本体は、電源とチャンネル切り替え用のボタンが壊れてそのままなのだ」
サゴーズ「最悪だあああ！？」
ブラカワニ「音量は変えられるぞ？録画も出来るし」
タジャドル「そこだけ変えられても意味ないし！」

『これは、１８９２年６月の物語…』

サゴーズ「うわーっ、始まった！」

ブラカワニ「シャウタ部屋で内職してろ！」

シャウタ「だいじょうぶだもんだいない」 顔が青い

ガタキリバ「問題大有りだああ！」

ラトラーター「タジャドル！見に行ったことあるんだよな、危険シン教えてくれ！その時だけシャウタの目を隠せば何とか！！」

タジャドル「んー…確か、この後……」

『キヤーツ！』

（とてつもないグロ映像の為、お見せすることは出来ません）

タジャドル「…いきなり心臓挟られて、それを口（以下自主規制）」

シャウタ「」 放心状態

タトガタラトサゴブラ「」 「シャウタアア！？」 「」

プトティラ「シャウタ、お腹すいた」

シャウタ「」 放心状態

プトティラ「シャウタあ？」

タトバ「プトティラ！今、それどころじゃない。シャウタ今それどころじゃないから！！」

サゴーズ「っていうか…これのどこが【過激なグロはない】だあああ！？」

それから30分後…

『崇りじゃ…御社様の崇りじゃああ!!』

『そんな、崇りなんて、非現実的ですよお婆さん』

ガタキリバ「シャウタ、お前もう寝ろ…」

シャウタ「」 未だ放心状態

ラトラーター「いや、今寝かせたら、悪夢に魘されるぞ絶対…」

タジャドル「くっそ、ラトラーターがじゃんけんで負けていれば、

今頃リモコンのチャンネルが変えられたのに!」

サゴーズ「負けたの親父って何それ何の冗談?」

タトバ「シャウタ、生きてる?息してる!」

プトティラ「ねーねー」

タトバ「何?」

プトティラ「心臓っておいしいの?」

(この瞬間、丁度画面では第二の犠牲者が一人目以上の状態では
ました)

シャウタ「」 心肺停止

タジャドル「シャウタアアアア!」

ガタキリバ「駄目だ、プトティラのセリフと相俟って…気を失って
いるってレベルじゃない!」

タトバ「なんで今それを聞いたかな!」

プトティラ「ごめんなさい!でもお腹すいた」

サゴーズ「グロ映画見るときに、カニバリズム的発想はやめなさい!」

ラトラーター「それよりもシャウタ助けるのが先決だろ!」

(タジャドルが人工呼吸等で頑張った為に復活しました)

シャウタ「ぜえ…ぜえ…ぜえ……」

タジャドル「死に掛けるぐらいなら、もう寝なさいお前は！」

シャウタ「もう今更寝れないいいい」 大泣き

タジャドル「だから最初で親父とかが『やめとけ』って言ったのに！ああもう、今日一番空気を読んでないプトティラ！！シャウタと一緒に寝とけ！！！」

プトティラ「ぐるる」

タジャドル「唸らないいからシャウタ連れて行け、言っておくが三人目の惨状を見たら今度こそシャウタが死ぬぞ！」

プトティラ「やだ！」

ブラカワニ「ただいまー…って、シャウタは？」

タジャドル「プトティラが部屋に連れて行って、一緒に寝てる」

ブラカワニ「そうか…ところで、ガタキリバ達は？」

タジャドル「…どうやらこいつらでも、三人目の犠牲はアウト級だったらしい」

タトガタラトサゴ「…」 気絶

ブラカワニ「それで気絶しないお前も凄いけど、そんな映画流すこのテレビ局正気か？」

シャウタ「ひつぐ…」

プトティラ「あうあう」 頭なでなでしてる

シャウタ「ごめんなさい俺ってホント汚いよ最低だよ」

プトティラ「大丈夫、シャウタ汚くないよ、誰も汚くないよ」

シャウタ「だって意地張ってそこに居続けてたくせに…結局迷惑かけてるし、逃げちゃったし」

プトティラ「そんなことないよ、いつも皆迷惑かけてるから、今日

ぐらいかけてもいいんだよ」

シャウタ「……うわああああああ」号泣

プトティラ「あうっ!？」一層泣かれるとは思ってなかった

「「うわあああああー……」」

タジャドル「：シャウタとプトティラだ」

ブラカワニ「シャウタはともかく、プトティラはシャウタに釣られて泣いたなあ絶対」

タジャドル「しょうがない、親父はプトティラ担当・俺はシャウタ担当であやしに行くぞ」

ブラカワニ「おー」

タトガタラトサゴ「「……お、俺達は……?」」

016:Pのおつかい・妄想編

ブラカワニ「プトティラはペットとはいえ、我が家の一員です」
プトティラ「うー!」

ブラカワニ「そこで、誰もが避けては通れないであろう…“おつかい”をしてもらいます」

タトバ「いや、無理でしょ」

タジャドル「やめる親父」

ガタキリバ「結果が見えてきたぞ」

ラトラーター「迷子になるか無駄遣いするぞ」

サゴゾ「おつかいに渡したお金が弁償代じゃ済まされなくなるよ」

シャウタ「お前ラトラーターの惨劇覚えてないだろ親父」

ブラカワニ「いやいや、他の奴が世話しているならともかく…シャウタが躰けてるなら大丈夫っしょ」

タトタジャガタラトサゴ「…どどういう意味だ!?!」

ブラカワニ「そんなに気になるなら、言っけどさあ…」

〈ブラカワニの妄想〉

1・タトバが育てた場合

「プティラ、がうがう！」　タトバの宿題破り捨て中

「タトバ、やめてプティラ、それは明日の宿題ー！」

「プティラウガー！」

「タトバ キイイエイヤアアアアアアー!!!」

2 タジャドルが育てた場合

タジャドル「プティラ！俺の布団引き裂くなって何度言ったら分かるんだ！？」

「プティラ」

タジャドル「唸るな！」
叩く

プトティラ「ぐあー！」

ストレインドウム

タジャドル「ぎゃあああああ！」

3 ガタキリバが育てた場合

「プティラふっ！ふっ！」

ガタキリバ「痛い、爪立てるな！…尻尾で叩き潰そうとするなああ
あ！！俺は蠅でも蚊でもねえええええ！！？」

4 ラトラーターが育てた場合

「うわーっ!?家がめちゃくちゃだああ!」

「プティラ」クッションの綿ちぎって投げている

「ラトラーター」「こら、家の中で遊ぶなって……ってだからって俺で遊ばうとしないでエエエ！」

5. サゴーズが育てた場合

「プティラ」がうがう
冷蔵庫勝手に漁る

サゴゾ「プティラ！勝手に食べちゃ駄目っていつも言ってる！？」

「プティラ？」

サゴーズ「首傾げない！」

6・シャウタが育てた場合

シャウタ「プトティラ、お手」

プトティラ「あう」　お手

シャウタ「伏せ」

プトティラ「うー」　伏せ

シャウタ「三回回って『ニヤン』」

プトティラ「（回転中）…にゃん！」

シャウタ「よし、おりこう」　頭撫でる

プトティラ「…」　尻尾パタパタ

シャウタ「…リンゴでいいか？夕飯、チャーハンだから」

プトティラ「うー！」

シャウタ「よし、待て」

プトティラ「……」　待機中

シャウタ「待てよ、飛びつくなよ、……（床にリンゴ置く）…よし！」

プトティラ「がうつ」　リンゴに飛びつく

（妄想終了）

ブラカワニ「　　ってぐらいの差じゃない？」

タトバ「否定できない…ラトラーターが」

ガタキリバ「タジャドルの惨状が安易に思いついた件について」

タジャラト「「おい」」

サゴーズ「でも、おつかいは流石に無理なんじゃ…」

シャウタ「ああ。ラトラーターなんて、確か玩具買いに行ったからな」

タトバ（…聞けば聞くほど親父似すぎる）

ブラカワニ「何とかなるっしょ？」

コンボ兄弟「…いやいやいや！」「…」

プトティラ「おつかいやりたい」

シャウタ「…プトティラが自主性を持って言った！親父に洗脳されてないよな！？」

プトティラ「うー」 首を横に振る

タジャドル「マジらしい…」

ラトラーター「まあ、どうにかなるんじゃない？ヘタ打ったらシャウタの責任ってことd」 オクトバニツシュ&プロミネンスドロップ&ガタキリバキック&サゴーズインパクト&ワーニングライド
タトバ「ラトラーターアアアー！」

シャウタ「…いいか、買ってくるのは人参とジャガイモとタマネギと豚肉だぞ」

プトティラ「うー！」

シャウタ「……お金はラトラーターの件を考慮して1000円しか渡さないからな」

プトティラ「あう！」

シャウタ「……本当に覚えたか？」

プトティラ「今日の夕飯は肉じゃが！」

シャウタ「カレーだ！…まあどっちでもいいや、無駄遣いしたり落としたりするなよ！！」

プトティラ「うー！」

タジャドル「…不安すぎる」

ガタキリバ「まあ、プトティラみたいに“夕飯の材料”で覚えてれば何とか…なるんじゃないか？」

ラトラーター「いや、でも、プティラだしなあ……」

サゴーズ「そもそも、プティラってお金の価値……分かってたっけ？」

シャウタ「………あ」

タトバ「……おい親父……！」

ブラカワニ「その辺考えてなかった」

タジャドル「……ライア！ライア、うちのペットがお前の魚屋に行ったら……それとなくヒントを与えてくれ……！後、お札を食べようとしたら止めてくれ……！」

ガタキリバ「あ、龍騎！？お前の家って精肉店が近い場所にあった餃子屋だよな、……頼むうちのペットがよだれ垂らしたら失敗したのでいいから恵んでやってくれ！ヘタしたらどこかで食材食べるかも……！」

ラトラーター「アギト！お願い、お前の母さんに頼んで間違えそうになったらそれとなくヒント……っていうか！お腹が空いて売り物の野菜を食べそうになったら、とりあえず何かあげてくれない……！」

サゴーズ「……タイタン！ごめん、プティラの見張りお願い……！同じ紫だろ……！」

シャウタ「……オーガごめん、プティラのこと信じてないわけじゃないけど、あいつが気を惹きそうな何かがあったら事前に食い止めてくれない……？必要なら、リュウガ呼んでもいいから」

タトバ「お願い！プティラが高そうな肉を買おうとしたら、それとなく安い豚肉を提示して……！ディケイド……！」

ブラカワニ「信用されてないな、プトティラ」
コンボ兄弟「「あんたのせいだよ！」」

017:Pのおつかい・買い物編

タイタンはプトティラに気付かれないよう、尾行しております

プトティラ「」

クウガタイタン「…えー、こちらタイタン、ターゲットは食べ物のニオイを頼りに商店街に向かっております」

プトティラ「えっと、人参と…ジャガイモと、……なんだっけ」

クウガタイタン「ターゲット、早速おつかいの内容を忘れています。早くもオーガ出勤か？」

プトティラ「あ、そうだ、…肉じゃがだから、肉とタマネギ！」

クウガタイタン「なんか肉じゃがと間違えたまま行こうとしています！でもある意味間違っではいません！！」

プトティラ「肉じゃが 肉じゃが」

クウガタイタン「食べ物の強いニオイを嗅ぎ分け、目的の商店街に到着です」

プトティラ「まず、…！」

クウガタイタン「おっと、プトティラの動きが止まったぞ？」

プトティラ「…おでん…」

カプトハイパー「ん？」

クウガタイタン「…カプト先輩の実家・おでん屋の二オイに釣られたああ！」

プトティラ「じゅるる…」

カプトハイパー「どうした？」

プトティラ「おでーん！」

クウガタイタン「飛び掛って食べる体勢に入ってたぞ！これは、おでん屋始まって以来の大ピンチかー！？」

シャウタ『勝手に食うな晩飯抜きだぞ！』

プトティラ「…」 静止

クウガタイタン「あつと、プトティラの動きが止まったぞ？」

カプトハイパー「どうした？」

プトティラ「…勝手に食べたら…シャウタに怒られて、ご飯なくなる……」

カプトハイパー「もしかして、おつかいの途中か？」

プトティラ「あう」 頷く

カプトハイパー「何を買った？」

プトティラ「…肉じゃが？」

カプトハイパー「だったら、隣の八百屋に行つて…欲しい野菜を、お金を出して買ったぞ。うちはおでん屋だから、おでんしか出せないからな」

プトティラ「う！」

クウガタイタン「…なんと、おでんを食べるかと思いきや…ギリギリのところ、自重しました！決め手は五男による刷り込みです！

！
」

プトティラ「野菜…野菜ー」

アギトシャイニング「いらっしゃーい」

プトティラ「野菜！」

アギトシャイニング「何の野菜が欲しいの？」

プトティラ「肉じゃがだから……人参と、タマネギと、ジャガイモ
！」

クウガタイタン「さあ、順調にこのままミッションコンプリートか
！？」

アギトシャイニング「肉じゃがだったら、アスパラもお勧めよ！今
なら2本で30円」

プトティラ「う？」

クウガタイタン「頼んでもいないのに誘惑攻撃ー！アスパラは
別に買っても買わなくても支障はないけど、残金が心配になります
！！」

プトティラ「んー…うー…」

シャウタ『無駄遣いしたり落したりするなよ！！』

プトティラ「…いない…」

アギトシャイニング「あら、いいの？」

プトティラ「無駄使いしたら、シャウタに怒られる」

アギトシャイニング「シャウタ君じゃしょうがないわね。あそこ
は大家族だから、袋の方でいい？」

プトティラ「うー！」

クウガタイタン「またしても五男ミラクルキターツ！シャイニングさんと一緒になって、『シャウタなら仕方ない』モードになっているー！！」

アギトシャイニング「じゃあ全部で、320円ね。…あ、そうだ、おまけにスイカー玉つけてあげるわね」

プトティラ「…うー」 唸る

アギトシャイニング「お金は出さなくていいわよ。おつかい頑張っ
てねー」

プトティラ「ありがとー！」

クウガタイタン「ちゃっかり、スイカまでタダで貰ってご満悦のプトティラは…ちゃんとお礼を言っ
て次の店へ！」

プトティラ「最後は…肉！」

クウガタイタン「さあ、最後の難関：【破壊者精肉店】！プトティラは果たして、無事に肉を買えるのか！？」

ディケイド「いらっしやーい」

プトティラ「肉ちようだい！」

ディケイド「そうか。…そうだ、この最高級黒毛和牛なんてどうだ？少し値は張るが、最高に美味しいぞ？」

クウガタイタン「…コイツが一番駄目だったー！最高級黒毛和牛なんて提示すんなああー！！」

プトティラ「うー……お金、これだけしかない」

ディケイド「680円か…だったら、これだけだな」 右手でだい

たい2mmを示す

プトティラ「少ない！やだ！！」

ディケイド「だったら、こっちはどうだ？…イベリコ豚7枚分！」

プトティラ「…一人に一枚しかないの、やだ」

クウガタイタン「意外と粘るプトティラ！やっぱり、お肉はいっぱいがいいよな！！」

ディケイド「なら、この唐揚げ肉はどうだ？肉汁もたっぷりだし、美味しいぞ」

プトティラ「うー」

ディケイド「（ちっ、手持ちが少ないせいかなかなか高値で買おうとしないな…だが！）だったら、……この最高級黒毛和牛を全部でどうだ！」

プトティラ「！？」

ディケイド「足りない分は、ローンで返せばいい。月々6800円の100回払いだ！」

プトティラ「う…うーうーうー」

クウガタイタン「ことごとく最低だああ！ローン支払い総額68万円って、破格すぎるわああ！？」

ディケイド「さあ、今すぐサインを！」

プトティラ「…うう」

クウガタイタン「合意書まで取り出した！こいつマジ悪魔！！」

ディケイド「美味しい肉で料理できたら、皆喜ぶぞー」

プトティラ「うー、うー」

シャウタ『……はあ。今月の電気代、水光熱費、電話代、更に授業料やタトバ達の部費を引くと…今月10万円か、厳しいな……』

プトティラ「やだ!!」

ディケイド「な」

クウガタイタン「ここに来て、はつきり断ったー!」

プトティラ「やだ、やだやだ、美味しい肉食べたいけど、シャウタが辛いのだ!」

クウガタイタン「…ペットの方がシャウタの苦勞を分かってたあああ!」

ディケイド「今すぐ払えつて分けじゃないんだぞ?」

プトティラ「それでもやだ! タジャドル達そんなに稼いでるわけじゃないし、ブラカワニあんまり役に立たないし、…やだ!!」

ディケイド「だがな…」

リュウガ「ええ加減にせんかあああ!」 木彫りの熊投げつけ

ディケイド「ゴフツ!」

クウガタイタン「…ナイスシュート!」

リュウガ「てつめえ…初めてのおつかいを散々な思い出に終わらせる気か? そこまで性根が腐ってるかこのスイカ頭」

オーガ「ちょッ、リュウガ、落ちつい」

リュウガ「お前はゴミ箱の中に入ってる!」

オーガ「…ふあーいず…」

クウガタイタン「止めに入ったオーガが、ゴミ箱に入っていきます!」

リュウガ「安い豚肉500g渡せ今すぐだ」

ディケイド「ぐふっ…残念ながら、安肉は売ってな」

リュウガ「テメエの人生ここでファイナルベントにするぞ…?」

プトティラ「500gってどのくらい?」

リュウガ「俺が直接量つて渡す。…オラそこだけ価格の破壊者！」
蛇の置物投げつけ

ディケイド「ぎゃふん！」

クウガタイタン「リュウガ強すぎです」

リュウガ「ほら、このぐらいだ。価格は…あー、この馬鹿の愚かぶりから510円引いて…48円で」ディケイド足蹴にしながら
プトティラ「…うー？」

リュウガ「50円玉…穴の開いてる奴出せば足りるぞ」

プトティラ「うー！」

リュウガ「はい、お釣りの2円」

プトティラ「ありがと！」

クウガタイタン「プトティラ、ミッションコンプリート！なんと、残金632円を残してのおつかい完了です！！」

プトティラ「……ねーねー」

リュウガ「どうした？」

プトティラ「余ったお金で、皆に何か買いたい」

リュウガ「いいのか？」

プトティラ「うー、でも、タジャドルにはあげないけど…その分シヤウタに何かあげたい」

リュウガ「…その気持ちとスイカだけで充分だと思うぞ」

プトティラ「ん。ありがと」 頷く

クウガタイタン「余ったお金で兄弟…ただしタジャドル先輩除くに何か買いたいと言ったプトティラですが、“その気持ちこそプライスレス”で済ませたリュウガは上手いと思う」

プトティラ「じゃーねー」

リュウガ「寄り道するなよ」

ディケイド「…ちょ、もうそろそろ、足をどけ…」

リュウガ「何か言ったかゴミ屑？」

クウガタイタン「ほのぼのとしたおつかいとは裏腹に、リュウガによるDSシヨールは留まる所を知りません」

プトティラ「ただいまー」

タトバ「おかえりー」

タジャドル「…」

ガタキリバ「道に迷わなかったか…くくく」

ラトラーター「ちゃんと買ってきたかー？」

サゴーズ「ほらシャウタ、何時まで泣いてるんだよ…」

シャウタ「…涙じゃなくて冷や汗！」

ブラカワニ「ま、いいや、それより飯だな」

018:Pのおつかい・又聞き編

タイタンには予め無線を持たせて、状況を生実況してもらっています

タトバ「そもそも、プトティラって商店街の場所分かったっけ？」
ガタキリバ「さ、さあ…」

ラトラーター「でも、シャウタがいなくて大泣きしながら…あいつの（海鮮の）ニオイを頼りに、学校まで来た事なかったっけ？」
サゴーズ「あ、無線入った」

クウガタイタン「…えー、こちらタイタン、ターゲットは食べ物のニオイを頼りに商店街に向かっております」
タジャドル「…その手があったかー！！！」

クウガタイタン「ターゲット、早速おつかいの内容を忘れています。早くもオーガ出勤か？」

ラトラーター「いや、今からオーガの奴をプトティラのところに向かわせた所で間に合わないって!？」

ブラカワニ「ラトラーターが行けば？」

ラトラーター「やだよ!」

シャウタ「いや、食い意地の張ったプトティラのことだ、きっと」

カレー』で刷り込みは完了して…」

クウガタイタン『なんか肉じゃがと間違えたまま行こうとしています！でもある意味間違っではいけません！！』

シャウタ「　　ちがああああう！！」

タトバ「間違えて糸コンニャクも買いそうだね」

タジャドル「買ったなら、それはそれでいいんじゃないのか…カレールーはどうせ日持ちするし」

クウガタイタン『食べ物強いニオイを嗅ぎ分け、目的の商店街に到着です』

ガタキリバ「プトテイラの食い意地、すげえ…」

サゴーズ「ミラクルだよね」

タジャドル「だが、ここからだぞ…」

クウガタイタン『おっと、プトテイラの動きが止まったぞ？』

タトバ「まさか」

クウガタイタン『カプト先輩の実家・おでん屋のニオイに釣られたああ！』

タジャガタサゴシャウ「「「やっぱりいいいい！！」」」

ラトラーター「しまった、カプトの家は盲点だった！」

タトバ「どうするんだよ！オーガ先輩頼る！？それともリュウガ！？」

ブラカワニ「あのおでん屋まだ続いでるんだな」

ガタキリバ「そんな場合か！？」

クウガタイタン『飛び掛って食べる体勢に入ったぞ！これは、おでん屋始まって以来の大ピンチかー！？』

シャウタ「やああああめろおおおおー！！」

サゴーズ「お願い、食べないでえええ！」

クウガタイタン『あつと、プトテイラの動きが止まったぞ？』
兄弟「……へ？」

クウガタイタン『……なんと、おでんを食べるかと思いきや……ギリギリのところで、自重しました！決め手は五男による刷り込みです！』

ガタキリバ「なんだこの奇跡はああ！？てつきり『奇跡も魔法もないんだよ』って思いつつあったのに！」

ラトラーター「すげえシャウタの教育マジ鬼教育！」
スバルタ

シャウタ「……ラトラータータ飯抜き」

ラトラーター「ぎゃあああああ！」

タトバ「でも、良く刷り込まれてたね……」

シャウタ「あいつが来た日からみっちり仕込んだからな……」

ブラカワニ「うん、その“みっちり”加減も妄想できるわ」

クウガタイタン『さあ、順調にこのままミッションコンプリートか！？』

ガタキリバ「大丈夫だろ。アギト経由で頼んであるはずだから」

ラトラーター「そうそ……あ」

サゴーズ「何、その“あ”って」

ラトラーター「俺、アギトに『お前の母さんに頼んで間違えそうになったらヒントを出して』ってしか言っていない」

シャウタ「……まさか」

クウガタイタン『頼んでもいないのに誘惑攻撃ー！アスパラは別に買っても買わなくても支障はないけど、残金が心配になります！！』

タジャドル「……最悪だあその奥さん！旦那さんの苦勞が分かる
！！」

サゴーズ「しかも、天然だから悪気はないと言う……！」

シャウタ「…そうだな…万が一アスパラを買ったら、親父の夕飯それで」

ブラカワニ「プトティラ、買うなあああ！？」

クウガタイタン『またしても五男ミラクルキターツ！シャイニング
さんと一緒になって、“シャウタなら仕方ない”モードになっている
る……！』

シャウタ「おおおいつ！？それはどういう意味だああ！」

タジャドル「お前の躰がしっかりしているって意味でいいだろ！」

クウガタイタン『ちゃっかり、スイカまでタダで貰ってご満悦のプ
トティラは…ちゃんとお礼を言っただけの店へ！』

タトバ「え…俺の時は、オマケくれなかったよ……？」

サゴーズ「どんまい」

クウガタイタン『さあ、最後の難関…【破壊者精肉店】！プトティ
ラは果たして、無事に肉を買えるのか！？』

シャウタ「ん…ちょっと待て、あそこって確か…破格の値段で売っ
てないか？」

タトバ「そうだった……？」

タジャドル「親父さん（コンプリフ）とお袋さん（激情態）なら、
まあ、それほどもないんだけど…店番がディケイドだった日には
……シャウタカリユガじゃないと定価以下で買うことすら出来な
いぞ」

ガタキリバ「…確か、タトバ、お前…」
ラトラーター「……ディケイド頼ってなかったか…？」
タトバ「…あ」

クウガタイタン『…コイツが一番駄目だったー！最高級黒毛和牛なんて提示すんなあああ！！』
タジャラトサゴ「…やっぱりー！」「…」
シャウタ「タトバ、…お前も夕飯抜き…」
タトバ「ごめんなさあああい！」
ブラカワニ「うわー、お金の価値は分からなくても食べ物の価値や品質は分かるプトティラだろ？まずいって…」

クウガタイタン『意外と粘るプトティラ！やっぱり、お肉はいつぱいがいいよな！！』
ガタキリバ「すげえ！？」
タジャドル「あー、うんうん、そうか…」
シャウタ「どうした？」
タジャドル「ライアからの話だと、今ディケイドの奴イベリコ豚の薄切り肉7枚を提示して断られたそうだ」
ラトラーター「高い肉買わせようとするディケイドも凄いいけど、断るプトティラマジすげえ」
ブラカワニ「ラトラーターと大違いだよな」
サゴゾ「ちよつと、あんたの血を一番引いている息子にその言い草はないんじゃない？」
ラトラーター「お前の言い草もねえよ！？」

クウガタイタン『ことごとく最低だあああ！ローン支払い総額68万円って、破格すぎるわあああ！？』
ガタキリバ「最低ってレベルじゃねえええ！？」

サゴゾ「商魂凄まじすぎる！価格の破壊者だ、あいつー！」

ブラカワニ「どれだけ高い肉置いてんの！？」

タジャドル「いや、プトティラの手持ちが680円だから…それに0を一つ足して更に100回払いさせるよう言っているだけで、実際はそこまで破格的じゃないかと…」

クウガタイタン『合意書まで取り出した！こいつマジ悪魔ー！』

ラトラーター「…最低だ…」

シャウタ「おい、誰かバーニングさん呼んでこい。あいつ少年院に入れてやる」

ガタキリバ「それも怖いっての！？」

クウガタイタン『ここに来て、はつきり断ったー！』

コンボ兄弟「「え！？」「」」

ブラカワニ「マジ？」

クウガタイタン『…ペットの方がシャウタの苦勞を分かってたああー！』

タトタジャガタラトサゴ「「すっげええええええ！？」」「」」

シャウタ「」想定外すぎて硬直

ブラカワニ「安定のシャウタ！」

クウガタイタン『ナイスシュート！』

全「「何が！？」「」」

クウガタイタン『止めに入ったオーガが、ゴミ箱に入っていきますー！』

シャウタ「何が起こってる!？」

タジャドル「あ、くそ、…映像で見たい！」

サゴーズ「確かに…！」

ガタキリバ「それだったら…龍騎が『えー、それだったら俺カメラマンやりたい!』『はじめてのおつかい』ってそんな感じだろ?』って言っ…自前のビデオカメラで撮影してるぞ」

ラトラーター「無駄に空気読んだな、龍騎！」

クウガタイタン『リュウガ強すぎです』

シャウタ「…リュウガが…」

タジャドル「リュウガなら、仕方ない」

クウガタイタン『プティラ、ミッションコンプリート!なんと、残金632円を残してのおつかい完了です!』

ブラカワニ「甘いな…シャウタなら、820円まで残す!」

シャウタ「アホか900円だ」

タトバ「それも凄い!？」

クウガタイタン『余ったお金で兄弟…ただしタジャドル先輩除くに何か買いたいと言ったプティラですが、“その気持ちこそプライスレス”で済ませたリュウガは上手いと思う』

タジャドル「をい!？」

タトガタラトサゴシャウ「『ブワッ』」 号泣

ブラカワニ「シャウタの教育マジ安定」

クウガタイタン『ほのぼのとしたおつかいとは裏腹に、リュウガによるDSショーは留まる所を知りません』

タジャドル「どうしよう、その様子凄く見たい」

タトバ「…龍騎先輩に頼めば？」

ガタキリバ「龍騎はもうプトティラのおつかいの帰りの風景撮ってるから駄目だろ。…ライア先輩に頼めよ、近いんだし」

ラトラーター「もう電話して、そしたら超楽しそうな声で『分かった』って言ってたよ」

サゴーズ「早ッ!？」

タジャドル「勿論リアルタイム実況だよな？」

ラトラーター「あの人の性格だと、そうだと思う」

ガタキリバ「…やっべえ、想像しただけで笑えて来た!」

プトティラ「ただいまー」

タトバ「おかえりー」

タジャドル「…」

ガタキリバ「道に迷わなかったか…くくく」

ラトラーター「ちゃんと買ってきたかー？」

サゴーズ「ほらシャウタ、何時まで泣いてるんだよ…」

シャウタ「…涙じゃなくて冷や汗!」

ブラカワニ「ま、いいや、それより飯だな」

シャウタ「カレーできたぞー」

プトティラ「カレー？肉じゃがじゃなくて？？」

タジャドル「…材料はあまり違ってないけどな」

サゴーゾ「うん。むしろ、糸こんにゃく買わないか心配だった」
プトティラ「う？」

シャウタ「ただしタトバとラトラーターは沢庵1枚だ」

ラトラーター「…沢庵だけでも、嬉しいのはなんでだろう」

タトバ「プトティラのお陰だよきつと…！」

プトティラ「ねーねーねー」

ブラカワニ「ん？どうした？」

プトティラ「皆のおつかいって、どんな感じだった？」

ブラカワニ「あー、あいつらのおつかい…。……飯食べ終わってからでいいか、今話すとシャウタの機嫌が急転大直下でご飯自体なくなるぞ（ボソ）」

プトティラ「分かった！」

（夕飯後）

タジャドル「さーて、レポート…」

ガタキリバ「寝よ…」

ラトラーター「俺も。新聞配達バイトあるし…」

サゴーズ「おやすみー」

シャウタ「さーて、造花の内職の続きでもするか…」

プトティラ「皆寝たね！」

ブラカワニ「タジャドルとシャウタは寝てないけどな。…よし。じゃあ、パパンがお話しちやうぞー」

〈回想〉

1・タジャドルの場合【お題：肉のないすき焼き】

タジャドル（5歳）「おとうふ、ねぎ、にんじん、しいたけ、えのき…スーパーに行けば買えるかな？」

ブラカワニ「うむむむ、タジャドルはしっかりしてるなあ」

サゴーズ（3歳）「ぱぱー。おまわりさん」

バーニング「……おい、あんた、」

ブラカワニ「ん？」

バーニング「最近、噂になっている誘拐犯じゃないのか？ちよつと署まで来てもらおうか」

ブラカワニ「え、ちよつ、違う違う、俺の子供！」

バーニング「嘘つけ、似てないだろ！」

ブラカワニ「いや息子だって！？あの子（＝タジャドル）もこの子（＝サゴーズ）ちゃんと腹を分けた息子なんです！」

バーニング「アホか“腹”じゃなくて“血”だろ！？…怪しすぎる、さっさと来い！」

ブラカワニ「あー、ちょっと待って、…サゴーズオオオ！」

サゴーズ「ぱがおまわりさんとあそんでる！」

ブラカワニ「サゴーズオオオ」

2. ガタキリバの場合【お題：ケーキ】

ガタキリバ（5歳）「ケーキ、ケーキ、おかーさんのケーキ」

シャイニング「あら、ガタちゃんいらっしやい！」

ガタキリバ「ケーキください！」

シャイニング「あら、ごめんね。うちにはケーキ置いてないのよ」

ガタキリバ「ええ…」

シャイニング「ケーキ屋さんだったら、ライアサバイブさんの所の魚屋さんを右に曲がって、すぐの所にあるわよ」

ガタキリバ「はい！」

ガタキリバ「ただいま！」

タジャドル（6歳）「…ガタキリバ、その箱、何？」

ガタキリバ「ケーキ！」

ラトラーター（5歳）「うまそー！」

サゴーズ（4歳）「…イチゴとミカンとモモは…？」

シャウタ（3歳）「…ふわふわ、クリーム、どこ…？」

ガタキリバ「あれ？何で二人とも泣いてるの？」

サゴシャウ「おかーしゃんのケーキはああ！？」

ガタキリバ「○○」

ブラカワニ「…材料じゃなくて、売り物買ってきちゃったかー…」

ちなみに、買ってくるものはイチゴ・桃（缶詰）・ミカン（缶詰）

・ スポンジ・クリームでした

3・ラトラーターの場合【お題：豆腐の味噌汁】

買ってくるものは豆腐・長ネギ・白味噌・乾燥ワカメ

ラトラーター「やったー！お金だー！！」

ラトラーター「ただいま！」

ブラカワニ「おお、流石に速い」

タジャドル「…ラトラーター、その箱は？」

ラトラーター「おもちゃ！」

タジャブラ「はあ！？」

ガタキリバ「あ、ずるい！俺にもおもちゃー！！」

サゴーズ「…ごはんは…？」

ラトラーター「へ？」

シャウタ「……ぶわあああああああああああああ」

タトバ（2歳）「びやあああああああ！」 つられて泣いた

ラトラーター「なんで泣くの！？」

タジャドル「…当たり前だー！」

4・サゴーズの場合【お題：炊き込みご飯】

サゴーズ（5歳）「えっと、…ねぎとしいたけとごぼうと、……にんじん…」

シャイニング「あら、いらっしやい」

サゴーズ「おばさん、…ねぎとしいたけとごぼうください」

シャイニング「はいどうぞ」

サゴーズ「ただいまー」

タジャドル（7歳）「おかえり」

ガタキリバ（6歳）「あれ？…人参がないぞ？」

サゴーズ「にんじんは売り切れだつて」

シャウタ（4歳）「？？？」

タトバ（3歳）「むー」 布団でおねむ

ちなみにサゴーズの人参嫌いは、7年後シャウタによって克服しました

5・シャウタの場合【お題：シーフードカレー】

シャウタ（5歳）「おばさん、にんじんとじゃがいもとたまねぎく
ださい！」

シャイニング「はいはい。それじゃあ、320円ね」

シャウタ「…まけて？」

シャイニング「そう言われてもねえ」

シャウタ「……（うるうる）」

シャイニング「そうねえ、じゃあ、220円ね」

シャウタ「もうちょっと…（うるうる）」

ブラカワニ「うちの息子マジ天使」 カメラ片手に

シザース「失礼します」

ブラカワニ「ん？」

シザース「最近この辺りで、いたいけな幼児にわいせつ行為を働く
者がありまして…失礼ですがお話を聞かせていただけないでしょう
か？」

ブラカワニ「え、何、またこのパターン！？…待つてあの子は俺の
子供、俺の子供なんです！」

タトバ「???」

シャウタ「…ロール…キャベツ…ひぐつ、」

タジャドル「やばい、母さん、かあさああーん!」

後でディケイドは両親に怒られました

く回想完了く

ブラカワニ「うん、……なんかある意味まともな思い出はサゴーズだけ」

プトティラ「どんまい」 頭なでなで

ブラカワニ「…お前、ホンツト優しくていい子だわ…!」

タジャドル「……思い出せば思い出すほど、殺意が沸くな…あの時のラトラーター」

シャウタ「…ラトラーターの奴に沢庵勿体無かったか?」

020：兄弟ガンバライド！その1

第一戦 タジャドル（003R）&ガタキリバ（002R）VS
プトティラ（005N）&シャウタ（004R）

第1ラウンド

タトバ『タジャドルとガタキリバは“面白い組み合わせ”、シャウタとプトティラは“なかなかいい組み合わせ”が出ました！』

タジャドル「どうしてこうなった」

ガタキリバ「俺が聞きたい」

シャウタ「俺も聞きたい」

プトティラ「う」

タトバ『まずは互いに普通の攻撃で終わりました！しかしシャウタの“アイテヲ ブットバセ”は発動、追加ダメージです！！』

第2ラウンド

タトバ『果たして下克上なるか、長男・次男コンビ！第二ラウンドのロットは…』

タジャドル「いや、 普通【下克上】はあっちに使うものだろう

「があああ！？」　ゲキレツ当てた
ガタキリバ「なんら間違ってもいないけどなあああ！？」　ゲキレツ当てた

タトバ「キター！ここでゲキレツアタックは大きいぞー！！」

タジャガタ「そおい！！」　同時キック

プトティラ「……」

シャウタ（あ、…嫌な予感）

第3ラウンド

タトバ「属性効果もあつてか、長男・次男コンビは優勢！更に、タジャドルチャンスによるクワガタカマキリバツサイゴリラタカライオングガスカヤンは大きいぞー！！」

タジャドル「タジャドルチャンスって言えよ！？」

ガタキリバ「でも、相手がいくら速さでも俺の後衛スキル“降り注ぐメダル”のお陰でアタックポイントは+10…相手のアタックポイントを上回っ」

プトティラ「……」

ゴックン　メダガブリュー出現

タジャガタ「え」

プトティラ「ぷー！！！！」

タトバ「ここに来て、メダガブレイク発動！ゲキレツアタック確定だあああー！！」

タジャガタ「うつそおおお！？」

シャウタ「…やっぱゲキレツされて切れたか」

タトバ「土壇場での逆転ザウラーブロー！モーションが若干、ドラ

グフアング・ツバイに似ているとは言わないように！』
プトティラ「勝った！」

シャウタ「ああ、なんか、切ない勝利だった」
プトティラ「？」

タジャドル「…どうして俺達の扱いはいつもこうなんだ」

ガタキリバ「畜生、ガンバライドでもこうなのかよ…！」

プトティラ「ぷひゅ（笑）」

シャウタ「こらプトティラ、せめてガタキリバは笑うな」

タジャドル「俺は！？」

ガタキリバ「畜生…ラトラーター！サゴーズ！！……テメエらも道
連れじゃあああ！！！？」

ラトサゴ「えええ！？」「」「」

（（（

第二戦 プトティラ&シャウタ（同上）VSラトラーター（002
R）&サゴーズ（002R）

第1ラウンド

ブラカワニ『さあて、続いては巻き込まれたラトラーターとサゴ
ゾが相手！ラトラーターに関しては、ライダースキル“流浪の男”
でアタックポイント+10だ！』

ラトラーター「ってことは、最低でもアタックポイント+20か」

速さ属性

サゴゾ「でも、…相手が相手だから」

プトティラ「う！」

ゴックン メダガブリュー出現

ブラカワニ『メダガブレイク突入』

ラトサゴ「嫌ああ懸念した矢先にそれはやめてえええ！？」

プトティラ「あう！」

シャウタ「…ところでラトラーター…お前俺のパイの実食べただろ

おおお！？」 追撃キック

ラトラーター「ぎゃああああバッドタイミングで追い討ち攻撃し
ないでえええ！！」

第2ラウンド

シャウタ「パイの実パイの実パイの実…！」 ゲキレツ当てた

プトティラ「パイの実…！」 ゲキレツ当てた

ブラカワニ『何と二度目のゲキレツアタック！もはや、サゴゾ達
に逃げ場はないぞー！！』

サゴゾ「もう、嫌…ラトラーターのせいだ……」

ラトラーター「なんで！？」

第3ラウンド

ブラカワニ『ちなみに、いくら技属性であつたとしても、2回ゲキレツを食らうと完封試合だからな』

ラトラーター「もう、涙も枯れ果てた…」

サゴーズ「ああ、身代わりしても結果は何も変わらないなんて…出なかったけど」

ラトラーター「おいその“ガードヲカタメロ”!？」

シャウタ「懇親の一撃叩き込め！」

プトティラ「パイの実の仇ー!!」 ザウラーブロー

ブラカワニ『食べ物の恨みは怖いもんだぜ、マイ息子ラトラーター』

サゴーズ「もう嫌!二度とラトラーターとガンバライドで組まない!」

ラトラーター「俺だけのせいだよ!？身代わり出せよ身代わり!」
サゴーズ「ラトラーターのせいで死にたくないし!？」

ラトラーター「あ!？殺るか!!？」

タトバ「もー、落ち着いてよ…」

タジャドル「しかし、あそこまで綺麗な完封試合だと…」

ガタキリバ「…逆に寒気がするよな」

ブラカワニ「あ、じゃあさ、今回は“劇中技限定対決”しない?」

ラトラーター「ちょっと待て、作者、俺のコアメダルどこるかライオディアスのカードも持ってないんだけど」

ブラカワニ「だから、お前は実況」

シャウタ「俺とプトティラはカードないんだけど」

プトティラ「う」

ブラカワニ「そこはコアメダルによるコンボチェンジでいいんじゃないか?ただ、公平を期すためにタトバの003SRタトバキック

のカードを使うけど」

ラトラーター「ってことは、確実にシャウタとプトティラは別々&前衛になるのか」

ガタキリバ「俺はもうタジャドルとは組まない…」

シャウタ「だったら俺と組むか？」

プトティラ「サゴーズ、組も」

サゴーズ「うん」

タジャドル「…タトバ…もう切れた、あいつら、粉碎する（ただしサゴーズは悪くないので除外）」

タトバ「また俺、タトバキックを決める機会失っちゃった…？」

021：兄弟ガンバライド！その2

第一戦 タジャドル（005SR）&タトバ（003SR）VS
プトティラ（003SR）&サゴーズ（003SR）

第1ラウンド

ラトラーター『サゴーズ負けろ』

サゴーズ「なんでまだ引き摺ってるかな!？」

ラトラーター『とりあえず、長男チャンスはサイゴリラゾウライオ
ントラクワガタカギガスキャン!』

タジャドル「長い!」

タトバ「せめて“・”で区切れない!？」

プトティラ「ぷー」

ラトラーター『とりあえずこのラウンドは普通に終わったので、流
します』

第2ラウンド

ラトラーター『さて、プトティラLRを持たない作者はここでコア
メダルをスキャン!』

タジャドル「メタ発言するな！」

ラトラーター『上がったのは必殺・攻撃・防御がそれぞれ250！
さあ、ここからの……』

プトティラ「う！」

ゴツクン メダガブリユー出現

タジャタト「うわあああああだからコイツ嫌ああああ！？」

「

ラトラーター『悪夢再来』

第3ラウンド

タジャドル「負けていられるか…こいつにだけはああ！」

ラトラーター『おおと、長男タジャドル、意地の先攻だー！』

タジャドル「食らえ！プロミネンスドロップ！」

ラトラーター『流石に厨二臭いぜええ！しかし、これでプトティラは……』

プトティラ「……たあーじゃあーどおーるうー…」 『ゴゴゴゴゴ…』

タジャタト「ひっ！？」

サゴーズ「まさか…」

プトティラ「…うがあああああー！」

ラトラーター『ライダーガッツだああああ！？』

第4ラウンド

タジャドル「まだまだ！先攻を取れば、こっちが勝てるー！」

プトティラ「ぐるるる…！」

サゴーズ「（うっわあ、ガードしないと怖い）……ごめんタジャドル！」

タジャドル「は！？」

ラトラーター「　　おーいつ！おま、何で身代わり防御するわけ！？俺の時はしてくれなかったのに！！」

サゴーズ「そして…更にごめん！」

プトティラ「うー！！」　メダガブリューシュート

タジャドル「ぎゃああああああ！」

ラトラーター「HP60で逆転勝利か…しかも何気にWライダー必殺技」

タジャドル「あ、あの野郎…」

〃
〃
〃

第二戦　プトティラ&サゴーズ（同上）VSシャウタ（003SR
タトバ）&ガタキリバ（003SR）

第1ラウンド

ブラカワニ『さーて、早速どうなっ
サゴーズ「あ」ゲキレツ当てた
プトティラ「あう？」ゲキレツ当てた
ガタシャウ「マジかああ！？」
ブラカワニ『そうだった、シャウタとガタキリバっておみくじで
凶か大凶引くほどあまり運がないんだった』

第2ラウンド

ブラカワニ『メタ発言すると、1Pがプトティラ・2Pがシャウタ
にコンボチェンジだな』

シャウタ「これ以上ゲキレツされるとまずいな…」

ガタキリバ「でも、何か嫌な予感が…」

プトティラ「あうっ！？」

ゴックン

ガタシャウ「ぎゃあああああああ！」

ブラカワニ『何だこれ、前回のラトラーターとサゴーズが重なって
見えるぞ？』

第3ラウンド

ブラカワニ『さあ、ここでゲキレツを引かないと後がない2Pチー
ム！果たして…』

ガタシャウサゴプト「あ」APの数揃った

ブラカワニ『これはなんと！ライダーラッシュ突入だー！！』

ガタキリバ「勝てシャウタ！」

サゴーズ「勝たなくていいよプトティラ！」

シャウタ「絶対負けたくねえええ！」

プトティラ「あう、あうあう、…うー」
ブラカワニ『空気を読んで負けたプトティラ超いい子』
シャウタ「うん、後でちょっと後悔した!」

第4ラウンド

ガタキリバ「いきなりオチを言うけどさ、……ねえわ」
シャウタ「うん」
プトティラ「ごめんねごめんね…!」
シャウタ「いいよもう代わりにサゴーズの夕飯バナナ2本だから」
サゴーズ「ありがとうございます!」 飯抜きじゃなかった&バナナ
ブラカワニ『ちなみにあえて実況すると、プトティラ達がWライ必
殺出したっという』

タトバ「シャウタとタジャドルで戦ったら?」
シャウタ「えー…」
ガタキリバ「不幸の代名詞である俺らに、死ねと?」
タジャドル「馬鹿言え、不憫タツグ舐めるなよ」
タトバ「まあ、提案した身としては何かが起こる気がしてならない
…」

ブラカワニ「……あー、そう、うん、分かった…」
ラトラーター「どうした?」
ブラカワニ「なんか、コア注意報出たってさ」
タトバ「ジャガタシャウ」「…え?」「」
サゴーズ「うわぁ…」
プトティラ「コア???」

〃
〃
〃

第三戦 タジャドル&タトバ（同上）VS シャウタ&ガタキリバ（同上）

第1ラウンド

ラトラーター『ここはなんら普通に終わったな』
ブラカワニ『タトバが追い討ち攻撃出したけどな』

第2ラウンド

ラトラーター『ここも普通だった』
ブラカワニ『さて、来るぞ…』

第3ラウンド

コア「我が名は、仮面ライダーコア！」

タトバ「ぎゃああああマジで来たああああー！」

プトティラ「タジャドル殺られる」

サゴーズ「ごめん、夕飯のためにも正直それを願ってる！」

タジャドル「おいっ!？」

コア「……（やべあの真つ赤トラウマ）……ぐおおおおおお！」

ガタシャウ「「ぎゃーッ!？」」ゲキレツ破壊

ブラカワニ「シャウタ達のほうのゲキレツアイコン消えたー！」

ラトラーター「運がないとかそういう問題じゃない！」

シャウタ「……orz」落ち込み

ガタキリバ「諦めるな、ひよっとしたら奇跡が……」

タトタジャ「「あ」」ゲキレツ揃った上に稲妻

サゴーズ「グレートゲキレツアタック……」

プトティラ「ちっ」

ラトラーター「奇跡、そんなのは期待すんな……ってか」

シャウタ「……もういいよ、やれよ、やれったら……」体育座り

ガタキリバ「ごめんなさい、無駄だって分かっているけど盾になりま

す！」身代わり防御

ブラカワニ「お前が身代わりになるうが、シャウタの気持ちはガタ落ちのままなのが切ないなガタキリバ……」

シャウタ「……」体育座り

タジャドル「おい、まずお前が謝ってこい」

プトティラ「タジャドルが先！」

タトバ「いや、ある意味俺が一番謝らないといけないのかもしれない……」

サゴーズ「ゲキレツ揃えちゃったこつちにも原因がある…」

ガタキリバ「俺も色々…」

ラトラーター「皆で謝るか…？」

シャウタ「いや、もう、いいよ…ふふ、……ふふふふ、ははは、あはは…」

タトタジャガタラトサゴプト「「シャウタごめんなさああい！

？」」

ブラカワニ「落ち着けマイ息子シャウター！」

シャウタ「もう人生疲れた死にたいどうせ戦闘中に歌かからないし水没してくる」

プトティラ「ごめんなさい！ごめんなさああい！！」

タジャドル「ホントすいませんでしたあああ！」

シャウタの機嫌は2日後に戻りました

022：小ネタその3

・映司君目エ怖！

シャウタ「ぎゃあああああああああああああああ」

ガタキリバ「うるさい！！」

プトティラ「…むにゅ？」 バトスピ終わった辺りから転寝して今起きた

タジャドル「まあ、軽くホラーだよな…」

・町中の防犯カメラ

ラトラーター「実際、この町でやられると迷惑他ならないよなあ」

ガタキリバ「そうそう。特に王蛇とかホッパー兄弟なんて、補導対象だろ…」

サゴーズ「プライバシーの侵害もあったものじゃないよね」

タトバ「本当に…勘弁して欲しいなあ」

シャウタ「親父なんて、ただ歩いているだけでも捕まりそうだよな」
プトティラ「タジャドルもね」

タジャブラ「おい！！」

・チェスをするロスト

タジャドル「……」

シャウタ「……」

プトティラ「あれ何してるの？」

ガタラトサゴ「「頭の痛くなる遊び」」

タトバ「チェス。…俺、未だにルールよく分らないんだけど」

ブラカワニ「なー。終わったら、将棋しないかマイ息子達」

タジャシャウ「「やだ」」

ガタラトサゴ「「無理将棋わかんない！」」

タトバ「…上に同じく！」

ブラカワニ「……ちえー、いいもん、プトティラに教えるから」

プトティラ「ぷ？」

・今回のヤミーは

ブラカワニ「軍鶏^{しやせ}らしいな」

タトバ「うわー、伊達さんいないのに鶏系が来るなんて…！」

シャウタ「って言うか、炎・格闘で軍鶏なんて…なんというワカシヤモ」

タジャドル「バシャーモだろ！？」

プトティラ「軍鶏って美味しい？」

サゴーゾ「あまり見ないけど、多分美味しいんじゃない…？」

・シャゴリーター

ラトラーター「チーターとゴリラって相性悪いんじゃないか、そう思っていた時期が俺にはありました」

サゴゾ「かなりカオスな組み合わせの亜種だよね」

シャウタ「どの辺りが、だ？」

ラトサゴ「全部」

ガタキリバ「もつと言えば、サウバ以来のな」

タジャドル「しかし、タカトラーターよりは役に立っていた…というか！順番が逆だったらきつとあっちが拘束プレイだったぞコノヤロオオ」

サゴシャウ「変態」

・シャゴリーターその2

タトバ「そういえばリイマジオーズの1話でも、出てたねシャゴリーター」

ブラカワニ「宣伝乙」

タジャドル「というか…俺、気付いてしまった」

ラトラーター「お前も？」

ガタキリバ「つか、気付かないとおかしいだろ…」

サゴゾ「うん、流石に分かった」

プトティラ「何が？」

タジャガタラトサゴ「『シャチでも水出るんだな!?!』」
シャウタ「…出るわああ!?!」

タトバ「いや、だって、今までウナギが水出しているんだとばかり
…」

ラトラーター「メズールだって手から出してるじゃん、手から!」
タジャドル「じゃああれか、メズールも頭の部分から水出せるのか
!?!」

ガタキリバ「いや、それ、口から出すようなもんだろ?! 女性怪人
でそれは流石にやばいって…」

サゴゾ「…だったら、タコからも出るのかな…」

シャウタ「出ねえよ(きつと)!そこからも放水できたら、俺の体
は何で出来ているんだ!?!」

ガタキリバ(液化化できるから、体を構成する殆どが水…?)

サゴゾ「え、じゃあシャウタどうやって用を足して…」

シャウタ「それは出るよ!つか、お前のほうがタジャドルより変態
発言だろ!?!」

ブラカワニ「ちなみに、『シャチで水出せるなら改変しなくてよかったのに…! or z』と悔しがっている作者がいたとかいなかったとか」

・凸凹コンビ?

ガタキリバ「里中って一体…」
タトバ「なんでゴスロリ…?」
ラトラーター「…さあ」

ブラカワニ「女って生き物はな、ここぞという時には気合いを入れておめかしするものなんだよ…」
タジャドル「そうか…？」

ブラカワニ「あと、身だしなみを無駄に気にする生き物なんだ」
シャウタ「それは分かる気がする」

・今回のヤミーの親って

タトタジャガタラトサゴシャウ「」「絶対風都出身だろ、あの悪女」
「」

プトティラ「ふーとって何？」

ブラカワニ「簡単に言うと、一年前の仮面ライダーの舞台」

ラトラーター「つか、ゾーンとビーストのドーパント回を思い出したわ…マジで」

タジャドル「ニオイが似ていたもんな」

・次回は

タトバ「アंकウウウウ」

タジャドル「消えるのか！？消えないのか！！？」

ガタキリバ「マジレスすると、取り込まれr（ry」
シャウタに
W水流浴びせられた

ラトラーター「俺の出番だああ！」

サゴーズ「あーそう、よかったね。でもどうせメダガブリュー振って終わりだよ」

シャウタ「ふーん」

プトティラ「…手を消毒してから使え」 唸りながら

ブラカワニ「案外、最初はラトラーターを出して取り逃がすけど、みたいな展開にならないもんかね？」

タジャドル「そうなのかどうかは、次回のOPを注意深く見れば分かるな」

ガタキリバ「ああ。個人的には、また後藤がやってくれると信じている」

タトバ「いや、そろそろフルコンボエディション出るでしょ？それまでには、シャウタの歌出さないと（催促的な意味で）」

ラトラーター「何その安定した扱い方！つか、42話じゃダメなのシャウタ！？」

シャウタ「42話ってマツキーが人々脅してオーズを呼ばせるんだろ？プトティラ出るしかないじゃん…第一、その手前もソフビの催促か亜種祭らしいし」

ガタラト「お前が一番言ったら駄目なネタバレ言ったアアア！？」
「

・オーズには関係ないですけど

ガタキリバ「ヴィオレまゐ復活キター！！」

タジャドル「ごめん、俺バトスピ見ないから分からない…」

プトティラ「アニメは見るけどゴークカイジャーの頃に眠くなる」

7:30台以外のニチアサは見る

ラトラーター「悪い、オーズの頃に起きるわ…日曜」

サゴーズ「…タジャドルと一緒に」

ブラカワニ「ごめんオーズしか見てない」

シャウタ「って言うか、手前のデジモンも含めて全部見てるのって
お前ぐらいだろ…？」 バトスピは見てる

タトバ「ごめん、【少年突破バシン】の頃は見てたけど…」

ガタキリバ「だって久々のまゐ様の勇姿だぜ！？美しいんだぜ、凜
々しいんだぜ、【少年撃破ダン】から2年経っている設定の【ブレ
イヴ】のまゐ様のバトルなんだぜ！！？」

タジャラトサゴタト「…ガタキリバが盛り上がる意味が分からな
い…」

シャウタ「でも可愛い子だよな」

タジャラトサゴタト「…え！？…」

シャウタ「ただし俺は華実のような清纯派が好み」

ガタキリバ「あ、華実もいいよなあ…！」

シャウタ「あーでも、プリムも捨てがたいし…」

ガタキリバ「フローラも味があるよなあ…」

シャウタ「マギサも良くなかったか？」

ガタキリバ「茶目っ気あつたよなあ。あれで婚活してたって信じら
れん」

シャウタ「シリーズ別物になるけど、マイサンシャインとかも…」

ガタキリバ「マイサンシャインは俺達の太陽！」

タトバ「…ごめん、本気で何の話をしているのか分からない！
？」

023：兄弟SPEC

タトバ「えー、7/27日はavexから【仮面ライダーオーズ Full Combo Collection】が発売されまーす！
長男集団「わーパチパチパチー」」

プトティラ「ぱちぱち」

ブラカワニ「よかったなマイ息子達…！発売日は並んで買っぞ」

タジャドル「いや、ライアに焼き増ししてもらっ」

ガタキリバ「買えよ！特にシャウタとプトティラのためにも…！」

シャウタ「あー、それは許す」

プトティラ「ガタキリバ、復活したらガブリュー（一回だけ）使っ
ていいよ」

ラトラーター「あつれー！？俺とは扱いが違っ」

プトティラ「黙れ」

ラトラーター「orz」

ガタキリバ「まあ、CDのジャケット見たけどさあ」

サゴーズ「どうやって…？」

ガタキリバ「調べれば出てきたぞ」

ラトラーター「俺、あの並び方は正直どうかと思うんだ」

タトバ「俺、正直裏面（？）のジャケット絵…黒色なのにツツコミ
を入れたいんだ」

サゴーズ「何かおかしい気がしたのは、タジャドルとシャウタとプ
トティラの順番にあると思うんだ」

ブラカワニ「あれ…誰が中間フォームだったっけ？」
タジャドル「俺だよ!!」

タトバ「…そうだったっけ!？」

ガタキリバ「ごめん、シャウタに侵食されて分からねえわ！」
ラトラーター「専用バイクないのに!？」

サゴーズ「苦戦多いのに!？」

シャウタ「…センターはサゴーズなのに!？」

タジャドル「泣くぞお前らああ！PV舐めんなよおお!？」

ブラカワニ「冗談だよ（でも正直、中間フォームってある程度の基本フォームを出し終えた後に出るものだと思うんだ）」

タジャドル「親父は（ ）を正直に言えよ！そしてシャウタはプティラより突起目立って正直どうなんだ!!」

シャウタ「知らねえよ水かけるぞ！」

ラトラーター「身長、誰が大きいんだろうなあ」

タトバ「えっ、みんな高岩さんだから同じじゃないの!？」

ガタキリバ「メタやめろ」

シャウタ「…マスクまでの長さを言うのなら、……サゴーズ>ガタキリバ>ラトラーター≡俺≡プティラ>タジャドル>タトバ…?」

ブラカワニ「設定だと、サゴーズ≡プティラ（205cm）>ガタキリバ（204cm）>シャウタ（203cm）>ラトラーター（200cm）>タジャドル≡俺（198cm）>タトバ（194cm）」

タジャドル「orz」

ラトラーター「すげえ、シャウタの目測殆ど当たってる!」

ガタキリバ「お前ミスってるけどな」

ラトラーター「でも嬉しいミスだから気にしないでおく!」

サゴーズ「切なくなるミスじゃなくて?」

タトバ「他はどうなんだろう」

ブラカワニ「うーん、調べによると」

体重

サゴーズ(110kg) > プトティラ(105kg) > ガタキリバ
(93kg) > ブラカワニ(90kg) > ラトラーター(89kg)
> シャウタ(88kg) > タジヤドル(87kg) > タトバ(86
kg)

走力

ラトラーター(0.222秒) > プトティラ(3.3秒) > タジヤ
ドル(4秒) > タトバ(4.5秒) > ガタキリバ(5.2秒) > ブ
ラカワニ(5.8秒) > シャウタ(6秒) > サゴーズ(6.5秒)

パンチ力

プトティラ(10.5t) > サゴーズ(8t) > タジヤドル(6.
5t) > ブラカワニ(6t) > タトバ＝ラトラーター(4.5t)
> ガタキリバ(4t) > シャウタ(3.5t)

キック力

プトティラ(20t) > タジヤドル＝ブラカワニ(15t) > タト
バ＝ガタキリバ(12t) サゴーズ(10.5t) > ラトラーター
(9t) > シャウタ(8t)

ジャンプ力

プトティラ(210m) > ガタキリバ(200m) > タトバ(19

0m) > タジャドル (160m) > ブラカワニ (90m) > ラトラ
ーター (80m) > シャウタ (75m) > サゴージ (55m)

ラトラーター「おい、これ、何か間違えてる」

ガタキリバ「え、シャウタのスペック間違えてるんじゃない？」

シャウタ「…間違いは体重ぐらいじゃない？」 タジャドルの足を
踏みつけながら

タジャドル「痛い痛い、踏むな！」

タトバ「俺、意外と上位な件について」

サゴージ「orz」

シャウタ「 今まで、タトバが『俺全然必殺技決まらないし、
きっと俺は別の家の子なんだ』、とか言ってたけどさ」

タトバ「あ、うん」

シャウタ「…ぶつちゃけ、俺が一番この家の子とは言い切れない気
がする…」

タジャドル「いや、それはない」

ラトラーター「っ…か、似てないのは今に始まったことじゃないだ
ろ…」

ガタキリバ「その上、スペックなんて飾りだし…中の人が実際、そ
こまでできたら凄いぞ？」

サゴージ「それに少なくとも、俺よりジャンプ力あるし…」

タトバ「俺より体重あるし…」

タジャドル「あ、それは俺も…」

シャウタ「 タ力頭二人、今日から二日間飯抜き！」

タトタジャ「なんでえええ！？」

ガタキリバ「当たり前だろ」

ラトラーター「ぶっちゃけ、痩せたいなら自分の飯減らせば…あいだだだだだだ！？」 頬抓られてる

シャウタ「減・ら・し・と・る・わ！！」

ラトラーター「じゃあ運動しr…あだあああああ！？」

シャウタ「…煩せえ身長俺より低い上に運動もしてるのに重い奴！それに部活戻れば苦労しないわボケエエエ！！」

ブラカワニ「あー、じゃあプティラ散歩に連れて行けば？…結構ハードだぜ…」

プティラ「う！」

シャウタ「…プティラを散歩に連れて行ったら、痩せるどころか灰になるのは目に見えてるから…」

ラトラーター「正直、親父が帰ってきて良かったと思えるのは、シヤウタというリスクを犯すことなくプティラの散歩が出来ることだよな」

ガタキリバ「プティラとの散歩の後で死んだように倒れると、大打撃だしな…」

タジャドル「でも、俺、 シャウタが他の兄弟を押さえて勝てる部分知ってる」

タトバ「え、何、恐怖政治？」

シャウタ「お前一週間飯抜きにするぞタトバ？」

タトバ「ごめんなさい！」

タジャドル「…これだ」 最初に受けた超有名大学の難問入試問題
取り出しながら

ガタキリバ「……駄目だ、見ただけで頭痛が」

サゴーズ「ごめんなさい、その大学の名前だけで目が……」

ラトラーター「嫌あああそんなの見せないでえええ」

タトバ「ぐあああああああああ」

シャウタ「あーこれか……ところでタジャドル、お前なんでこの大学落ちたんだっけ。確か、先生達には『余裕で入れる』って言われてなかったっけ」

タジャドル「極度の緊張と、プレッシャーと、前日にガタキリバ・サゴーズ・ラトラーター・タトバ・プトティラの酈が気になりすぎて眠れなかったせい。つか今それを蒸し返すな！」

歌を流しながら読むと楽しさ倍増の作品です

ガタキリバ「長い！」

ラトラーター「しつこい！」

サゴーズ「ウザイ！」

シャウタ「くどい！」

タトバ「無駄に壮大！」

プトティラ「煩い」

タジャドル「ひっでええええ！？お前らだってどっこいどっこいだ

るうがー！！」

ブラカワニ「皆、短冊に願回事書いたかー？」

プトティラ「う！」

ブラカワニ「マイ息子達、何を書いた？」

タジャドル「普通教えないだろ……」

ブラカワニ「ちえー。ちなみにパパンは【金】」

タジャドル「稼げよ！」

プトティラ「【飯】」

タジャドル「お前も親父と同レベルか！」

ガタキリバ「【受験合格】」

ラトラーター「上に同じく」
サゴーズ「【ツッコミ脱却】」
シャウタ「【本編で歌が流れますように】」
タトバ「【タトバキックを決められますように】」
タジャドル「…ちなみに俺は【ロストアंकと再戦、勝てますように】」

タジャドル「大河ドラマ！大河ドラマ見せてくれって…！」
ガタキリバ「いや、アニメ！アニメ…！」
ラトラーター「音楽番組だろ！」
サゴーズ「時代劇！」
シャウタ「サスペンス劇場だろ！」
タトバ「バラエティー！」
ブラカワニ「いいや、まずは明日の天気を見てからでも…」
プトティラ「うー。皆がチャンネル争いすると、つまんない」

ブラカワニ「…よし。じゃあ、ここは公平にプトティラが何を見たいかにしよう！」
タジャドル「いや、こいつ、テレビに興味ないから…」
タトバ「あつたとしても、料理番組を見てよだれ垂らすぐらいだよ…」
ブラカワニ「プトティラー。テレビ見るとしたら、誰と一緒に見たいか？」
タトバ「タジャガタラトサゴ」「それシャウタ滅茶苦茶有利じゃん！」
「」
プトティラ「ぷー」ガタキリバ指差す
タトバ「あれっ意外とガタキリバだ！？」
プトティラ「……他のはつまらない…」

タトタジャラトサゴ「「orz」」

シャウタ「ま、そりやあなあ……。……ガタキリバの見たいアニメって7時半からだろ、それまでは提案した親父の天気予報見せてやれよ。一番キリのいいところで終わるし……」

ガタプト「「はい」」

ラトラーター（あれ、……親父の奴……この展開狙ってた……？）

タトバ（それもあるんだろうけど、……親父プトティラ可愛がってるから……）

プトティラ「タジャドル永遠におやす……」 メダガブリュー構える

タジャドル「 みになってたまるかあああ!？」 起きた

プトティラ「ちっ」

タジャドル「……おいッ！ シャウタ、親父、こいつの教育どうなってる!？ タトバとサゴーゾも来い!！」

シャウタ「お前が何かしたんだろ」 2時の方向見ながら

ブラカワニ「俺一緒に遊んでるだけだぞー」 6時の方向見ながら

タトサゴ「俺達関係ないし!？」

シャウタ「タジャドル、隣町の大安売りよろしく」

タジャドル「……ラトラーターは？」

シャウタ「三駅隣のスーパーに行かせた、ちなみにガタキリバは近くのスーパーがお一人様1パックの卵を買いに行かせた」

タジャドル「……」

シャウタ「任せた」 背後でプトティラと親父がエグイルごっこ
タジャドル「……俺の休日何処だよ……!」 泣きながら飛び出す

シャウタ「俺だって休日ねえよ」 後ろで遊んでいた二人を捕りながら

ブラカワニ「ぎゃー、痛い痛い!」

プトティラ「ごめんなひゃあい！」

タジャドル「うわああああ大安売りのバカヤロオオオオ泣きながら安売り品を持って飛び立つ

プトティラ「今日のご飯は？」

シャウタ「安売りのお肉たくさん買えたから、焼肉」

プトティラ「！！！」 尻尾ふりふり

シャウタ「ただし肉は5パック分しかないので、基本は野菜ばかりです」

プトティラ「：あうー」 尻尾垂れる

龍騎「焼肉と聞いて遊びに来ました！」 ソーセージと牛肉と鶏肉持参

ライア「魚介も持ってきたぞ」 家のイカとエビとホタテ持参

タジャドル「なんでお前らそういう情報は早いんだよ、持参してくれるのは嬉しいけど」

タトバ「っていうか、龍騎先輩とリュウガの肉って何処の？」

リュウガ「『この間うちのバカ息子が迷惑かけたから、ブラカワニさん所に行くならお詫びとして持って行きなさい』……って、肉屋の奥さんがな」 ホルモンと牛タンとハツ持参

タジャドル「：おいっ！俺の前に鶏肉ばかり焼くなああ！！」

タトバ「誰、俺の狙ってた牛肉食べたの！？」

ガタキリバ「キャベツキャベツ」

ラトラーター「ホルモンホルモン」

サゴーゾ「バナナない？」

龍騎「入れるなよ!？」

プトティラ「うー!うー!」

シャウタ「こらプトティラ、肉ばかり取るな!イカ食べイカも!!」
リュウガ「…お前も焼いてばかりいないで食べよ!」 シャウタの
皿にハツ入れつつ

ブラカワニ「エビうまー」

ライア「……ところで、一体誰だ、俺の目の前でパイナップル焼いたのは」

タジャドル「あ、それ、多分ラトラーターかガタキリバ」

ガタラト「「焼きパイナップル美味しいよ!？」」

シャウタ「どっちもかい!……あー、サゴーズ!!バナナはやめろ、
パイナップルとは雲泥の差だ!!!」

025: POWER to TEARER兄弟Ver.

歌を流しながら読むと楽しさ倍増の作品です

タトバ「…なんでプトティラの『ティラノ』の部分だけ、『ザウルス』が続くんだろう…」

ガタキリバ「あまり気にしないでいいことだと思っぞ」

ラトラーター「歌は気にするな！ってか」

サゴーズ「気にしてよ!？」

タトバ「えーっと、今日は何にしよう…カマキリ？ゴリラ？ウナギ？それともクジャク？」

ラトラーター「待て、何でトラをデイスる方向なんだ!？」

タトバ「え、じゃあ、バッタデイスる？」

ガタキリバ「喧嘩売ってるだろお前!」

サゴーズ「タカをデイスったら？」

タトバ「あー…頭として役に立つのは、クワガタかライオンだもん
な」

タジャドル「…おい!」

シャウタ「それ全部実行してみる、その瞬間からお前は『タトバ』
じゃなくなるぞ」

シャウタ「誰だ…冷蔵庫にあった俺のプリン食べたのはああ！？」

タジャドル「いや、もう一匹確定してるだろ…」

プトティラ「違う！」

タトバ「あんな堂々と『シャウタの』って油性ペンで書いていれば、この家の人間は全員食べないよ…食べたら後が怖いのが分かってるし」

ガタキリバ「だとしたら、誰が…」

王蛇「……ふう」

シャウタ「…王蛇、お前、何で勝手にうち上がりこんでいる？そして、口の周りについているカラメルは何だ」

王蛇「……食べなかった、お前が悪い…この世は弱肉強食だ…」

逃げ出す

シャウタ「待てやあああ！おまつ、今日こそ潰す本気で潰してやる！…」

プトティラ「がうがうがう！」 タジャドル攻撃中

タジャドル「あだだだだ、噛むな！手を噛むな！！」

サゴーゾ「仕方ないでしょ」

ガタキリバ「……ホントに、大学合格しますように…！合格、合格…！！」

ラトラーター「俺達の未来がかかっているんです、どうかお願いします…」

ブラカワニ「お前ら、高校受験の時も七夕の短冊に必死こいて願い事かけて、笹をしまうその日まで祈ってなかったっけ？」

タジャドル「…そんなことしている暇があつたら、勉強しろよ…」

ガタラト「自分が頭いいからって！」

シャウタ「いいから勉強せんか！」

タトバ「…どうせ、タトバキックは決まらないんだよ…！orz」
シャウタ「お前：俺の弟になるか…？」

タジャドル「二人とも落ち着け！な？な！？」

サゴーズ「プトティラの教育に悪いからやめてえええ！」

ガタキリバ「だあああああつ、何でシャウタのクラスには悪影響与える奴しかいないんだあああ！」

ラトラーター「後、もうお前ら兄弟だから」

シャウタのクラスメート 王蛇、オーガ、キックH、パンチH、
エターナル、リュウガ、ネガ電王etc

シャウタ「……ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、…お前らちよつとこつち来い」 学年トップ

タジャドル「この点数は…どういうことだ…？」 高校在学中3年間学年トップ

ガタキリバ「あ、いや、その…」 国語20点、社会28点

ラトラーター「そつ、その…えつと」 数学10点、英語32点、理科22点

サゴーズ「ご、ごめん…なさい」 国語35点、数学40点、英語38点

タトバ（俺、普通でよかった…！） 教科でバラつきはあるものの、最低でも50点

プトティラ「？」 テスト？それ美味しいの？

プトティラ「シャウタ、おやつ」

シャウタ「今それどころじゃありませんちよつと黙ってなさい」

プトティラ「じゃあタジャドル食べる」

タジャドル「食べるなそれより黙ってる、今俺達はガタキリバ達と話を」

プトティラ「…おなかすいたああああー」 シャウタに泣きつく
シャウタ「……タジャドル、おやつ、作ってきていいか」
タジャドル「ああ…プトティラを静かにしないことには、まともに説教なんて出来やしない…おいお前ら、おやつが出来るまではちょっとそこで正座してる」

ラトラーター「救われ…た？」

ガタキリバ「違う、…ある意味での拷問だ」

サゴーズ「死亡フラグが後回しになっただくらいだよ…」

シャウタ「プトティラ、待て」

プトティラ「…」

シャウタ「……よし」

プトティラ「がうつ」 目の前のリンゴにかじりつく

タトバ「本当に…なんでシャウタには懐くんだろう……」

サゴーズ「ご飯あげてるからじゃない…？」

ブラカワニ「お、プトティラ、……ガタキリバスイッチ『キ』！」

プトティラ「“きをつける”！」 気をつけの姿勢

タトサゴシャウ「…！？」

ブラカワニ「ガタキリバスイッチ『バ』！」

プトティラ「“バイバイする”！」 手を振る

ブラカワニ「ガタキリバスイッチ…『リ』！」

プトティラ「“リモコンをもってくる”！」 リモコン持ってきた

サゴーズ「ガタキリバスイッチって何！？」

シャウタ「他にもスイッチが！？」

タトバ「そこじゃないッ！ 何で親父プトティラ手懐けてるのおおー！？」

シャウタ「ところでタトバ、タジャドル…今日、夕飯は鶏肉にしよ
うかと思うんだ」

プトティラ「鶏肉食べたい！」

タトタジャ「何それ虐め！？」「」

シャウタ「俺が食いたいただけ」

タトタジャ「尚更虐めだ！！」「」

ブラカワニ「唐揚げにする？」

シャウタ「俺は竜田揚げが食べたい」

ラトラーター「あー、竜田ならポン酢が合うよなあ」

ガタキリバ「俺は蒸した奴が食べたいかな…」

サゴーズ「ダイレクトに鶏肉のグリルとか」

プトティラ「わくわく」

タトタジャ「話を聞いてえええ！？」「」

プトティラ「ぶとていらのじゃうるす」 噛んだ

ブラカワニ「…」

プトティラ「ぶとちらのじゃうるす」 また噛んだ

ブラカワニ「……」

プトティラ「…ぶちよちらのじゃうるしゅ！」 またまた噛んだ上
に泣き始めた

ブラカワニ「あープトティラ、ゆっくり言ってみようか…ゆっくり」

プトティラ「ぶとていらのざうるしゅ」 またまたまた噛んだ

ブラカワニ「………」

プトティラ「あうう」 本格的に泣き始めた

シャウタ「親父！何でプトティラ泣かせてるんだよ！？」

ブラカワニ「ええっ！？」

026：立場チェンジ！

タジャドル「……たまには甘える立場になりたい……」

ガタキリバ「なんだ急に……」

タジャドル「ガタキリバおにーちゃん、あーそびーましょー」

ガタキリバ「お前本当にどうしたタジャドル！？」

ラトラーター「うわぁ、プトティラが完全に怯えている！『何あのタジャドル気持ち悪い』ってぐらいに震えている……」

プトティラ「ガクガクブルブル」ラトラーターを盾に警戒態勢

サゴーズ「それ、ラトラーターの本音じゃない？」

タトバ「いや、多分兄弟の総合意見だと思う……」鳥肌立つてる

シャウタ「……ラトにーちゃん、あーそびーましょー」

ラトラーター「ぎゃああああシャウタも何かの病気に罹ったあああ……」

シャウタ「主に心が疲れたたまには甘えたい休みたい疲れた」

ガタキリバ「……成績優秀組、頭はいいけどメンタルが若干脆いんだよなあ……」

サゴーズ「ラトラーターのように図々しいのも困るけど、メンタルガタキリバもちよつとね」

タトバ「まあ、気苦労が多いしね……ってかシャウタもおかしくなつて、プトティラが親父の所に逃げていった……」

プトティラ「ブラカワニイイイ」大泣き

ブラカワニ「お、何があつたマイペット」

タトバ「かくかくしかじか」

ブラカワニ「あー、成程…」

ラトラーター「だったら、今日一日だけタジャドルが弟でよくない！？」

タトバ「何、その『超いいこと思いついた！』みたいな笑顔」

タジャドル「じゃあ俺、五男！」

シャウタ「六男！」

ガタキリバ「うわぁ滅茶苦茶ノリいい！」

ラトラーター「んで、六男の座を追い出されたタトバは…うーん、一日長男で」

タトバ「長男！？俺が！！？」

ラトラーター「サゴーズは次男、俺三男、ガタキリバ四男ね」

サゴーズ「次男…かぁ、………うっわぁポジションに変動ねーわー」

ツッコミ

ガタキリバ「同じく…」 ツッコミ

ブラカワニ「つていうか、ラトラーターまったく変わってないけどそれでいいのか？」

ラトラーター「えー、だって、サゴーズだって一日兄貴やる機会なんてないだろうしー、俺だってたまにはガタキリバより上の立場に立ってみたいしー」

ガタキリバ「それが本音だろ！？」

プトティラ「…俺は？」

ラトラーター「…お兄ちゃん任せた」 サゴーズの肩叩きながら

サゴーズ「えええっ！？………えっと、そうだ、プトティラは…一日親父！」

タトバ「え、じゃあ、親父は一日ペット…つて、これもポジション

変わらないじゃん！」

プトティラ「うー！」

ブラカワニ「え、ペットって何すればいいの？とりあえず吼えとく！？」

（その頃、外では…）

シヨツカーライダーA「ふふふ、我々はSライダー強盗団…」

シヨツカーライダーB「今日は、この家から何か拝借しようぜ」

シヨツカーライダーC「大丈夫っすかね？この家のペット、狂暴って聞きますけど…」

シヨツカーライダーD「凶暴じゃなくて？」

シヨツカーライダーC「いや、何となく…」

シヨツカーライダーA「まあいい。まずは、家の様子を…」

ブラカワニ「うおーん！うおーん！！」

タトバ「こら、親Z…じゃなかった、ブラカワニ！近所迷惑だから吼えないでって！！」

ブラカワニ「バウバウ！」

ラトラーター「サゴーズお兄ちゃん、バナナ食べる？」 バナナ食べながら

サゴーズ「もう食べてるだろうがああ！」

ラトラーター「ガタキリバ、台所に後1本あるから持ってきて」
ガタキリバ「パシるなあああ！」

プトティラ「Zzzz…」　ブラカワニの親父らしい所を知らないの
で昼寝

タジャドル「うわぁーい、プトティラお父さんぁーそびーましょー」
シャウタ「駄目だよ、お父さん寝てるんだからー。それよりも、タ
ジャドルお兄ちゃんチェスしてあそぼー」
タジャドル「わーい、負けないぞー」

ショッカーライダーABC「……」
ショッカーライダーD「あの、…本当にこの家に強盗に入るんです
か」

ショッカーライダーC「…本当に大丈夫っすか？」
ショッカーライダーB「た、多分…」
ショッカーライダーA「よ、様子を見よう」

タジャシャウ「きゃっほーい」
ブラカワニ「あおーん！」
プトティラ「Zzzz」

タトバ「…正直思った、これ、楽しいのって親父とタジャドルとシ
ヤウタだけじゃない？」

ラトラーター「俺は楽しいけど？」
サゴーズ「……よし！俺達も普段できないポジションに折角いるん
だ、楽しもうそうじゃないとやってられない」
ガタキリバ「だな…！」

ラトラーター「ガタキリバー宿題手伝ってー」
ガタキリバ「ええーっ、ラトラーター兄さん自分でやれよ！ほら、
サゴーズ兄さんに教えてもらいなって…！」

サゴーズ「よし、お兄ちゃん頑張っちゃ…（V3のテスト）…
タトバ兄貴！ここ教えて！！」

タトバ「おいちよつと待て。実質中学3年生に、高校3年生の問題
聞くて…お前らイジメだろ」

ラトラーター「プトティラパパーン。この問題分かる？」

プトティラ「むにや？…んー、おとうさん分らない」

タトガタラトサゴ（（すげえ、親父ポジションちゃんと覚えてた
！））

ブラカワニ「腹が減ったわおーん！」

シャウタ「プトティラおとうさーん、お風呂一緒に入るうよー」

タジャドル「やだー、お父さんと入るの俺ー！」

ラトラーター「タジャドル何が起きた！？」

プトティラ「うー、お父さん今日はブラカワニと入る日だから、二
人で仲良く入りなさいー」

ガタキリバ「スゲエ断った！」

サゴーズ「しかも最良の断り方だ！」

タトバ「まあ、確かに、今日は親…ブラカワニの日だけどさ！」

金曜日にプトティラとお風呂に入るのはブラカワニの担当。残り
は一家紹介欄を参照

シャウタ「ねーねータトバお兄ちゃん、一緒に入るうよー」

タジャドル「お兄ちゃーん」

タトバ「わ、分かった。…お兄ちゃんとお風呂入ろうねー」 鳥肌
しゅつ

タジャドル「うわーい、シャウタ、水鉄砲して遊ぼうねー」

シャウタ「うふふーどっちが遠くまで飛ばすか競争しよっかー」

タトバ「いやちよつと待って、シャウタはやめてリアルに水鉄砲だ
から！（シャチとウナギ的な意味で）」

シヨッカーライダーA「…この家は諦めるか。なんか、おぞましい
(特に赤と青)」

シヨッカーライダーBCD「…はーい…」

(30分後)

タジャドル「あー、すつきりした」

シャウタ「さーて、飯だ飯」

タトバ「…ぜえぜえぜえ」

ラトラーター「大丈夫かお兄ちゃん」

タトバ「…シャウタのポジションって辛い…!」

ガタキリバ「いや、どっちかって言うと、長男はタジャドルだから」

プトティラ「もう一日ブラカワニなくていい?」

サゴゾ「いいよ。タジャドルとシャウタが元通りだし…」

ブラカワニ「えー、俺は一日ペットまだ続けたいんだけどなあ」

ガタキリバ「やめい!」

タジャドル「…ところでラトラーター、お前、さっきの宿題見せて
みる」

シャウタ「状況に応じては、…殺すぞ」

ラトラーター「…ごめんなさい」

タジャドル「おまつ、これ、中学の復習問題じゃねえかああ
ああ…!」

シャウタ「正確に言うと、中学の応用だけだな…それでも分からない

いとは何だ分らないとはああ!？」

タトバ(うわっ、通りでどこかで見たとあると思ったら…) で
も答えられなかった

ガタサゴ「…」 問題の意味すら分からなかった

ラトラーター「ガタキリバお兄ちゃんヘルプ！」

ガタキリバ「こういう時だけ兄扱いすんな!？」

タジャドル「ちょっと全員、そこに座れ!そこに!！」

シャウタ「今日という今日は徹底的にその脳みそ深くまで叩き込んでやる!」

タトガタラトサゴ「…いやああストレス発散したせいでフルパ
ワーモードだああ!?!？」

プトティラ「いつ終わるの?(ぐきゅる)」

ブラカワニ「多分、夜中まで続くから…俺達は先に食べようか…」

プトティラ「親父とペットって、こういう時便利だね」

ブラカワニ「…だな…あーでも、親父も親父で大変なんだぞ」

プトティラ「う」 頷く

結局、コンボ兄弟が夕飯(冷やし中華)を食べたのは夜中の2時
でした

027：SMように謝罪する

ラトラーター「……」 レイプ目

タジャドル「こら呆けるな！次の公式行くぞ！！」

ラトラーター「こんなのってないよ…酷すぎるよ…」

タトバ「どうしたの、あれ」

サゴーズ「ほら、ラトラーターって陸上の推薦をいくつか受けてるでしょ。でも、一番行きたい大学がタジャドルが二番目に受けた大学でさあ」

タトバ「えー、タジャドルそこ落ちたのに大丈夫なの…？」

サゴーズ「試し（超難問大学）・滑り止め（ラトラーターの行きたい所）・二番目志望でタジャドルが落ちた原因は、ほぼ俺達だと思うんだけど…」

ちなみに今行っている大学は、タジャドル本人が一番行きたがっていた本命大学です

落ちた原因の殆どはガタキリバ・ラトラーター・サゴーズ・タトバ・プトティラの酈による寝不足とストレスと緊張

タトバ「それ踏まえると、何で本命受かったんだろ」

サゴーズ「タジャドルは合格しないと二度と家の敷居は跨がせん、他は少しでも酈を搔いたらその時点でタジャドル同様の末路と思え」

by・シャウタ」

タトバ「あー、思い出した、あの時のシャウタが怖すぎて皆寝れなかったんだった。タジャドル寝てたけど」

ガタキリバ「その時のあいつ、精神的に追い詰められて睡眠不足だったからな…シャウタの説教すら耳に届かず、どっぷりと眠りに落ちてみたいだぞ」

サゴーズ「ってか、明らかにタジャドルの飯に睡眠薬入れていたレベルの眠りっぷりだったよね…」

シャウタ「ところでガタキリバ、お前は何処の大学受けるんだ？」
ガタキリバ「…あー、これからガタックや龍騎と勉強会やるんだったー！」 逃げた

シャウタ「おい待て、龍騎は餃子屋継ぐから大学行かないって言うてたぞ！コラー！！」

プトティラ「大学っておいしいの？」

ブラカワニ「うーん、硬くて美味しくないと思うぞ？」

サゴーズ「…あれ」

タトバ「どうしたの？」

サゴーズ「ガタキリバ、こんなの落として行っただけだ」

“サゴーズは【xだいがくのパンフレット】を てにいれた！”

シャウタ「なんだ今のRPG風セリフ!？」

サゴーズ「えっと、何処の大学？」

タトバ「えーっと…あ、これ、医療科や福祉科がある…あれ？」

タジャドル「ん、どうした？」

ラトラーター「ぜえぜえぜえ」 死に掛け

タトバ「いや、実はパンフレットに付箋が…」

“タトバは パンフレットを みやぶった!”

“ページには 【ふくしかあんない】と かかれていた”

シャウタ「だから…!」

プトティラ「ふくし? 食べれる?」

サゴーズ「食べたら困る人がいるからやめようね」

タトバ「ガタキリバが…」

タジャドル「福祉科志望、だと…?」

ラトラーター「あの、ガタキリバが…」

妄想ガタキリバ「ほーら、シャドームーンおじいちゃん、車椅子に
乗りますよー」

妄想シャドームーン(妄想の為、勝手に老人にされています)「ふ
おふおふお、すまんのー」

タトラトサゴシャウ「…似合わねえええええ!?!」

タジャドル「こら、そこまで言うな!……うーん、ガタキリバはラ
トラーターより酷い成績じゃないし、頑張れば行けなくもないけど
…それにしても、何で福祉科…?」

ブラカワニ「いやー、それはきっと、年老いたパパンを介護する為
に…」

タトバ「なんで?」

サゴーズ「世のため、人のためだろ」

ラトラーター「その方が納得」

タジャドル「夢は夜に見ろ」

シャウタ「つていうか夢を見るな親父」

ブラカワニ「orz」

プトティラ「…どんまい」

ブラカワニ「プトティラ、本当にお前いい子…」

（ガタキリバ帰宅）

ガタキリバ「ただいまー」

タトラトサゴシャウ「…ぶふっ」「」 噴出し

ガタキリバ「…なんでいきなり人の顔を見て笑うんだ!？」

タジャドル「あー、気にするな。それより…ガタキリバ、ちよつと俺に部屋に來い」

ガタキリバ「え、この間の国語の抜き打ちテスト40点取ったよ!？」

タジャドル「それは…後で23点のラトラーター共々叱る!とにかく、来ないとシャウタに頼んでお前の夕飯プトティラのものにするぞ」

ガタキリバ「ごめんなさい今すぐ行きます!」

タトラトサゴブラ（（遂にタジャドルが、シャウタとプトティラを使って脅した…））

タジャドル「で?何でこの大学に??」

ガタキリバ「げっ、しまった…」

タジャドル「まあ、お前の学力ならラトラーターよりは見込みがあるけどな。それにしても、福祉科って唐突過ぎないか?」

ガタキリバ「そりゃあ……まあ、そうだけど……ほら、うちの学校って二年の時にインターンシップやるじゃん」

タジャドル「ああ、確かサゴーズは今度、花屋に行くらしいぞ」

ガタキリバ「俺が志望したところ、定員が多くて抽選に漏れてさ……福祉センターの手伝いになっただろ。想像していた以上に、凄く大変でさ」

タジャドル「……それで？」

ガタキリバ「ぶっちゃけた話、親父だっていつか介護が必要になるだろ。そうなった時、親父の世話までシャウタに任せっきりになるのは、あいつの負担も大きいだろうし……」

タジャドル（その時まで、俺達はシャウタの世話になっている前提かよ……そんな気がしなくもないけど……）

ガタキリバ「だったらせめて、親父の介護だけでも負担を減らしてやりたいだろ。……それに、俺、その福祉センターであまり役に立たなくて迷惑ばかりかけてたのに、俺が担当になった人は、『ありがとうね』って」

タジャドル「……」

ガタキリバ「本当は慣れない奴にやられて迷惑だっただろうに、そう言ってもらえて嬉しかったけど……同時に悔しくなって、……」

タジャドル「……お前は負けず嫌いだからな。今度は相手に迷惑にならないように、ちゃんとした介護をしたいって思ったんだろ。お前なりに真剣に」

ガタキリバ「……まあ、そんな感じ」

タジャドル「……だったら、……もう少し早くから勉強頑張れよなあ……！」

ガタキリバ「ごめんにゃひゃーい（訳：ごめんなさーい）……！」

タジャドル「まあ、ラトラーターだって……この間アギトから聞いたけど、俺達に楽な暮らしさせたいから陸上の選手になるんだって言

つてみたいだし。夢叶えるなら、…勉強しようか」 力強めながら
ガタキリバ「ふぁありまひたぁぁぁ（訳：分かりましたぁぁぁ）！
？」

タトラトサゴブラ「…ぶわっ」… 感涙

シャウタ「つか、ラトラーター、…そんな夢あったのか」

ラトラーター「ん、まあ、俺が自慢できるのって足の速さだけだし
…」

サゴーズ「まあ…本当に頑張るなよ、勉強。まずはそこに尽きる」
タトバ「サゴーズは？」

サゴーズ「…今から頑張ります！」 双子よりはそこそ勉強できる
タトバ「俺もちよつと頑張ろうかなぁ… 幸い、…タジャドルやシャ
ウタには聞きやすい」 次々四男よりは勉強できる

ブラカワニ「パパンにも聞いていいんだよ！？」

タトラトサゴ「…それは生理的に受け付けない」…

ブラカワニ「パパンショーックorz」

プトティラ「ぐるー」 ブラカワニの前に立ちながら

タトバ「なんで唸るの！？ 何で親父には懐くのプトティラ！！？」

シャウタ「……夢、なあ」

028：小ネタその4

・そういえば

タジャドル「前回、アंकがチェンジしようとしたメダルって…青に見えたんだが」

タトバ「言わないで！タトバって言うかタカの立つ瀬が無くなるから！！」

シャウタ「気付きたくなかったのに！せめて…他の色だと信じていたかったのに！！」

ガタキリバ「代えられるメダルがあるだけいいだろ！？」

緑のメダルは、現状でバッテリー1枚しかないです

タトシャウ「…ごめん」

・ラトラーターは規則が苦手です

ラトラーター「うわ、次の授業遅れる！」

V3「廊下を走るなー！」

ラトラーター「…赤い液体と緑の液体を混ぜるんだっけ？」

ライダーマン「えー、予習をしていれば大丈夫だろうが、赤い液体と緑の液体は混ぜると危険なので…」

ドカーン！

ラトラーター「真っ黒

アギト「…」 巻き添え

カブト・ファム・ギルス「…先生」 同じく巻き添え
ライダーマン「ラトラーター、後で職員室に来い」

ラトラーター「横断歩道は点滅しても全力疾走！」 ダッシュ

龍騎「できるのお前だけじゃね？」

ガタツク「やめんか馬鹿！」

サゴーズ「…でも、朝の朝食時間と門限は守るんだ」

ラトラーター「飯のためですから」

シャウタ「他も守れ！」

・知世子さんカッター！

タジャガタラトサゴシャウブラ「…」 沈黙

ブトティラ「う？」

タトバ「いいよな、あのキック！あれをタトバキックとして採用…」

サゴーズ「YAMETE！」

ラトラーター「いや、ちょ、金的キックって…」

ガタキリバ「タトバ…それをやった時点で、お前に男を名乗る資格はないぞ！」

シャウタ「キックはともかく、知世子さんはカッコいいけどな」

タジャドル「つか、もし採用としてもヒーローとしてどうなんだ？」

ブラカワニ「まあな」

・パンツが久し振りに出た

タトバ「パンツとは、男のロマン…パンツとは、男の象徴……更にブリーフは、男のみが履ける至高の形のパンツ！」

サゴーズ「また始まった…タトバの熱狂パンツ語り」

シャウタ「お前のマツケンフィーバーもな…」

タトバ「マツケンと一緒にするな…！」

サゴーズ「パンツと一緒にするな…！」

シャウタ「うっせえ！右京さんに比べればパンツもマツケンもなあ

…」

ガタキリバ「ヴィオレまるこそが至高だ！」

ラトラーター「Gack tだろ！」

ブラカワニ「いやいや、【MOTTO！いまドキ】に出ているもののんがなあ…」

タジャドル「全部どうでもいい！」

プトティラ「う」 頷く

・後藤さん厨臭い

ガタキリバ「一気にタジャドルレベルに堕ちたな」

ラトラーター「ああ…いつかこうなると思っていただけに」

サゴーズ「初期から世界がどうのって言っていたし…」
タジャドル「お、ま、え、ら、な…」

ガタキリバ「うわっ、厨臭い！厨臭いぞおお！！」
ラトラーター「ぎゃータスケター」

サゴーズ「誰かフアブリーズ！フアブリーズううう」
タジャドル「焼くぞお前らああああ！？」

タトバ「楽しそうだね、皆」

シャウタ「張り倒したいぐらいにな…」

・連結！クジャク・バッタ・ウナギ映写カメラ

ラトラーター「すげえ便利！」

タトバ「クジャクが映写機の代わりで、バッタが映像を流して、ウナギは…なんだろう。連結ユニット？電池パック？？」

サゴーズ「あ、もしかしたら、うちでも同じことができるのかも…」
ラトラーター「…うちでも、って」

シャウタ『電力確保！ケーブル接続OK！！』

ガタキリバ『映像、流します！』

タジャドル『任せろ！映像を写すぞ！！』

タトバ「そもそも、テレビの代わりにはならないと思う」

ラトラーター「できて、あれじゃね？…（バッタが記憶した）録画ビデオの再生」

サゴーズ「いい手だと思ったんだけどなあ…うちのテレビ、おんぼろだし」

シャウタ「……サゴーズ、納豆一粒とワカメ一枚と砂糖（粉）一粒。
どの夕飯が食べたい？」
サゴーズ「……せめて納豆一粒で」

・ある意味瞬殺ラトラーター

タジャドル「流石だな、陸上部」

ガタキリバ「久々の出番も、たったの数秒」

ラトラーター「言っなあああ！！」

シャウタ「まあ、どんまい。瞬殺なんてよくあることだ。青オウム
とか、赤オウムとか」

ラトラーター「うわーん！しかも、しかも……」

プトティラ「ぷひゅ（嘲笑）」

ラトラーター「……コイツ、メダガブリュー貸してすらくれなかった
！最悪だマジで……」

プトティラ「シャウターガタキリバーうん、予約詰まってる○○」

ラトラーター「うわあああん！！」

・Count the medals 詐欺

ガタキリバ「またか」

タトバ「でも、予告で青が……」

シャウタ「まあ、……赤は確実になくなっただな」

タジャドル「タカ！クジャク！タカアア！！」

サゴーズ「あれ、でも、予告でタトバが…なんで…？」

シャウタ「ここで予想されるのは、」

1・完全にメダルを奪われる寸前、意識の入ったコアメダルを比奈に渡した（3枚奪われたのはCGミス）

2・3枚奪われたのかと思いきや、信吾が無意識のうちに一枚握っていた

3・奇跡の力ここに降臨

シャウタ「…だと思っ」

タジャドル「嫌な予感していたんだよ、てれびくんか何かのバレで…クジャクだけ亜種祭りに加わっていなかったから…でもさあ…！orz」

ラトラーター「でもさ、マッキーが紫メダルをいくつか奪ってグリードになるって噂も立ってるからなあ」

プトティラ「ぷう！？」

サゴーズ「大丈夫、きつと余っているプテラとティラノだから！」

タジャドル「逆に、トリケラを奪われると…」

プトティラ「うわああああああ」　ブラカワニにとシャウタに泣きつく

ブラカワニ「おーよし、おーよし」

シャウタ「…何プトティラ虐めてんの？」

タジャラト「…そんなつもりじゃないですごめんなさい！」「」

・詐欺と言えば

ガタキリバ「……デッカードラモン本当にサヨナラしたあああ!？」
プトティラ「うー?」

シャウタ「【最期】って書いてあっただろ!」

ガタキリバ「だって、…バリスタモンが敵になった後の予告が、『
さらばクロスハート!』ってタイトルがつけられたんだぜ!?!だから、その類だと信じていたのに…!」

シャウタ「バリスタモンは主役とデジクロスするんだろ、諦めろ!」
ガタキリバ「うわああああ…デッカードラモオオオン!!」

029：夢を捨てた日

歌舞鬼「えー、ではこれから…将来の夢についての作文を書いてもらう。提出期限は、最低でも明日のHRまでだ」

シャウタ「…」

リュウガ「おい、どうした？ぼうつとして」

シャウタ「いや。なんか、皆夢があっていいなあ…って」

リュウガ「夢…」

パンチホッパー「兄貴…夢って、眩しすぎる…！」

キックホッパー「光（＝夢）を求めるな…弟よ」

王蛇「夢で腹が膨れるか…？」

オーガ「夢…夢って言うのは呪いと同じなんだ。夢は（以下省略）」
ネガ電王「夢だ？希望だ？…はっ、どこのアンパンだよ」

リュウガ「安心しろ…このクラス、全員書けそうにもないぞ」

シャウタ「いや王蛇達じゃなくて、……タジャドル達」

リュウガ「あいつら？」

シャウタ「タジャドルは…学校の先生になりたいんだってさ」

リュウガ「…タジャドルが先生」

妄想タジャドル『はい、ここの公式は…って、授業中は話を聞けえええええ！』　クジャク光弾発射

妄想生徒『『ぎゃー！』』　サボってた

リュウガ（無理がありすぎる！第二のV3先生以下省略になる気が！？）

シャウタ「ガタキリバは介護士になりたいらしいし、ラトラーターは陸上選手、サゴーズは柔道で金メダルを取りたいらしくて…タトバも、将来は医者になりたいって言ってた」

リュウガ「ガタキリバが介護士…？タトバが、医者…！？」

妄想ガタキリバ『はいはい、V3おじいちゃん…体起こしますよー』

妄想V3（妄想なので老人役）『むふー』

妄想タトバ『それでは、癌摘出手術を開始します…ヤスリ』

妄想ライダーマン（妄想なのでサポート役）『はい』

妄想タトバ『よし』　トラクロー構える

リュウガ（色々と恐ろしすぎて寒気があああ！？）

シャウタ「…皆、夢があるよな」

リュウガ「…？」

シャウタ「熱くなれるものがあって、いいなあって時々思うんだ」

リュウガ「シャウタ」

シャウタ「時々思うんだ、兄弟の中で一番駄目なのって…俺なんじゃないかって。そりゃあ、家のことや勉強とか、出来ることはたくさんあるけど……それまでであって」

リュウガ「…」

シャウタ「皆、いつかは離れていくものなんだし…そうなる何の夢も目標も持たない俺だけが、取り残されて、独りになって」

リュウガ「だったら、もう一度ぐらい夢を見てもいいんじゃないのか？まだ、水泳に未練があるんじゃないのか」

シャウタ「…」

リュウガ「タジャドルには『一回入部したけど、家の事情と両立できなくてすぐに辞めた』って口裏合わせたが…いつかばれるものだぞ」

シャウタ「…お願いだから言わないで、…お願い…」

パンチホッパ「壊してやる…夢なんて！」

キックホッパ「今…夢のない俺を笑ったな？」

王蛇「祭の場所は…ここかあ？」

オーガ「そう、夢は呪い…呪いと一緒に…」

ネガ電王「zzzz」 昼寝を始めた

リュウガ「…ちょっと待ってろ。

お前ら今すぐその口塞げ焼

き殺すぞオオオ！？」

王蛇「面白い…やってみろ…」

シャウタ「……」

（下校時間）

シャウタ「…はあ」

オーガ「あれ、リュウガ」 巻き込まれて絆創膏だらけ
リュウガ「なんだ…」 王蛇に殴られた痕を氷嚢で押さえながら
オーガ「水泳用の体育館…あそこにいるの、シャウタじゃない？」
リュウガ「…あいつ」

オーガ「じゃあ、またねー」
リュウガ「ああ、また明日。…… ったく、どうしたものか」
タジャドル「リュウガ。今、帰りか？」
リュウガ「…タジャドル」

タジャドル「なあ、本当にシャウタって入ってすぐ辞めたのか？」
リュウガ「…何が？」
タジャドル「ライアはOBだからな、この間…インターハイ前の激励に行ったらしい。その際、顧問のバイオリダー先生に尋ねたら…… シャウタの奴、入部届けすら出してないって聞いてな」
リュウガ「…」
タジャドル「何か…理由でもあるのか？」
リュウガ「ああ。ただ、 あいつ…その件で凄く傷付いているから」
タジャドル「…？」

リュウガ「知ってるだろ、去年の中学の中体連の大会。シャウタの奴、選抜メンバーに選ばれたけど…大会の当日、タトバが事故に遭ったって聞いて…すぐさま飛び出していったんだ」
タジャドル「あ…前方不注意の自転車がぶつかってきて、左足痛めたって奴か」
リュウガ「それ。…… 結局、大会には間に合わなくて…しかも全国

大会出場が懸かっていた大事な試合だったから、相当非難受けたみたいで」
「タジャドル……」
「リュウガ」それにあいつ自身、他の部のメンバーから期待されていた選手だったから……大事な時に大事な奴が抜けたせいで負けて、裏切られた気持ちが強かったんだろうな」

〈過去回想〉

水泳部 A 「 どういうつもりなんだよ！大事な大会だったのに、勝手に抜け出すなんて……！」

シャウタ 「……ごめん」

水泳部 B 「ごめんで済むか！皆に迷惑がかかっているんだぞ！？特に俺達三年にとっては、最後のチャンスだったんだ……！」

シャウタ 「……」

水泳部 B 「お前の代わりに試合に出た奴、二年だったけど、“自分のせいで負けた”って思い詰めて……今同じ二年の部員が励ましてるけど、多分辞めるかもしれないって」

シャウタ 「えっ……」

水泳部 C 「お前の自分勝手な行動で、どれだけ迷惑したと思ってるんだよ……！」

シャウタ 「……」

水泳部 D 「 お前みたいに、才能あるのに中途半端なことをぐらいたったら……最初から水泳やるなよ」
シャウタ 「……！」

ファイズ『おい、それは流石に言いすぎだろ。…そもそも、弟の命と大会…どっちがあいつにとって大事だと思ってるんだよ』

水泳部C『だからって、納得できるか!』

水泳部A『期待を裏切られた俺達の気持ちにもなってみるよ!…シヤウタ!』

シヤウタ『…っぐ、…め、……ごめ…』

水泳部B『何でお前が泣くんだよ!…泣きたいのはこっちだよ!』

シヤウタ『ごめ、ん、…なさ……ごめっ…っつ…』

〈回想終了〉

リュウガ「その後、ファイズが尚もシヤウタを責める部員の一人を殴ってファイズの奴は謹慎処分…シヤウタの代わりに試合に出た部員は、結局退部した」

タジャドル「……」

リュウガ「…自分のせいで皆に迷惑を掛けたこと、皆を傷付けてしまったこと、期待を裏切ってしまったこと、……そしてファイズが罰を受けることになって。多分その時から、シヤウタの水泳への情熱は急速に消えていったんだと思う」

タジャドル「だから、…水泳の話をするとか籠るのか」

リュウガ「本人も、まだ水泳への未練は残っていると思う。だが、後悔と心の傷が強すぎて、それを忘れたいから家のことに専念しているんだろうな」

タジャドル「…そう、か」

リュウガ「……あいつ、『何の夢も目標もない自分だけが、取り残されて独りになるんじゃないか』って言ってた」

タジャドル「……」

リュウガ「夢は残っているんだと思う、だけど、それはもうシャウタ自身が触れたくない辛いもので……目標も、何もないまま、何も見えないまま迷子になっているんだろう」

タジャドル「……俺達にできることは、あるのか？」

リュウガ「……さあ。こればかりは、当人の精神的な問題だしな」

タジャドル「シャウタ本人の、か」

リュウガ「じゃあな」

タジャドル「ああ……」

タジャドル「ただいま」

シャウタ「……遅い！」

タジャドル「うわっもう帰って来ていた!？」

タトバ「もう20分も前にね」

ラトラーター「そんじゃバイトいつてきまーす!」 猛ダツシュ

サゴーズ「いつてらっしゃーい」

ガタキリバ「どうしたんだ? 大学、結構早く終わったって聞いたけど」

タジャドル「ちょっと、リュウガと話を」

タトバ「何の？」

タジャドル「……うちのラトラーターの末路を語り合っていた」

ガタキリバ「末路ってなんだよ!? ラトラーターいなくてマジよかった!」

シャウタ「どうでもいいから、さっさと風呂入れ！さもないと、夕飯のスパゲッティは全部プトティラにやるからな！！」

プトティラ「今すぐ食べる！」

タジャドル「させるか！あ、サゴーズ、鞆部屋に置いてくれ！！」

サゴーズ「あまり長湯するなよ、鶏がらスープのニオイになるから！！」

タトタジャ「なるかつ！？」

タジャドル「ふー………あいつなりに、立ち直ってるってことなのかな」　タトバのアヒルのおもちゃを弄りながら

タジャドル「　　迷子、なあ」　アヒルのおもちゃを沈めながら

030：ペットと親父の親密状況

プトティラ「うがーッ！」

ラトラーター「ぎゃあああああああああああ」

ガタキリバ「何があつた、プトティラ！」

サゴーゾ「どうかしたの、プトティラ！」

タトバ「大丈夫！プトティラ！？」

シャウタ「怪我はないか、プトティラ！」

ブラカワニ「マイペット大丈夫か！？」

タジャドル「えっと、…ラトラーター生きてるか？」

ラトラーター「ありがとう、タジャドルだけが味方だった！」

プトティラ「うーぐるるるる」

シャウタ「なにになに…おいラトラーター、お前プトティラの散歩忘れてたな？」

ラトラーター「なんで分かるの！？」

シャウタ「当たり前だ馬鹿！」

ガタキリバ「でも、正直ラトラーターに任せないほうがいいぞ…忘れる以前の問題だ」

タトバ「あー…」

く回想く

プトティラ「うー!」

ラトラーター「ぎゃあああ!腕が千切れるうううう!」
「うううう!」
「うううう!」

プトティラ「う?」

ラトラーター「100m0.222秒舐めるなあああ!」
トップスピードダッシュ

プトティラ「きゃううううううう!」
引き摺られた

く回想終了く

タジャドル「まあ、正直プトティラを引き摺れるのってトップスピード発揮したラトラーターか…タコ足で粘れるシャウタぐらいだもんな」

プトティラ「ぐるる」

タトバ「その後、プトティラが『首痛い』ってわんわん泣いて…ラトラーター物凄く怒られてたよねえ」

ラトラーター「でもさ、正直、…プトティラをまともに散歩できるのっているのか!この家!」

ガタキリバ「あー」

〈回想〉

タジャドルの場合

プトティラ「ぷー！」

タジャドル「ぎゃあああああつ！待て、そっちコースじゃ…ぎゃあああああオーリングサークルが焼けるううう！！」　引き摺られる

ガタキリバの場合

プトティラ「きゅー！」

ガタキリバ「ぎゃあああああ！ちよ、ま、…嫌ああああ引き摺られるうううううう」　分身も出せない

サゴーゾの場合

プトティラ「がーう！」

サゴーゾ「プトティラ、ちよ、…止まって、…顔があああ！」
顔を地面に向けたままなので顔に酷いダメージ

シャウタの場合

プトティラ「うー！」

シャウタ「…プトティラアアアア！ちよ、…」　タコ足で粘るが最終的に疲れて引き摺られる（そして結果的に廃人になる）

タトバの場合

プトティラ「あうー！」

タトバ「…最初からクライマックスで脱落

ブラカワニの場合

プトティラ「にゅーう！」

ブラカワニ「ぎゃあああああプトティラ、パパン無理！必殺技が

地すべりでもこれは死ねるうつうつ!!」 例によって引き摺られる

〈回想終了〉

タトタジャガタサゴシャウ「「無理」」

プトティラ「あうっ!？」

ラトラーター「第一、プトティラは引つ張る力が強すぎるからなあ……」

タトバ「あれ、でも、サゴゾお前」

サゴゾ「重さでは勝てても速さで負けます」

ガタキリバ「…踏み止まって自分が主導権握る前に、相手の速さが高くて引き摺られるんだ。言ってるなあ……」

シャウタ「……俺のスペックの普通加減思い出せ、お前ら」

ブラカワニ「まあ、あまり気にすんなマイペット。元気なのはいいことだ」 などで

プトティラ「きゅーん……」 尻尾しょんぼり

ブラカワニ「よし、じゃあ、パパンと散歩するか!」

プトティラ「…きゅうっ」

ブラカワニ「どした?」

プトティラ「だって、…みんな迷惑してるもん…タジャドルとラトラーターでもいいけど」

タジャドル（いつもの扱いだから、もう怒る気も失せた…）

ラトラーター「ちよっと待って、ガタキリバ!ガタキリバは何処!？」

ブラカワニ「いや、…いつもパパンが受ける仕打ちに比べたら…プ
トティラの散歩ぐらい迷惑じゃないさ！」

シャウタ「おい親父、今のどういう意味だ」

プトティラ「…ほんと？迷惑じゃない？」

ブラカワニ「迷惑なもんか。お前も可愛い息子みたいなもんだしな
あ」

プトティラ「…ぶわああああああ」泣きついた

タトサゴ「しまった、親父とプトティラの高感度がっちゃった
よ！？」

シャウタ「すつごく気になったけど、親父、…一体何をどう
したら、プトティラに懐かれるんだ？」少なくとも完全に手懐け
るのに一週間と4日掛かった

タジャドル「そういえば…」

タトバ「なんで？」

ラトラーター「賄賂？」

ガタキリバ「何のd…ああ、…エサか…？」

ブラカワニ「うーん、プトティラとしてることと言えば…」

（ブラカワニ説明中）

（008後）

プトティラ「シャウター飯」

ブラカワニ（求人誌読んでる）「シャウタは学校だぞ」

プトティラ「きゅう」

ブラカワニ「あー、ほれ、パパンとボール遊びするか？」

プトティラ「…（ぐるきゅー）」

ブラカワニ「……しょうがない、パパンの分の昼ごはん先に食べていいから、それからボール遊びするか」

プトティラ「いいの!？」

ブラカワニ「一食だけなら抜いても平気だからな」 実は寝坊して

朝食回らなかったため、実質二食抜いてる

プトティラ「ぷー!」

（011後）

ブラカワニ「プトティラ、風呂入るかー？」

プトティラ「今日シャウタの日じゃないの？」

ブラカワニ「タジャドルから聞いたけど、あいつ金曜日もお前の担当じゃん（実質火曜もだけど）。だから、今日から金曜日はパパンの担当でーす」

プトティラ「ぷうう……」 尻尾しょんぼり

ブラカワニ「まあ、そんなしょげるなつて。お風呂から上がったら、美味しいご飯だぞー」

プトティラ「うん……」

ブラカワニ「そうだ、水の掛け合いして遊ぶか!」

プトティラ「う!」

シャウタ「こら!水道代かかるだろ……って話聞けー!!」

ガタキリバ「どうでもいいだろ……どうせ、最後に入るのつてタジャドルかラトラーターだし……」

タトバ「あー、今日、あの二人バイトか……」

サゴーズ（そもそも、水が減ったらシャウタがシャチ放水補充すれば誤魔化せるような……）

（014後）

ブラカワニ「……また面接落ちたーorz」

プトティラ「……」 ボール持ってトコトコ

ブラカワニ「ん、どうしたマイペット」

プトティラ「遊ぶ？」

ブラカワニ「……うん、ありがとうプトティラ……」

〈説明終了〉

シャウタ「つまり、（006で親父が出てきたことを踏まえると）

…一週間と1日で仲良くなったわけ…！？orz」

ブラカワニ「厳密に言つと、ほぼ一週間な」

タジャドル「…今でも懐かれない俺達の立つ瀬は？」

ラトラーター「さあ…ガタキリバも、最近になつてからじゃないっけ…？（023参照）」

タトバ「ヶ月掛かるよりはいいけどね、シャウタも親父も」

サゴーズ「あれ、でも…」

ガタキリバ「どうした？」

サゴーズ「…龍騎先輩つて、プトティラに会つたのつて、つい最近だったような（005参照）」

タトタジャラトシャウ「…あ」「」

ガタキリバ「そういうえは、…プトティラの話はしたことあるけど…実際に二人が会つたのつて、あの時が初めてだったような……」

龍騎（電話）『で、俺にプトティラに懐かれる方法聞くの？』

タトバ「うん。俺達にも懐いてきたとはいえ、未だちょっと扱いが悪いんです」

サゴーズ「って言うか、プトティラとあんなに仲良くできる秘訣を

教えてください」

龍騎『さあ？』

タトサゴ「“さあ？”ってー！」

龍騎『なんだろうなー。あまり難しく考えないで、やってみたら素直に懐いてくれると思うけど』

リュウガ『つーか、馬鹿兄貴の場合…プトティラと同レベルだからじゃないのか？』

龍騎『えー！？』

タトサゴ（ああ、納得…ついでに親父に懐いた理由も）

龍騎『後はあれだ。タジャドルとラトラーターはプトティラに

嫌われることしたんじゃない？』

タジャドル『何ーッ！？』

ラトラーター『なんで！？』

ガタキリバ『いや、あれだろ…』

タジャドル まずい

ラトラーター 雑

タジャラト「orz」

ガタキリバ「あと、…何気に自分の味方するか、自分を可愛がつてくれるシャウタか親父の味方するかしたらちよつとは懐いてくれるぞ（例：023）」

ブラカワニ「ま、とりあえず、散歩行くか」

プトティラ「う！」

031：兄弟受難の日

ファム「夏ね」

キバーラ「夏ですね」

ファム「そろそろ、夏コミの季節ね!」

キバーラ「はい!」

ファム「夏コミに備えて、BL本を書きたいけれど…はてさて、何処からネタを仕入れたものか」

キバーラ「難しいですよねえ…あ」

ラトラーター「で、何で俺達に聞くわけ!？」

ガタキリバ「そりゃ、うちは全員男だけどさ!お前らの腐ったミカンの発想の巣窟じゃねえよ!」

ファム「いいじゃない、減るもんじゃないし!」

キバーラ「ネタを出してくれるだけでいいんです!」

ラトラーター「ちょ、勘弁してくれ…」

ガタキリバ「インハイあるラトラーターはともかく、俺、早く帰って勉強しないといけないんだけど…」

ラトラーター「あ、俺も今日部活ないよ?スーパー1先生出張だから」

ガタキリバ「ってことは、…お前も今日勉強会に巻き込まれるぞ…」

タジャドルがその気でいやがる」

キバーラ・ファム「勉強会…」

ラトラーター「あ」

ガタキリバ「しまった…！」

タジャドル「ほら、この公式を答えてみる」

ガタキリバ「あー、えっと、…分かりません」

タジャドル「しょうがない奴だな」押し倒す

ガタキリバ「っ！」

タジャドル「ゆっくりと教えてやるよ、その体にな」

ファム「…みたいな!？」

キバーラ「メモですね！」

ラトラーター「ちょおつ、やめて!？マジやめて!？」

ガタキリバ「妄想も大概にしてくれ!あつてもガチDVだって!…!そんなに現実もタジャドルも甘くないんだぞ!？」

ラトラーター「つうか、そんなタジャドル要らんマジ要らん！」

ファム「ねえ、部屋の割り振りってどうなってるの!？」

ラトラーター「やーだーよ、教えない！」

ガタキリバ「教えたらそれをエサにするだろ！」

キバーラ「お願いします！」

サゴーズ「…おい、ガタキリバ。ラトラーター」

ガタラト「げっ」

サゴーズ「まだ学校いたのか?早く帰らないと、タジャドルがフジヤマボルケイノ風マグナブレイズしそうな勢いなんだけど…」

ガタキリバ「帰りたいのはやまやまなんだが…」

ラトラーター「…ファム達が帰してくれないんだよ！」

キバーラ「あの、弟さんですよね？」

サゴーゾ「あ、はあ。えーと、確かガタキリバのクラスの…キバーラさんでしたっけ。あと、ラトラーターのクラスの…ファムさんも」

ファム「ねえ、部屋の割り振り教えてくれない!？」

ガトラト「おいサゴーゾ使うな!」

サゴーゾ「え?ええと…ガタキリバとラトラーターは、双子だからって同部屋だけど…」

ガタキリバ「馬鹿ツ…」

キバーラ「……え…」

ファム「まさか!」

ラトラーター「あー、疲れた…」

ガタキリバ「かなりハードだったんだな、今日」

ラトラーター「スーパー1先生だからな。…やべ、明日筋肉痛確実

かも」

ガタキリバ「だったら、俺がマッサージしてやろうか?」

ラトラーター「え?」

ガタキリバ「絶対、気持ちいいから」

キバーラ「…ってことですよね!」

ファム「ちよっと、何でそんな美味しい設定言わないで置いたのよ!」

サゴーゾ「……え?」

ガタキリバ「あー畜生、腐女子のメシネタになった…!」

ラトラーター「くっそ…」

サゴーゾ「何がどうなってるの!?!ねえ!」

ガタキリバ「いいだろう、俺達の受けている苦痛をお前にも味わわせてやる」

ラトラーター「ファム、お前、俺達の末っ子知ってるよな？」

ファム「うん、タトバでしょ？前、あんたの応援来てなかったっけ」

ラトラーター「そいつとサゴーズ…同部屋だ」

ファム「えっ、嘘！？」

キバール「どんな感じの子なんですか？」

ファム「えーと、…タジャドル先輩の頭を少し簡略化した感じと、

ラトラーターの胴体と、ガタキリバの足を思い浮かべれば楽」

キバール「その子がサゴーズと同部屋…」

タトバ『んー…！』

サゴーズ『…そりゃ！』

タトバ『うわっ！？ちよっと…俺がサゴーズに腕相撲で敵うわけないって、知ってるだろ』

サゴーズ『さーとと、じゃあ、言うこと聞いてもらおうかな』

タトバ『もー…分かったよ、……あまり…痛くしないでくれよ』

ファム「ちよっと、いいと思わない！？ガチムチ系に犯されるいたいけな少年！」

キバール「はい！鼻血が出そうです…！」

サゴーズ「えええーっ！？ちょ、そんなことしてな…」

ガタキリバ「諦める。腐女子の妄想力は、俺達の意向総無視なんだ」
ラトラーター「ネタを与えたが最後、…そこから広がる妄想は半端ないぞ」

サゴーズ「ええええええー！？」

ファム「そうになると、シャウタとタジャドル先輩も同部屋!？」

ガタキリバ「いや、あいつら別々」

ラトラーター「タジャドルが受験の際、母さんの部屋で勉強することになってそのまま」

サゴーズ「…ちなみに、親父の部屋にはペットのプティラがいて、最近では親父とプティラはそこで一緒に寝てる」

ファム「……流石に親父とペットは無理ね」

キバーラ「若さ溢れるフレッシュな人材でないと……あと、ある程度イケメン」

サゴーズ「orz」

ファム「あれ、何かダメージ受けてる? 何で?」

ガタキリバ「…タジャドル>シャウタ>ラトラーター」俺>タトバ

>サゴーズなんだよなあ…バレンタインで女子からチョコ貰う比率)

ラトラーター「」好意抱かれてる女子の数だしな。…まあそのチョコが飯になることもあるから、いいんだけど」

キバーラ「でも、お母様が帰ってきたら…もしくは?」

サゴーズ「えっ…どうなんだろう…」

ガタキリバ「うーん…」

ラトラーター「母さんが帰ってくるかどうかすら、分からないんだよなあ」

ファム「でもお母さん除け者にするわけにはいかないでしょ」

ガタキリバ「そうなんだけどな?」

ラトラーター「まあ、母さんの性格だったら親父やプティラの部屋で寝そうだなあ……」

サゴーズ「それか、…倉庫代わりにしている部屋を片付けて、そこにタジャドルを移動させるか」

シャウタ「 おい! ガタキリバ、ラトラーター、何でもまだ学校

いるんだ!？」

ガタキリバ「げっ!」

ラトラーター「まずい、シャウタが来た!」

シャウタ「サゴーズも、何でミイラ取りがミイラになってるんだよ!」

サゴーズ「いや、実は、その…」

ファム「ねえ、ちょっといい？」

シャウタ「…はい？」

キバーラ「もしお母様が帰ってきたら、部屋の構成はどうなると思います?」

シャウタ「あ…タジャドルだったら面倒くないし、俺の部屋で寝てもいいけど…(倉庫片付けるの面倒だし)」

ガトラトサゴ「…あーあ…」

ファム「…言質取ったわよ!」

シャウタ「へ?」

キバーラ「歳の差3つは余裕の範囲内ですよね!」

シャウタ「は?」

ファム「しかも勉強できてイケメンなものね!」

シャウタ「ちょ」

キバーラ「ええ、それに…」

シャウタ「…ん…」

タジャドル「大丈夫か?」

シャウタ「…うん、」

タジャドル「痛かったら、…言っていんだぞ」

シャウタ「だい、じょうぶ。…それに、痛いって言うよりも、嬉しい、って気持ちのほうが強いかな」

タジャドル「嬉しい?」

シャウタ『うん。…やっと、一つになれたって感じで、……だから、やめないで』
タジャドル『 分かった。じゃあ、…続けるぞ』

キバーラ「…と、前々から妄想を!」
ファム「やーん!す・ご・く・い・い」
シャウタ「えっ、…え、……は?」 顔真っ赤
ラトラーター「…諦める」
ガタキリバ「つか、帰るか。タジャドル怖いし」
サゴーズ「俺も部活だし、…シャウタ頑張って」
シャウタ「はああああ!?!」

タジャドル「…(ゾクッ)」
タトバ「ただい…あれ、どうしたのタジャドル」
タジャドル「いや、……なんか変な妄想繰り広げられたような感覚が」
タトバ「は?」
ブラカワニ「それ…【悪寒】って言うんだぜ、マイ息子」
プトティラ「zzzz…」

032：四男のストーカー生活

本日は予定を変更して、とある一家のお話をしたいと思います。

クウガドラゴン「orz」

クウガタイタン「どうしたんだ、ドラゴン」

クウガペガサス「さあ…」

クウガマイティ「…なんでも、また例の件断られちゃったらしいよ」

クウガグロージング「れいのけん？」

タイタン「あー、そりゃ、お前：無理だ」

ドラゴン「なんでー!？」

マイティ「何だろう、やりたくないとか以前に…お前のはちょっと、しつこいっていうかウザイっていうかストーカーレベル」

ドラゴン「えええ!？」

ペガサス「ドラゴン兄さん、…あまり変な行為に走らないでくださいね」

ドラゴン「いや違うって、そんなことしてないよ!グロージングは信じてくれるよな!？」

グロージング「うにゅ?」

タイタン「つつーか、ペガサスやアメイジングマイティ兄さんの話だと…」
マイティ「本当に、ストーカー級らしいよね」
ドラゴン「ええええええええ！？」
タイタン「だつてさあ…」
ペガサス「…はい」

〈回想〉

（入学式）

ドラゴン「遂にライダー学園の入学式…！水泳頑張るぞー！！」
ペガサス「張り切ってますね、兄さん」
ドラゴン「だつてさあ、…あー！」
プトティラ「やだああああシャウタああああ」
シャウタ「諦めなさい！ああもう、入学式始まるからー！！」
タトバ「ほらプトティラ、永遠の別れじゃないんだし放してあげようよ…」
ドラゴン「　　すみません！あの、シャウタさんですよね！？」
シャウタ「あ、はあ。…えーつと、どこかで会ったことありましたっけ…」
ドラゴン「隣の　　中水泳部のドラゴンです！シャウタさんがこの学校に入るって聞いて、俺も受験したんですよ！！」
シャウタ「…水泳、部」
ドラゴン「俺シャウタさんと水泳するのが憧れだ…あれ！？シャウタさんは！？」
ペガサス「液化化して逃げ出して体育館に向かいましたよ」
ドラゴン「ええええええええー！？」

プトティラ「…シャウタあああああああ」泣き出した

（クラス分け）

シャウタ「あ、リュウガと同じクラスだ」

リュウガ「そうみたいだな…って、このクラスって成績優秀な奴が入れる補習クラスだよな」

シャウタ「あー、うん」

リュウガ「…なのに、オーガ・ホッパー兄弟はともかく…王蛇やネガ電王がいるのはどういうことだ」

シャウタ「さ、さあ…」

ドラゴン「俺別のクラスだったorz」

ペガサス「でも私と同じクラスですよ、兄さん」

ドラゴン「こうなったら…誰か一人、そうだ、オーガ辺りを病院送りにして空いた穴に俺が…！」

ペガサス「でも兄さん、勉強できるんですか？」

ドラゴン「む、無理orz」

（体験入部期間）

ペガサス「兄さん、すぐ入部届け出してきたって本当なんですか？」

ドラゴン「うん！顧問の先生も…まあ、『俺は怒りの王子！』っていちいち言うことを除いたら良さそうな先生だったし…ああ！」

シャウタ「えーっと、今日の夕飯は餃子でいいかな」

サゴーズ「龍騎先輩の所で買う？」

シャウタ「その方が安くできるし……げ」

サゴーズ「？」

ドラゴン「…シャウタさん！シャウタさんも水泳部入ったんですよ！？」

サゴーズ「え、そうなの？」

シャウタ「……」

ドラゴン「やっと一緒に部活でき…あれー！？シャウタさん！

？」

ペガサス「液状化で全力疾走して学校出ましたよ」

サゴーズ「ごめん、シャウタちよつと人見知りで……」 とりあえず
フォロー

（体験入部終了）

ドラゴン「orz」

アメイジング「……おい、どうした」

ドラゴン「アメイジング兄貴……毎日部活に行ってみたけど、シャウ
タさんいなくて凹みそう」

アメイジング（シャウタって確か……一年A組だったな。ん、確かあ
いつの家……）

ドラゴン「毎日勧誘してるのに、毎日学校の帰りにスーパーに行っ
たり友達と帰るかで水泳部に来てくれる素振りがまったくないんだ
よおおお」

アメイジング「……部活動入れない理由があるとかじゃないのか？ 去
年受け持ったクラスのタジャドルって奴の弟なんだが、あいつらの
家結構ギリギリで生活しているそうだし」

ドラゴン「そうなの！？」

アメイジング「父親蒸発・母親は単身赴任、タジャドルと……三年の
バカ双子と二年のサゴーズがバイトをしていて、シャウタも弟と内
職しているって聞いたんだが」

ドラゴン「そうなんだ……」

アメイジング「もしかしたら、家の事情で部活に入れないんだろう。
だから、あまり関わらない方が」

ドラゴン「 じゃ、『家のことで忙しくても、うちの部キツチリ
5時半で終わるから大丈夫です！』っていえば入ってくれるかも！
！」 ダッシュ

アメイジング「おいコラ人の話を聞け！……あー、でもあの家、バ
イトしている4人が部活しているぐらいだからある程度の余裕はあ

「つたりするのか……？」

（親父が帰ってきた後）

ドラゴン「アメイジング兄貴の話だと、親父さんが帰ってきたらしいし……これでやっと勧誘が！」

ペガサス「もう諦めた方が……」

シャウタ「げっ」
ラトラーターシールド

「ラトラーター」うわっ、何いきなり！？つか今1秒も経ってないのに俺の後ろ立った！！？」

ガタキリバ「あれ、あいつ確か、アメイジング先生の……」

ドラゴン「シャウタさん！水泳部……」

シャウタ「無理！」

ドラゴン「ええええええ！？」

シャウタ「入らない！」

ドラゴン「ええええええええええ！？」

シャウタ「水泳やらない！」

ドラゴン「ええええええええええええええええ！？」

ライター「テンション高いなー……」

「ガタキリバ、あー、ちよつといいか？……確かに俺もシャウタには水泳やつてもらいたいとは思っているが……嫌がつている奴を無理矢理入部させるのも、正直考え物なんだが」

ドラゴン「何で!？」

ガタキリバ「何でっていうかさあ……」

「あー、口で言うの面倒くさい。ガタキリバ、シャウ

「タ抱えてダッシュ！」

加減ライオディアス

ドラゴン「ぎゃー！目がー！！」

ガタキリバ「逃げるぞ！」

「シャウタ」…きゅう」
加減されていても熱光線の影響は食らう

〽回想終了〽

マイティ「まず、…相手がラトラーター先輩で防御するほど警戒されている時点でお前相当しつこいつて思われてるぞ」

タイタン「しかも全速力で逃げられてるし…」

ペガサス「今日もまた何かやらかしたみたいですし。正直、兄さん、…変人飛び越して変態です」

ドラゴン「変態の要素何処にもないよ!？」

グロージング「へんたい？」

ドラゴン「…orz」

シャウタ「…ただいま…」

ガタキリバ「ドラゴンに『水泳しましょうよ!』って勧誘されてたんだな」

シャウタ「よく分かるな…」

ラトラーター「そんな顔してるからなあ」

サゴーズ「でも、相手が『入ったんですよ?』って聞いてきたから、てっきり体験入部が始まった時点で入っているものかと」

タトバ「え、入ったけど…うちの事情ですぐ辞めたって聞いたんだけど」

シャウタ「……そんな話どうでもいいから、夕飯作るぞ。今日は麻婆豆腐な」

プトティラ「わーい!」

パパン「プトティラ、その前に手を洗おうなー」
プトティラ「あい」

ラトラーター「なんか情報錯綜してるけど、…中学のトラウマでF
A？」 事情知らない
タジャドル「…まあ、多分な。家の事情もないことはないんだろう
が」 事情知ってる
ガタキリバ「…どういう理由があるにせよ…ドラゴンの奴のストー
カースキル凄いぞ。この間、シャウタと行った隣町のスーパーで…
…何故か見かけた」 事情知らないけど事故が原因だとは感付いて
いる

タジャドル「…俺なんて、帰ってきたら家の前の電柱の陰から様
子を窺っているドラゴンを見たんだが。その後、サゴーズとの散歩
から帰ってきたプトティラに不審者扱いされて噛まれていたが」
ラトラーター「俺がシャウタの立場でも引くストーカーだよな」
ガタキリバ「本人に自覚がないのが悲しいな…」

033: プールに行こう！

シャウタ「死ぬ…」 水棲コンボ
ブティラ「きゅうっくっく…」 氷属性

タジャドル「あ、暑い…」
ラトラーター「蒸し暑い…」

サゴゾ「これでもクーラー禁止なの…？」

ブラカワニ「パパン干からびるよ…」

タトバ「…駄目だ、意識が朦朧としてきた」

ガタキリバ「扇風機じゃ快適に過ごせそうにねえ…」

タマシー「おい、遊びに来…うわっ！？この家蒸し暑ッ！！？」
タジャドル「た、タマシー…」

ラトラーター「水は自分で用意してね…」

サゴゾ「…後、クーラーつけたら駄目だよ…」

ガタキリバ「扇風機の独占禁止な…」

タマシー「だあああ、そりゃあ今年は節電の夏だの猛暑だの言われているが、……このままだとこの家全員熱中症になるぞ！？つかシャウタとペットが一番危ない！」

ブラカワニ「…なんかないか？マイ甥っ子…」

タマシー「思い出した。……実は隣町にできた温水プールがあるん

だけど、そこに行つて涼まないか？ペア1組半額券が4枚分あるんだよな」

タトバ「1」

ガタキリバ「2」

ラトラーター「3」

サゴーズ「4」

タジャドル「5」

シャウタ「6」

プトティラ「…なな…」

ブラカワニ「8、あー丁度いけるわ…」

タマシー「いや、俺は？」

一家「…は？」「…」

タマシー「誘つた俺は！？つか、ペット頭数に入れ…」

シャウタ「……………あ？」 死に掛けも相まつて怖い

プトティラ「ぐるるるるる…」 上に同じく

タマシー「…すいません、大人800円素直に払います」

そして…

タトバ「 いやっほおおおおお！」

ガタキリバ「生き返るー！」

ラトラーター「あー…やっど快適…」

サゴーズ「だよねえ…」

タジャドル「家にいるより遥かに涼しい…」

シャウタ「冷たくて気持ちいい…」

ブラカワニ「やっど生きてるって感覚だよな！」

タマシー「はいはい。…って、プトティラは？」

タトバ「あれ？」

サゴーズ「そういえば…」

プトティラ「…」 深さ確認中

タジャドル「何してるんだ、あいつ…」

プトティラ「あきゅ」 滑って落ちた

ラトラーター「あ、落ちた」

ガタキリバ「…ん？」

ブラカワニ「え？」

タマシー「…まさか」

プトティラ「…たしゅけてえええええ！」 溺れた

タトタジャガタラトサゴ「…プトティラアアアア！？」

ブラカワニ「え、まさか…」

シャウタ「…プトティラッ！！」 全力で泳ぐ

タマシー「うおっ、速っ！」

プトティラ「…うきゅー」

シャウタ「ぜえ、ぜえ…」

タジャドル「おい、…どっちも大丈夫か？」

ガタキリバ「…もしかしてお前、カナヅチ…だったりするの？」

プトティラ「カナヅチじゃないよ、ちょっと泳いだことないだけだよ」

サゴーズ「世間ではそれを【カナヅチ】と言いますが」

タトバ「プトティラ、浅いプールで遊ぶ？」

プトティラ「やだ！」

シャウタ「って言ってもなあ…泳げないんじゃ、深いプールは無理だぞ」

ガタキリバ「溺れて、またシャウタが助けに行くってあまり洒落にならないからな。…シャウタの体力的にも」

ラトラーター「タジャスピナーかゴリバゴーンをビート板代わりにしたら？」

タジャサゴ「何故そうなる！」

ブラカワニ「そうだ、確か…」

ブラカワニ「　　というわけで、ジャジャーン！」

プトティラ「う！」　浮き輪装備

ブラカワニ「これでプトティラも大丈夫」

タジャドル「よかったな、ここ、浮き輪も貸し出しOKなんだと」

ラトラーター「へー、じゃあ、サゴーズが足釣ったら2個投げれば大丈夫じゃん」

サゴーズ「何で俺が溺れる前提！？」

ガタキリバ「でも、プトティラだけに…ひっくり返って犬神家のように逆さの状態で浮いて…」

プトティラ「…ぶくぶくぶく」　早速ひっくり返った

シャウタ「プトティラアアッ!？」

プトティラ「けほ、けほ…」

シャウタ「…ぜえぜえ…」

タジャドル「なあ、暑さに弱い組は連れて来ない方がよかったんじや…来る前よりも疲れてないか」

タトバ「うーん…あ、そうだ、じゃあローションでプトティラといればいいんだ！」

ガタキリバ「…残念ながらそのローテーションに、タジャドルとラトラーターとタマシーは入れないぞ」

サゴーズ「残りで頑張ろう…」

ブラカワニ「そうだなあ」

シャウタ「じゃあ、最初は俺といるか？」

ブラカワニ「じゃ、次パパンな」

プトティラ「う！」

プトティラ「うー うー」

シャウタ「楽しいか？」

プトティラ「ん！」

シャウタ「そうか、よかったな」

プトティラ「…ねー、シャウタ」

シャウタ「どうした？」

プトティラ「泳ぐの…教えて？」

シャウタ「…なんで？」

プトティラ「泳ぐの上手になって、シャウタの迷惑にならないようにがんばる」

シャウタ「……そっか。でも、じゃあまずは浅い所で練習しないと。ここ、足が着かないから…立ち泳ぎ、正直疲れるんだ」

プトティラ「う」

タジャドル「ん、浅い方に行くみたいだな」

ガタキリバ「まあ、シャウタだし大丈夫だろ。それより…」

ラトラーター「…すげええええ！俺、自分の可能性に涙出そう！？」

水上を全力疾走

タジャガタ「人様にぶつからんじゃないぞ、そのバカ！」

タトバ「ななあ、ビーチバレーしよう！」
サゴーズ「お、いいな」
ブラカワニ「じゃあ、パパン頑張るぞー！」
タマシー「おっしゃ！やるか！！」

ズパーン！

タトバ「……ごめんなさい」　トラクロー出してサーブした
サゴーズ「バカーツ！それも、ここの借り物だろおお！？」
ブラカワニ「タマシーよろしく」
タマシー「えーっ！？」
タトバ「よし、トラクロー封印完了！」　トラクローを閉じた状態
で更に縄で縛った
サゴーズ「それじゃあ、仕切りなおして……」

タトバ「そーれっ！」
タマシー「レシーブ！」
ブラカワニ「トス！」
タマシー「…アターック！」
サゴーズ「うわっ！？速……」

パーン……！

サゴーズ「……」　ボールが頭に当たって割れた
タトバ「どんまい」
ブラカワニ「こっちは完全にタマシーの過失かな」
サゴーズ「うん、次、頑張ろう」

タマシー「いや、…もうタジャドル・シャウタ・プトティラとしか
ビーチバレーしないことに決めたわ。俺」

ラトラーター「あー、楽しかった!」

ガタキリバ「…満喫できたのってお前ぐらいだろ…!」

タジャドル「警備員さんに謝った俺の身にもなってくれ…」

タトバ「プトティラ、どうだった?」

プトティラ「楽しかった!」

サゴーズ「本当に?」

プトティラ「う!」

ブラカワニ「ま、本人が楽しかったならいいんじゃないのか?…その
代わり、シャウタ寝ちゃったけど」 おぶっている

シャウタ「…zzz」 疲れて寝た

タマシー「ずっとプトティラに付きっ切りで教えてたからなあ。…

ところで、シャウタって水え」

ガタキリバ「 あー、そうだ、シャウタ寝たってことは夕飯どう
するんだ?」

タジャドル「タトバ、いけるか?」

プトティラ「O O」

タトバ「…プトティラが嫌そうな顔してるから、無理!orz」

サゴーズ「どんまい…」

タマシー「いや、シャウト…」

ラトラーター「じゃあタマシーに任せれば?」

ブラカワニ「あ、それいいな」

タマシー「おい!」

シャウタ「…んー…」
タトタジャガタラトサゴ「…しー!」
「…」
プトティラ「しー○○」
「…」
タマシー「orz」
「…」
ブラカワニ「どんまい!」
「…」

034：兄弟スイッチ！

タトバ「…息抜きしたい」

サゴーズ「タトバ、受験勉強は？」

タトバ「まあ、それは、何とかなるとして…どうせサゴーズ達にいる学校だし、ラトラーターが入学できたなら大丈夫」

ガタキリバ「馬鹿、タジャドルの例があるんだぞ。……気合入れてやらないと、お前、泣くぞ（シャウタが）」

ラトラーター「ヒデエ！」

タジャドル「俺のは…お前らが原因だああ！？」

タトバ「部活引退して暇なの…勉強しなきゃいけないって分かってるけど、……息抜きしたい」

ガタキリバ「それはある…」

ラトラーター「息抜きには同意」

サゴーズ「ラトラーターは勉強しようか！？」

タジャドル「つたく…じゃあ歴史のクイズでもするか。今年のオースは徳川吉宗のいる時代だぞ」

シャウタ「冬に関しては、織田信長だったしな」

タトガタラト「…歴史だけ100点のサゴーズに勝てるわけないじゃああん！？」「」

サゴーズ「時代劇効果です」

タジャドル「大河ドラマも偉大だぞ」

プトティラ「何して遊ぶ？」

シャウタ「こっちはこっちで、『息抜き』と聞いて待機しているし……」

タジャドル「親父と遊べよ……」

プトティラ「ブラカワニ“しょくあん”行つたー○○」

シャウタ「プトティラ放り出して職安……本当に行っていると思うか？」

タジャドル「……以前の親父だったらパチンコ行つてたが、……プトティラ裏切ると後が怖いって分かつてるなら大丈夫だろ」

プトティラ「中に入るところまで見送つたよ」

シャウタ「ついていったんかい！よく帰つてこれたな！？」

タジャドル「（帰巢本能強いな、こいつ……）プトティラに見られてるなら、最低でも求人票は取つて帰ってくるな、うん」

シャウタ「紙みたいなもの持つて帰つてこなかったら、『プトティラ裏切つた？』って言えば反省してくれるから、絶対言うんだぞプトティラ」

タジャドル「頼むぞ。……あの親父に一番いい薬になるのは、俺とシャウタが一撃ぶちかますよりお前だ」

プトティラ「う」

プトティラ「……で、何して遊ぶ！？」

オーズ兄弟「……あー……」

サゴーズ「あ、そうだ、……ガタキリバスイツチ『バ』」

プトティラ「“バイバイする”！」 手を振る

タジャガタラト「……何それ！？」

シャウタ「親父がたまにやつてる遊び（025参照）。……ガタキリ

バスイッチ『キ』

プトティラ「きをつける”!” 気をつけの姿勢

サゴーズ「ガタキリバスイッチ『リ』!”

プトティラ「“リモコンをもってくる”!” リモコン持ってきた

タジャドル（ある意味、情操教育の一環だな…）

ラトラーター「待てよ、じゃあ、……ガタキリバスイッチ…『ガ』

プトティラ「ガオー!”

オーズ兄弟「“!”?」

プトティラ「“ガオーとほえる”

シャウタ「吼えるのかよ!”

タジャドル「ガタキリバスイッチ『タ』

プトティラ「……」 太鼓の玩具準備

ガタキリバ「あ。あれ、昔よく使ってた玩具だ」

プトティラ「“たいこをたたく”!” 太鼓の玩具を叩く

サゴーズ「すごつ、ラトラーターより賢い!?”

ラトラーター「泣くよ!?”

タトバ「…他もあるのかな」

ガタキリバ「えええ…」

シャウタ「試す価値はあるな。……タジャドルスイッチ『ル』!”

プトティラ「“るるんスキップ”!” スキップ開始

ガタキリバ「タジャドルスイッチ『ジャ』!”

プトティラ「“じゃぐちをひねる”!” 蛇口を捻る

シャウタ「出すな勿体無い!…タジャドルスイッチ『ジャ』!!”

プトティラ「“じゃぐちをしめる”!” 蛇口閉める

タトバ「二段階!?”

ラトラーター「タジャドルスイッチ…『タ』

タジャドル「おい、それ、太鼓と被るんじゃ……」

プトティラ「“たすぎがけ”！」　襷かける

タジャドル「すげえ万能すぎる!？」

タトバ「あ、じゃ、じゃあ……タトバスイッチ『タ』!」

プトティラ「……」

タトバ「あれ？」

プトティラ「何か困ってることない？」

タトバ「えっ、……ええーっ」と

シャウタ「今日の夕飯の肉じゃが、たまねぎ切るのが面倒だけど」

プトティラ「“たすけにはいる”!」

サゴーズ「そう来たかーッ!？」

シャウタ「……気持ちは嬉しいけど、プトティラ、……お前包丁使えないし……たまねぎ切ったら泣き出すの確実だから、今日のところはお座り待機ね」

プトティラ「あい」

ガタキリバ「じゃあ……シャウタスイッチ、『タ』」

プトティラ「“たつきゆうする”!」　卓球のラケット持ちながら

ラトラーター「おおー」

タジャドル「待てよ、……ラトラータースイッチ『ター』!」

ガタキリバ「えっ、ちょ、それは流石に……」

プトティラ「ぷ!ぷっ、ぷっ!」

オーズ兄弟「……?」

プトティラ「……“ターニングプレス”」

シャウタ「音楽専門用語!？」

サゴーズ「　ラトラーターよりも頭いいいいッ!」

ラトラーター「本格的に泣くぞおお!？」

ガタキリバ「ラトラータースイッチ『ラー』」

プトティラ「…」 粘土準備

タジャドル「何するんだ…？」

プトティラ「ぷーぷ！」 新聞紙の上に叩きつける

シャウタ「…？」

プトティラ「ラーメンのめんをうつ」！

サゴーズ「通すぎる！」

タトバ「タトバスイッチ…『バ』！」

プトティラ「……」 ガタキリバのバスケットボール持ち出し

ガタキリバ「まさか」

プトティラ「“バスケをする”！」 拙いドリブル

シャウタ「…親父、何処まで教え込んだんだ…？」

ガタキリバ「正直、もうちょつと役に立つスイッチの内容があつたらしいのに……」

タジャドル「サゴーズスイッチ…『ゴー』」

プトティラ「タトバ、はい」 襷の端を持たせる

タトバ「？」

プトティラ「“ゴールテープをじゅんびする”！」

サゴーズ「通すぎる！！（本日二度目）」

タジャドル「シャウタスイッチの『シャ』は？」

プトティラ「“シャウタのいうこときく”」

タジャドル「…いつもと変わらねえ……」

シャウタ「とりあえず、使う機会は保留で……サゴーズスイッチ『サ』」

プトティラ「“さんぽする”！」

タトタジャガタサゴシャウ「…今日はもう遅いから行かないぞ！？」

プトティラ「ぷーい……」

ラトラーター「……orz」

タトバ「あ、ラトラーター落ち込んでる…」

ガタキリバ「プトティラ以下に扱われたからな…」

シャウタ「プトティラ、…タジャドルスイッチ『ド』」
プトティラ「う」

プトティラ「ラトラーター」

ラトラーター「何…」

プトティラ「“どんまい”！」 肩叩く

ラトラーター「 空しさ倍增するわああッ!？」

ブラカワニ「お、ただいまマイ息子達」

プトティラ「ただいまー」

シャウタ（そういえば、何でスイッチの類に“ただいま”がないんだ…）

サゴーズ（素朴な疑問すぎるよ、それ）

タジャドル「親父、求人誌ぐらいいは印刷してきたんだよね？」

ブラカワニ「いや、いい場所がなくなくてなあ…」

サゴーズ「シャウタスイッチ『シャ』」

シャウタ「さっきの言葉を言ってやりなさい」

プトティラ「…プトティラうらぎった？」 うるうる

ブラカワニ「うっ！…いや、別に、裏切ったわけじゃ…」

プトティラ「……ぷう」 うるうる

ブラカワニ「 求人情報誌貰ってきました！」 負けた

シャウタ「急げよ、職安閉まるの7時だからな」

タジャドル「…便利だな、兄弟スイッチ…」

035：換装！亜種ゲーム

タジャドル「突然ですが、頭を使うゲームをしたいと思います」

ラトラーター「えええ…」

ガタキリバ「頭を使う奴ならいいんだな…」

サゴーズ「嫌な予感しかないけどね」

シャウタ「で、何をやるんだ？」

タジャドル「【換装！亜種ゲーム】」

タトバ「ルールは簡単、最初の人が出た亜種を1つずつ繰り上げるゲーム！」

ブラカワニ「例を挙げれば、タトバ ラキリドル ガタジャタ…みたいな感じでな」

タジャドル「なお、分からなくなったらコンボ名を使って回避・新たにすることも可能」

タトバ「さっきので続けると、ガタジャタ タカウーター シャトラバ サゴーズ サゴリーター サウバ…ってね」

ブラカワニ「ただーし！同じ亜種を続けて言ったり、コンボの後にコンボを繋げた時点でアウトー！」

プトティラ「119種類全部言ったら次の人は“プトティラ”と宣言して、クリアして続けるよー」

シャウタ「…親父行方不明だな、そのルールだと」

ブラカワニ「スーツの構造上じゃあ亜種できるみたいだけど、まあ、抜かそうぜ。パパンめげないから」

ガタキリバ「えっと…え？」

ラトラーター「あー、うー、ええっと」

サゴーズ「つまり、…分からなくなったらコンボ！？」

シャウタ「いや、コンボ連発してもあれだろ…っていうか、ある程度頭回る奴は約3名の為にコンボ宣言縛りをしないと…」

ガタラトサゴ「…3人でもう分かったんですが！？」

タトバ「同じ色 違う色 同じ色って続けてもいいらしいよ」

ブラカワニ「カウントは、タイピングと記憶力に自信のあるこの方にやってもらいます」

リュウガ「…なんで俺が」

タトバ「同じ亜種を言ったりしたらお願いね、リュウガ！」

リュウガ「別にいいんだが、罰ゲームはどうするんだ？」

全「…あー…」

ラトラーター「『バカ』って罵るのは？」

サゴーズ「いや、それ、…メンタル弱い赤いのと青い人には大ダメージだから」

タジャシャウ「隠す気ないなサゴーズオオオ！？」

ガタキリバ「じゃあ、間違えた奴の前の人が…駄洒落を言う」

タトバ「もう、…間違えた亜種ソングを歌えばいいと思う」

リュウガ「って言うか、お前も参加するのか…？」

プトティラ「う？」

リュウガ「まあいい。

スタート！」

タトバ「ガタトラドル！」

ガタキリバ「えっと、ラジャ…タ！」

ラトラーター「あっ…ジャタドル」

リュウガ「ねえよ！」

サゴーズ「これ、…何の歌を歌わせればいいの？」

シャウタ「タジャドル（サビ） 俺（B） タジャドル（B）」

ラトラーター「歌った感想。ワケわかんねえ」

タジャドル「だろっなあ…」

リュウガ「はい、いったん亜種情報クリアして…サゴーズから！」

サゴーズ「サジャタ」

タジャドル「タカウーター」

シャウタ「シャトラバ」

プトティラ「ラキリドル！」

ブラカワニ「ガタジャーター！」

タトバ「タカトラ…ゾ？」

ガタキリバ「ガタキリバ！」

ラトラーター「ガタキリ…タ！」

サゴーズ「ガタウドル…！？」

タジャドル「シャジャタ！」

シャウタ「タカウゾ！」

プトティラ「シャゴリドル！」

ブラカワニ「サジャゾ！」

タトバ「ええーっと…タカゴリバ！」

ガタキリバ「シャウタ！」

ラトラーター「シャウ…バ？」

サゴーズ「シャキリーター！」

タジャドル「ガタトラドル」

シャウタ「ラジャゾ」

プトティラ「タカゴリーター！」

ブラカワニ「サトラドル」

タトバ「サツ…え、…あ」

リュウガ「アウト！…サトラドルの歌な」

タトバ「一瞬分からなくなった…サトラドルって何…！？」

シャウタ「サイ+トラ+コンドル」

（タトバ熱唱中…）

リュウガ「はい、亜種情報クリア。…ガタキリバからだ」

ガタキリバ「ちよっ、もう、パンクしてきた」

シャウタ「…1ゲーム終わったらもう一回別の亜種言っていんだぞ？」

ガタキリバ「シャウター」

ラトラーター「シャトラゾ」

サゴーズ「ラゴリ…ドル？」

タジャドル「サジャタ」

シャウタ「タカウター」

プトティラ「シャトラタ！」

ブラカワニ「ラウバ！」

タトバ「シャキリゾ！」

ガタキリバ「ガタゴリーター！」

ラトラーター「サトラーター！」

サゴーズ「待って、チーター多い！？…えっと、ラトラタ！」

タジャドル「ラウター」

シャウタ「シャトラーター！」

プトティラ「シャウタ！」

ブラカワニ「シャウター……あっ」

リュウガ「アウト！」

コンボ兄弟「……いえーい！」

ブラカワニ「なあ、皆チーター攻めしすぎじゃない？チーター使えなくなっちゃうよ？」

シャウタ「なんでもいいから歌え」

タジャドル（つか、シャウタとシャウター……ラトラーターとラトラって面倒くさいな）

（パパン熱唱中……）

ガタキリバ「来るぞ……」

タジャドル「ああ……」

ラトラーター「一人で歌えないことに定評のある……」
サゴーズ「自分で言う！？」

（パパン、Bメロ熱唱中）

ブラカワニ「ゼエゼエゼエ……！」

プトティラ「長いね」

ブラカワニ「うん、歌って分かった、……ラトラーターの歌ってさ……」

一人カラオケ向きじゃない」

シャウタ「得点89点以下を覚悟するなら、出来ないこともないぞ……？」

リュウガ「じゃ、面倒だから次で最後な」

タトバ「タカジャバ！」

ガタキリバ「タカキリ……ドル？」

ラトラーター「ガタジャーター」

サゴーズ「……タカトラゾ！」

タジャドル「ラゴリタ」

シャウタ「サウター」

プトティラ「シャトラバ！」

ブラカワニ「ラキリドル」
タトバ「ガタジャゾ！」
ガタキリバ「タカゴリーター！？」
ラトラーター「タジャドル！」
サゴーズ「タカジャーター…！」
タジャドル「タカトラドル」
シャウタ「ラジャーター」
プトティラ「タカトラタ！」
ブラカワニ「ラウドル！」
タトバ「シャジャタ！」
ガタキリバ「タカウバ…？」
ラトラーター「サゴーズ！」
サゴーズ「サゴリバ！」
タジャドル「サキリバ」
シャウタ「ガタキリーター」
プトティラ「ガタトラバ！」
ブラカワニ「ラキリタ！」
タトバ「ガタウーター…？」
ガタキリバ「シャトラーター…」
ラトラーター「ラトラ…ドル」
サゴーズ「ラジャ…バ」
タジャドル「タカキリゾ」
シャウタ「ガタゴリタ」
プトティラ「サウバ！」
ブラカワニ「シャキリタ」
タトバ「ガタウタ…」
ガタキリバ「…シャウタ」
ラトラーター「シャウゾ…？」
サゴーズ「シャゴリーター…！？」
タジャドル「サトラーター」

シャウタ「ラトラタ」

プトティラ「ラウドル！」

ブラカワニ「シャジャーター！」

タトバ「タカトラゾ…」

リュウガ「　　タトバ、アウト！」

タトバ「うわああああもうワケ分からなあああい！」

ガタキリバ「…駄目だ、頭が痛い」

ラトラーター「吐き気が…」

サゴーズ「耳が痛い、頭が痛い、腹が痛い…」

タジャドル「お前ら…プトティラは元気だぞ」

プトティラ「ぷ！」

シャウタ（個人的にはガタキリバ以外と粘ったな…）

タジャドル「それでは、タトバの歌う【Tigh ten goes

Up】をBGMに…終了したいと思います」

シャウタ「それでは、次回の【換装！亜種ゲーム】……お楽しみに
！！」

タトガタラトサゴ「…もうしたくなあああい！！」

036：小ネタその5

・正解はほぼ1でした

タトバ「あれって、意識の入ったメダルなのかな」

サゴーズ「でも、アंकの意識がまだ残ってるみたいなのはあったから…ヒナちゃんに託されたのは1話で拾ったメダルじゃない？」

タジャドル「そうになると、……あの3枚のメダルは何だったんだ…？」

ガタキリバ「4・実はアंक、タカを3枚持っていた」

ラトラーター「5・こんなこともあるうかと、タカ・セルを塗装していた」

サゴーズ「えええ…」

・ロストVSプトティラですが

タジャドル「…最強フォームが苦戦した」

プトティラ「ぐるるるる…」 何処を噛んでやろうか狙いを定めている

ラトラーター「ほら、あれだって、コアが殆ど揃ったアंकはこん

なに強いんだぞ！みたいな」

ガタキリバ「……それか、事前に（つていうか前回）ラトラーター出したせいじゃ……」

タトバ「コンボの後の疲労は少なからずあるということだ」

サゴーズ「それが、制御＝暴走していない＝力を抑えてる説もあるんじゃない」

ラトラーター「俺のせいッ！？」

プトティラ「がうーっ！」

タジャドル「ぎゃあああああ！わき腹噛むなあああ！？」

シャウタ「おい、おやつのゼリーできー……」

プトティラ「シャウタああタジャドルが虐めるうううう」

シャウタ「……何した？」

タジャドル「待って、俺の言い訳ぐらい聞いて、……ちょっとボロツと言ったぐらいで……ラトラーター達がフォローしてくれたのに、……噛んだ」

プトティラ「『最強フォームのクセにロストに負けてやんのプーw』って笑ったあああ！」

タジャドル「そこまで言っていない、『最強フォームが苦戦した』って言ったただけだ！？」

シャウタ「なんだろう、もう、お前らの最強フォーム・中間フォーム論争面倒くさい」

プトティラ「でも負けてないもん！」

タジャドル「俺だって、コンボの疲労で（以下省略）」

ラトラーター「……あー、じゃあさ、今度ロストを完全に倒した奴が最強ってことで」

ガタキリバ「それは出られない俺への嫌味か！虐めかー！」

サゴーズ「ははは、ラトラーター………そんなシャウタが本編でも下克上しそうな雰囲気出さないでよ」

タトシャウ「（シャウタノ俺）限定!？」

ラトラーター「でも、ロストからアंकを助け出すだけじゃ完全じゃないからな」

プトティラ「勝ったら何する？」

タジャドル「ここは、全員公平に行こう。……つかガタキリバ、お前が決める」

ガタキリバ「じゃあ…全員から祝福のラリアット」

シャウタ「うわ、一気にタジャドル臭がしてきた」

サゴーズ「そんな仕打ち受けるの、タジャドルだけだもんね」

・比奈ちゃんに抱きつかれて

タトバ「……刑事さん、背骨、折れないの？」

シャウタ「1000回記念は忘れる」

・タトバ シャトラーター ラウバ サゴリーター タカウゾ
ゴリタ シャウタ

タジャドル「ソフビ催促、はーじまーるよー!」

ガタキリバ「メタなこと言うな!」

ラトラーター「実際そうだし」

シャウタ「俺は正直、ガタジャーターがいいかなあとは思ってる」

サゴーズ「俺、ラウーター」

タトバ「自分の頭は？」

サゴシャウ「恥ずかしい」

ガタキリバ「……ガタゴリバ欲しいと思ってた

ラトラーター「……ラジャゾ欲しいと思ってた

タジャドル「……タカトラドル欲しいと思ってた

タトバ「そんな俺はタカジャバです」

ラトラーター「トラデイスるな！」

ブラカワニ「パパンはタカジャーター」

プトティラ「シャキリゾ！」

サゴーゾ「……ところでシャウタが、地味ーに出て地味ーにオクト
バニツシュ出してたね」

ガタキリバ「馬鹿！それに触れるな！！」

ラトラーター「せめて亜種ソフビで話を反らそうと思ってたのに！」

シャウタ「……もういいよ、もうorz」

タトバ「……サゴーゾ確実にメシ抜きだね」

タジャドル「ナンマイダブ」

プトティラ「食べていい？」

・火野映司さんに天使化フラグが立ちました

サゴーゾ「ふああ……」

シャウタ「眠いのか？」

サゴーゾ「うん、ちょっと」

シャウタ「早く寝ろって。俺は、もうちょっと内職してるから」

サゴーゾ「分かった。キリのいいところでやめなよ」

シャウタ「うん。……俺の分までいい夢見るよ、サゴーゾ」

ガタキリバ「ほら、プトティラ、コーヒー」

プトティラ「ありがと！…おいしー」

ガタキリバ「そうだろ、自身あるんだ、このホットコーヒー」

プトティラ「ホット…？」

ガタキリバ「ああ、凄く熱いからな」

プトティラ「温かくないよ？このコーヒー、冷たい」

ガタキリバ「……そ、そうだな、冷たいな。ちよつとしたジョークだ」

プトティラ「うん、ジョークだよ」

ガタキリバ「！」

プトティラ「ねえ、ガタキリバ、本当はどっちか分からないんじゃない…？」

ラトラーター「そんな…お前、いつからだよ！タトバ！」

タトバ「…最初におかしいと感じたのは、コンドルが奪われた時から。その時から、何を食べても美味しく感じなくなっちゃったんだ」
ラトラーター「タトバ…」

タトバ「それから、今度は眠らなくなつて…次のメダルが奪われた時にはもう、熱いのか冷たいのかさえ分からなくなつたんだ」

ラトラーター「そんな…コアメダルを奪われるつてことは、お前のままだやいらなくなるつてことじゃないか！」

タトバ「…だつて、それが、タトバリングになるつてことなんですよ？」

タジャドル「………うん、お前ら、…ちよつと落ち着け！」

タトバ「見ないで…見ないでえ！」

シャウタ「おかしいよね、こんな体…変だよね？」

ガタキリバ「気持ち悪いよね…？」

ブラカワニ「タジャドル、…パパン達もやるぞ！」

タジャドル「しねえよ！」

・パンツの雨

タトバ「どうしよう、凄く天国」

シャウタ「…やああああめろおおおおお!!」

サゴーズ「おかしい! 凄く、おかしいから!!」

ガタキリバ「空からパンツの雨が降ったら、それこそ、天変地異…
終末じゃあああああ!？」

・ところで

ガタキリバ「メズールの中の人が、バトスピに出演した件について
ラトラーター「えっ、そうなの!？」

シャウタ「らしいな。でもまあ、前に一度奇跡の櫻井コンボがデジ
モン バトスピ ゴーカイで出たから…」

037：ハリセンと夢ときっかけ

ラトラーター「いよっしゃ、今日からインターハイ…頑張ってくるわ！」

タジャドル「肩の荷は下ろしていけよ」

ガタキリバ「頑張れよ！」

サゴーズ「いつも通りにね！」

シャウタ「緊張しすぎるとタジャドルみたいになるぞ」

タトバ「ファイト！」

プトティラ「ラトラーターどっか行くの？」

ブラカワニ「うん、インターハイにね。暫くは家には帰ってこないな」

プトティラ「美味しい？」

ブラカワニ「食べられないな、うん」

プトティラ「…美味しくないのに行くの？」

ブラカワニ「でも、ラトラーターの夢を叶える第一歩なのは確かだな」

タジャドル「さて…ガタキリバ、お前は大学受験の勉強だ」

ガタキリバ「ひーッ!？」

タトバ「俺、図書館いつてきまーす」

サゴーズ「部活いつてきまーす」

ブラカワニ「プトティラのお散歩いつてきまーす」
プトティラ「おさんぽしまーす」

シャウタ「……いいなあ」

ピンポーン

シャウタ「誰だろ、こんな早くから。…はい？」

ファイズ「…よ」

シャウタ「………」

ファイズ「ちよつと待て！無視して扉を閉めるな、扉を！？」

ガタキリバ「あれ、ファイズじゃん。どうかしたのか…っていうか助けて！」 タジャドルに十字固めされている

タジャドル「…ファイズ」

ファイズ「ちよつと通りがかったからな、家、上がっていいか…つてシャウタは扉を閉めるな扉をおお！？」

ガタキリバ「…で、家に上げたわけだけど」

タジャドル「………」

ガタキリバ（勉強どうした、って言おうとしたけど、シャウタも気になるし…言ったら廃人になるしいいや）

ファイズ「久し振りだな。そっちはどうなんだ？」

シャウタ「まあ…王蛇やホッパ―兄弟、エターナルetcクセの強い奴らの中で頑張ってる」

ファイズ（癖が強いつてレベルじゃねえ…悪役ライダー揃いだろオイ！？）

シャウタ「……そっちは？」

ファイズ「ん、……まあボチボチな。工業系だから、男しかないけど……女がいなくて寂しいわけでもないし」

シャウタ「ふーん……」

ファイズ「……水泳はやってるのか？」

シャウタ「……やめた」

ファイズ「……ま、あんなことがあったら無理もないよな……って言うと思ったか！？」　ハリセンツツコミ

シャウタ「あぶっ！？」

タジャガタ（ツツコミ一本入りましたー！）

ファイズ「お前な……前から気になってたけど、メンタル弱すぎだろ！中学の時だつて、頼まれたら断らずに何でもやるわ……そのせいで三年連続学級委員もさせられただろ……！」

シャウタ「……」　叩かれた部分押さえてる

ファイズ「それにな……あんなこと言われたからって、水泳やめる必要が何処にあるんだよ。お前言つてただろ、高校に行っても水泳しな……って！」

シャウタ「……中学の時の話だろ」

ファイズ「もし大会とかで会つて、あいつらにまた何か言われたとしても、平然とやってりゃいいんだよ。あいつらもう忘れてるだろうし、覚えていたとしても、無視すれば」

シャウタ「……誰もがお前みたいに強いつて思うなよ」

ファイズ「……なんだと？」

シャウタ「そうだよ、俺は弱虫だよ！意気地なしだよ……水泳から逃げて家族に依存するほど根性なしだよ……！」

ファイズ「お前」

シャウタ「それに、…元々水泳はただやりたいからやってただけなんだ。そりゃあちよつとは、水泳に関わる職業になってもいいかな、とか思ったことはあるけど、……ラトラーター達みたいに本気で打ち込めるものってワケでもなかった」

ファイズ「……そうか、お前の兄貴、今日からインターハイだったな」

シャウタ「正直、未練は残ってる。だけど、…再びやりたいって思えないんだ…今は。それに、水泳をもう一度やったとしても、……今度こそ本気で打ち込めるわけでもない」

ファイズ「…ま、そうだよな。俺も水泳は流れで何となくだったからよ、部活入ってる面接で便利…としか思ってた。やれれば何でもよかった、って奴だな」

シャウタ「……」

ファイズ「別に、…夢ってのは水泳に限った話でもないだろ。いつそ、水泳を“家族の世話焼き以外の趣味の充実”にして夢は別に考えればいい」

シャウタ「…でも」

ファイズ「夢なんてそんなすぐに見つかるか。俺だって、まだはつきり定まってるないしな」

シャウタ「…」

ファイズ「でも、お前の場合は早く見つけたほうがいいのかもな」

シャウタ「…え？」

ファイズ「お前のことだから、さつさと夢を見つけてそっちに全力注がないと…このままだと死ぬまで家族の世話焼くことになるぞ」

シャウタ「……」

ファイズ「自分のやりたいこと、見つけるよな」

シャウタ「やりたいこと……」

ファイズ「じゃ、帰るな。……オラ後は自分達で何とかしろよデバガメ共！」ドア足蹴

タジャガタ「ギャーツ！ばれてた！？」

シャウタ「あ……！」

ファイズ「はい、あとは兄弟で。……あ、必要ならこれ使っている」ハリセン託す

ガタキリバ「あ、はあ……」

シャウタ「……聞いてたな……？」

タジャドル「ああ、……結構前に事情はリユウガから聞いた」

ガタキリバ「俺はまったく初耳なんですが」

シャウタ「……なあ、夢って一体どうやってら見つかるんだろうな」

タジャドル「そんなに急には見つからないと思うぞ。お前はタトバの次に若いんだから、これからゆっくりと決めても……」

シャウタ「何だろう、思えばさ、夢なんてはつきり……真剣に考えてこなかったんだと思う。俺」

タジャドル「シャウタ、」

シャウタ「ただ普通に学校に行つて、勉強して、家の仕事して、そしてまた学校に行つて……用意された一日をただ、いつも通りに過ごしていただけなんだって思うんだ」

タジャドル「……」

シャウタ「家の仕事は夢が見つからない言い訳にはしたくない。したくないけど、」

ガタキリバ「黙れ」ハリセンツッコミ

シャウタ「あふっ!？」

タジャドル「シャウターツ!？」

ガタキリバ「俺だって、今行こうと思ってる大学に決めたのは去年の冬ぐらいだよ。…最も、介護士になりたいって思ったのはそれより数ヶ月前で、『じゃあ何処に行けばいいんだろう』って考えた結果、そこに決めた」

シャウタ「…」

ガタキリバ「そりゃあ…俺達はお前に家事総てを押し付けていたんだから、夢ぐらい決めてないと駄目すぎるだろ。駄目なんだけど、……お前が家族の面倒見ること以外にすることがないって言われたら、もつと駄目だって今気付いた」

シャウタ「……」

ガタキリバ「…だからさ、……買い物とか…掃除とか、料理以外のことは俺達が何とかする。何とかしたいから、……分かりやすくノートに書いてくれない……？」

シャウタ「おいっ!？」

タジャドル「あー、それはいいな。お前も時間に余裕ができれば、夢はともかく、趣味の一つや二つ見つけられるだろ」

シャウタ「いや、内職が趣味じゃ駄」

ガタキリバ「駄目」 ハリセンツツコミ

シャウタ「きゃん!？」

ガタキリバ「それに、……何かあったら親父がいるからな!つか、親父に今まで迷惑かけた責任として、料理以外の家事を押し付けてやればいいんだよ!!」

タジャドル「あー、親父、そういえば料理以外は得意だったな。…

…母さんは料理以外駄目だった気がするけど」

シャウタ「…でも、それでもし、見つからなかったら？」

ガタキリバ「見つかるさ。俺だって、見つかったんだし……後はき

っ かけだ」
シャウタ「……うん」

ガタキリバ「あと助言しておく、……趣味を仕事にすると辛いぞ」
タジャドル「ああ…例えとして水泳を仕事にしたいなら仕事として
割り切るか、水泳は趣味のままでいたいなら趣味に留めるかしない
と、……趣味を仕事にしたら…自由が利かなくてストレス溜まるか
らな？」

ガタキリバ「あと、趣味の充実程度に専門学校行くと…損だからな。
専門学校って、まさに【本気でその色に就きたい奴】しかお勧めし
ないぞ」

タジャドル「それと【就職できるか分からないし、それなら専門学
校でもいいから学校に行って様子見ようかな】程度に進学すると…
ダラダラ過ごすことになって、ニート予備軍になるからな」
シャウタ「…凄くリアルな話だな」

タジャドル「まあ、いずれにしても、…【きっかけ】だな。これば
かりは、自分の生き方次第だ」
シャウタ「……うん」

038：小ネタその6

・後藤さんは

ガタキリバ「 氷に捕まった際に、バースバスターで氷を撃てばよかったと思う！」

サゴーズ「それは割と考えた」

シャウタ「しかし、あれってタジャドルとラトラーター以外どうやって抜け出せばいいんかね」

タジャドル「あー、確かに」

ブラカワニ「パパンは上半身さえ動けば、蛇が勝手にやってくれるよ！」

シャウタ「やああめろおおお！」 蛇嫌い

プトティラ「自力」

タジャドル「お前はできるな、絶対」

ガタキリバ「カマキリで何とか…」

サゴーズ「ゴリバゴンで何とか…」

シャウタ「鞭で何とか……できねえええええ！」

タトバ「トラクローで……どうにもならなーいつ！」

ブラカワニ「シャウタは液化化すれば？」

シャウタ「余計に凍るわ！」

タジャドル「あれ…俺、どこかで氷のヤミーとぶち当たったシャウタを見たことが…」
ガタキリバ「俺も思った!」

・マツキーの腕が怖い

サゴゾ「何あの腕!？」
タトバ「アंकみたいなのヒラヒラが…」
タジャドル「そこか!？」
プトティラ「紫色じゃないね」
ブラカワニ「そこも気にする所じゃ…」

シャウタ「ちなみに、東映公式サイトでの予告では、火野映司の右腕がグリーd」
ガタキリバ「言うなああああ!？」

・ターザン後藤、再び

サゴゾ「あの人、伊達さんと組むようになってからワイルドになったよねえ」
ガタキリバ「自重しろってぐらいにな…」
タジャドル「しかも、銃系ライダーのロマン・0距離セルバーストもやらかしたし…」
タトバ「…何処かのシャウタは0距離で何撃ってくれるのかな」

シャウタ「…タトバ、お前、メシ抜きになるか？」
タトバ「ごめんなさい！」

・グリードには味覚がないようです

プトティラ「…きゅうつうつ」

シャウタ「どうしたんだ、プトティラ」

ブラカワニ「あまり食べてないじゃないか」

プトティラ「グリードは美味しく感じないの、なんで？」

シャウタ「…あー」

タジャドル「グリードには欲求を満たすものは“何もない”からな」

ガタキリバ「俺達もグリードだったら、きっと、今食べてる美味しいご飯は美味しく感じられないんだろうな…」

サゴーズ「もしかしてプトティラ、それを気にしてたの？」

プトティラ「きゅうつ」

タトバ「そんな心配要らないって。そりゃあ、何らかの要因でおかしくなることはあるかもしれないけど、“まったく無くならない”わけじゃないんだから、安心して食べていいんだよ」

プトティラ「きゅうつ」

ガタキリバ「あ、でもさ、」

シャウタ「なんだ？」

ガタキリバ「…味覚なくなったら、シャウタ以外の奴の料理がどんなに酷くても食べられるから、シャウタの負担減るよな…」

シャウタ「ガタキリバ、お前、明日から洗米前の米粒1つね」

ガタキリバ「ぎゃああああ！ごめんなさい、ちょ、それだけはー！

！」

・「ついでに紫のコアメダルも奪おうかな」 〓 死亡フラグ

タジャドル「…あーあ」

サゴーズ「やっちゃった」

ガタキリバ「さようなラトラーター」

プトティラ「ブラカワニ、死亡フラグって何？」

ブラカワニ「うーん、簡単に言うと、いつも余計なことをしてシャウタにメシ抜きを食らう際の、【余計なこと】」

プトティラ「わかった！」

シャウタ「…親父…？」

プトティラ「ブラカワニ、死亡フラグだね！」

ブラカワニ「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAA」

・直接的な表現で人が死にました

サゴーズ「ぎゃあああああ！珍しく人があああ！！」

タトバ「こりゃあ誰だって『何か分かんないけどとにかくこの状況脱することが出来る人と呼ばう！』になるよおお！！」

ガタキリバ「従来の助けてコールとは偉い違いだな」

シャウタ「一気に鬱展開がスピードアップしてきて、作者的にはガ

ツツポーズ物・職場の休憩室でも一回見てるのにまたもう一回家で見ている始末」

タジャドル「あれを見ると、異世界のシャウタってすげえな…」

タトバ「まあ、砕かれはしなかったし…」

ガタキリバ「体の一部を僅かに残していたし…」

サゴーズ「ビギナーズラックだし…」

シャウタ「正直、俺もあれは怖いと思った」

・助けてオーズ！

タトバ「うがああああああ！あのラトラーターアアアー！！」

シャウタ（あいつ、インターハイ中でよかったな…）

サゴーズ「落ち着きなってタトバ、その後のラトラーターの扱いは

悲惨だったよ！？」

タジャドル「ああ…物凄い悲惨だった！」

ガタキリバ「もう泣けてくるぐらいにな！」

・黄色メダルは投げ捨てるもの

ブラカワニ「で、プトティラ、…ああいう投げ捨て方だった理由は？」

プトティラ「ラトラーター知らない」

タジャドル「ちょッ！？」

ガタキリバ（これでタジャドルだったら、どんな悲惨なことに…）

シャウタ「しかしまあ、理には適っているよな。凍らされた人達の救出&今すぐにでも助けに向かうってことで、ラトラーター」
ブラカワニ「その後は悲惨だったけどね」

・ 0 距離セルバースト

ガタキリバ「この距離ならバリアは張れないな！」
シャウタ「言うと思った」

・ 暴走プトティラえげつねえ

ガタキリバ「どうしよう、プトティラが勝っちゃったせいでラリアツトが…」

シャウタ「まあ、『万が一アंकが完全に敵になって、戦って、勝った時』ということだ…」

プトティラ「ぷふー！」 えっへん、のポーズ

サゴーズ「つか、…翼二枚もへし折って（？）その上で頭にバカーン…って……」

タトバ「えげつないけど、…それ以上に怖かったのは…」

・砕けタジャドル

タジャドル「タカアアア！クジャク、コンドオオオル！！」

プトティラ「タジャドルだからやった、後悔はしていない」

タジャドル「おまああッ！？」

タトバ「　　コアメダル3枚も壊しちゃったことなんだよねー」

ガタキリバ「あれにはビビッた」

サゴーズ「でも、そうするとアंकの持っているメダルって…5枚？」

シャウタ「だな。映司の持っているタカを足して6枚だとしても、完全復活はできなくなったな…」

ブラカワニ「器になるって言ったのも、完全復活ができなくなったからかね？」

サゴーズ「でもそうになると、…オーズ側が不利だなあ」

シャウタ「ハゲタカ、プトティラが倒すんだろうなあ」

プトティラ「ぷきゅ？」

タトバ「そこを心配しているのは、シャウタだけだと思う」

タジャドル「コアメダアアアル！！」

・ウヴァさんがすんなり復活しているんですが

ガタキリバ「流石、虫の生命力は偉大だ」

サゴーズ「虫が言う！？」

シャウタ「さて、ウヴァ復活の理由はなんでしょう」

- 1 ・自力で復活
- 2 ・アंकがコアメダルを見つけて復活
- 3 ・カザリの気まぐれ

ガタキリバ「でも、俺バレ画像見たけど胸の部分が消失しているっぽいな」

シャウタ「まあ、殆どウヴァわれてるからな」

サゴーズ「さてさて、どうなることやら」

・ハゲタカダービー杯2011

タトバ「さて、次のうち…ハゲタカヤミーを倒すのは誰!？」
ブラカワニ「そして、その方法とは!？」

- 1 ・タトバによるタトバキック単体撃破
- 2 ・奇跡の復活ガタキリバ、ただしCG代が掛かるからメダガブリユー使え
- 3 ・大本命プトティラ、いつそSCで倒してくれ
- 4 ・ラトラーターのトライドベンダーで轢く
- 5 ・ガタキリバ以上の奇跡タジャドル、プロミネンスドロップお願いしまーす
- 6 ・シャウタで安心の爆殺オクトバニッシュ、CD販促としてShout out流してくれたら良し
- 7 ・サゴーズでまさかのサゴーズインパクト（地震後の規制的な意味で）
- 8 ・バースが倒す

9・超大穴・ブラカワニが映画に先駆け登場、派手な印象を残す

シャウタ「妄想するならタダだよな」

ガタキリバ「個人的には10・CDの催促とソフビの販促を兼ねて
シャウタ&亜種祭り第二番」

サゴーズ「いや、亜種催促は、次回のシャゴリタ・ラトラバで確定
だから!？」

プトティラ「11・まさかのえーじグリード態でムツコロ!」

タトバ「やめてえええ!それ、バッドエンドオオオオ!」

タジャドル「コアメダル:orz」

ブラカワニ「超個人的には、12・シャウタで倒すけど暴走」

シャウタ「やめろ!俺が暴走の加速装置みたいに言うなあああ!」

タトバ(でも正直、赤オウムも青オウムもシャウタ必要なかったよ
うな…単に暴走の可能性を増やしたただけなんじゃ……)

サゴーズ(それを踏まえるとあながち間違っても…)

ガタキリバ「ちなみに、加速装置はプトティラとタジャドルのほう

が正しいぞ。あいつら出番多すぎ」

プトティラ「サゴーズは?」

039・怒って！サゴゾ

タトバ「え、そうなの？うん、分かった」

タジャドル「どうした？」

タトバ「ラトラーターのインターハイの結果出たって」

ガタキリバ「それで？」

タトバ「短距離走で全国1位だったって！」

サゴゾ「うわー！よかったじゃん！！」

ガタキリバ「帰ってくるのって、明日だったか？」

シャウタ「明日はあいつの好きなオムライスでも作ってやるか」

プトティラ「???」

ブラカワニ「どうした、プトティラ？」

プトティラ「：“いちい”って皆が喜ぶの？」

ブラカワニ「そうだな。たくさんいる人の中で一番って言うのは、
凄いことだからな」

プトティラ「ぷう…?」

サゴゾ「俺も頑張らないとなあ…いいところまで行ってたのに、
決勝で負けちゃったし」

ガタキリバ「それでもいい成績だったじゃないか。準優勝のトロフ
イーとか、盾とか貰えたし」

タジャドル「おい、賞状用の棚、どこかスペース空けるべきか？」
シャウタ「俺のところでいいんじゃない？…この先増えることなんてないし…」

ガタキリバ「とう」　ハリセンツツコミ

シャウタ「きゅうつ！？」

プトティラ「シャウタアア！」

ガタキリバ「お前のところは駄目！あと、この先増えることないって言うな…それと、プトティラ悪かっただから足噛まないで…！」
プトティラ「がうがうがう！」　ガタキリバの足攻撃中
シャウタ「プトティラ、よしなさい！音の割には痛くないから（本当は痛かったけど）…！」

タジャドル「…じゃあ、ガタキリバの所片付けるか」

サゴーズ「そうだねー」

タトバ「いや、俺のスペース使っていいんで…うちのサッカー部そこまで成績よくないし…」

タジャドル「あー、やっと片付け終わった」

ガタキリバ「殆ど全移動だったもんな…」

サゴーズ「ラトラーターは中学の時もあるからねえ…」

シャウタ「お前もだよ…」

ブラカワニ「もういつそ、ラトラーター用の別棚作る？」

プトティラ「ねーねー」

シャウタ「どうした？」

プトティラ「“いちい”欲しい！」

シャウタ「…ええーと、どうしよう、タジャドル」

タジャドル「俺に聞くな！……まあ、そうだな、一位は無理でも…

【努力賞】とか【頑張りま賞】とか、【左賞太郎】とか【津上賞一】とか…【賞油】でもいいんじゃないか？とにかく賞状をあげれば」

シャウタ「そうだな…」

タトバ「いや、ちょっと待って、シャウタ…ツツコミを放棄しないで！？」

シャウタ「よし、じゃあ、今日一日いい子にしてたら【いい子にしていたで賞】あげるから、それでいい？」

プトティラ「うー！」

ブラカワニ「よし、じゃあ、パパンと早速散歩に行くか！」

プトティラ「うん！」

ガタキリバ（前から思ってたけど、…よく親父ってプトティラと何度も散歩に行けるな…）

タジャドル「じゃあ俺は、レポートでも書いておくか」

シャウタ「俺は買出しかな…ガタキリバも手伝え」

ガタキリバ「…ふぁーいず」

タトバ「宿題やろつと」

サゴーゾ「俺も。…V3先生の宿題、多いんだよなあ…」

プトティラ「ただいま！」

ブラカワニ「ゼエゼエゼエ…」

シャウタ（親父は今日も凄い目に遭ったみたいだな）

ガタキリバ（回復しちゃうから、怪我は残らないけどな）

プトティラ「……………」尻尾ふりふり

ブラカワニ「な、なにしてるの、マイペット？」

プトティラ「…いい子にするって、何すればいいの？」

ブラカワニ「うーん、そうだな、お手伝いをするとか…お掃除するとか…誰かの役に立つことをすればいいんじゃないかな……………」

プトティラ「おそうじ……………」

ブラカワニ「でも、あまり動き回らない方がいいかもよ…かえって邪魔になることもあるわけだし」

プトティラ「う」

プトティラ「…そういえば、いつもブラカワニやシャウタが掃除してるから、家ピカピカ……………」

プトティラ「俺もおそうじする！」タトバのパンツを持ちながら

プトティラ「でも、何処おそうじしよう…あ」賞状用の棚見つける

プトティラ「あれ、全部ピカピカにしたら、喜んでくれるかな！」

プトティラ「ぷっきゅ、ぷっきゅ」ガラス戸開ける

プトティラ「ごしごしーごしごしー」タトバのパンツでトロフィ

ー磨く

プトティラ「これはー…タジャドルだからいいや、…………こっちはサ
ゴーゾのだ」ガラス盾持ちながら

プトティラ「きゅ、きゅ」　タトバのパンツで盾磨く

プトティラ「うんしょー……う、きゅ、…ぷっつっつっつー!」

ガッシャーン!!

シャウタ「…なんだ今の音!？」

ガタキリバ「向こうから聞こえたぞ!」

サゴーズ「え、何、何があった!？」

タトバ「何か割れたよね!？」

タジャドル「嫌な予感が…」

プトティラ「ぷっつっつっつ…」

シャウタ「…プトティラ!何してるんだ!？」

プトティラ「ぷっきゅ!？」

タトバ「って、わあああああー!サゴーズの盾と俺のパンツがああ!？」

タジャドル「おいプトティラ!本当に何したんだ!？」

プトティラ「う、う、…おそうじ…」

ガタキリバ「掃除…?」

プトティラ「うん…おそうじするのがいい子って聞いたから、…おそうじ…」

サゴーズ「…」

シャウタ「プトティラ、それ、誰が言った?」

プトティラ「ぶりやかわに……」
タジャシャウ「親父のバカ後で絞める！」

タトバ「…お気に入りのパンツが…雑巾に……orz」

サゴーズ「……」

プトティラ「ごめんなしい……」

サゴーズ「…プトティラ！」

プトティラ「きゅ、（ビクッ）」

サゴーズ「……………割れたガラスとか触ってないよな、破片は踏んでないか？」

プトティラ「…え、う、うん」

サゴーズ「ガタキリバは見えてないで箒とちり取り持ってくる！なかったら親父で代用！」

ガタキリバ「何をどうやって!？」

プトティラ「…怒らないの？俺悪いことしたよ、サゴーズの大事なもの壊しちゃったんだよ……」

サゴーズ「そりゃお腹ただしとか、怒りたい気持ちはあるけどさ、プトティラだって悪気があってしたんじゃないって分かるし…俺達喜ばせようって思っただけだから、怒れないよ」

プトティラ「ぶ……」

サゴーズ「後、プトティラのことだから…パニックになって片付けて、怪我することだってあるわけだからそっちの方が心配！」

プトティラ「……ぶわあああああああ！」 逃げ出す

サゴーズ「あ、プトティラ！」

ブラカワニ「おいおい、一体何があっ」

タジャサゴシャウ「…黙っとけクソ親父！……」 トリプルパンチ

ブラカワニ「ぶげらっ!？」

龍騎「あー、成程。プトティラは悪いことしたんだから…怒って欲しかったわけなんだな」

リュウガ（なんでうちを逃げ場に…後、何でうちの兄貴にマジで懐いてる）

プトティラ「うきゅ…」

龍騎「まあ、サゴーズは優しいからあまり怒れないのかもなー。あいつの怒りが限界点越えるのって、バナナと時代劇関係だけだっけ？」

リュウガ「ああ…それでこの間、ラトラーターがマウントポジションで殴られていた」

龍騎「怒られるよりも、許される方が辛いときってあるよなあ。リュウガ」

リュウガ「俺に意見を委ねるなよ!」

龍騎「だよなー。プトティラはもう充分反省したんだろ?家に帰って、改めて『ごめんなさい』ってしようか」

プトティラ「…きゅうつ」

龍騎「今頃皆すごく心配してるぞ?特にシャウタ辺りが。……餃子持って、一緒行つてやるからさ」

プトティラ「あきゅ」 頷く

シャウタ「…プトティラ!何処行つてたんだ、心配したんだぞ!」
サゴーズ「わざわざしません…」

龍騎「別に、昔から喧嘩したガタキリバとラトラーターの逃げ道にされ慣れてるからなー。あ、これ、餃子」

シャウタ「…そっちの意味でもすいません…」

プトティラ「あのね、…サゴーズ…ごめんなさい！頑張って直すから……」

サゴーズ「そんな気にしないでいいのに…俺は」

リュウガ「サゴーズ、軽くでもいいから怒ってやれ。プトティラは悪い事したって自覚があって、尚且つ、怒られて当然って思っているんだから」

サゴーズ「でも」

リュウガ「優しさも時には残酷だぞ」

サゴーズ「うん、分かった。……プトティラ！危ないから、今度からやるときは親父かシャウタと一緒にやること……！」

プトティラ「…あい」

二日後…

ラトラーター「へえ、そんなことがあったんだな」

ガタキリバ「ああ…その日はプトティラ、サゴーズの部屋で寝ちゃって…追い出されたタトバは親父と一緒に就寝になった」 ジューズごくごく

ラトラーター「ある意味辛くないか、二重の意味で」 芋けんぴボリボリ

ガタキリバ「…ちょっと待て、それ、俺の芋けんぴ」

ラトラーター「って…それ、……俺のジュース！？何で飲むんだよ！」

ガタキリバ「お前だって、何で芋けんぴ食べてるんだ!？」

ラトラーター「近くにあったからだよ!」

ガタキリバ「そんな理由が通るか!」

ラトラーター「そっちだって、何で俺のジュース飲むわけ!?!自分
で持ってくればいいじゃん!」

ガタキリバ「近くにあったから」 どや顔

ラトラーター「はああ!？」

ガタラト「……………このおおおお!!?!」

そしてギャグNOVEL大戦へ

サゴーズ「プトティラも出せたりするのかな」

プトティラ「うーう」

シャウタ「無理だつて」

ラトラーター「あ、俺、紫のオーラ出す方法知ってる！」

ガタキリバ「はあ？そんなの出来るわけ……」

ラトラーター「この間のシャウタのアイス、タジャドルの先輩のギヤレンさんが食べて」

シャウタ「あつの野郎……！」 誰もが恐れる負のオーラ

ラトラーター「な？」

サゴーズ「馬鹿あああああ！」

タジャドル「わざわざ実証するアホが何処にいるんだああ！？」
タトバ「……あそこ」

・OPでガタキリバ復活

ガタキリバ「でもなんか切ない!？」

ラトラーター「がんばれよ、秋田県在住の851歳」ガタキリバ「ちがーう！俺はまだピチピチの18歳だああああ!！」

タジャドル「……ならば俺も、ピチピチの19歳だあああ!！」

ラトラーター「ピチピチの18歳だー!！」

シャウタ「恥ずかしいわ!！」

サゴーズ「……ピチピチの17歳だああああ!！」 趣味：時代劇観賞

タトバ「いや、……サゴーズは流石に……趣味が」

タジャドル「枯れてるよな……」

ガタキリバ「そのうち、盆栽集めもしそうだな……」

ラトラーター「縁側でお茶飲みそくだよな」
シャウタ「…ごめん」
サゴーズ「何その扱いはあああ!？」

・そういえば

タジャドル「…タカああああ!」
タトバ「うわああああ!俺までドロップアウトって何これ、何がどうなってんのおおおお!!」
ガタキリバ「だが、忘れてはいけないことがある」
サゴーズ「何？」

ガタキリバ「来週はカザリ完全体確定で、45話はメズール、46話はガメル…更にそもそも44話はコアメダル総取られフラグ確定」
ラトサゴシャウ「…」

ガタキリバ「つまり…プティラ以外ドロップアウト確定なんだよおおおお!!」
サゴシャウ「「ぎゃああああああ!!」」
ラトラーター「まだだ!まだ、カザリが来週ムツコロされれば…俺は生き残れる!!」
ガタキリバ「そう思うだろう?しかあし!次週は完全体カザリとプティラが戦い、更に、ギルまで登場するという情報まである…よって!!下手をすればコアメダルを砕かれる可能性も大にあるのだああああ!!」
ラトラーター「ぎゃあああああああ!!」

プトティラ「ガタキリバ、楽しそうだね？」
ブラカワニ「…TV本編で2回しか出ていない恨みが爆発してるなあ」

・リア充爆発しろヤミィ

ブラカワニ「うわー、カップル…っていうか男だけを狙ってる？」
タジャドル「スパイダードーパーントを思い出すな」
プトティラ「りあじゅーって何？」
ラトラーター「現実生活が満たされてる奴ってこと。例えば、彼女がいる相手が…」

プトティラ「皆にかのじょっているの？」

タトタジャガタラトシャウ「…orz」
プトティラ「ぷ？」
ブラカワニ「プトティラ、えげつないね」
プトティラ「ブラカワニはいるの？」
ブラカワニ「パパンにはママンがいるからねー。ママンがいなかったら、タジャドル達は産まれなかったんだよー」
プトティラ「ママンどこいるの？」
ブラカワニ「ママンは遠くでお仕事してるんだよ」

タトバ「…ふっ、皆に分かる？女のマネージャーすらいなうちのサッカー部…お陰で、ホモの巣窟と言われてるんだよ…！」
タジャドル「……彼女は作りたいんだが、…合コン行っている時間と金がない…」

ガタキリバ「ははは…キバーラのようにネタにされたくないし」
ラトラーター「ファム見てると、女作りたくなくなってくるんだよね…」

サゴーズ「…モテた試しはないですが何か？」

シャウタ「……………」

プトティラ「プトがかのじよになるうか？」

シャウタ「ありがとうプトティラ、でもね、…ちょっと切なくなってくるから気持ちだけ受け取る」

・里中さん！スカート、スカート！！

ブラカワニ「移動すれば見えるって思った人、拳手」

シャウタ「何馬鹿なこと言ってるんだアホ親父イイ！？」

ラトラーター「…」

タトバ「…」

サゴーズ「……………」

ガタキリバ「……………」

シャウタ「嫌だこの思春期集団！？」　でも正直ちょっとだけ思った

・「紫のメダルは破壊しなくてはならない」by・鴻上

プトティラ「……………やああだああああー！！！」

シャウタ「分かったから落ち着きなさい」

サゴーズ「でも、メダルを破壊できるのは紫…じゃあ、その紫を壊すのは？」

ガタキリバ「普通に考えて紫じゃないのか？」

ラトラーター「ポケモンでも、ドラゴンに有効なのは同じドラゴンだもんな」

タトバ「あと、ゴースト同士ね」

タジャドル「まさか紫の相打ち狙いとか…それにしても、会長のラスボスフラグが立ったか…？」

・ガタキリバの横にタトバ…だと？（映画CM）

サゴーズ「ガタキリバの分身で揃い踏みフラグ立ちましたー」

タジャドル「ってか…ガタキリバ！お前のせいで俺見切れてるんだが！？」

ガタキリバ「へっ」

・備えあれば憂いなし！

（視聴中）

タトバ「おー、シャゴリタだ！」

ラトラーター「【仮面ライダーディケイド】〇〇〇の世界】でもシヤゴリタは活躍してるよ！」

サゴーズ「宣伝乙」

シャウタ「しかも出てねえし（シャゴリーターは出たけど）」

プトティラ「たこー！きゅー！！」

タジャドル「備えあればなんとやら」

ラトラーター「亜種のスキャニングチャージ、久し振りに見たなー！」

ガタキリバ「タカキリーター（不発）と…ラキリバ以来だっけ？」

（視聴後）

ラトラーター「　　ってか、シャウタでもよかったよな今回」

タジャガタ「馬鹿あああ！それを言うなあああ！！」

シャウタ「…プトティラ、ラトラーターの分の目玉焼きハンバーグ食べてきなさい。サゴーズはおやつバナナパイ」

サゴプト「やったああー！！」

ラトラーター「そんなああああ！！？」

・正解は1と2でした

ガタキリバ「ウヴァマジしぶとい」

タジャドル「流石虫」

・カザリは誰にムツコロされる？

サゴーズ「さあ、大体当たらない予想コーナーのお時間です！」

シャウタ「今回の予想はこちら！」

- 1・本命・プトティラ
- 2・次点・ギル
- 3・大穴・アंक or ウヴァ
- 4・超大穴・自滅
- 5・絶対ありえない・鴻上会長

タジャドル「俺はギルによって消されるに1票」

ガタキリバ「プトティラによって粉々に1票」

ラトラーター「アंकかウヴァと言わずに、残りのグリード総てからの壮絶な裏切り」

サゴーズ「鴻上会長の不思議パワーで滅殺」

シャウタ「6・もう誰かディケイド呼んで来てカザリが存在破壊してくれよ」

ブラカワニ「7・まさかのバースで逆転勝利」

プトティラ「8・プトにやられて敗走するけど逃げた先にギルがいて消滅！」

タトバ「でも正直、ライ街のカザリには強く生きてもらいたい」

タジャガタラトサゴシャウ「「ああー……」」

プトティラ「そなの？」

ブラカワニ「まあ、いい奴だしなあ……」

・ソース 東映公式サイト or 本日（7/24）の活動報告

ガタキリバ「なんだろう……ギルの顔を見たら、何かを思い出すんだ

よなあ……」

ラトラーター「ガタキリバだから、アニメ関係？」

タジャドル「…それ、不特定多数過ぎないか？」

ガタキリバ「あー、なんだっけ、誰か…っというか、何かに似ているんだよ……口の部分」

サゴーズ「……モアイ？」

シャウタ「それよりも、俺はアニメの星のカービィのカスタマーセンターが垣間見えた…顎の感じが特に」

タトバ「っというか…むしろ一瞬、ゴセイジャーのマスクの口の部分进行い出した」

ガタキリバ「それだー!!」

タトタジャラトサゴシャウ「…どれが!!?」

041: プトティラの宿題

オーズ兄弟達も、夏休み真つ盛り。

タジャドル「……ガタキリバ、ラトラータアアアー！逃げんなあああ！！」

ガタキリバ「……暑くて無理イイイ！」

ラトラーター「うわああああん、あんな暑い部屋で勉強する方が集中力持たないってばー！？」

タジャドル「四の五の言うなあああ！」

サゴーズ「受験生組は大変だねえ」

タトバ「……来年はサゴーズがああなるんだよ？」

サゴーズ「うっわあ、……その現実突きつけるのやめて」

タトバ「それよりも……今年こそ早めに宿題終わらせよう」

サゴーズ「そうだなー……去年は、タジャドルすら手伝ってくれなかったから大変だったけど……今年は双子の受験があるから、尚更無理そう」

プトティラ「皆お外で遊ばないの？」

サゴーズ「遊びたいんだけどねー……宿題が」

プトティラ「宿題？」

タトバ「そう。…夏の地獄…そして、8月31日になって大量に積み上げられる宿題の山は……もう」

シャウタ「今年は早めに終わらせろよ。オーズの最終回まで宿題やつてる、なんて馬鹿なことにならないためにもな……」

タトサゴ「はぁーい……」

プトティラ「きゅう」

シャウタ「どうした？」

プトティラ「皆宿題するからつまんない…夏休みつて、皆いるから遊べるって思っただのに……」

シャウタ「まあ、プトティラはなあ…学校行ってるわけでもないし」

ブラカワニ「そんなマイペットのために！パパン張り切っちゃうぞ！！」

グ　　コのポーズ

プトティラ「パパン！○○」

シャウタ「何やってんだアホ親父！暑さで頭が沸騰してるのか！？」

ブラカワニ「えー、まず用意するのは…日記帳と鉢植えと種」

シャウタ「それ何処で買ってきた……？」

ブラカワニ「いえ、シャイニングさんのところから貰ってきました。実質タダです」

プトティラ「それで！？」

ブラカワニ「…プトティラには、プチトマトの観察をしてもらいます！」

プトティラ「ぷ…？トマトって真っ赤な奴だよね？」

シャウタ「つか、観察ならメジャーなのは朝顔とか向日葵じゃ…」

ブラカワニ「花じゃお腹は膨れません」

シャウタ「まあそうなんだけどな！？」

ブラカワニ「プトティラの夏休みの宿題…その1！【プチトマトを観察してシャウタを喜ばせよう】…！この日記帳に日々のプチトマトの生長振りを書いて、尚且つ！きちんと育ててトマトをシャウタにあげると喜んでもらえるぞ…！」

プトティラ「ぷ！やる…！」

シャウタ「本人のいる前で趣旨を話すな！」でも嬉しい

ブラカワニ「やり方はパパンが後で教えるから、まあこれは保留ね」
プトティラ「ぷーい」

ブラカワニ「続けて！ラジオ体操カードです…！」

プトティラ「ラジオ…？」

シャウタ「何処で拾ってきた！」

ブラカワニ「そりや学校に決まってるだろ」

タトバ（うわっ！うちの学校で配られたカードだ！？）

ブラカワニ「プトティラの夏休みの宿題…その2！【ラジオ体操を毎日やるう】…！朝早くラジオ体操に参加して、終わったらスタンプを貰いましょう」

プトティラ「ラジオたいしうって何するの？」

ブラカワニ「それは…明日からタトバと一緒に行けば分かるよ」

タトバ「マジですか…！」

ブラカワニ「後、明日からプトティラも一緒をお願いしますってZ
O先生に頼んできたからね」

タトバ「マージーなの…！！？」

プトティラ「全部行ったら何かもらえる!？」

ブラカワニ「頑張ったで賞をもらえます」

タトバ「ないよ!？そんなの…むぐがつ!?!？」 シャウタに口を

塞がれる

シャウタ「…言うな…それだけは流石に、言うな」

プトティラ「ないの…？」

ブラカワニ「パパンが作ります」

プトティラ「きゅーい!><」

ブラカワニ「それから…画用紙とクレヨン!」

シャウタ「何処から奪ってきた!？」

ブラカワニ「龍騎サバイブ。子供が昔使ってたけどもう使わないからって、くれたよ?」

プトティラ「何描くの?」

ブラカワニ「プトティラの夏休みの宿題…その3!【夏休みの思い出を絵にしよう】!!プトティラが夏休みの間に、楽しかったことを描くのだー!!!」

プトティラ「ぷっきゅい!」

サゴーゾ「…何あのテンション…」

タトバ「プトティラが親父色に染まってい…」

シャウタ「…なんか頭痛い」

ブラカワニ「でも、画用紙は5枚しかもらえなかったの…5つ分しか描けません」

プトティラ「後ろは?」

ブラカワニ「後ろは、プトティラが何でその絵を描いたのかを簡潔

に説明する為に、作文用紙を貼ります」

シャウタ「誰が書くんだ…？」

ブラカワニ「え？プトティラに懐かれてる奴でしょ。パパンたまにいないし」

シャウタ「それ高確率で俺だろ…！」

ブラカワニ「漢字は書いてもいいけど、小学校3年までの漢字以外は平仮名のルビ振ってね」

タジャドル「……いつの間に漢字を覚えさせたあああ！？」

ブラカワニ「それから…プトティラの夏休みの宿題…その4！【夏休みの間に『換装！亜種ゲーム』で兄弟＋パパンに勝って、金メダルを貰おう】！！」

タトガタラトサゴ「「マジでええええッ！！？」」「」

プトティラ「がんばる！」

シャウタ「…金メダルどうすんだよ…」

ブラカワニ「これまた龍騎サバイブから貰ってきた折り紙で作ります」

プトティラ「プト、頑張って宿題する！」

ブラカワニ「よし、じゃあ、まずはプチトマトを植えに行くぞー」

プトティラ「あい！」

タトバ「…どうしよう…明日からマジで体操しなきゃいけないの…」

？「たまに起きれなかったりサボったりしてた

ガタキリバ「つか、……その3つて明らかに後半じゃないと描けそうにないよな？」

ラトラーター「それよりも、宿題ないほうが絶対いいのに……」

タジャドル「アホか！宿題への意欲でプトティラに負けてどうするんだ、お前は……」

サゴーズ「ってか、早く終わらせないと、……プトティラに巻き込まれるということも踏まえると……」

シャウタ「……頑張れよ、俺はアイス作ってくる」 宿題終わってる

042：小ネタその8

・やっぱりいきなり飛び出す会長

タトバ「すいません、ガチで驚きました！」
サゴーズ「いや、アレは誰だって驚くって…」
ガタキリバ「前にもあつたよな…？」

・OPはラトラーターでした

タジャドル「つまり、これは【その週にやられるグリード】に対応させているのか…？ああ、ウヴァは例外だ。例外」
ラトラーター「なんだろう、素直に喜べない」
シャウタ「来週はどうせ俺なんだろう！？来週消えるのは俺なんだろう…！？」
サゴーズ「ちょっと落ち着いて！」

・映画に出てきたものがちらほら。

ブラカワニ「あー、映画との接点をここで回収したかー」

タジャドル「まあ、この話の展開じゃここに詰め込むしかないよな…」

プトティラ「せってん？」

タトバ「繋がってるってこと」

ガタキリバ「しっかし、鴻上ファウンデーションの地下27階になんつつーもんを…」

ラトラーター「つか、そんなに深い場所に作ったら地底到達するんじゃない…」

・三つ巴の戦い

タジャドル「何故だろう、アंकが不利にしか見えない」

ガタキリバ「ウヴァ来たー!？」

ラトラーター「ちょ、1VS2は卑怯じゃなかったつけ!？おーい虫頭!」

サゴーゾ「ガメル応援してるし!」

タトバ「あ、クワガタとカマキリ奪還した」

シャウタ「メズールが止めたな…」

プトティラ「しゅごい!」

ブラカワニ「……なんか、…うちの喧嘩に似てるなあ…」

くブラカワニ回想く

タジャドル（当時高1）「ラアアアトオオラアアアータアアアー！！」

ガタキリバ（当時から3）「俺達のイチゴ食べやがってえええ！」

ラトラーター（当時から3）「わー、ごめん、ごめんってば！」

サゴーズ（当時から2）「ちょ、ちよつと……」

シャウタ（当時から1）「喧嘩すんなああ！」 シャチ放水

タジャガタラトサゴ「ギャーッ!?」

・紫のコアメダルを出すには

タジャドル「欲望を持つこと、か……」

シャウタ「結構難しいんだよなあ……」 夢がない人

サゴーズ（シャウタが言うと言得力があるように思えるのは、何故）

ラトラーター「でも、これ結構罠なんじゃ……紫のメダルを出させて排除するっていう」

ガタキリバ「疑いすぎだろ？」

ラトラーター「だよなー！」

タトバ「ところで、今日の遊んだお金って後藤さんの奢り？」

ブラカワニ「お金の出所は気にするな！」

・欲望戦隊！グリードレンジャー！！（ただし1日で解散）

タジャドル「厨二担当！タジャドルレッド！！」

ガタキリバ「巻き込まれ担当！ガタキリバグリーン！！」

ラトラーター「不遇担当！ラトラーターイエロー！！」

サゴーズ「時代劇担当！サゴーズ…（きつと）ホワイト！！」

シルバー「または無色」

シャウタ「家事担当！シャウタブルー！！」

タジャガタラトサゴシャウ「『兄弟戦隊！オーズレンジャー！！』」

「」

タトバ「俺は！？」

プトティラ「プトは！？」

ブラカワニ「パパンは！？」

タジャドル「ちなみに、合体ロボは頭がタカ・右腕がウナギ・左腕がカマキリ・右足がチーター・左足がゾウだ」

タトバ「トラとバッタ派手にデイスったよ…どうでもいいけど」

タジャドル「なお！戦隊でありがちな専用武器：俺はタジャスピナーで固定！！」

ガタキリバ「カマキリソード！」

ラトラーター「トラクロー！」

サゴーズ「ゴリバゴーン！」

シャウタ「電気ウナギムチ！」

タジャドル「そして、これらを合体することで【ジャキリトラナゴーン】が…」

タトバ「その辺にしておこうか！？」

・比奈ちゃんのメダルパス無駄に上手い

タトバ「これ、刑事さんが極端に悪かっただけ？」
ラトラーター「さあ…？」

・あんたがバースだあああ！

ラトラーター「ぎゃあああああああああ」

ガタキリバ「いらっしやーい！」

タトバ「いや、そこじゃないでしょ」

サゴーズ「何あのイソギンチャク!？」

タジャドル「せめて八岐大蛇と…」

シャウタ「メデューサだろ！」

プトティラ「うー…分かった！ドレッド怪人ドレディオン!!」

兄弟「…何それ!？」

ガタキリバ「後藤スゲエ！確実に破損してるのに生きてる!!」

タジャドル「そこもなんか違う！」

ラトラーター「正直、カザリのコアが壊れた(っっていうか壊れかけ

?)ことがどうでもよくなるぐらい粘ったよね」

サゴーズ「これで次回無傷だったら、照井以上のガードベント確定に…」

・正解はプトティラの意見でした

プトティラ「ぷー！ぷー！！」 小躍り

シャウタ「よかったな」

タジャドル「くっそお！あまりにもベターだからないだろうな、と思っていたのに！！」

ガタキリバ「ラトラーター相手だから、完全に粉々にすると思ったのに！」

ラトラーター「でもむしろ直前に軽いいざござはあったよね！？」

サゴーズ「往生際が悪い！」

シャウタ「しつかし、カザリのあの最期…空しいよな」

サゴーズ「だね…」

ラトラーター「うーん、あの死に方、誰かを思い出すんだけど」

タトバ「誰？」

ブラカワニ「俺はただ、幸せになりたかっただけなのに…」

兄弟「…それだっ！」「」

・ いろんな意味でさようなラトラーター

シャウタ「ちつくしよおおおおお俺（っていうかメズール）死亡フラグかよおおおおおおお！！」

プトティラ「ぷ、ぷう、…ぷきゅうっうっ」

サゴーズ「大丈夫、次回、青メダルに手を下すのはプトティラじゃない…」

プトティラ「ぷ？」

タジャガタサゴタト「…メダガブリュー持ったラトラーターだ」

「
シャウタ「…なんだと？」
プトティラ「ぷ…きゅ？」

シャウタ「 お前消えたんじゃないやなかったのかあああつ！？ガタ
キリバとタジャドルの後を追ったんじゃないやなかったのかあああああ
あ！！」

プトティラ「やだやだ、やだ！ラトラーターにメダガブリュー渡す
のやだあああ！！」
ラトラーター「泣くぞ！？」

・例によつて変な予想をしよう

タトバ「さあ、今回は…これだ！」

- 1 ・シャウタ使つてメダル奪われる（今回のラトラーター方式）
- 2 ・むしろ使つていたのは別フォーム、しかし攻撃受けて青メダル
落とす
- 3 ・というより、他のコア取り込む
- 4 ・里中が定時で帰つたせいで総攻撃食らつてメダル奪われる

サゴゾ「これ、何の予想…？」

ガタキリバ「メズールがどうやって完全体になったか、だつてさ…」
タトバ「つていうか、1だと間違つてShout out 流しちゃ
つた時に切ないよね」

サゴゾ「いや、それ（「シャウタの歌」は次々回を期待するしか
…あーでも、その回で伊達さん復帰っぽい話聞くから…」

タジャドル「むしろ、来週は何故か Ride on Right time だな…」

ガタキリバ「っか、もうそれしかないよな」

サゴーズ「選択肢少ないよね。っていうか、ラトラーター自重」

ラトラーター「何で!？」

シャウタ「 プトティラ、親父、冷蔵庫のあまりで擬似焼肉するか? 5人ほど夕飯要らないみたいだし」 背後に巨大タコオーラ

プトティラ「きゅーい!」

ブラカワニ「イエスッ!」

タトタジャガタラトサゴ「「ぎゃあああああああ!」」

・それよりも

プトティラ「ウバが落とし穴に落ちてた」

ブラカワニ「マイペット、そんな大人の事情は話さなくていいんだよ」

043: プトティラの宿題？

ガタキリバ「ガタトラドル！」

プトティラ「ラジャバ！」

ガタキリバ「タカキリゾ！」

プトティラ「ガタゴリーター！」

ガタキリバ「サトラバ！」

プトティラ「ラキリゾ！」

ガタキリバ「ガタゴリタ！」

プトティラ「サウドル！」

ガタキリバ「シャジャバ！」

プトティラ「タカキリーター！」

ガタキリバ「ガタトラドル…ぐっ！？」

プトティラ「やったー！」

ガタキリバ「つ、疲れた、10亜種言わされるとは思わなかった」

サゴーズ「もうちょっと粘りなよ…」

プトティラ「サゴーズ勝負！」

サゴーズ「えええー！？」

サゴーズ「サウバ！」

プトティラ「シャキリタ！」

サゴーズ「ガタウーター！」

プトティラ「シャトラタ！」

サゴーズ「ラトラ…ドル！」

プトティラ「？」

サゴーズ「へ？」

プトティラ「アウトー！O O」

サゴーズ「あれっ！？俺、何言っただけ…えーっと…」

ガタキリバ「シャトラタに対して、ラトラドル」

サゴーズ「あつれえええ…orz」

ラトラーター「俺の名前呼べばよかったのに」

プトティラ「勝負！」

ラトラーター「げっ！？」

プトティラ「シャジャドル！」

ラトラーター「ガタキリバ」

プトティラ「ガタキリーター」

ラトラーター「ガトラ…バ？」

プトティラ「ラキリーター！」

ラトラーター「ガタ…トラ…タ？」

プトティラ「ラウバ！」

ラトラーター「タジャドル！」

プトティラ「タカジャーター！」

ラトラーター「タカトラ…バ？」

プトティラ「アウトー！>ワ<」

タトバ「…ラトラーターお前最低」

ラトラーター「ごめんつてばあぁ！？」

プトティラ「タトバ！しょーぶー！！」

タトバ「うへっえええ！？」

プトティラ「シャウドル！」

タトバ「シャジャバ！」

プトティラ「タカキリドル！」

タトバ「ガタジャーター！」

プトティラ「タトバ！」

タトバ「ガタ…あれ？」

プトティラ「勝ったー○○」

タトバ「あの、俺、コンボ扱いじゃないの…？orz」

サゴーズ「あー、ごめん、タトバは亜種コンボ扱い」

タトバ「つまり…？」

ガタラト「ぶつちやけると亜種寄り」

タトバ「orz」

ブラカワニ「お、やってるな」

プトティラ「パパン！今ね、宿題中なの…！」

タトガタラトサゴ「…そう言えばそんな宿題あったけ…」

プトティラ「パパンも勝負！」

ブラカワニ「いいとも！」

ブラカワニ「ガタジャーター」

プトティラ「タカトラーター！」

ブラカワニ「ラトラバ！」

プトティラ「ラキリバ！」

ブラカワニ「ガタキリドル！」

プトティラ「ガタジャドル！」
ブラカワニ「タカジャーター！」
プトティラ「タカトラ…ゾ？」
ブラカワニ「ラゴリーター！」
プトティラ「サトラーター！」
ブラカワニ「ラトラタ！」
プトティラ「ラウバ！」
ブラカワニ「シャキリゾ！」
プトティラ「ガタゴリーター！」
ブラカワニ「サトラドル！」
プトティラ「ラジャバ！」
ブラカワニ「タカキリゾ！」
プトティラ「ガタゴリドル！」
ブラカワニ「サジャタ！」
プトティラ「タジャドル！」
ブラカワニ「タカジャバ！」
プトティラ「タカキリゾ…ぷっ！？」

ブラカワニ「パパンの勝ちー」
プトティラ「ぷうう…><」
ブラカワニ「ま、一日でやるうとしないで、夏が終わるまでに頑張
って勝とう！」
タジャドル「なんかまたやってるな…」
シャウタ「冷麦できたぞ」
タトガタラトサゴブラ「わーい！」

プトティラ「…タジャドル！勝負！！」
タジャドル「何の！？」
シャウタ「アレだろ…プトティラの宿題」

タジャドル「あー…なんかもう面倒だし、俺シャウタとタッグ組むからどっちかが間違えるまで粘れば2ポイント分で」

タトバ「ポイント制なの!？」

プトティラ「うー!」 頷く

ガタキリバ「あ、いいのか…」

タジャドル「サトラドル」

プトティラ「ラジャーター!」

シャウタ「タカトラーター」

タジャドル「ラトラバ」

プトティラ「ラキリドル!」

シャウタ「ガタジャゾ」

タジャドル「タカゴリタ」

プトティラ「サウタ!」

シャウタ「シャウドル」

タジャドル「シャジャバ」

プトティラ「タカキリゾ!」

シャウタ「ラトラーター」

タジャドル「ラトラドル」

プトティラ「ラジャゾ!」

シャウタ「タカゴリーター」

タジャドル「ガタキリバ」

プトティラ「ガタキリタ!」

シャウタ「ガタウーター」

タジャドル「シャトラーター」

プトティラ「サゴーゾ!」

シャウタ「サゴリタ」

タジャドル「サウバ」

プトティラ「シャキリドル」

シャウタ「ガタジャーター」
タジャドル「タカトラドル」
プトティラ「シャウター！」
シャウタ「シャウター」
タジャドル「シャトラタ」
プトティラ「ラウター」
シャウタ「シャトラドル」
タジャドル「ラジャーター」
プトティラ「タカトラゾ」
シャウタ「ラゴリドル」
タジャドル「サジャバ」
プトティラ「タジャドルううう…」
シャウタ「（明らかに嫌そうな顔したな）タカジャバ」
タジャドル「タカキリゾ」
プトティラ「ガタゴリーター」
シャウタ「サトラタ」
タジャドル「ラウタ」
プトティラ「シャウゾ！」
シャウタ「シャゴリタ」
タジャドル「サウター」
プトティラ「シャトラーター…」

プトティラ「orz」
シャウタ「あー、自分で間違えたって分かるのか…」
タジャドル（コイツ、大真面目に三馬鹿より頭いいんじゃない…）

プトティラ「頭疲れたよう」
シャウタ「冷麦で頭冷やさない」

プトティラ「ぶきゅー」 頭から湯気

タジャドル「相当頭使ったのか…つか、疲弊原因俺らが明らかに」
サゴーズ「冷えピタ持って来ようか？」

ラトラーター「団扇も持ってくるけど？」

プトティラ「亜種ゲームって奥が深いねパパン…」 冷えピタ頭に
貼りながら

ブラカワニ「はっはっは。タジャドルが暇な時にママンかパパンと
やっていた遊びだからなあ」

プトティラ「そうなの？」

タトガタサゴ「マジで!?!」

ラトラーター「あー、そういえば、最初に亜種ゲーム言い出したの
ってあいつか…」

タジャドル「とりあえず、チェスやるか」

シャウタ「おー」

ガタキリバ「こいつならありえる」

プトティラ「トマトの様子見てくる!」

サゴーズ「こら、今の頭で外に出たら熱中症になるから、少し休ん
でから行きなよ」

プトティラ「ぷい!」

044：トマトの友情

プトティラ「おおきくなーれー」 如雨露で水遣り

ラトラーター「おー、プチトマト大分大きくなってきたな」

プトティラ「食べないでね！」

ラトラーター「食べないよ！まだ実が緑だし！！」

プトティラ「うー」

ラトラーター「さて、俺は、…自由研究用の鳳仙花に水やるか…」

プトティラ「じゅうけんきゅ？」

ラトラーター「自由に調べなさいって奴。…うー、でも俺、理科苦手なんだよねえ」

プトティラ「何するの？」

ラトラーター「カプトやアギトと一緒に、葉っぱの葉脈…あ、例えるなら肉なんかにある筋みたいなものな。それを取り出して、画用紙とかに貼り付けて提出すんの」

プトティラ「楽しいの？それ」

ラトラーター「お前のよりはあまり楽しくないなあ…」

プトティラ「楽しくないのにするの？なんで？」

ラトラーター「…宿題だからです」

プトティラ「宿題楽しいよ！」

ラトラーター「お前のは…俺達と違って、憂鬱にならないものだから」

らなあ……」

プトティラ「早く赤くならないかなー、シャウタにあげたいなー」

ラトラーター「……シャウタ好きか？」

プトティラ「うー！」

ラトラーター「……そっか。トマト育つといいな」

プトティラ「ぷう……？うん！……ぷっぷー」 観察日記書き始める

ラトラーター「はああ……あと何残ってたっけ、宿題……」

(翌日)

プトティラ「○○」

ラトラーター「ふああ……おろ？どうしたんだよ、プトティラ」

プトティラ「トマト……○○」

ラトラーター「トマトがどうし……たっ！？」

トマトの みが なくなっている！

プトティラは ほうしん じょうたいだ！！

プトティラ「……トマト……シャウタにあげるトマトオオオ；；」

ラトラーター「うわっ、見事に実の部分が無い……なんで！？」

プトティラ「ぶぎゅうつうつうつうつ……！！」

タジャドル「……おい……朝から何を泣き喚いてるんだ！？」

シャウタ「プトティラ、ちょっと静かに！」

ガタキリバ「…っあー、頭痛い…」

サゴーズ「どうしたの…」

ブラカワニ「どしたマイペット…」

プトティラ「トマト…ないのおおおお！！T T」

シャウタ「へっ！？」

タトバ「どういうこと！？」

ラトラーター「俺が来た時から無くなってるんだよ！…でも、昨日見たときはまだ緑だったから…食べる奴なんていないはずなのに、………」

タジャドル「考えられることは…この家の誰かが食べたわけじゃない、ということだな」

ガタキリバ「そりゃ、そうだろ…プトティラもがっつかないで我慢して観察してたんだから…」

サゴーズ「でも、熟してないトマトを食べる人っている！？」

シャウタ「…いや、心当たりはある…」

タジャドル「……あ、俺も、何か読めてきた」

プトティラ「ぷっきゅ…ぷっきゅ…；；」

タトバ「もう泣き止みなって、プトティラ…」

ブラカワニ「ほ、ほら、まだこっちの方にちっちゃく実ができてるから！」

プトティラ「…やだあああ！あのトマトがいい、あのトマトがいいのおおお！！」

シャウタ「なんでだ？」

プトティラ「……最初にできたトマト、食べてもらいたかったんだ

もん……」

ガタキリバ「そりゃ、そうだよなあ……」

サゴーズ「シャウタにあげるトマトだったんだもんね……」

タトバ「で、ラトラーターは？」

全「……あれ？」

プトティラ「『いないはずなのに』の後からいなくなったよ……？」
全「……mjd？」

ラトラーター「……ゴルアアッ！ ホッパー兄弟……！」

キックホッパー「何だお前は……」

パンチホッパー「兄貴……あいつ、眩しいよ……」

ラトラーター「眩しい眩しくないじゃねえ！ お前らだろ、プトティ
ラのトマト盗んでいったの……！」

キックホッパー「トマトだと……？」

パンチホッパー「俺達は闇の住人だよ……」

キックホッパー「よって、太陽の光を充分に浴びた真っ赤なトマト
は食べない」

パンチホッパー「でも……兄貴……まだ太陽に染まりきっていない奴
だったら……いいよね？」 緑のプチトマト取り出しながら

キックホッパー「ああ……弟よ、光に満ちたものは食らうな……それが
正解だ」 緑のプチトマトむしゃむしゃ

ラトラーター「……そのこと言っただよオオオオッ！ リバ
ースしてでもいいから、さっさと返さんかああッ！？」

キックホッパー「……やるのか、お前……」

パンチホッパー「太陽なんて……壊してやる……！」

ラトラーター「上等だ…お前らぶちのめしてプトティラの前に差し出す！そしてストレインドゥーム撃たれる！！」

（暫くお待ちください）

シャウタ「…嫌な予感がして探してみれば…」

タジャドル「こういう食べ物絡みって、ギャレンか王蛇かお前らだもんな…！」

ホッパ―兄弟「……」 シャウタとタジャドルに殴られた

ラトラーター「…なんで俺まで？」 言わずもがな

プトティラ「プトのトマト返して！」

キックホッパ―「…食った」

プトティラ「ぷ」

パンチホッパ―「…食べたものは返せない…それが自然の摂理……」
プトティラ「ぷ、ぷええ…〇〇」 泣く3秒前

ラトラーター「…謝れよ！プトティラの奴、凄く楽しみにしてたんだぞ…！」

パンチホッパ―「何で…？」

キックホッパ―「この世は弱肉強食なんだよ…」

ラトラーター「屁理屈はいい、プトティラにちゃんと謝れ！……また実がつくとかそういう問題じゃない、初めて育てて初めて誰かにあげるための物だったんだよ…！」

プトティラ「ぷっきゅ！」 頷く

シャウタ「 ラトラーター、ライオディ阿斯発射」

タジャドル「シャウタは熱光線モロに食らう前に、即刻連れて帰る」
そう言いながら既に飛行

シャウタ「グッドラック！」 タジャドルに掴まったまま

ラトラーター「…謝らんかああッ！！」 ライオディアス

プトティラ「> <」 目を隠す

キックホッパー「ぐあああああ！太陽が…太陽が眩しいiiiiii
iiiiiiッ！？」

パンチホッパー「兄貴iiiiiiiii」

この10秒後に謝罪しました

ホッパー兄弟「」 バッタの炙り焼き状態

ラトラーター「あー、朝から疲れた…。帰るかプトティラ」

プトティラ「…トマト…」

ラトラーター「…プトティラ、確かに最初に実をつけたトマトは
無理だけど…まだ実は残ってるから、…最初に真っ赤になったト
マト…シャウタにあげような」

プトティラ「ぷつきゅ…でも、何でラトラーター怒ったの？」

ラトラーター「俺もさ、…陸上やってる理由って…皆を楽させたい
のもあるけど、陸上で一番になると皆が喜んでくれるからなんだよ
な」

プトティラ「？」

ラトラーター「だから、練習きついても頑張れるし…。お前だって、
宿題つてのもあるけど…シャウタに喜んでもらいたいから、トマト
育てていたんだろ？」

プトティラ「あい」

ラトラーター「それと一緒にだよ。一緒だから、…お前のトマトが盗まれた時すっごいムカムカした。お前の頑張り、無駄になったみたいですっごい腹が立った。……流石に、こんがり焼いたのはやりすぎだけど」

プトティラ「…ラトラーター、」

ラトラーター「何？」

プトティラ「…プトのトマトの葉っぱ、じゅっけんきゅに使っているよ」

ラトラーター「……ありがとな」

後日

プトティラ「シャウタ！トマト、赤くなった！」

シャウタ「そうか？よく頑張ったな」

プトティラ「だから、はい、あげる！」

シャウタ「ありがと」 プトティラなでなで

プトティラ「パパンにもあげる！」

ブラカワニ「お、ありがとな！」

プトティラ「サゴーズと、タトバと、ガタキリバも！」

サゴーズ「ありがと」

プトティラ「あとね、ラトラーターも！あげる！！」
ラトラーター「えっ、マジ？ありがとな」

タジャドル「orz」

タトバ「どうしたの、あれ…」

ガタキリバ「ほつとけ…ラトラーターにまでプトティラに懷かれて、
落ち込んでるんだろ」

シャウタ「それよりも…」

キックホッパ「はっはっは。おはよう！諸君」 ゴミ拾いしながら
パンチホッパ「今日も朝日が眩しいね！兄貴！！」 箒で掃除し
ながら

シャウタ「 あいつら気持ち悪い」

ラトラーター「光、浴びせすぎちゃったかなー…」

045：小ネタその9

本日放送のなかった地域は、バックor046を読んでネタバレを防いでください

・ガタキリバが何かを言いたいようです

ガタキリバ「やあああめろおおおベルゼブモオオオオオン！！」
タトバ「なんで最初からクライマックスで、こんな？」

ラトラーター「今日放送のなかった地域の人が最初の段階から読むのを防ぐ為に、ワンクッション」

サゴーズ「それにしてもマジな叫びだけど？」

ガタキリバ「うがあああああデッカードラモンの件もあるんだぞ畜生！！」

タトバ「まだ引き摺ってるし……」

ガタキリバ「せっかく…せっかく！メルヴァモンといい雰囲気だったのに…雰囲気だった、のに……！戦士の愛は死亡フラグですかそうですかああああ！！」

シャウタ「色々な意味で別の作品とも繋がるからやめろ！」

ブトティラ「例えば？」

タジャドル「…何があったつけ…？」

シャウタ「えーっと…ラトラーター、頼む」

ラトラーター「基本的に、俺、この戦いが終わったら結婚するん

だ』は死亡フラグ」

サゴーズ「後は？」

ラトラーター「『俺はお前との約束を果たすまでは、死ねない』とか：あ、そうだ、龍騎の霧島美穂とかファイズの長田結花が有名な恋愛系死亡フラグ」

ガタキリバ「ダンもダンで、華麗に死ぬ雰囲気ビンビンのセリフ立てんな馬鹿ああああ！ヴィオレ様がジークブルムノヴァを手に入れた時の『未来に行つて以降失踪』も相まってかあいつが引き金」人柱になつて死ぬ予感しかしねえええええええ！！」

タジャドル「：どうしたらいい、あの馬鹿」

ラトラーター「ほつとけば？明日はイナズマイレブン見てるんだろうし」ハルル地域の放送圏は明日イナイレがあります

シャウタ「：ダンとベルゼブモン、どっちが生き残ると思う？」

サゴーズ「：：：ダンでしょ：：：主人公」

タトバ「いや、でも、ベルゼブモンって死亡フラグを転生フラグにしたじゃん：あいつ完全に消えたら、何処かの死亡不可銃火器当主も死ぬことができるってことだし」

・バカ アホ サゴーズ

ラトラーター「何あの略！？」

サゴーズ「しつかし：こうなると次は、タジャドル？シャウタ？」

タトバ「最終回までに残り3話：果たして、一体誰なのか」

タジャドル「予想外のバースとか」

タトサゴ「：ねえよ！」

・里中さんの華麗なるトラップ術

サゴーズ「何あれ…」

ラトラーター「あー。何かゲームでありそう」

ガタキリバ「ゼエゼエゼエ…」

ブトティラ「だいじよぶ？」

ガタキリバ「ああ、ちよつと落ち着いた。……ガタックがあんなゲームしてたな…確か」

タトバ「しっかし、落とし穴に爆弾投げ込んだり…里中さん弾けてません？」

シャウタ「でも、ラトラーターの悪戯よりマシだと思っぞ」

タジャドル「ああ。ウヴァは、あれぐらいの深さの落とし穴でよかったと思うべきだ」

サゴーズ「…確かに…」

ガタキリバ「だよな…最悪、タジャドルが来るまで穴の中から抜け出せないなんてことも…」

タジャドル「馬鹿、俺なんてな、飛ばうとした瞬間に網が降って来て大変だったんだぞ」

ラトラーター「今の俺なら、地殻のある場所まで掘れると思う！」

タトバ「掘らないでね!？」

・タトバに一瞬見えました

タトバ「…ラトラバですよねそうですね…！」

・逆にウヴァわれましたが

サゴシャウ「orz」

タジャドル（し、刺激しない方がいいな…）

ラトラーター（俺は何も言わないでおこう…）

ガタキリバ（そのほうが賢明だ…）

タトバ（どうしよう。とりあえず、何か話題を反らそう）

ブラカワニ「しかし、何か切ないもんだよねー…メダルだけ求めるってのも」

タトバ「まあ、うん」

シャウタ「光を求めるなってか…」

サゴゾ「フフフ…地獄に落ちようか、シャウタ…」

タジャガタ「浄化しろラトラーター！！」

ラトラーター「浄化フラッシュ！」 ただのライオディ阿斯

サゴシャウ「ぎゃー！！」

タトバ「ところで、鴻上さんの言ってた役立つものって何かな」
ブラカワニ「パパンの予想は」

- 1 ・物ではないけど、伊達のこと
- 2 ・爬虫類メダル
- 3 ・まさかのタトバ強化形態的な何かのツール

4・まさかの甲殻類メダル

5・むしろ、フォーゼを呼ぼう

ブラカワニ「さあ、どれだ！」

タトバ「俺としては3」

プトティラ「2！」

・鴨だけに

タジャドル「絶好のかも、ってか……」

シャウタ「……………ちよつと誰ー、エアコンつけたのー」

プトティラ「しゃむい」

ガタキリバ「うおっ、夏なのに死ぬほど寒い」

サゴーズ「ラトラーター、ライオディアスプリーズ」

タトバ「この寒さ氷河期級だわー」

ブラカワニ「パパンは寒いと冬眠しちゃうよ！」

ラトラーター「ちよつと待って、俺も湯たんぽ欲しいわー」

タジャドル「誰か突っ込めよ！なあシャウタああ！？」

シャウタ「寄るな凍りつく……！」

・ライオディアスが効かないだ！？

ラトラーター「ライオディアス子供だまし扱いされたー！！！！」

ガタキリバ「……………」

サゴーズ「……」

シャウタ「……………」

タジャドル「ラトラーター、気付かないか？」

ラトラーター「何が？」

タトバ「メスール、液状化してたよね……」

ガタキリバ「つてことは、完全体になったら〃オーズのコンボ能力に近い者が使える……？」

サゴーズ「でも、カザリは前に重量級メダル取り込んだ状態で重力操作したよね」

シャウタ「差があるんじゃないのか」

プトティラ「タジャドル飛ぶだけだもんね！」

タジャドル「ライ」

ラトラーター「つてことは、ひょっとしたらウヴァの完全体はウヴァが50体」

コンボ兄弟「「「ねえわー……！！」」」 想像したら寒気

プトティラ「ウバ50匹になっちゃうの？」

ガタキリバ「そうはないと信じたい」

ブラカワニ「つかさ、マイ息子達。大事なことを忘れてるよ？」

タトバ「何が？」

ブラカワニ「完全体メスールにライオディアス効かない〃実質、シヤウタにもライオディアスが効かない」

タトタジャガタラトサゴ「「「！！！！」」」

でも（紫メダルの力で）凍りはします

真相は046へ！

046：許して！シャウタ

シャウタ「……………」無言で蛇口を捻る

ラトラーター「ごめんなさい、俺が調子乗りすぎました」土下座
プトティラ「ごめんなしゃい、プトがガブリュー貸したせいです」

上に同じく

龍騎「…何が起きてんの、あそこ」

タジャドル「何も…言うな」

ガタキリバ「まあ、簡単な話、……シャウタの命とも言える大事な
モンをド派手にぶっ壊した」

龍騎「あー、大体分かった」

タマシー「お前ら兄弟、ホント飽きないよな（シャウタを怒らせる
的な意味で）」

プトティラ「プトがガブリュー貸したせいだからラトラーター悪く
ないの；」

ラトラーター「いや！俺がぶっ壊しちまったんだ…プトティラは悪
くない…」

シャウタ「……………」無言で皿洗い中

サゴーズ（無言が一番怖いです！）

タトバ（プトティラが歌を出した時並みに怖いよ、あのシャウタ…
！）

プトティラ「ごめんなちゃい何でもしますだから機嫌直してシャウ
タアアアア」

ラトラーター「ホントすいません、三日間メシ抜きでも文句言わな
いから許して…！」

シャウタ「…」 無言で食器棚片づけ中

プトティラ「シャウタああ」

ラトラーター「ごめんなさい、本当にごめんなさい！」

シャウタ「そこ邪魔」

ラトプト「orz」 隅っこで体育図座り中

シャウタ「……」 ラトラーターとプトティラのいた場所の棚開ける
タトバ「どうしよう…」

サゴーズ「どうしようって言われても、…物凄く怖いんだけど…」
ガタキリバ「……はあ」

ラトラーター「プトティラ…俺達、家、追い出されるかもな…」

プトティラ「きゅうつ」

ラトラーター「…お前は残れよ…非は俺のほうが大きいし、お前一
人じゃ生活力ないだろ……」

プトティラ「やだ…プトが壊したようなものなのに、ラトラーター
捨てられるのやだあ…」

ラトラーター「……ダンボール、倉庫から引っ張ってこようかなあ
…」

プトティラ「『ひろってください』って書いたら、誰か拾ってくれ
るかな…」

タマシー「あれ、あいつ…いつプトティラに懐かれたんだ？普段だ

「つたら、『俺悪くないもん、悪いのラトラーターだよ！』なのに」
タトバ「この間懷かれてた」

龍騎「でも、前からおかしいと思ってたんだよな」。親父さんにすぐ懷くなら、ラトラーターにもすぐ懷くだろうに」

サゴーゾ「ラトラーターは…散歩の時、プトティラの首を思いつきり引つ張つちやったからねえ…」

ブラカワニ「お風呂でも、たまにトラクロー展開して体洗つちやつたみたいだし」

タマシー「とどのつまり？」

タトサゴ「アホラーターだから」

タマシー「あつそ…」

ラトラーター「ご飯…不味くても食つてくれよ…？」

プトティラ「ぶきゅーん…；…；」

ガタキリバ「おーい、シャウタ…」

シャウタ「…」 掃除中

ガタキリバ「もふもふのクッション」 ソファのクッション提供

シャウタ「……もっふー！！」 クッションダイブ

ガタキリバ「ぎゃー！！」

タジャドル「もふもふでシャウタ釣るなら、時と場合を考えるバカキリバ…」

シャウタ「もふもふもふもふ」 クッションに顔押し付け中

ガタキリバ「はい、もふもふタイム終了」

シャウタ「そんなもふ！」

タジャドル「『もふ』付けんな！お前ホント、もふもふしたクッションとかぬいぐるみ好きだな！？」

シャウタ「だって気持ちいいし……」
タジャドル「で？ラトラーターとプトティラのことだが、」

シャウタ「……正直、……あそこまでガチで怯えられると……何ともしにくいと言つか」

ガタキリバ「まあ、許してはやってくれ……あいつらだって、悪気があってやったんじゃないんだ」

シャウタ「それは分かってるよ。でもさあ……どう言っているのかが分からなくて」

タジャドル「前に、プトティラがサゴーズの盾を壊しただろ。あれと同じで、本人達も何らかの罰は受ける気にいるんだ……流石に家から追い出すのは、生活面で不安しかないとアレだが……」

シャウタ「……いや、ラトラーターとプトティラを追い出したらどうなるかなんて、親父を追いつくこと以上に不安しかないって充分理解してるから」

タジャドル「……だよな」

シャウタ「でも、本気で出て行かれる前に……何とかするしかないか………はあ」

ラトラーター「よりもよって、シャウタのだもんな……」

プトティラ「きゅっ……あ！」

シャウタ「……」

ラトラーター「うっ……本ッ当にごめん！どんな罰でも受けるから！……」

プトティラ「プトも！プトも罰受ける！！」

シャウタ「……ラトラーター、もうちょっと左寄って」
ラトラーター「へ？…あ、はい…」 左に移動
プトティラ「ぷ？」

シャウタ「この、」 二人の頭ぺちん
ラトプト「あう」
シャウタ「お馬鹿」 二人ぎゅう
ラトラーター「へ？」
プトティラ「シャウタ、なんでぎゅうしてるの？怒ってないの…？？」

シャウタ「ハラワタは煮えくり返りそうなぐらいですが何か？」
プトティラ「でも…」
シャウタ「二人とも充分反省してるのは分かってる。相手も悪いことは分かってるけど、自分のほうが悪いって相手を庇ってるのも分かる」
ラトラーター「シャウタ」

シャウタ「でもまだ怒ってます」
ラトラーター「ですよねー」
シャウタ「それなりに罰は与えます」
プトティラ「ぷう…」
ラトラーター「今日一日、メシ抜き…？」
プトティラ「一週間メシ抜き…？」
シャウタ「え、それでいいの？それでいいなら実行するよ？？」
ラトプト「ごめんやだ！」

シャウタ「ラトラーターは夏休みが終わるまで、毎日庭の草むしり。」

プトティラはトイレ掃除」

ラトプト「うええええ！？」

シャウタ「嫌ならメシ抜き」

ラトラーター「…分かりました」

プトティラ「ぷう… プトもやりゆ…」

シャウタ「宜しい。 はい、今日は鯖味噌作るからテーブル片付ける！」

ラトラーター「鯖買ってこようか！？」

シャウタ「タジャドルがライアから貰ってきたのが、冷蔵庫にあるからいい」

プトティラ「お味噌！」

シャウタ「まだ残ってます」

ラトラーター「えーつと、えーつと…」

プトティラ「ええと…」

シャウタ「……いいからテーブルの片付け！」

ラトプト「イエッサー！」

龍騎「あれ、綺麗に終わったな」

タトバ「なんで…？」

タジャドル「お前ら知らなかったのか？……前にプトティラがやらかしてシャウタの機嫌悪かった際、プトティラが『何でもするから許して』って言ったが…」

ガタキリバ「シャウタの奴…お前とサゴーズに少しは懐け、それでいいって言ったんだぞ」

サゴーズ「そうなの？」

タジャドル「基本的にはお前に似てるんだよな、サゴーズ」

ガタキリバ「まあ、ちゃんと怒る時は怒るし…怒りをある程度抑えて『許すからその代わりこの罰を与えます』って言い出すのが、遅いぐらいだな…」

サゴーズ「ふうん…」

タジャドル「…………でも、反省の色がないと逆にもっと悪化するから気をつける…」

ブラカワニ「うん、それは痛いほど分かる」

タトタジャガタサゴ「…親父、シャウタにいつも何してたんだ」

「

プトティラ「シャウター！」

シャウタ「こら抱きつくな、包丁持ってるから！」

プトティラ「うきゅー」

シャウタ「…まあいいか」 プトティラなどで

ラトラーター「…………だから頭が上がらないんだよなあ」

047: プトティラの宿題？

プトティラ「パパン！トマトの観察日記、完成したよ！！」

ブラカワニ「おー、そうかそうか！」

プトティラ「でも、トマト全部生っちゃったら、その後どうなっちゃうの？」

ブラカワニ「枯れちゃう…なあ」

プトティラ「ぷええ…」

ブラカワニ「でも、プチトマトさんはプトティラ達の中で、プトティラ達の命として生きるのだ」

プトティラ「プト達の中に生きてるの？」

ブラカワニ「そう！トマトさんの分まで、明日に向かって生きるんだ！！」

プトティラ「ぷー！」

タトバ「うまいこと誤魔化したね…」

サゴーズ「流石親父…変な所で頭はいい」

シャウタ「…親父だからな」

ガタキリバ「よっし！今年はいつともより早く終わった…！！」

ラトラーター「俺も、プトティラに負けたらそれこそアホラーター扱いだからな…あーもー、疲れた…」

タジャドル「終わっても受験勉強があるぞ」 参考書装備

ガタラト「orz」

シャウタ「プトティラ、宿題はどのくらい進んだ？」

プトティラ「あのねー、トマトの観察日記は全部描いた！」

サゴーズ「それから？ラジオ体操は？？」

プトティラ「あと15日ある！」

タトバ「15日もある…のかぁ…orz」 巻き込まれている人

プトティラ「思い出の絵はねー、3枚描いたー」

ガタキリバ「何描いたんだ？」

プトティラ「一枚はねーエイジと森で会った時の絵！それからねー」

ラトラーター「プトティラも、宿題もうすぐ終わるんじゃないか？」

ブラカワニ「そういえば、まだ何が終わってないんだっけ？」

プトティラ「……亜種ゲーム」

タトガタラトサゴ「……やっぱりそれか……」

プトティラ「この間、パパンには勝ったの…でも、シャウタとタジヤ何とかには勝てないの……」

タジャドル「おい！タジヤ何とかってなんだ！？」

プトティラ「うるしやいタジヤほにやらら」

ガタキリバ（ラトラーターに懷いて以降、タジャドルの扱いがかなり酷くなっているな…）

プトティラ「今日は負けないもん！タジヤ　　！！」

タジャドル「何故伏せる！？」

シャウタ「お前ら楽しそうだな…」

タジャドル「これのどこが楽しそうなんだ！？」

プトティラ「いくよ！」

タジャドル「ガタジャーター」
プトティラ「タカトラーター！」
タジャドル「ラトラバ」
プトティラ「ラキリゾ！」
タジャドル「ガタゴリタ」
プトティラ「サウーター！」
タジャドル「シャトラドル」
プトティラ「ラジャゾ！」
タジャドル「タカゴリバ」
プトティラ「サキリタ！」
タジャドル「ガタウバ」
プトティラ「シャキリゾ！」
タジャドル「ガタゴリドル」
プトティラ「サジャーター！」
タジャドル「タカトラタ」
プトティラ「ラウゾ！」
タジャドル「シャゴリタ」
プトティラ「サウーター…ぷっ！？」

タジャドル「はい俺の勝ち」
プトティラ「ぷうう…」
タトバ「むしろ、発案本家に勝てたら、それだけで表彰ものだよ…」
ガタキリバ「ところで、気になったんだけど、……シャウタとタジャドルってどっちが亜種ゲーム強いんだ？」
サゴーズ「あ、そういえば、二人が間違えたのって見たことないな…」

プトティラ「見たい！シャウタ、タジャ××に勝ってね！！」
タジャドル「おい！」
「×」は流石にやめろ、何か卑猥だ！！」
シャウタ「えー…俺、この間録画したサスペンス劇場見たいんだけど…」

仕方ないので、二人ともテレビ見ながらやってます

タジャドル「シャウター」
シャウタ「シャトラバ」
タジャドル「ラキリゾ」
シャウタ「ガタゴリタ」
タジャドル「サウドル」
シャウタ「シャジャーター」
タジャドル「タカトラゾ」
シャウタ「ラゴリバ」
タジャドル「サキリドル」
シャウタ「ガタジャーター」
タジャドル「タカトラタ」
シャウタ「ラウドル」
タジャドル「シャジャドル」
シャウタ「タカジャゾ」
タジャドル「タカゴリーター」
シャウタ「サトラバ」
タジャドル「ラキリタ」
シャウタ「ガタウドル」
タジャドル「シャジャゾ」
シャウタ「タカゴリバ」

タジャドル「サキリーター」
シャウタ「ガタトラーター」
タジャドル「ラトラバ」
シャウタ「ラキリーター」
タジャドル「ガタトラドル」
シャウタ「ラジャタ」
タジャドル「タカウタ」
シャウタ「シャウドル」
タジャドル「シャジャバ」
シャウタ「タカキリタ」
タジャドル「ガタウタ」
シャウタ「シャウゾ」
タジャドル「シャゴリタ」
シャウタ「サウタ」
タジャドル「シャウバ」
シャウタ「シャキリタ」
タジャドル「ガタウーター」
シャウタ「シャトラーター」
タジャドル「ラトラゾ」
シャウタ「ラゴリーター」
タジャドル「サトラーター」
シャウタ「ラトラタ」
タジャドル「ラウドル…ッ」

プトティラ「ぷーい！ぷーい！！」
タジャドル「なんでお前が喜んでるんだよ！？」
プトティラ「だってシャウタが勝ったんだもん >ワ<」
タトバ（っていうか、テレビ見ながらなんで42亜種を…途中コンボ挟みなしで言えるわけ？）

ラトラーター「もう面倒だから、タジャドルに勝ったシャウタに勝てばプトティラの亜種ゲームの宿題それで終わり！でいいんじゃない？」

プトティラ「やる！」

タジャドル「もうそれでもいいから好きにしてくれ…」

シャウタ「巻き込まれてるの俺なんだけど！？」

シャウタはテレビ見ながらやっています

プトティラ「シャトラーター！」

シャウタ「ラトラゾ」

プトティラ「ラゴリバ！」

シャウタ「サキリドル」

プトティラ「ガタジャーター」

シャウタ「タトバ」

プトティラ「ラキリタ」

シャウタ「ガタウーター」

プトティラ「シャトラバ！」

シャウタ「ラキリゾ」

プトティラ「ガタゴリタ」

シャウタ「タジャドル」

プトティラ「タカジャバ！」

シャウタ「タカキリーター」

プトティラ「ガタトラーター！」

シャウタ「ラトラタ」

プトティラ「ラトラーター！」

シャウタ「ラトラバ」

プトティラ「ラキリタ…ぷいつ!？」

シャウタ「再戦は30分後ね、今、凄くいい所だから」

プトティラ「orz」

ガタキリバ「…シャウタの集中力ばねえ…」

プトティラ「勝てないよー…○○」 頭から湯気

ラトラーター「ガタキリバ冷えピタ」

ガタキリバ「水も持ってきたほうがいいか？」

サゴーゾ「氷水お願いね」

プトティラ「亜種ゲームに終わりはないんだね、パパン…」 冷え

ピタ貼りながら

ブラカワニ「亜種ゲームに笑う者は、亜種に泣くのだぞ。マイペツ

トよ」 履歴書書きながら

プトティラ「ぷ!」

（30分後）

プトティラ「シャウタ!再戦…」

シャウタ「ごめん、5時から大安売りあったの忘れてた!明日ね!

!」

プトティラ「きゅうん…」

タジャドル「…ま、シャウタは色々忙しいからな…」

シャウタ「タジャドルは隣のスーパーで、野菜詰め合わせ買って

こい！ビニール袋の口は広げろよ！！」
タジャドル「……はいはい……！」泣く泣く飛んで行く

プトティラ「むうう……」

タトバ「もー、ぶーたれないの。プトティラ」

プトティラ「……だからタジャドル嫌い」

タトサゴ「？」

ガタラト「……ああ……成程……」

048: プトティラの宿題？

プトティラ「ぶにゅー」

タトバ「どうしたの、プトティラ」

プトティラ「亜種ゲーム、かーてーなーいのー」

ラトラーター「あれから何度も、シャウタやタジャドルに挑んでるんだってさ」

タトバ「で？」

ガタキリバ「いずれも20戦20敗」

サゴーズ「この間なんか、合計6連続やって高熱出したもんねえ」

プトティラ「ぷいー」

ブラカワニ「うーむ。もはやあの二人に勝つのは運だな」

タトバ「親父が出した宿題だよ!？」

プトティラ「でも頑張る!金メダル欲しいもん!」

サゴーズ「ところで親父、…金メダル作ってるのか?」
頭鷲掴みにしつつ

ブラカワニ「ちゃんと作ってあります、いや、その前に、サゴーズ怖ッ!？」

サゴーズ「作っているなら良し」

タトバ「でも、難しいよねー」

ガタキリバ「手伝ってやろうか、と言いたい所だが、…俺達プトテ

イラに瞬殺されたぐらいだから…」

プトティラ「一人で頑張る！」

ラトラーター「だもんなぁ」

タトバ「こうなったら応援しかできないね…」

サゴーズ「うーん、せめて必勝法があれば…」

ブラカワニ「あー、成程ねー。忙しいところごめんね、愛してるよ」

???『あの子達によろしくね』

ブラカワニ「…ふー」

ガタキリバ「おい…親父、どこに電話した？」

ブラカワニ「ママン」

タトガタラト「…電話出たの!？」

サゴーズ「って言うか、電話番号知ってたの!？知ってたら教えるバカ親父！」

兄弟の殆どがママンの携帯の番号を知らない上に、そもそも電話代の都合で長電話できません

ママンは知ってますが掛ける時間がないので、状況報告はタジャドルの手紙便りです

ブラカワニ「今、休憩中だったみたい。ママン情報だと…『傾向としては、あの二人、チーターかバッタが多くてコンドルが少ないのよね』って」

プトティラ「にゅー…〇〇」

タジャドル「おいサゴーズ、歴史の本貸して…」

プトティラ「勝負！」

タジャドル「いきなりかよ！」

サゴーズ「ところで、歴史の本どうするの？」

タジャドル「……バカアホ双子の受験勉強対策以外に、何が？」

ガタラト「ぎゃあああああー！」

プトティラ「しょーぶー！」　タジャドルのバツクル引つ張りながら
タジャドル「馬鹿、こら、ベルト剥こうとするな！【大人の事情】
で取ったらいけないって、お前も分かってるだろ！？」

プトティラ「うるしやいタジャぷー！」

タジャドル「伏せ文字を『ぷー』で表現するな！？分かったから離
せ！」

プトティラ「いくよ！」

タジャドル「ラジャーター！」

プトティラ「タカトラーター！」

タジャドル「ラトラゾ」

プトティラ「ラゴリドル！」

タジャドル「サジャバ」

プトティラ「タカキリドル！」

タジャドル「ガタジャゾ」

プトティラ「タカゴリドル！」

タジャドル「サジャタ」

プトティラ「タカウドル！」

タジャドル「シャジャーター！」

プトティラ「タカトラドル！」

タジャドル「ラジャゾ」

プトティラ「タカゴリーター！」

タジャドル「サトラバ」

プトティラ「ラキリドル！」

タジャドル「ガタジャバ」

プトティラ「タカキリゾ！」

タジャドル「ガタゴリーター」

プトティラ「サトラドル！」

タジャドル「ラジャーター… あっ」

プトティラ「勝ったー！>ワ<」

タトガタサゴ「「おおー！？」」「」

ラトラーター「母さんスゲエ」

タジャドル「ちょッ、母さんに聞くの反則だろ…！」

サゴーゾ「聞いたの親父だもん」

シャウタ「さつきから何やってるんだ？」

プトティラ「シャウタ！タジャピーに勝った…！」

タジャドル「おい伏字すんな！」

シャウタ「あー、よかったな」 プトティラ撫でようとした

プトティラ「きゅ！」 回避

ガタキリバ「避けた！？」

シャウタ「」 放心状態

タトバ「プトティラ、早くフロローして！シャウタが想定外の反応で真っ白になってる…！」

サゴーゾ「シャウタ白くならないで、俺と色被る！」

プトティラ「シャウタに勝ったら頭撫でてね！」

シャウタ「負けたら？」

プトティラ「…omO」泣きそう
ラトラーター「負けても慰めてあげたら?」
シャウタ「うん…じゃあ、やろうか…」

プトティラ「ガタジャドル!」
シャウタ「タカジャーター!」
プトティラ「タカトラドル!」
シャウタ「ラトラタ」
プトティラ「ラウドル!」
シャウタ「…シャジャドル」
プトティラ「タカジャバ!」
シャウタ「タジャドル」
プトティラ「タカジャゾ!」
シャウタ「タカゴリドル」
プトティラ「サジャドル!」
シャウタ「タカジャタ」
プトティラ「タカウドル!」
シャウタ「シャジャーター!」
プトティラ「タカトラゾ!」
シャウタ「ラゴリドル」
プトティラ「サジャーター!」
シャウタ「タカトラーター!」
プトティラ「ラトラバ!」
シャウタ「サゴーズ」
プトティラ「サゴリーター!」
シャウタ「サトラドル」
プトティラ「ラジャドル!」
シャウタ「ガタキリバ」

プトティラ「ガタキリドル！」
シャウタ「ガタジャドル…ッ!？」

タトガタラトサゴ「「おおおおー!!?」「」
プトティラ「勝った…〇〇」 頭から湯気
タジャドル（コンドル攻め状態だったからな…）
シャウタ「…だー、ガタキリバじゃなくてラトラーターにすればよ
かった」

プトティラ「きゅぷぷぷぷぷぷい…〇〇」 頭の二箇所から湯気
タトバ「うわっ、6連続やったとき並みに湯気が!」
ラトラーター「もはやコンドル大会だったもんなあ…」
タジャドル「お前明らかにシャジャドルの時点で気付いて、封殺に
入っただろ…」
シャウタ「タカ ドルを言い切った時点でやめておけば…!」
ガタサゴ「反省する前にプトティラの頭冷やすの手伝え!」
シャウタ「そうでしたごめんなさい!」

シャチ放水で消火した後、冷えピタ2枚貼りました

プトティラ「- -」
ブラカワニ「冷えピタが気持ちいいんだろっなあ」
タトバ「2枚も貼ってるからね…」
ブラカワニ「それよりも…はいプトティラ!お約束の金メダルです
!!」 プトティラの首にかける

プトティラ「ぷ！」

サゴーズ「…おめでとう…！」 感涙

タジャドル（柔道で金メダル取りたい夢があるだけに、プトティラが貰えて嬉しいんだろぅなあ）

プトティラ「シャウタ！金メダル貰った！！」

シャウタ「プトティラ、ちよつとこつち来な」

プトティラ「ぷ？」 とことこ

シャウタ「…よしよし。よくできました」 頭撫でる

プトティラ「きゅーん…〇〇」 嬉しくって倒れた

シャウタ「ぎゃああああ！プトティラああああ！？」

タジャドル「駄目だ、念願の金メダルと…（頭の消費で）今まで忘れていたご褒美の『頭なでなで』というグレートゲキレッツアタックで、プトティラが倒れた！」

タトバ「叫んだり冷静に見解下したりする前に、団扇と枕持ってきてよ！？」

プトティラ「ぷにゅん〇〇」 気絶したまま

シャウタ「プトティラ…」

ラトラーター「まあ、母さんの攻略法があつたとはいえ、頑張つたからなあ」

ガタキリバ「冷えピタ2枚でも足りなかったか…」

サゴーズ「今日は冷たいものにして、明日、プトティラの食べたいもの作ってあげたら？」

シャウタ「そうだな。じゃあ、冷やし中華作るか」

プトティラ「……むにゅ、…残りも頑張りゅ…」

タトバ「あ、寝言」

プトティラ「…全部終わったら、パパンも…シャウタも…皆も、…
…褒めてくれるかな…きゅう」

タトガタラトサゴ「…」「…」「…」

タジャドル「だ、そうだ…タトバ、お前イヤイヤ言わずに付き合っ
てやれよ。ラジオ体操」

タトバ「はい…」

ブラカワニ「いやあ、いい子に育ってるねえうちのペット」

ガタラトサゴ「（タジャドル以外にはね！）（）」

タジャドル「おい三馬鹿、今『どっかの長男以外にはいい子だよ』
とか思っていないよな？」 クジャク羽展開
ガタラトサゴ「…」「…」「いえ！…？」「…」

049：小ネタその10

本日放送のなかった地域は、バック推奨です

・ガタキリバが叫びたいようです

ガタキリバ「ベルゼブモオオオオン！！」
タジャドル「煩い！」

ガタキリバ「畜生！あんな展開ありかよ…！ユウに『死ぬのはデジタルワールドでも一緒』って話をしたら、下手を打てば戻ってこない可能性だつてあるんじゃないか…！！」

ラトラーター「いやー、クッション話題とはいえ、スゲー威力」
サゴーズ「もう、見ただけでバックする人多いよね」

ガタキリバ「メルヴァモンと脈あったのに…！キュートモンやメルヴァモンという様子は、まるで親子みたいだったのに…！ベルゼブモン、カムバック…！」

シャウタ「ところで、ダメモンにしてもズアーモンにしても、熊の人形みたいな奴が本体なのかね？」

ブトティラ「わかんない」

ブラカワニ「パパンはデジモンあまり知りません」

ラトラーター「俺も、放送時期変わったのは知ってるけどな」

タトバ「ということは……何処かの死亡不可銃火器当主も死ねる
ってことか……」

小ネタその9を参照

・安定の真木

シャウタ「…畜生、何でシリアスに向かう一方でどんどんキヨちゃん
が人間じみたリアクションをしていくんだ」

タトバ「今までは、ギリギリ『撮影上のミス?』とかで済んだけど
……」

サゴゾ「アレ、もう、意思宿ってない?」

ガタキリバ「流石に眉毛は…くそっ、ベルゼブモン…orz」

タジャドル「まだ言うかお前は」

ラトラーター「え、元々そういう生命体なんじゃないの?」

プトティラ「きゅ」

タトタジャガタサゴシャウ「…いやいやいや!?!?!」

ラトラーター「キヨちゃん星から来たプリンセスじゃなかったんだ」

プトティラ「マツキーの全意識・全神経を宿した、マツキー本体じ
やなかったんだね!」

タトバ「どこから突っ込めばいいの俺達!」

・バカ アホ レスラー シャウタ

サゴーズ「なんかショックなあだ名ついた!？」

シャウタ「せ、せめて、せめて俺は『苦労人』で…!」

タトバ「もういつそ、ここでタジャドル飛ばしてプトティラだと面白いのに」

タジャドル「おい」

・アイスを食べに戻ったわけですが

タジャドル「知ってるか…回想って、死亡フラグに近いんだぞ」

タトバ「やめて悲劇しか思い浮かばない」

ガタキリバ「悲劇なんて、1時間30分前にも起こったさ…!」

サゴーズ「っていうか、1000回記念って、公式で繋がってる扱いはなんだね…」

シャウタ「むしろ、1000回とか頭バシバシを組み込むって…悪意しか感じない」

ラトラーター「それ以前に、そのこと思い出したら決別深まると思っただのは気のせい?」

プトティラ「……1000回記念って何?」 存在してない

ブラカワニ「パパンも知りたい」 上に同じく

ラトラーター「あー、ライオンとチーターも知りたいー」 トラしかなかった

ガタキリバ「クワガタとカマキリも知りたいー」 バッタ以下略

サゴーズ「サイとゾウも知りたいー」 ゴリラ以下略

タトバ「ええつと……カオス映画作り」 この頃までは安定のタ

トバ

タジャドル「……イカとジャガーが合体……」 この頃まではいた
シャウタ「……1000枚投入でサソリメカ……？」 サソリに乗っ
てブイブイ言わせてた

・「最後に生き残るのは俺だ」

タジャドル「こいつもフラグ立てていくな……」

ガタキリバ「え、ウヴァはこれがデフォルトじゃね？」

ラトラーター「むしろ、復活しなかったらしなかったで映画にでも
何にでも繋がられたのになー、とは思った」

サゴーズ「いや、それよりも、……ウヴァならコア碎けても暫くは生
き延びるよ」

シャウタ「あー、虫って、首切り落としても暫くもがく奴いるんだ
っけ？」

タトバ「何それ怖い」

・届けものは伊達さんじゃありませんでした

タトバ「まさかの3（まさかのタトバ強化形態的な何か）クルー！
？」

プトティラ「違うもん、2（爬虫類メダル）だもん！」

サゴーズ「よし、4（まさかの甲殻類メダル）で」

ガタキリバ「あえてふざける。5（むしろ、フォーゼを呼ぼう）」
ラトラーター「6・この期に及んで2でも4でもないコアメダル」

タジャドル「明らかに小さい小包だからな……」

シャウタ「……俺、前にアレに似たようなものを見たことがある気がする」

ブラカワニ「どこで？」

シャウタ「……確か、ライオンとか……クジャクとかに関係しそうな……」

タマシー「7・予想外のタマシーコンボのメダルウウウウー！」

オーズ一家「「それはない」」

・人がセルメダルになりました

サゴーズ「何これガチで怖い！」

シャウタ「……つまり、サゴーズが触れるだけでものはセルメダルに……」

サゴーズ「なりません！」

シャウタ「うん、知ってるから」

ガタキリバ「いやー、必ずしも、コンボ時の能力＝完全体グリードの能力じゃないんだな」

ラトラーター「当たり前だって。それだと、俺の頭、ライオンヘツ

ドブレイブじゃないとおかしい」

ブラカワニ「考えられるのは……」

1・メズールが完全体になった時の表現がそれしか考えられなかった

- 2 ・実はできるけど、尺の都合でカットされたグリードさん達
- 3 ・実はできるけど、ボツられたコンボ特殊能力
- 4 ・ライオンというかラトラーター虐めをしたかった
- 5 ・むしろシャウタ虐め
- 6 ・水も滴るいい女

ブラカワニ「どれ！」

プトティラ「ぷえ…5駄目！4もだけど…！」

シャウタ「…」 指バキボキ

ブラカワニ「ごめんなさいシャウタ殺さないで！」

・伊達明、リバーズ！

タトバ「うわあああああ！一級フラグ破壊士の伊達さんだあああああ…！」

ラトラーター「一級雰囲気ブレイカーの伊達さーん！」

ガタキリバ「第一級シリアス破壊士の伊達さん、キター！」

サゴーズ「…随分早く手術終わったねえ…」

シャウタ「そこは突っ込むの、やめようか」

タジャドル「というか、『邪魔してすいませんでした』…相変わらずお茶目というか……」

プトティラ「おちゃめって？」

ラトラーター「プトティラが間違えてタジャドルのプリン食べた時、

『ごめんちゃい』ってきゅるるんウインクで言うこと」

プトティラ「こんな感じ？> O」

ガタキリバ「何だよそれ！？何だよその説明！」

サゴーズ「つていうか、いつの間にかラトラーターが親父のポジション奪ってる！？」

ブラカワニ「やめてラトラーター、パパン居場所なくなっちゃう！」
シャウタ「いや仕事しろよ！」

タジャドル「いや、そもそも誰だよプリン食べたの！？」

タトバ「本当に食べられてたの！？」

ラトラーター「ごめんちゃい > O」

タジャドル「おつまあああああああああああああああああ
あ！！！！」

・「やったか？」 殺りました（間接的に）

タトバ「流石一級フラグ破壊士……！」

ラトラーター「お約束を破壊した……」

サゴーズ「ただし、…真木博士の助力付きで」

ガタキリバ「どんどん犠牲者が増えていくな……」

シャウタ「さーで、緑は何枚逝くかな」 シャチウナギタコ

タジャドル「さあな」 タカクジャクコンドル

ラトラーター「1枚、1枚な」 ライオン

サゴーズ「2枚」 サイゴリラ

ガタキリバ「……むしろバツタ以外全部だったら泣いてやる」

ブラカワニ「それだと、一生ガタキリバ揃わなくなるよ……せめて
6枚だ、マイ息子」

プトティラ「紫は…？」

タトバ「あ…」

タジャドル「さあ…」

ガタキリバ「どうなんだろう…」

ラトラーター「しらね」

サゴーズ「ごめん、予想できない」

シャウタ「よしよし…」 プトティラの頭撫でる

プトティラ「ぷええええええええ」 泣きつく

・紫目タトバ&映司グリード

ガタキリバ「物語が絶望へと進んで行き過ぎている件について」

ラトラーター「まだだ、希望を信じるんだ…」

タトバ「折角伊達さんが帰ってきたのに！」

サゴーズ「希望がないなんて、悲しすぎるよ…！」

シャウタ「ところで、恐竜グリードの中で誰が一番カッコいいと思う？」

プトティラ「プト！」

シャウタ「はいはい、プトティラ可愛いね」 頭撫で撫で

プトティラ「…ごっこ遊びじゃないよね…？」

シャウタ「俺の愛を疑うならメシ抜き」

プトティラ「ごめんなしやああああああい！！！」

シャウタ「よいい子」

ラトラーター「正直、口籠っていい？」

サゴーズ「もしかして、とは思うけど、……ウヴァに他のコアメダルを取り込ませたんじゃないかって」

ガタキリバ「ははは、そんなことあるわけ……ない……よな」

ラトラーター「そうそう、そんなこと……ない、他のメダル取り込んでいたせいで、ウヴァの意識メダルじゃなくて他のメダルが壊れたなんて……」

タジャドル「はは、ははははは……そんな都合がよすぎるな……」

プトティラ「ぷぷぷ……ぷ、ぷう……ぷううう……〇〇」

シャウタ「それ、高確率で逝くの俺かお前ってことじゃねえかあああああああああ……!?!」

サゴーズ「だから言いたくなかったんだよおおおおおおおおおおおおおお!!」

ラトラーター「地味に俺も忘れないで頂戴、アंकが2枚・映司の手元に3枚・破壊された1枚で残り3枚の所在が分かってないんだからあああああ!!?」

・作者が今一番何とかして欲しい欲望をラトラーターが受けました

ラトラーター「…何もしてないのに喉痛い…」

ガタキリバ「カラオケ行っただけでもないのにな。昨日からか？」

ラトラーター「昨日の夜ぐらいかりや…うぐう」

サゴーズ「プトティラでもないのに噛んでるよ？」

タジャドル「って言うか、大丈夫なのか本当に」

ラトラーター「大丈夫だったら、苦労…るわけないじゃん……」

プトティラ「きゅ？」

シャウタ「なんか聞き取れなかった」

ラトラーター「……たの先のほうに口内炎できてるから、喉が痛いのも相…って、上手く喋れない…だよ！」

ブラカワニ「舌の先つちよに口内炎できて凄く腫れてるもんだから、喉含め二重の痛みに苦しんでるんだって。さっきから見てる限り、

『さしすせそ』がちよつと言いにくいみたいだね」

全「…あー……」

プトティラ「ラトラーター喋るのやめたら？」

ラトラーター「ありがとプト…ラ、でもこれだけは……ガンバライドシャッ…ルムツコロオオオー！」

ガタキリバ「シャッフル、な」

以降、一部を除いてラトラーターは筆談となります
被害は、手元にあったガンバライドカードをシャッフルして適当に引いた一枚で決めました
ちなみに、こんな状況でも明日もバイトです

・走馬灯は死亡フラグ

シャウタ「前回もやったけどな」

タトバ「ここまでやると、伊達さん効果も相俟って、逆に死なないとか？」

タジャドル「とりあえず伊達さんのフラグブレイカーに期待」

ラトラーター『ってか、グリード態から直接プトティラになれるんだな』

プトティラ「しゅごいよね！」

ガタキリバ（ラトラーターが何か言いたい時、筆談だから待つのも面倒くせえ…）

ラトラーター『今なんか思ったかガタキリバ』

ガタキリバ「いえなんでも」

・バカ アホ レスラー おかん タジャ××

タジャドル「伏字イイ！」

シャウタ「どーでもいいーだろーもー」 凄まじく投げやり
サゴーズ「おかんは否定しないのな、シャウタ…」
プトティラ「きゅっぷい」

ラトラーター「最…う回」

サゴーズ「ごめん無理に喋らないで」

ラトラーター「…」 筆談中

シャウタ「……だあああああ、携帯のメール機能使え！お前打つの早いだろー！」

ラトラーター『シャウタが遅すぎるんだと思う』 携帯使った
タジャドル「そっちの方が早いマジで！？」

ラトラーター『最終回、OP多分ないだろうから、ここで打ち止めか…あるいは、映司がメダルピーンするところまではやるんじゃないかな』

ガタキリバ「そんな長文、よく15秒以内に打てるな」

サゴーズ（どこかでタイプミスしそうだけどね…！）

・キヨちゃん海にダイブ！

ガタキリバ「火の海ダイブよりよくね？」

タジャドル「なんかごめんなさい」

サゴーズ「って言うか…こんなシリアス続きなのに、ギャグって…」

そんなのないよ、酷すぎるよ……！」

ガタキリバ「それ俺が言いたかった」

ラトラーター『ってか、眼鏡ないよ！とか僕泳げたよ！とか完全に

アドリブだよな？」

シャウタ「だろうなー」 かなり投げやり

タトバ「あの、シャウタ、何か凄いいい加減に思えたのは気のせい？」

プトティラ「何かあったの？」

シャウタ「……………」

ラトラーター『歌』 シャウタに見せないように

タトバ「ジャガタサゴ」「なんかごめんなさい」「」

プトティラ「きゅうO m O」

ブラカワニ（つてか、メール便利だなー…）

・知世子さん男前で結婚してください

タトバ「知世子さん…素敵すぎる…」

ガタキリバ「オースのおやつさんポジションだな」

ラトラーター『まあ、あの人ならかなり早めにばらしても受け入れ
そうな気はしたよな』

サゴーゾ「そういえば、何でばらせないんだっけ？」

ブラカワニ「リアル思考だから」

プトティラ「お店？」

タジャドル「【エクシスク】と変わらなくなるぞ」

シャウタ「お前らはタジャドルがNOVEL大戦で受けている苦痛
を受けたいのか？」

タトバ「ラトサゴ」「大体分かりましたごめんなさい」「」

ガタキリバ「ってか、もうあれだよな」
ラトラーター「？」

ガタキリバ「…比奈ちゃんの欲望が、総てを救うと信じて！完」
タトバ「何処のソードマスター！？」

・アングの意識コアに…

タトタジャ「タカアアアア！」

シャウタ「煩い」

タトバ「…ごめんなさい」

タジャドル「すい」

シャウタ「黙れ」

タジャドル「おい、ちょ」

シャウタ「煩い」

タジャドル「シャ」

シャウタ「呼ぶな」

タジャd

シャウタ「出るな」

タジャドル「…………orz」

プトティラ「ぷひゅー○○」

ガタキリバ「…なんかシャウタの機嫌が悪くて、プトティラの機嫌がいいんだが」

タトバ「いや、プトティラは分かる…何となくだけど」

サゴーズ「……××（あえて伏字にしていますが、歌のことです）
のせいにしても、何かタジャドルの扱いが」

ラトラーター『出番』 シャウタに見せないように
タトガタサゴ「「あー……」」

ブラカワニ「まあ、遅くても3日経てば機嫌収まるんだから、放つ
ておいてあげようか」

タジャドル「いやちよつと待て、それはそれで！」

シャウタ「…あ？」

タジャドル「……存在自体がすいません…！orz」

・ 平常運行の伊達さん、そして

ガタキリバ「…鴻上さん、明らかに、マッキーのオーバーリアクシ
ョンが乗り移ってないか」

ラトラーター『それは誰しも思う道だと思っ』

・ で、箱の中身は？

ブラカワニ「次回予告でタトバ出てきたから、多分、800年前の
王が使っていたメダルなんじゃない？ 鴻上が次回予告で持ってたし」
タジャドル「そもそも、頭が10枚目って言う確定要素もないわけ
だしな…」

プトティラ「ぶりやかわに出ないの…？ タジャ は出るのに…？
？」

タジャドル「おい」

シャウタ「黙れ」

タジャドル「:orz」

サゴーズ「頑張れ、最低でも3日後には機嫌が直るから」

タジャドル「そこまで生きていられる自信がない:orz」

ガタキリバ「だから:ごめん、ラトラーター代弁して」

ラトラーター『だからお前、シャウタに続くメンタル低い扱い作者から受けてるんじゃない?』

タジャドル「:それを言うなと何度もおおお!!」

シャウタ「口塞げ煩い叫ぶな」

タジャドル「orz」

プトティラ「」

・欲望を解放していく映司に、シャウタが一言

シャウタ「力を求めすぎるあまり、手を伸ばせる距離にいるはずのWバースを助けずに鴻上のところに行った時点で、なんかズレてるし間違っているような気がする…」

タトタジャガタサゴブラ「:一番言ったらいけない奴が言った!」

「」

シャウタ「ラトラーターとプトティラ以外メシ抜き」

タトバ「ぎゃああああ!」

ガタキリバ「ごめんなさあああ!?!」

タジャドル「しかし、映画を見た後だと映司の欲望が世界を救うと思っていたんだが…」

タトバ「逆になんか危なくなってますか」

ガタキリバ「比奈ちゃんの欲望が世界を救」

サゴーズ「それはもういい！」

・ウヴァさんの名言集

サゴーズ「完全復活を舐めるな（どやっ）」

ガタキリバ「虫けらが（どやっ）」

タトバ「俺の天下だ（どやっ）」

シャウタ「…ラトラーターが上手く話せないせいで、タトバが三馬鹿に見えるな」

タトバ「やめて！？一応、点数いいんだよ！？……歴史はサゴーズに負けるけど！」

・次回、感動の最終回！

ガタキリバ「いいよな、出番のある奴は…！」

シャウタ「歌のある奴は…！」

サゴーズ「優遇されている奴は！」

ラトラーター「相棒補正のある奴は…！」 頑張って喋ってくれました

タトバ「映画で隠し玉扱いされた奴は！」

プトティラ「あんきゅ補正のあるタジャ××は！、」

タジャドル「よし、ガタキリバとシャウタは心からなんかごめん。

でも、何かちよつと言わせてくれ」

ブラカワニ「はいどーぞ」

タジャドル「ラトラーターとプトティラには【補正】とか言われる筋合いねえええつ!!?」

タトバ「それは確かに!」

ガタキリバ「出番…出番寄せよ……出番…!」

シヤウタ「歌…出番、……歌…」

サゴーズ「活躍…ノーモア集団リンチ…出番…not人質……!」

ラトラーター「怖ッ!？」

プトティラ「ごめんなしゃああああい!」

ガタキリバ「なんで企画の時点で気付かなかったかな…予算とかああああ!!」CG代で恐らく1000万越えている可能性あり
シヤウタ「なんで中間とそうじゃない奴の出し方間違えるかなああああ!!」タジャドルの時期に出ていれば歌が出せた人

ラトラーター「…」CG代に優しいコンボ

サゴーズ「…」震災前でギリギリセーフ

プトティラ「ぐしゅ…omO」CGはともかく歌出た

タトバ「…ホント、」そもそも基本フォーム

タジャドル「ごめんなさい…」映画

051：ドタバタ夏祭り・値段編

タトバ「今日は…夏祭りだー！」

プトティラ「だー！」

ブラカワニ「いやっほー！」

シャウタ「いや、手伝えよ屋台」

ラトラーター「そうだそうだ！」

プトティラ「ぷええ…○○」

サゴーズ「でも、その屋台って本来なら龍騎サバイブさんが開いてる屋台なんだよね。……何故かクレープ屋の」

ガタキリバ「ところがどっこい。急に田舎に帰らなくちゃいけなくなつて、俺らに押し付けてきたんだ」

ラトラーター「まあ、収入は全部くれるみたいだし…最低でも場所代・光熱費の1万2000円さえ稼げれば」

タジャドル「具材も準備してくれているから、気が楽だよな」

プトティラ「クレープって何？」

タトバ「うーん、薄い生地にクリームやイチゴなんかを入れて、巻いて、食べるの」

プトティラ「おいしい！？」

ラトラーター「うん、美味しい」

シャウタ「だがな…流石、あの龍騎サバイブさんだ」

ガタキリバ「ああ…」

シャウタ「……紙皿にスプーンってどういうことだ！？なあ、ガタキリバ！」

ガタキリバ「俺に聞くなよ！」

シャウタ「クレープってあれだろ、巻いて手で持って食べる奴だろ、……これ明らかに本格的なクレープの方作る気だったんじゃないのかああー！！？」

ガタキリバ「だから俺に言うなって！？」

ラトラーター「しょうがないからそれで作ろうか、シャウタ」

シャウタしかまともに料理できません（タトバは見た目と味が無個性）

タトバ「ま、いいや…」

サゴーズ「一時間経ったら交代だからね」

ブラカワニ「パパンとタジャドルは二時間後」

タジャドル「何この拷問」

プトティラ「プトはシャウタのクレープ食べてから行く！」

ブラカワニ「じゃ、パパン、近くで待ってるからな」

シャウタ「俺だけ何処も行けないって、何だよこれ…何の拷問だよ…別にいいけど……」 チョコバナナクレープ試作中

ガタラト「すんません」

V3「お？ここ、確か龍騎の家がやるんじゃないのか？」

ガタラト「「げっ」」

V3「『げっ』とは何だ、失礼な。……そうだお前ら、宿題はちゃ

んとやってるんだろうな？」

ガタキリバ「勿論！」

ラトラーター「もう終わりました！」

V3「本当か…？まあそれはさておき、ちょっと食ってもいいか？」

シャウタ「あ、どうぞ…今、イチゴとチョコ出来てますんで」キ

ヤラメルクレープ試作中

プトティラ「むきゅー」チョコバナナ試食

V3「……これ、いくらで売るんだ？」イチゴクレープ試食

シャウタ「えーと…150円が打倒、じゃないかな…？」

ガタキリバ「え、200円だろ」

ラトラーター「相場はそのくらいだよな？」

V3「300円」

ガタラトシャウ「…えっ…」

V3「…どう考えても300円だろオオオ150円ってシャウタお前馬鹿にしてるのかアアアア！！？」

シャウタ「何がですかー！？」

ライダーマン「V3先生、何してるんですか…」

V3「ライダーマン先生！このクレープ300円だよな！？」

ライダーマン「食べてもない私に言われても！」

プトティラ「ちゃらめる…からめる…ちゃりやめりゅ……」

ライダーマン「…キヤラメル？」

プトティラ「ぷ！」頷く

ガタキリバ「キヤラメルもありますよ、って言いたいんです…プトティラ」

ライダーマン「ああ、そうか…じゃあそっちを」

V3「俺チョコバナナ」

シャウタ「何気に二枚目行きますV3先生!？」

ライダーマン「……」

シャウタ「150円ですよね…?」

ガタキリバ「200円?」

V3「300円!」

ラトラーター「間を取って、250円」

プティラ「ぷにゅ?」

ライダーマン「…V3先生、採用」

V3「イヤッホー!」

ガタシャウ「えええ!?!」

ラトラーター「決め手は?」

ライダーマン「いや、美味いから」

V3「今まで食べたクレープの中で美味い」

シャウタ「ただのクレープでしょ…」

V3「何で!?!」

シャウタ「何でって言われても!」

プティラ「なんで!?!」

ライダーマン「何故!」

シャウタ「ちょ」

V3「こんなに美味しいのに150円とか罪悪感バリバリだろうがアア!」

ライダーマン「よし、300円で看板立てよう」

プティラ「マジックあるよ!」

シャウタ「ちょ、…ラトラーターもガタキリバも止めてくれ!」

ガタキリバ「……………これは流石に、無理」

ラトラーター「そもそも、V3先生とライダーマン先生のタッグに勝てるはずがない」

シャウタ「おおおい!？」

結局一律300円にされました

シャウタ「いや、高いだろ…」

ラトラーター「向かいのラーメン屋だって、550円だよ?安い方だつて」

V3「うん、美味しい!」 キャラメルクレープも頼んだ

ガタキリバ「先生、甘党っすか」

ライダーマン「昔からな…」

ブラカワニ「プトティラ、そろそろ他の屋台を見て回るか」

プトティラ「うん!」

ブラカワニ「ところで、クレープどうだった?」

プトティラ「しゅごくおいしかった!」

ドラゴン「シャウタさあああああん!」

シャウタ「きゃん!？」 ガタキリバガード

ガタキリバ「あー、そうか、こういう可能性もあるか…普通に」

ドラゴン「どうして…どうして水えブホッ!？」 殴られた

V3「営業妨害するな平常点引くぞ」 殴った

ラトラーター「すげえ職権乱用…」

ペガサス「ここって…確か、龍騎先輩とリュウガさんの家の…ですよね？」

タイタン「え、どうしてシャウタ達がやってるの？」

ガタキリバ「かくかくしかじか」

マイティ「これこれうまうま。……あー、大変なんだなあ」

アメイジング「とにかく、うちの弟が迷惑かけた詫びに…何か食べていくか」

グロージング「うにゅ！」

V3「おすすめは…あえて言うなら、イチゴだ！」

シャウタ「なんで先生が宣伝してるんですか!？」

ドラタイ「じゃ、イチゴください」

ペガマイ「チョコバナナで」

アメイジング「グロージングと分けるから、キャラメル1つ」

クウガ兄弟「……」

シャウタ「150円だよな…？」

V3「まだ言うか!300円だ!」

ラトラーター「ところで先生いつまでいるんですか？」

ドラゴン「…うつ、うえつぐ…!」

シャウタ「なんで泣くの!？」

ドラゴン「だって…シャウタさんの手料理、ぐずつ……」

タイタン「この変態はともかく、…なんでシャウタ自分を過小評価すんの？」

マイティ「うん…150円っていうほうが納得いかない」

ペガサス「はい」

アメイジング「……300円で」

グロージング「おいしー!」

ラトV「ありがとうございまーす」
ガタキリバ「ラトラーターアアー!?」
シャウタ「V3先生も何気に根付いてるし!?…誰か、そろそろス
ーパー1先生をー!!」

ファム「あ、ラトラーター発見」

キバーラ「ガタキリバさん発見」

ガタラト「ぎゃあああああ!」

シャウタ「来ちゃった…」

ファム「え?ここ、龍騎の家がやってるんじゃないの??」

キバーラ「はい。そう聞いてましたが」

ガタキリバ「かくかくしかじか」

ファム「これこれうまうま…成程ねえ」

キバーラ「でも…」

ファム「？」

キバーラ「クリームを受けの体に塗って、攻めがそれを舐めるプレ
イっていいと思いませんか!？」

ファム「逆もいいわよね!」

ガタキリバ「…お前らはこんな時でも妄想するかー!」

ラトラーター「女として、ペガサス見習ってこいよ!かなり本気で
!」

シャウタ「逆にペガサスが染められちゃうからやめて!？」

V3「妄想もいいが、クレープ食べてみたらどうだ?美味いぞ」

ファム「V3先生、そういえばこの間ケーキフェアやってるときに
見かけたなあ」

キバーラ「先生が言うなら間違いないですね」

ガタキリバ（ホント甘いもの好きなんだな、V3先生…）

カブト「む、クレープか」

アギト「本当だ。すいません、チョコバナナください」

シャウタ「あ、はい…」

ラトラーター「300円でーす」

カブト「300円だと？それはクレープとしては破格じゃないのか」
シャウタ「ですね？」

V3「何だとオオオオ！そんなに言うなら、食べてみる…！」

シャウタ「なんで先生が怒るの！？」

カブト「いいだろう…では、キャラメルだ」

アギト「ん、美味しい シャウタ、クレープ屋さんになったら？」

シャウタ「ははは…」

カブト「…」

ラトラーター「で、お前は？」

カブト「…何故だ、…何故こんなクレープが作れる…！？orz」
V3「いえーい！」

ラトラーター「それじゃ、素直に300円」

ガタキリバ「何だよ、この【美味しいと認めたら300円】ルール！？」

タトバ「…なんか繁盛してない、クレープ屋…？」

サゴーズ「むしろ、早めに客を呼んで品切れにさせて、シャウタを夏祭りに行かせてあげようか…」

タトバ「だね。…えー、美味しいクレープいかがですか？」

サゴーズ「決して損はさせません！1品300円でーす…！」

ガタラトシャウ「」「」なんか客寄せしやがったー!!?」「」

052：ドタバタ夏祭り・教師編

タトバ「ただいま」

サゴーズ「どのくらい売れた？」

ガタキリバ「はい、イチゴクレープ3つお待ちどうさまです！……
あ？何だつて！？」

ラトラーター「キャラメルクレープ2つですね～…何か言ったか二人とも！？」

シャウタ「……………」 文句すら言えない

タトサゴ「うん、ごめんなさい」 ちゃっかり宣伝してきた

V3「ごめんなさい」 最大の宣伝犯

スーパード「V3先生に乘せられて買ってみたが…結構美味しいな」
響鬼「クリームはそんなに甘くしてないんだね」

シャウタ「……………」

ライダーマン「『ソースが甘いから、砂糖はそんなに要らないんじゃないかって思ってケチりました』…だそうだ」

タトバ「凄い、翻訳してる！？」

ブラカワニ「うわー、大盛況だな」

タジャドル「…これは…売り切ったと同時にシャウタが倒れるんじゃないか……？」

タトサゴ「おかえりー」

プトティラ「ぶきゅ！ライダーマンしえんしえ、また来たの？」

V3「おー、50分ぶりだなプト介」

ライダーマン「…プトティラですって」

サゴーズ「あれっ、……そういえばプトティラ、先生達に吼えてなかったけど…知ってるの？」

プトティラ「うん。ブラカワ二帰ってくる前は、プト、たまに学校で遊んで待ってたよ！」

タトバ「マジでッ！？え、…いつから！！？」

プトティラ「うー、家に来て……1カ月後？」

タジャドル「…ということは…シャウタがまだ中学3年の時か」

ラトラーター「え？俺見かけなかったよ??」

サゴーズ「……俺も…ガタキリバは？」

ガタキリバ「連絡は受けたなあ…でも俺も、何でシャウタのいる学校じゃなくて俺らの高校来たんだろうとは…」

タジャラトサゴ「…何でガタキリバには連絡行ってるんだ！！？」

「」

当時のガタキリバの担任が、教師陣の中で一番懐かれているライダーマンだったからです

ガタキリバ「プトティラの話だと、……俺らが持って行ったシャウタ作・弁当の匂いが一番強かった場所に行ったら…高校に迷い込んで、事務員のZX先生に見つかったそうだ」

プトティラ「ゼクロシユしえんしえ、絵本読んだりしてくれたよ！」
ラトラーター「ZX先生、事務員の仕事ってそんな暇なんっすか？」
ZX「暇じゃない…暇じゃないんだ、暇じゃないんだが…！orz」
タトバ（何気に、先生達の溜まり場になってるなあ…うちの中学
のZO先生やJ先生、ロボライダー先生までいるし…）

シャウタ「プトティラ…？お留守番してないと駄目って言っただろ
……??」キャラメルクレープ作りながら

プトティラ「ぷきゅ…OO」

V3「まあまあそう言うな、一人でお留守番するのは寂しかったん
だろうさ」

プトティラ「ぷい！」

サゴーズ「鍵は？」

ZX「ライダーマン先生が謎の技術で合鍵を作って、それで鍵を閉
めるように二回目から言ったそうだ…」

ガタキリバ「でも、ホントどんな感じだったんですか？」

全「…「あ…」」

ライダーマン「それは…」

（回想）

ZX「すいません先生方…俺だけでは、手に負えなくて」

プトティラ「シャウター！シャウタどこー！！シャウタアアアア
ア…！！」

スーパー1「うーむ、シャウタって…うちの学校にいたか？」

サイガ「Meは分からないでゴザルます」

アメイジング「あ、うちのクラスのタジャドルの弟じゃないですか？ あいつ結構『うちの弟のシャウタが』って、手作り弁当でノンケ話しているので」

プトティラ「タジャドル？なにそれまずいの？？」

スカイライダー「…タジャドルがこんな扱いだと、その線は薄いんじゃないですか…例えば、シャウーターと勘違いしているとか」

V3「とりあえず、名前教えてくれるか？校内放送で呼びかければ、分かるのがあるかもしれないし」

プティラ「ぶとちら！」

V3 「ぶとちらな」

プトティラ「あう、違う！…ぷちよちら！！」

サイガ「Oh、ぷちよちらですネ？」

プティラ「違うの、ぶちよてら…ぶちよちりゃ…ぶとちりゃ…！」

ライダーマン「……プロティラ？」

プ
テ
ィ
ラ「
ぷ
う
う
ー
」
大
泣
き
し
な
が
ら
ハ
グ

ライダーマン「うおわっ!？」

「アメイジング、正解みたいです」

プトティラ「うえええええええええええええええ」

ライダーマン「ゴボゴボ……」

アメijing「って、ぎゃー！ライダーマン先生が泡を噴いてるーッ！？」

V3「よし、プト介だな」

スーパ―1「いや、あんた全然話聞いてないな!？」

威吹鬼「　　どうでもいいからスカイライダー先生とZX先生以外、とつと次の授業に行ってください！」　地理担当
響鬼「休み時間、あと2分しかないですよ？」　保健体育担当
授業ある先生達「「すんません！」」「」

プトティラ「う　う」　お絵描き中

ZX「何で俺：こんなことしてるんだ：？」

スカイライダー「ははは：プトティラ、この青いのは？」

プトティラ「シャウタ！」

ZX「こっちの緑のは？」

プトティラ「がちゃきりば！」

スカイライダー「……がちゃ：ガタキリバ？」

ZX「…今、LHR中ですよ。……休み時間に引き取ってもらおう、そうしよう」

スカイライダー「そういえばプトティラ、頭のやつはもしかして：プテラか？」

プトティラ「そだよ！」

スカイライダー「ということは、空を飛べるのか。だったら部屋で遊んでいないで、一緒に外で遊ぼう！」

プトティラ「ぶえ？」

（校庭）

スカイライダー「それじゃあ、行くぞ！」　飛行開始

プトティラ「O　O」

スカイライダー「さあ、プトティラも一緒に：あれ？その斧どこか

ら」

プトティラ「ぶきゅうつうつうつん!!!!」

『プットツティラーノヒツサツ』

スカイライダー「消された」

〽回想終了〽

タジャガタラトサゴ「…何してんだああああ!!!?!」
プトティラ「だってえええええ」

スーパード「後で話を聞いてみたら…プトティラの奴、『スカイライダーが空を飛べるから』って」

ブラカワニ「すいません、プトティラ飛べないんです…タジャドルを嫌う原因の一つに、『空を飛べるから』があるほど……」

X「つまり…飛べるライダーが羨ましい、と」

プトティラ「om o」

V3「それだったら尚更、スカイライダーと仲良くしたらどうだ?」
プトティラ「うー…」

V3「スカイライダーだって悪い奴じゃないんだし、飛び方を教えてもらうことだってできるんだぞ?いつまで意地を張っていても、訓練しなければ飛べるようにはならないだろ」

プトティラ「でも、プト、撃っちゃったもん……しゅいからいだーにとつては、悪い子だもん…」

スカイライダー「スイカじゃなくて、スカイ…ね…orz」

ライダーマン「まずは『ごめんなさい』と謝ってみたらどうだ？家の人は、そんな簡単なことも教えてくれなかったか？」

タトタジャガタラトサゴ「『教えてますよ！？』」

アメイジング「シャウタがだろ？」

タトタジャガタラトサゴ「『はいorz』」

プトティラ「教えてくれたもん！」

ライダーマン「じゃあ、スイk…スカイライダーに謝ってきなさい」
スカイ「あの、だから…スカイorz」

プトティラ「…しゅかいらいだーせんしえ…ごめんなしやい」

スカイライダー「うん、もう大丈夫。…スイカと間違えなければ大丈夫…orz」

プトティラ「いい子にするから、暇な時、飛び方教えてくれる？」

スカイライダー「それは別に構わないぞ。そう、…スイカと間違えなければ…」

スーパー「それ以前に、ストレインドウム撃たないことを約束しとけ」

シャウタ「………そんなのどうでもいいから手伝って…orz」

タトバ「ぐわっ、いつの間にか長蛇の列！」

サゴーゾ「タトバ、クレープ巻くのだけでもやってあげて！」

タジャドル「ああもう、ソースから何まで全部手作りでやろうとするから！」

ガタキリバ「いや、それ龍騎サバイブさんのせいだから！？」

ラトラーター「っていつかなんで他の露店に客がないわけ！？何があつたの！」

プトティラ「プトは何すればいい！？」

ラトラーター「…招き猫ごっこしとけば？」

プトティラ「分かったにゃん！」

タトタジャガタサゴ「…っつかお前が客引き寄せてんじゃないのかラトラーターアアアー!?」「」

ブラカワニ「猫だけに？」

この後、一時間後に完売しました

053：ドタバタ夏祭り・徘徊編

タトバ「や、やっと、売り切った…」

ガタキリバ「何これ辛い」

ラトラーター「もう、暫くはクレープ見たくないかも…」

サゴーズ「同感…」

プトティラ「シャウタアア」

シャウタ「うん…生きてる、うん、うん…」 放心状態

ブラカワニ「……おー！」

タジャドル「どうした、疲労なんて回復しちまえるクソ親父…」

ブラカワニ「いや、パパンも疲れてるよ？……お客さんは、V3先生がために数えてくれていたので…297人！」

ラトラーター「うわ中途半端！」

ブラカワニ「でも、V3先生はクレープ3つ分の代金を出してくれたので、一人で3人分の働きをしてくれました……よって！300人分の売り上げは…9万円です…！」

タトバ「おおーッ!？」

サゴーズ「タジャドル達が稼いでくる1ヶ月のバイト代よりいいじゃん！（俺もだけど）」

タジャガタラト「……おい……」

ブラカワニ「そこから、場所代・水光熱費の1万2000円を引いて…売り上げ金額は、7万8000円となります!」

タトサゴブト「…わーい!」

シャウタ「でも、これ龍騎サバイブさんの所のお金なんだし…4万4000円はあっちに渡して」

ガタキリバ「いや…龍騎一家の総意で、全額やるってしつこく言われてるから…普通に返されるぞ」

ラトラーター「その辺、義理堅い一家だから」

サゴーズ「片付けは俺とタトバと親父でやっておくから、皆は屋台見に行ったら?」

ラトラーター「そうだな…俺達、ここから動けなかったもん…」

シャウタ「気力ないです」

プトティラ「じゃ、プトがおぶる!」

ガタキリバ「それがいいな」

タジャドル「よし、シャウタのウナギムチで固定しておくか」

シャウタ「おい」

結局固定されました

プトティラ「○○」

シャウタ「ちよつとプトティラ、危ない危ない!」

ラトラーター「シャウタと文字通り一緒に楽しいんじゃない?」

ガタキリバ「あ、見ろよ!射的だ!」

タジャドル「10発300円…5発で150円か。丁度5人だし、300円出して一人2発ずつでやるか?」

ゾルダ「おいおい、2発で取れると思うの?」 本職・弁護士

タジャドル「…」

パン！

ゾルダ「……1発で大きな熊の人形取ったし…」

タジャドル「…っしやあ！」

ラトラーター「そういえばあいつ、弓道部だったっけ？」

ガタキリバ「今はアーチェリー部のサークルにいるけどな。……もう全発タジャドルがやっちまえよ、そのほうが総取りできる」

シャウタ「…もっふー！」

ガタラト「熊の人形でシャウタ生き返った！」

タジャドル「プトティラに持たせとくか？それとも」

シャウタ「自分で持つ！」 タコ足8本でプトティラ固定

プトティラ「きゅぷぷ！」 タコがくすぐったい

タジャドル「タコ出してまで頑張るのかよ！……おい、他に何か欲しい奴いるか？」

ラトラーター「どうする？3DSにしとく??」

ガタキリバ「Wiiも捨てがたいけど…シャウタが……」

シャウタ「ゲームは力加減できないのがいるから駄目」

ガタラト「そんなわけで、i-podお願いしまーす」

タジャドル「曲は……ああ、タマシいのところで入れればいいか…

あいつの家パソコンあるし」 一発命中

ゾルダ「ちよっ、高額景品狙わないでくれる!？」

ゾルダ「orz」

ラトラーター「やつほーい！俺、白」

ガタキリバ「黒ー！」

シャウタ「もふもふ…」

タジャドル「サゴーズ用に時代劇のDVD、タトバ用にこけし、俺個人用に望遠鏡…大量だな」

ガタキリバ「あと、お菓子3種類な」

プトティラ「シャウタ、プトも人形欲しい！」

シャウタ「え、射的屋にいたときに言えば、タジャドルに取って貰ったのに。おつきいウサギさんいたる？」

プトティラ「タジャドルからの施しは受けにやい」「」

シャウタ「…はいはい、くまさん持つとく？」

プトティラ「ぷう！」

シャウタ「あれは…」

タジャドル「輪投げと型抜きを兼用してるんだな」

ガタキリバ「俺、輪投げするわー」

ラトラーター「俺も。集中力続かないし」

プトティラ「プトもわにやげやるー」

タジャドル「俺は型抜きだな」

シャウタ「俺も輪投げするから、プトティラ降ろして」

プトティラ「う」

タジャドル「待て、俺孤立してるだろ！」

プトティラ「きゅ！ぷううい！！」 ノーコン

ガタキリバ「おらー！」 なかなか入れられない

ラトラーター「セイヤー！」 ノーコン

シャウタ「…」 ノーコンすぎてタジャドルに当てる

タジャドル「 負けない…」 輪が当たっても型抜き集中

ラトラーター「おつ、くじ屋だつて！一回200円！…」
シャウタ「……」

タジャドル「今日ぐらいはやってみたらどうだ。楽しいぞ」
シャウタ「…うん。プトティラもやる？」

プトティラ「ぷ！」

ガタキリバ「…よし、プトティラ用に50円割り勘な」

ラトラーター「5円玉10枚でいい？」

タジャドル「地味に酷いなお前」

タジャドル「……」 メイドキャップ

シャウタ「…」 鼻眼鏡

ガタキリバ「………」 付け髭

プトティラ「きゅぷう」 猫耳

ラトラーター「なんかごめん」 3等の液晶テレビ

タジャドル「…まあ…地デジ対応だしよしとしておくか………そう言
い聞かせないと、…悔しすぎて血涙出る」

ガタキリバ「お前、浪人するんじゃない？」

シャウタ「運使い果たしたな…絶対」

プトティラ「ラトラーター、ニートになったらプトと遊んでくれる
？O O」

ラトラーター「なんでそんな優しさの一欠片もないの？」

タジャガタラトシャウ「「ただいまー」」
プトティラ「まー！」

タトバ「おかえ…うわっ！？なんか大荷物になってない！？」

サゴーズ「そのテレビって、くじ屋の景品でしょ！？誰が当てたの
！！？」

タジャガタシャウ「「アホラーター」」

タトバ「…そう、か……残念だったね、ラトラーター」

サゴーズ「一生分の運、ここで使っちゃったんだな…」

ラトラーター「お前らヒデエ」

タトバ「ちなみに俺達は」 ひよっとこのお面

サゴーズ「これでした」 波平カツラ

ブラカワニ「パパンこれー」 ピカ ユウキャップ

シャウタ「……全員の運、ラトラーターに吸われたんじゃないか？」

ラトラーター「いや、そしたらガタキリバとシャウタからくじ運の
悪さ込められてる可能性だってあるし」

パアアン…

タトバ「あつ、花火！」

ブラカワニ「もうそろそろ、夏祭りも終わりなんだなあ」

プトティラ「きれい！><」

サゴーズ「そうだねえ」

シャウタ「……」

ガタキリバ「どうした？まだ疲れてるのか」

タジャドル「まあ、任せつきりにしてすまないとは思ってるが…」
シャウタ「そうじゃなくて…なんか、さ」
タジャガタ「？」

シャウタ「…クレープ作って、買ってくれる皆が『おいしい』って笑顔で言ってくれて…なんか、凄く、嬉しかったって言うか」
タジャドル「シャウタ」
シャウタ「…凄く大変だったけど、でも、…やってよかったなあっていうのはある。…売り上げとかよりも、そっちのほうが…よほど得るものがあつたって感じで」
タジャドル「…そうか」

ガタキリバ「ラトラーターあのファミコンとブラコン、そろそろ殴りたい俺」
ラトラーター「我慢だマイ兄貴…あと、シャウタ殴ったらプトティラに殺されるぞ」

パン！

ドドドドドドドドド！

ブラカワニ「たーまやー！」
プトティラ「ラトラーター？」
ラトラーター「確かに猫科だけど！たま違う！」
ガタキリバ「…あーほやー」
タトバ「らーとやー」
サゴーズ「らーたやー」
ラトラーター「おい！」

ドバババババババン！！

タジャドル「…たーこやー」

シャウタ「たーかやー」

タトバ「さーいやー」

ガタキリバ「とーらやー」

プトティラ「かーめやー」

ブラカワニ「わーにやー」

サゴーズ「ぞーうやー」

ラトラーター「しゃーちやー」

プトティラ「プト、今日のこと絵に描く！」

シャウタ「そうか」

プトティラ「それでね、後一枚で宿題全部終わる！」

サゴーズ「へえ！」

タトバ「あの苦痛のラジオ体操も…終わったしね…！」

ガタキリバ「あと一枚だと、選ぶのが難しいよな」

ラトラーター「タジャドル血祭りに上げる？」

プトティラ「いいね！」

タジャドル「おい」

054：小ネタその12

・ガタキリバさんが感動したようです

ガタキリバ「うわああああああダン×まゐiiiiiiiiiiii
ii!!」

タジャドル「そこかよ!!」

ガタキリバ「ベルゼ×メルヴアの分まで幸せになるように祈ってる
!だから死ぬなダアアアアン!!」

シャウタ「もうお前の感動の基準点分からん」

・「この昆虫野郎」byギャランドウ伊達

ガタキリバ「それ言っちゃいけない!一番言っちゃいけない!!」
ラトラーター「それはカザリに猫野郎!というようなものだ!!」
タジャドル「アंकに鳥野郎というような…」

サゴーズ「ガメルに……あれ、詰んだ」

シャウタ「メズールに……なんて言えはいんだ?」

プトティラ「マツキーに……恐竜やろって言うようなもの?でも、
えーじも恐竜……ぷゆ??」

タトバ「じゃあ鴻上さんは？」

ブラカワニ「ケーキ野郎」

タジャドル「誕生野郎」

ガタキリバ「お騒がせ野郎」

ラトラーター「濃い顔野郎」

サゴーズ「鳴滝野郎」

シャウタ「…その前に、何故その人をグリードと同じに並べる」

・箱の中身は…

タトバ「800年前の王様の使っていたタトバキター！」

シャウタ「ただし約6分後に」

タトバ「ごめん言わないでシャウタ！」

シャウタ「ごめん歌の恨み」

サゴーズ「あー……………許可」

シャウタ「約6分後に砕け散るレベルの貧弱さ」

タトバ「ウワアアアアア」

ブラカワニ「パパン出なかったな…」

ガタキリバ「砕かれに行きたいのか？」

ブラカワニ「パパン負けない」

・地味にタトバキックが決まりましたが

タジャドル「当たったな」

ガタキリバ「ああ、当たった」

ラトラーター「おめでとう」

サゴゾ「やっと当たったじゃん！」

プトティラ「ぷ！」

ブラカワニ「おめつとさ〜ん」

シャウタ「ああ………ただし当てたウヴァはドクターのせいで無傷」

タトバ「すいません俺虐めるんじゃなくてタジャドル虐めて下さいorz」

ガタラトサゴ「シャウプト」「それは後でやる」「」

タジャドル「おいしいっ！」

・安定のウヴァさん

ラトラーター「最終回でも安定しすぎてる」

サゴゾ「うん、小物」

ガタキリバ「大物って、どついつのを言っただろう」

プトティラ「うー！」

ガタラトサゴ「うん、お前は大物になれる気がする」「」

・バラード版【Any singing Goes!】

ガタラトサゴ「……」 涙腺崩壊しすぎた
シャウタ「エンディングまで泣くんじゃない」
タトバ「あ、何か聞いたことある」

タジャドル「ちなみに、これは歌手の人が最終回を想定して作った……という逸話があるらしいが、ギャレンだしあまり信憑性が……」
ブラカワニ「でも、本当に予想していたなら凄いやね」
シャウタ「あの脚本家だからな……最悪、TVSP版の龍騎における、【戦いを止める】エンドや劇場版のことも想定しておかないと」
プトティラ「止めたらどうなるの？」

シャウタ「……鬱になります」
プトティラ「うちゅ？」
タジャドル「あと……あの最後のシーン、ゲリラロケだったらしいな……こっちはライア情報だから信用できる」
シャウタ「色々と生々しいから、別のこと話そうか」

・キヨちゃんが……

ラトラーター「アレってメスじゃなかったの？」
ガタキリバ「人形だし……」
サゴゾ「しかし、生存フラグ（＝ギャグの源）とも言えるキヨちゃんを手放したばかりに……」
タトバ「ちょ、それやめて台無し」

シャウタ「ところでプティラ：NOVEL大戦を知らない方のために、改めて自己紹介を」

プトティラ「う! : プトはねーぶとちりや : ぷちゅち、ぷーとーて
ーら!! ぷええええええッ」

シャウタ「はいお名前はプティラね」

プトティラ「うん! …… でね、うーと、シャウタ好き! パパンもだし、タトバやサゴーズ… ガタキリバにラトラーターも好き!!

タジャドル「性別は？」
自分の名前が言われないことなんて慣れたのでスルー

プトティラ「ぷう」

「シャウタ……プティラは男の子かな？ 女の子かな？」

「プティラ、
“ふう”
だよ！」

タジャドル「……歳は！？」

「プティラ
“ぶきゅ”」

シャウタ「血液型……」

プトティラ「ガタキリバ！」

タジャシャウ「それガタ違い！」

「プティラジャ、
“ふい”」

タジャドル「星座！」

「プロテイル」

シャウタ「…ちなみにスリーサイズ」

「プテラ・トリケラ・ティラノ」！

タジャドル「だあああああ性別は分かっても残りがあああ

「あああああ！」

「でもなんか許せる自分が嫌だ！」

ライター「そろそろ自粛しとけよ、親子」

ガタキリバ「いつから親子扱いに!？」

タトバ「あれじゃない？青＋赤＝紫」

サゴーズ「うんそれは分かってる、分かってるけどラトラーターが言ったってというのがムカつく！」

・おめでとう！ウヴァは から に進化した

サゴーズ「最初から最後までネタ過ぎる」

ガタキリバ「つか、むしろ、…泣いていいか？あんなののコンボが俺って」

ラトラーター「大丈夫、俺もちょっと自分のグリードに言いたかった」

プトティラ「から になるとどうなるの？」

シャウタ「もれなく、世界の終末を迎えます」

タジャドル「…まあ…なんだろう、……あんなの…アレに比べたら……あのサゴーズ伝説に比べたらちゃっちゃいな、って」

サゴーズ「誤解受けるような言い方やめてね、俺じゃないから」

・ヒビが…

ラトラーター「見えていない、だと」

ブラカワニ「グリード化の弊害がここに…」

ガタキリバ「うわあああああああ」

・「タカ！クジャク！コンドル！」（CV・アंक）

ガタキリバ「ちなみにあのCVはキャラクターボイスではなく、コンボボイスの略です」

ラトラーター「よしどうでもいい！」

タトバ「…噴いたらだめだ、噴いたら…！」

タジャドル「もれなく焼きタトバだからな？」

タトバ「まだ笑ってません！」

シャウタ「いやー………超個人的に後でタジャドルをウナギムチで縛り付け、もう一方のムチでぶっ叩きたい気分」

タジャドル「おいそれやめろ」

プトティラ「いいよ！」

タジャドル「俺に何をする気だ！俺に何の属性を付属させる気だ！？」

・7枚ギガスキャン！（ただし中身は…）

プトティラ「ぷきゅうんT^T」 イヤイヤ貸した

シャウタ「頑張ったよ。いい子いい子」

タジャドル「俺はどっちを殴ったらしい」

ラトラーター「どっちを殴っても【死】しかないぞ、お父さん」

タジャドル「だからなんで父親扱いに！？」

プトティラ「シャウターこれ洗って…鳥くしゃい」 タジャドルに

貸した紫メダル7枚

タジャドル「そんなに俺が嫌か！」

シャウタ「はいはい、食器と一緒に洗ってあげるから」

ラトラーター「だってさ、娘って基本的に母親には懐くけど…父親にはアレだぞ？ベターなもので、大きくなった年頃の娘に『お父さんの服と一緒に洗濯しないで』って言われるくらい」

シャウタ「お前は俺を母親扱いするかアホラーター」

・アंक、死す

タトバ「アंक…」

ガタキリバ「くそう、涙で前が…」

サゴーズ「でも、最後には映司もアंकも…望んでいた者を手に入られて良かったよね」

ラトラーター「うん。結果はどうあれ、これもハッピーエンドなんだよな」

プトティラ「だって鳥くしゃいんだもん！」

タジャドル「じゃあ俺のタジャスピナーだって恐竜臭いことになるぞ！」

プトティラ「プトくしゃくないもん！タジャドルのチキンカレー臭！！><」

タジャドル「俺はまだ19だああ！加齢臭と言われる筋合いはどこにもねえええええ！！」

シャウタ「煩いと二人とも仲良くご飯抜きにするよ」

タジャプト「……………」

シャウタ「ハイ、仲直り」

タジャドル「…悪かったな…！」
プトティラ「ごめんね…！ - m -」

タトバ「最強コンボって結局、シャウタだっけ？」
ガタキリバ「いや、一応タイトル上では俺ってことに…」
ラトラーター「バイオリダーだしシャウタでよくね？」
サゴーズ「うん、少なくともうちではシャウタだ」
ブラカワニ「ご飯的な意味でもね」

・で、

タトバ「…ムービー大戦どうするの…？」
タジャドル「…く、砕けたタカメダルを復活させるとか」
ガタキリバ「まさかとは思うが、…吸収された描写のない爬虫類とか言っちなよ…？」

ラトラーター「大丈夫、タマシーも親父も映画でしか出れないから」
ブラカワニ「パパンショックorz」
サゴーズ「個人的には、灰色と青色の10枚目気になる…！」
シャウタ「超個人的に言わせて貰うと、ガメルは頭がサイというよりはぼゾウっぽく見えたから灰色はゾウ…青は色々な意味でプッシュの凄まじかったウナギじゃ？」

ラトラーター「もしタカ復活したとして、…タトバじゃなくてタカウゾでMOVIE大戦…か」
ガタキリバ「いや、でも、パラルルって可能性もあるから…」
ブラカワニ「約3ヶ月と3日後を待とう！」

・で、（映画ネタバレ注意）

タトガタラトサゴ「タジャドルとシャウタって結局何してたの？」「」

タジャドル「飛び出るオーズ担当…？」

シャウタ「いや、…3D見てないから飛び出たのかどうかは知らないけど…」

ブラカワニ「ディレクターズカット版を待とう（王様のような人物に捕らえられているガラのバレ写真の件も含めて）」

プトティラ「でもしゅごかったね！ガタキリバー！」

ラトラーター「うん、ガタキリバ卑怯」

ガタキリバ「おい！…個人的には、プトティラ若干えげつないないって思ったり…」

ブラカワニ「パパンの勇士はどうだった！？」

タトバ「あーうん、いいんじゃない？…そんなことより、タトバキツクが決まった…！」

サゴーズ「久々に重力操作が…まともな表現……だったのかは知らないけど、とにかく出せた…！」

タジャドル（あれ…俺達どこをどう言えばあの話題に入れるんだろう）

シャウタ（…1000回記念のツケか？）

タジャシャウ「…」

タジャドル「それよりも、次からは新番組【仮面ライダーフォーゼ】が始まるぞ！」

シャウタ「青春スイッチ、オン！」
タトガタラトサゴブラ「「強引に誤魔化した！」」」

055…くんにはートライド

サゴーズ「ちよつと！大変大変！！」

タトバ「どうしたの？」

サゴーズ「家の庭に、変な自動販売機があるんだよ！」

タトバ「自動販売機い？」

タジャドル「来たか」

シャウタ「誰が置いていったんだ…親父か？」

プトティラ「パパン、今日は100回目のめんせちゆに行ったよ！」

サゴーズ「…そして、100回連続で面接に落ちるのか…」

タトバ「親父はあの子いい加減な性格で、損してるからねえ…アレを雇ってくれるところって、相当のいい人じゃないとありえないよ」

ガタキリバ「おい、どうした？」

ラトラーター「おろ？その自動販売機は？？」

シャウタ「朝からあつたみたいなんだ。第一発見者は、プトティラ」

プトティラ「プチトマト取りに行ったら、あつたの！」

ガタキリバ「あれ、これ前に見たことあるぞ…？」

ラトラーター「っていうか、自動販売機の横にある、缶みたいなのも」

タトバ「どうしよう…100円入れたらジュース出るかな？」

シャウタ「アホか」
タジャドル「まずは警察だろ…」
プトティラ「のどかわいたね」
サゴーズ「やめてプトティラ！欲しくなってきたやうから！！」
ガタキリバ「…あ、思い出した！」 自動販売機の指紋認証部分に触れる

ガシャンガシャンガシャン！

タトタジャサゴシャウ「…バイクになったあああ！？」「」
ライドベンドー「…」

ガタキリバ「やっぱりな。前に見た奴だよ、これ」

ラトラーター「あー、サゴーズがスイッチ押しちゃって爆発させちゃった研究所の…トライド元気かなあ……」

プトティラ「きゅん…omO」

タトバ「で、この缶は？」

シャウタ「見た感じ、自動販売機の中にあつたのと同じっぽかったけど…」

タジャドル「どうしたものか…」

サゴーズ「一応、仮面ライダーらしく高校二年で（授業の一環として）運転免許は取らされるけど…」

ガタキリバ「むしろ開けばいいんじゃないのか？」 トラカン起動

トラカン『トラー』

ラトラーター「あれ、こんなの前にどつかで…」

トラカン『トラー』 ライドベンドーに取り付けられる

オーズ兄弟「…えええ！？」「」

トライドベンダー『……グオオオオオン！』

タトタジャガタサゴシャウ『「トライドベンダアアアアアー！？」

」

ラトラーター「トライドおお！」 トライドに抱きつく

プトティラ「会いたかったよー！」 上に同じく

トライド『ウオオオオン！』 大泣き

シャウタ「あ、紙があつた」

タジャドル「なんて書いてあるんだ？」

シャウタ「えー…『拝啓オーズ一家の皆様 先日、私のミスでライ

ダータウンに放置したままのトライドベンダーを置いておくので、

大事にするように マスターハンド』」

サゴーズ「良かったじゃん！トライドトライドって、ラトラーター

ずっと魔されてたし」

ガタキリバ「泣きなくなるぐらい煩かったがな！」

プトティラ「トライドベンダーだから…ベンちゃん？」

ラトラーター「トライドだろ！」

タジャドル「名前付けようとしてるし！」

シャウタ「ラベンダー？」

サゴーズ「それハーブ」

タトバ「シャウタまで混じつたし…」

プトティラ「じゃあ、プトは『ベンちゃん』で呼ぶ！」

ラトラーター「俺は『トライド』な！」

タトバ「まあ、何でもいいや…エサっていらなんだっけ？」

タトバ「…あつれええええええ！？いつの間にか、あんな遠くに！」
サゴーズ「まさかとは思うけど、クロックアップ…？」
シャウタ「そういえば、直してくれた人が言ってたな…クロックアップ機能付けたって」
ガタキリバ「冷静に考えたらチートだよな」

ペガサス「面白かったですね、映画」

タイタン「ああ。良かったよな」

マイティ「まさか、あそこでああなるなんて！」

ドラゴン「はあ…シャウタさんと映画行きたいなあ…！」

ペガサス「…兄さんとシャウタさんがどこか行くとしたら、裁判所では？」

マイティ「それが、警察署」

タイタン「俺達シャウタの味方するからな」

ドラゴン「いや、なんか勝手に犯罪者予備軍にされてない？」

ラトラーター「あ、クウガ兄弟だ」

プトティラ「う？」

トライド「…」

ピピピピピ…

登録外、排除執行…

ラトプト「？」

トライド『グオオオオオン！』 咆哮衝撃波

ラトラーター「何か出したあああ！？」

プトティラ「にげてー！」

ペガサス「きゃあ！？」

マイティ「ドラゴンガード！」

ドラゴン「ほぐあっ！？」 衝撃波直撃

ガタキリバ「何してるんだ、お前ら！」

プトティラ「ごめんなさい……」

ラトラーター「まさか、本当に顔認識機能が付いてるなんて思わなかったんだ……」

シャウタ「大丈夫か？怪我は……」

ペガサス「ありがとうございます。私達は……大丈夫です」

タイタン「ああ、だが……」

マイティ「……弟が、身を挺して俺達を」

ドラゴン「……嘘つけえええ！？俺を盾にしただろ、俺をおお！」

ボロボロ

サゴーズ「皆が怪我すると危ないから、町内回って登録しようよ……」

ラトラーター「って言っても、どうすればいいのか」

トライド『グオン……』

プトティラ「ぷい……」

タジャドル「折角直してもらったとはいえ、何とかしないと、スクラップにするしかないぞ」

ラトラーター「そんなー！」

プトティラ「タジャ××のいじわる！鶏肉……！」

タジャドル「アホか！散歩に連れて行って誰かを怪我させるってなったら、洒落にならないんだぞ……！」

龍騎「おい、ガタキリバ。この間の漫画返してくれない？」

ピ。ピ。ピ。ピ。……

ドラゴン「顔認証できるなら、これで大丈夫」

ピピピピピ...

登録外、排除執行...

トライド『ガウツ』 ドラゴンの頭に噛み付く

ドラゴン「ぎゃあああああああ」

マイティ「お前はまだ登録されてないだろ、バカ！」

タイタン「今のうちに、俺達を登録してくれ！」

ペガサス「ドラゴン兄さんの尊い犠牲を、無駄にはしません！」

マイティ「ああ！」

ドラゴン「ちよつとおおおお！？」

その夜：

トライド『ZZZ』

ブラカワニ「成程なあ」

シャウタ「大変だったんだぞ...町内を回って顔の登録作業」

プトティラ「ぷ...できた!!」

タトバ「何が？」

プトティラ「宿題！最後の絵、ベンちゃんのこと描いたの!!」

サゴーズ「どんな内容？」

プトティラ「『新しい家族のベンちゃんができたよ』って内容！これで宿題終わり!!」

ブラカワニ「おー！凄いぞマイペット！！」

ガタキリバ「おめでと」

タトサゴ「おめでとう！」

ラトラーター「やったなあ」

シャウタ「よく頑張ったな、プトティラ」 頭撫で撫で

プトティラ「…きゆう」

タジャドル「おめで…」

プトティラ「・m・」 耳塞いでる

タジャドル「おおいッ！褒めようとしているのに何だその態度はあ

ああ！？」

プトティラ「じゃあひざまづ跪け！！」

タジャドル「ことわる」

056：兄弟×兄弟・母親編

本日は…

とある事情の為、オーズ一家の家にクウガ兄弟が泊まります。

クウガ・アルティメット「すいません、店があるものですから…」

タジャドル「いえ…大変ですね、改装工事」

クウガ・ライジングアルティメット「台所に、夕飯のカレーを置いておきましたから、皆さんで仲良く食べてください」

シャウタ「ありがとうございます」

タイタン「ごめんなー。父さんも母さんも、カレー屋の仕事忙しくて」

サゴーズ「大丈夫だって。仕事しない親父よりマシだよ」

ブラカワニ「パパン泣くよ？」

マイティ「アメイジング兄貴は、学校で急な仕事入って遅くなるって」

タトバ「へえ…そうなんですか」

プトティラ「何描いてるの？」

グロージング「ペガねえちゃー！」

「プティラ、プティラはねーパパン描いてるの！」

グローイング「ばばん？」

ライター「子供は和むなあ」

ガタキリバ
「ああ……」

ドラゴン「よっしゃあああああシャウタさんと寝れるうっうっう
うっうっうっう」

シャウタ「……」
ペガスガード

ペガサス「兄さん、いくら堂々と家には入れたからって、それは流石に駄目ですよ？」

「タジャドルって、お前、もう外で寝るか？」

「ボタンを押して消しちゃったんだから。いや別にいいんだけど」

「ガタキリバ、お前、もう、
“押しゾ”
“でいいよマジで”」

サゴーズ「ごめんなさい……！」

「でも、問題は部屋割りだよねえ」

ガタキリバ「流石に、ペガサスは女の子だから……男と一緒に寝かせ
るのは無しだろ」

「ライターじゃあプロティラと?」

サゴーズ「駄目だろ…プティラの屍は、親父じゃないと中和できない」

タジャドル「じゃあ、シャウタの部屋でいいんじゃないか？あいつの部屋、ぬいぐるみとか多いし」

ド
ラ
ゴ
ン
「
」

「シャウト」だったら……今日はタジャドルの部屋で寝るかな」

プ
テ
イ
ラ「らめえええええ
シャウタあああああ！
タジャドルの

臭いがうちゆるよおお!!」

タジャドル「おい!」

マイティ「あれ、俺達の憧れの先輩って家でこんな扱いだったの?」
タイタン（タジャドル先輩はこれが平常運行なんだ! マイティ）

ドラゴン「あの!俺がシャウタさんの部屋に」

ラトラーター「お前外で寝ろよ、お前の代わりにリビングにトライ
ド置くから」

ガタキリバ「むしろ、茶の間に隔離でいいんじゃないか?」

マイティ「茶の間あるんだ!」

タイタン「妙な印象持っている奴が多いけど、意外とこの家、広い
んだぞ!」

ペガサス「茶の間があるんですしたら、私、そこで大丈夫ですよ」

シャウタ「え、本当に?一応、ふかふかのベッドで寝たほうが体痛
めなくていいんじゃない?」

ペガサス「畳の上で寝るのは慣れてますから」

マイティ「ところで、サゴーズ達の部屋割りってどうなってるの?」

サゴーズ「双子・俺とタトバ・親父とプトティラ・タジャドル・シ
ヤウタって感じかな!タジャドルは受験する際、母さんの部屋使っ
てそのまま定住しちゃってるけど」

タイタン「じゃあ、元々シャウタと同じ部屋だったの?」

サゴーズ「うん。シャウタ自体は問題ないんだけど、!両側の俺達
が!問題大有りで」

タトバ「マジすいませんってぐらいにね」

グロージング「ペガねえちやと寝る!ペガねえちやああああ」

ペガサス「はいはい。一緒に寝ようね」

タジャドル（!あれ、何だ今のシャウタ臭）

アマゾン「X行くから来た！」

ライダーマン「ちよつとあんた方、何しているんですか！？」

タジャドル「増えたー！？」

タトバ「うわあああああ、X先生とアマゾンまでえええええ！」

シャウタ「…一応、アップルパイ焼いてますけど…2枚ほど」

V3「よし、俺は1/2な」

スーパー1「それ半分でしょうが！」

ライダーマン「一人で半分食べないでください！」

スカイライダー「どうせなら、我々は我々で、1枚を4等分にして残り1枚を12人で分けるべきでは」

X「え、13人では…？」

スカイライダー「え、グロウイングはペガサスのを貰うんじゃないんですか？」

スーパー1「いや、除外するならドラゴンだろう。それで12等分だ」

ライダーマン「いやいや、それよりも、16人分なんですから…8人で分けたほうがいいですよ」

V3「じゃあ1/4で」

X「V3先生は話を聞きましょうか？」

タジャドル「何この教師達フリーダム過ぎる」

タトバ「X先生は中学教師なのに、高校のV3先生達と仲いいし…！」

ラトラーター「ところでこれって、X先生のペットですか？」

アマゾン「ガウ？」

X「いや、去年森で拾って…そのまま一緒に暮らしている。あと、一応アマゾンは野生児というだけであってペットではないから」

タトバ「X先生とオルタナティブ・ゼロ校長の好意で、生徒として一応過ごしてるよ…」 実は同じクラス

プトティラ「プトもたまに学校行つて、色々教えてもらってるよ！」
グロイーニング「にゅ？」

ペガサス「主に…何を？」

プトティラ「お空の飛び方とか、漢字の読み方とか、実験とか、タジャドルに使えそうな“せっかん”とか、歴史のこととか、美味しいスイカの見分け方とか、宴会芸とか、せきしんしょーりんけん！」

スカイライダー「ちよつと、V3先生…私に喧嘩売ってますか？」

V3「何がだ？」 スイカの見分け方教えた人

ライダーマン「子供（？）に赤心少林拳どころか、折檻方法を教えるってどういう神経してるんですか！？」

スーパー1「お前も何で実験させてるんだ！」

X「…」

アマゾン「プトティラ、すごい」

X「アマゾンは、……来年高校に行けたら、スカイライダー先生が担任であることを祈ろうな」

シャウタ「…とりあえずドラゴン以外、皆食べようか」

ドラゴン「うっ、なんか冷たい扱い…でもどうしてだろう、嬉しいのは！」

スカイライダー「スーパー1先生、矯正しがいのあるアホがあそこにありますよ」

スーパー1「とりあえずドラゴン、Mに目覚めたいなら、俺が天国見えるほどの拷問を与えてやろうか？」

V3「どうでもいいからアップルパイ食べるか」

ライダーマン「X先生、夏のディケイド映画に申したいことは？」

X「とりあえず、ドラゴンは頭を冷やそう。話はそれからだ」

全「「「いただきまーす」」」

ドラゴン「」尻にドラゴンロッドとライダー

X「ライドルウウウウ！」

スーパード「いただきまーす」 ライドル犯

プティラ「おいしかった！OO」

シャウタ「ほらプティラ、口にパイのかすついてる」 ハンカチでふきふき

グロイーグ「おいし！」

ペガサス「もう、グロイーグ、溢してるよ」 胸周りをハンカチでふきふき

アマゾン「シャウタのおやつ、アマゾン、気に入った！」

X「ほらアマゾン、よだれ」 ハンカチでふきふき

V3「もう一枚おかわり」

ライダーマン「駄目ですって！」

サゴゾ「あつれえ…お母さん増えた…？」

ガタキリバ「だよ、なあ…」

ラトラーター「ZX先生までいたら、お母さんが5人になっていたんだらうけどね」

タジャドル「この場にお母さんが4人いるよな」

ライダーマン「私は足さないでくれ！頼むから！」

X「orz」 結構ショック受けてる

グローイング「ZZZ」お昼寝中

アマゾン「ZZZ」上に同じく

二人にバスタオルかけてる

サゴーズ「和むね」

「タトバ、そうだねえ……」

スーパー1「ふふふふふふふふふふ」
オーラの無駄遣い

「ひいひいひいひいひい！」
タイマードラ 「必死で宿題中」

「うっわ、宿題終わってマジよかった」

「ラトラーター、俺達、ひょっとしたらあなつてたかもしれない……」

ブラカワニ、「それ以前に、スーパー1先生って数学の先生だっけ？」

「ガタラト」「体育だけど？」

ブラカワニ「あつねええええ…じゃあ、なんで数学の宿題をさせてるわけ…？」

ライダーマン「生粹のドSなんです誠に申し訳ありませんでした」

X「もうそろそろ帰りたいけど、…アマゾン寝てるなあ…」

タイタン「ちよ、頭の、休憩……」

マイティ「もう駄目だ…頭がアアア」

ドラゴン「もはや灰

V3「国語の漢字ドリルも終わってないぞー？」

タイムイドラ「「「やめてえええ俺達のライフはもう0よおおお！」「」」

タジャドル「休憩がてらに、ゲームでもするか？」

タイムイドラ「「「やったー！」「」」

タトガタラトサゴ「「「嫌な予感……」」」

ペガサス「何をするんですか？」

タジャドル「亜種ゲーム」

タトガタラトサゴ「「「やっぱり」「」」

プトティラ「やる！」

ペガサス「？」

シャウタ「解説すると……（中略）って感じ」

タイタン「待つて……それ絶対頭使いすぎて脳みそ沸騰する……！」

マイティ「もうやだよお……！こんなのって酷すぎる……！」

スーパー1「罰ゲームは？」

全「「「えっ」「」」

スーパー1「ゲームには、罰ゲームがあるのが常識だろうが……！」

X「そんな常識どこにもないです！」

V3「よし採用！」

ライダーマン「採用しないでください……！」

スカイライダー「うわああああ……地獄だ！スーパー1先生が本気を
出してきたアアアアア……！」

プトティラ「じゃ、間違えた人は……手前の人の言うこと聞く……！」

タジャドル「読めたぞ……テメエ俺に罰ゲームを与える気か」

プトティラ「O O」 どや顔

スカイライダー「……予防策に、教師勢一不憫と名高いZX先生を呼

びつけよう……それで少しは延命できるはず」
ライダーマン「【じゃんけんをする際に、最初に言い出した人間が負ける】法則並みに死亡フラグですよ」

ZXも（クウガ家のカレー提供を条件に）来ました

プトティラ「ゼクロシュせんしえーだ！」

ZX「…少なくとも、スーパー1先生とV3先生に負けないよう頑張るぞ！」

ライスカX「…おおおおー！」「」

タトバ「なんでだろう…なんでうち、教師のたまり場になっているんだろう！」

ラトラーター「そして、中学教師のX先生が馴染んでいる件について」

タジャドル「…あの、スカイライダー先生と（大学が）同期だから…」

ガタキリバ「ちなみに、配分は以下の通り」

第1回戦 プトティラ・タジャドル・ラトラーター・ライダーマン・V3・マイティ

第2回戦 ブラカワニ・スカイライダー・ZX・X・スーパー1・ドラゴン

第3回戦 ガタキリバ・サゴーズ・タイタン・タトバ・シャウタ・ペガサス

タジャドル「…2回戦、完全に死亡フラグじゃないか？」
シャウタ「なんだろう…この、圧倒的な不利加減は」
プトティラ「しゅたーと！」

プトティラ「ガタジャーター！」
タジャドル「タカトラドル」
ラトラーター「ラジャタ」
ライダーマン「タカジャバ」
V3「タカキリドル」
マイティ「…ガタ…ジャーター？」

プトティラ「アウトー！○○」
マイティ「ええええ！？どこを間違えたのか理解できない！！」
V3「いやーよかった、コピペするとはいえ正直俺の名前打ちにく
いらしいし」
ライダーマン「メタ禁止！」

V3「じゃあ…罰ゲームとして、ハリケーンの自動操縦で市井引き
摺りまわしの刑」
マイティ「嫌あああああ！？」
ライダーマン「待ってください、それは宴会の時の王様ゲームだけ
でいいです！そしてその被害に遭うのは、ZX先生かスカイライダ
ー先生で！！」
ゼクスカ「ヒデエ」
V3「チッ」
タトバ「だから舌打ち！」

ブラカワニ「タカウタ」

スカイライダー「ラトラーター」

ZX「ラトラバ」

X「ラキリタ」

スーパー1「ガタウバ」

ドラゴン「シャウバ」

スーパー1「イエーイ」

ゼクスカ「やったあああああ！」

X「生き残った……！」

ドラゴン「orz」

ブラカワニ「強く生きるのだ、若者よ」

ラトラーター（スカイライダー先生のチーター率は何なんだろう）

スーパー1「じゃあ、トライドベンダーに噛まれながら本郷町を4219周」

ドラゴン「イヤアアアア！？」

ブティイラ「黄色のボタンで“くろつくあつぷ”だよ！」

スーパー1「魔改造してハイクロ可能にしているか？」

ライダーマン「いや、せめて切り替え式にしてください……間違つてラトラーターが使ったらどうするんですか」

ガタキリバ「ラトラーターより、サゴーゾのほうを心配してくださいライダーマン先生」

ペガサス「……どうします？」

シャウタ「もうZX先生が決めてください」

ZX「え、何でそんな重大な責任を事務員に擦り付けるの？」

X「ドラゴンの未来を決めるのは、先生です……」

スカイライダー「決断を！そして、スーパー1先生が本気でトライドを改造する前に早く！！」

ZX「じゃあ…齧られる場所は、頭で……あとハイクロ禁止」

スーパー1「すまん、もうクロックアップ・ハイクロ・フリーズ対応に改造した」

オーズ兄弟「……なんでええええええ！？」

ブラカワニ「ボタン3つに増えてるし！黄色・オレンジ・白になってるし！！」

スーパー1「オレンジがハイクロで、白がフリーズだ。よし逝ってこい」 フリーズスイッチ押した

トライド『ガオン！』 フリーズ突入

ドラゴン「……頭食われたまま強制突入

ガタキリバ「タカジャーター」

サゴーズ「タトバ！」

タイタン「ラキリタ」

タトバ「ガタウーター」

シャウタ「シャトラバ」

ペガサス「ラキリゾ」

ガタキリバ「ガタゴリタ」

サゴーズ「サウバ」

タイタン「シャキリーター」

タトバ「ガタトラドル」

シャウタ「ラジャバ」

ペガサス「タカキリゾ」

ガタキリバ「ガタゴリバ」

サゴーズ「サキリタ」

タイタン「ガタウタ」
タトバ「シャウゾ」
シャウタ「シャゴリタ」
ペガサス「サウタ」
ガタキリバ「ラトラーター！」
サゴーズ「ラトラタ」
タイタン「ラウドル！」
タトバ「シャジャバ」
シャウタ「サゴーズ」
ペガサス「サゴリドル」
ガタキリバ「サジャバ！」
サゴーズ「タカキリタ」
タイタン「ガタウーター」

サゴーズ「やった、アウトー！」
タイタン「ねえ、これ、頭の疲労が激しかった俺達不利じゃない！？」

ガタキリバ「普通ならその言い訳が通用できたが…」
シャウタ「残念ながらうちのプトティラは、多い日で6連続亜種ゲームをやって冷えピタのお世話になるほど頭を使っています」
タトバ「なので、頭の疲労は言い訳に入りません」

プトティラ「頑張ったから金メダルもらえたよ！」 手作りメダル
見せながら

ZX「おー、偉いなー」

X（確か、ここ的一家全員に勝てたら貰えるって話だったような…）
ライダーマン（この一家はいつも何をしているんだ）

サゴーズ「とりあえず…タイタン、罰ゲームは今日の夕飯のカレーの配膳と…皿洗いね」

タイタン「サゴーズが俺の前の奴でマジ良かった…！」

アメイジング「こんばん…うわっ！？V3先生達は何故！」

高校教師勢「「おじゃましてまーす」「」

X「ホントすまない」

V3「じゃ、カレーまで食って帰るか」

ライダーマン「そうですね…」

ZX「元々、それ目的で来たからなあ…俺」 白ご飯持参

スカイライダー「お、ビーフカレーだ」 鍋見ながら

スパー1「よしプティラ、腹ごなしに梅花の型のおさらいだ！」

プティラ「ぷい！」

アメイジング「そして、何気に食って帰る気にいるーッ!？」

タトバ「いやだこの先生達！」

シャウタ「…米、足りるかなあ…」

X「……買って…こようか。お金は、出世払いでいいから…」

シャウタ「マジすいませんX先生ホントごめんなさいorz」

058：兄弟×兄弟・悪夢編

全「「「ごちそうさまでしたー！」「」」

V3「いやー、ありがとなあ。福神漬け」

マイティ（夕飯時は罰ゲーム免除された）「俺達も、すっかり忘れちゃって…カレー屋の息子失格です！」

タイタン「ラッキョウの恩は忘れません！」

ZX「いや、別に気にしなくてもいいし忘れてくれても…」 付け合せ持つて来た人

X「それじゃあ、そろそろ」

アマゾン「タトバ、プトティラ、ばいばい！」

シャウタ「本当にお米ありがとうございました…！」

タトプト「「ばいばーい」」

グロージング「ぶえええ！じえくろー！！」

ペガサス「もう、グロージング、ZX先生とはまた今度遊ぼうね」

ZX「あはは……………なんで俺、子供に懐かれているんだろう… or z」

タイタン「正直、両親やペガサスと同じ扱いを受けているだけでも羨ましいですよ？俺達、大抵嫌がられますもん」

スーパード「俺達も帰るか…あ、これジュース」

V3「その辺で買ってきた菓子も置いておこうか？」

ライダーマン「あと…ビールのお供の、枝豆」

ガタラト「ありがとうございまーす」

ブラカワニ「アメイジング君と仲良く飲み明かすとするよ！」

タトバ「じゃあ、最初の取り決めどおりに…リビングに布団敷こうか」

サゴーズ「テーブル片付けるよー」

ブラカワニ「じゃあ、パパン達は縁側でビール飲みまーす」

アメイジング「あれ…蚊取り線香がないな、この家」

ガタキリバ「…」 殺虫剤の類に弱い

アメイジング「何か、同じ虫としてごめん」 強い

マイティ「そうだな…」 むしろクウガ一家全員強い

シャウタ「ペガサスとグローイングは、茶の間でいいんだっけ」

ペガサス「はい」

グローイング「うん！」

シャウタ「茶の間は丁度布団があるから、卓袱台さえ片付ければすぐに敷けるよ」

サゴーズ「あ、じゃあ、俺が手伝おうか？」

シャウタ「あつ、いや、俺だけで大丈夫！」

サゴーズ「え、でも」

シャウタ「それよりも、4人分運ぶ方が大変だと思っし、部屋の片付けとかあるし…こっちは大丈夫だから！」

サゴーズ「うーん…シャウタがそう言うなら、いいけど…あまり無

理しないでね」

ラトラーター「…ぴこーん」

ガタキリバ「なんだ、その電波を受信したような音は」

ラトラーター「別に？」

シャウタ「これでいいかな」

ペガサス「わざわざありがとうございます。本当なら、私達がやらないといけないのに…」

シャウタ「いや、ペガサス達はお客さんみたいなものだし、気にしないで」

グローイング「ふかふかー！」

ペガサス「よかったね」 グローイングなどで

シャウタ「なんかペガサスって、お母さんみたいだな」

ペガサス「グローイング、両親以外には私にしか懐いていなくて…あ、でも、プトちゃんやZ先生とは凄く仲がいいみたいなんですよ」

シャウタ「そういえば、たまに学校で仲良く遊んでるんだっけ？」

ペガサス「はい。最近じゃ、保育園に行くより高校に行ったほうが楽しいみたいで」

シャウタ「あはは…」

ペガサス「プトちゃんは…小学校とかには？」

シャウタ「どうだろう…とりあえず、三馬鹿より頭はいいけどペットだからなあ…でも高校に置きっぱなしも先生達に悪いし」

ペガサス「案外、楽しくやっていそうな気もするんですけどね」

シャウタ「まあ、スーパー1先生と梅花の型をやり始めたのを見る

と、…確かに」

ペガサス「プトちゃん、本当に賢いですよね」
シャウタ「うん。それに、凄くいい子」

グロージング「Zzz…」

ペガサス「あ、寝ちゃった」

シャウタ「じゃあ、俺も自分の部屋に戻るよ。…おやすみ」

ペガサス「おやすみなさい」

ラトラーター「何この甘酸っぱさ!!!」 耳いい

ガタキリバ「なんだ気色悪いばかりに満面の笑みしやがって」
サゴーズ「遂にアホになった？」

夜…

ドラゴン「…ずがー」 結局外で寝かされた

マイティ「ぐがあああ…」

タイタン「ずぴー…」

アメイジング「ぐうううう…」

トライド『グオオオオオン…』 ドラゴンの代わりに布団就寝

ペガサス「すう…すう」

グロージング「むにゅう…」

タトバ「たとばあああ…きいいいっく…」 タトバキック誤作動

サゴーゾ「ずがああああ…」　ゴリバゴーンで阻止

ガタキリバ「ごがああああ…」　寝ながら分身

ラトラーター「…すごおおおお」　寝ながらリボルスピンキック

ブラカワニ「ぐがああああああああああ」

プトティラ「ぐきゅうつうつうつうつ」

タジャドル「　　なんか眠れねえ」

シャウタ「…タジャドル」

タジャドル「分かってる…いつにも増して寝にくいんだろっ」

シャウタ「うん…下からも寝息が聞こえてくるから、尚更…いや
タトバ達よりはいいんだけど」

タジャドル「うう、何故俺達は寝つきが悪いんだろうか」

シャウタ「知らないよそんなの…」

タジャドル「だよなあ」

シャウタ「……………はあ」

タジャドル「どうした？」

シャウタ「あー、いや、なんでもない」

タジャドル「？」

シャウタ「…なんかさ、家に母さん以外の女の子が居ると、気を使
っちゃうよな」

タジャドル「プトティラは？」

シャウタ「あの子はうちの子です」

タジャドル（いやペット…まあいいか、あまり間違ってないし）

シャウタ「…」

タジャドル「おーい、寝たか？」

シャウタ「起きてるよ」

タジャドル「どうしたんだ本当に」

シャウタ「…ああ、うん、なんでもない。ただ」

タジャドル「ただ？」

シャウタ「なんか、すつごく胸が苦しいぐらいに緊張してるって
うか…いや、ペガサスという時だけなんだけどな？」
タジャドル「」

うわああああああああああああああああ

クウガ家三馬鹿「」「何があつたあああ！？」
アメイジング「二階からだぞ！？」

タジャドル「うちのっ…うちの弟が、……弟がああああ」

シャウタ「一体何が起こつたんだ！おい、タジャドル…タジャドオ
オオル！！」

タトバ「ふああ…何なのもう」

プトティラ「タジャドルうるしい…」

ペガサス「何があつたんですか、お兄さん！」

タジャドル「誰が義兄さんだ！」 血涙流しながら
ペガサス「ええ？」

ドラゴン「はっ、そうだ、…お義兄さん…シャウタさんを俺に！」
寝ぼけてる

タジャドル「誰がシャウタを嫁にやるかあああ！」 プロミネンス
ドロップ

ドラゴン「」

アメイジング「ドラゴオオオン!？」

ガタキリバ「あー、ごめん、きつとタジャドルの病気が出たんだ…」
タトバ「え、厨二病以外に病気あったの？」

サゴーズ「ブラコン病…かな」

ラトラーター「説明しよう！タジャドルは過去のトラウマで極度の
ブラコンなのである（ただしシャウタ関係での発動率が極端に高
い）」

タイマイ「えええ!？」

ブラカワニ「大丈夫、これ、夢だから（嘘です）」

タイマイ「ああ、夢か…」

タジャドル「うわあああああ…シャウタが、シャウタがメズール
コンボとしての副作用にiiiiiii!」

シャウタ「だから何が言いたいんだお前は!？」

ラトラーター「とりあえず寝ろよ不治の病持ち」 腹パン

タジャドル「」 気絶

プトティラ「消していい? O O」

ブラカワニ「リアルに消しちゃったら、それこそシャウタ泣いちゃ
うからやめようね。マイペット」

プトティラ「むう… - m -」

翌朝。

タイタン「あー…変な夢見た」

マイティ「ホントに…」

ドラゴン「夢なのに痛い…」

アメイジング（あの騒ぎは夢だったのか、それとも…）

グローイング「ふあー」

ペガサス「おはようございます」

シャウタ「もう朝食できてるよ」

ドラゴン「シャウタさんの朝ご飯!？」

プトティラ「しゅとーかーにあげるシャウタのご飯はありません！

>
<」

ドラゴン「えっ」

タトバ「プトティラ…誰に教えてもらったの？ストーカーって」

プトティラ「ガタキリバ…ラトラーター、あとタジャドルも言ってた気がするけど頭の中でタトバにしとく」

ドラゴン「俺はただ…シャウタさんと部活したいだけなのに…orz」

ペガサス「兄さん。…兄さんは憧れからの執拗的ストーカー行為が原因です」

ドラゴン「orz」

タジャドル「…何故だろう、ペガサスを見ると、昨日見た夢を思い出す…」

ペガサス「はい？」

タジャドル「シャウタがウエディングドレス着て、どこかに嫁ぐ夢

…」

ガタキリバ「いやそれ結構重症じゃね!？」

ラトラーター「精神科行つてこいよ、本当に」

ブラカワニ「夢の話はどうでもいいから、ご飯だご飯」

シャウタ「今日ばかりは親父に賛成…」

059・仏のうえい！

サゴーズ「明日から新学期かあ」

タトバ「宿題の準備OKつと！」

ガタキリバ「去年のサゴーズみたいに、家に忘れることがないよう
にしよう…」

ラトラーター「忘れたらダツシュで取りに帰れば？」

ガタサゴ「誰もがお前のように速いと思っなよ！？」

プトティラ「きゅーんきゅーん」 シャウタにぎゅー

シャウタ「親父とお留守番してなさい。できるでしょ？」

プトティラ「ぷい…OmO」

タジャドル「さて、親父はこのままこの家の貧乏神になるのか…」

ブラカワニ「タジャドルちよつと酷くない？」

シャウタ「…座敷わらしでもないだろ？」

タジャドル「仕事もせずに食いぶち得ているだけなのに何を」

プトティラ「きゅーい！」 尻尾ビンタ

タジャドル「ぎゃあああああ！なんで俺だけ！？」

プトティラ「パパン虐めないで！タジャ××嫌い！！元々だけど！
！！」

タジャドル「ライコラ」

ブラカワニ「ふーふふーのふー…」

ガタキリバ「な、何だ、あの不敵な笑いは」

ラトラーター「嫌な予感しかない」

ブラカワニ「残念ながら、パパンは貧乏神じゃなくなるのだ…」

タトバ「へ？」

サゴーズ「どういうこと？」

ブラカワニ「パパンも明日から、あるコンビニでバイトすることになりました！」

全「」「へ」「」

…3分経過…

タジャドル「……何故だあああああ！！？」

ガタキリバ「そんな奇特な人がいたとはあああああ！」

ラトラーター「世の中間違ってるだろオオオオオ！？」

サゴーズ「親父よりいい人いたでしょ絶対イイイイイ！！」

シャウタ「正気かその店エエエエ！」

タトバ「何これ明日世界終わっちゃうのおおおお！？」

ブラカワニ「酷くない？マイ息子達」

プトティラ「○○」

シャウタ「あれ、プトティラ…プトティラー？」

ラトラーター「どうした？」

プトティラ「…パパン、働くの？」

ブラカワニ「イエス！」

プトティラ「なんで…？○○」
ガタキリバ「なんでって！？」

シャウタ「い、一応、シフトを聞いておくか…」
タトバ（一応扱い…無理もないけど）

ブラカワニ「金曜日と日曜日以外は毎日。なんと！朝の10時から
夕方の6時までの、8時間勤務なのだ！！」

サゴーズ「うわぁ、かなりリアルだ…！」

プトティラ「ぶえ…ぶええ…」

トライド『ガオン？』

プトティラ「ぶつきゅ○○」 トライド騎乗

タジヤドル「プトティラ」

プトティラ「…ぶきゅうつうつうつ！> <」 スイッチオン

『Clock Up』

しーん…

タジヤシャウ「…プトティラアアアツ！？」

ラトラーター「クロックアップで逃げたーッ！？」

ブラカワニ「なんで！？」

ガタキリバ「知るか！」

サゴーズ「どこ行つたの！？」

タトバ「うわぁぁぁ…プトティラ！プトティラアアアア！？」

プトティラ「きゅーん…」

トライド『ガウガウ（訳…どうしたんだよ）？』

ブレイド「あれ？どうしたんだお前ら、迷子か？」

プトティラ「プト達いえでしたの…」

トライド『ガオツ（訳：俺巻き込まれたの）！？』

ブレイド「家出？どうしてまた」

プトティラ「…パパンが、明日から、お仕事なの」

ブレイド「？」

プトティラ「あのね、パパンね、ずっとお仕事見つからなかったの…でも明日からお仕事になったの…」

ブレイド「へえ、そりゃ良かったじゃないか」

プトティラ「でも…パパンがお仕事するってなったら、プト、寂しいよう…ずっとパパンと遊んでもらったりしてたから…Ｔ　Ｔ」
トライド『ガオン…』

ブレイド「そっか…。なあ、紫ドラゴン」

プトティラ「プトティラだもん」

ブレイド「プトティラ。確かに、お父さんがいないと寂しいって思うかもしれないけど…でも、お父さんはプトティラのためにお仕事に行くんだから」

プトティラ「プトのため？」

ブレイド「そう。お父さんが働くから、お金が入って、プトティラも美味しいものが食べられるんだぞ？」

プトティラ「きゅう…」

ブレイド「お父さん、お仕事のこと…何か言ってなかったか？」

プトティラ「ええとね…コンビニってところで働くことになって」

ブレイド「……ん？」

プトティラ「それでね、金曜日と日曜日以外は朝の１０時から夕方

の6時までバイトなの」

ブレイド「どこかで聞いたような話…まさか…」

トライド『ガオオン!』　ちゃっかり呼びに帰った

ブラカワニ「プトティラあああああ!マイペットオオオオオオオオオオオ!」

プトティラ「パパン!」

ブラカワニ「どこ行ってたんだ、心配したんだぞ!」

プトティラ「ごめんなしやい…」

ブレイド「あの…やっぱり言うのもなんですが」

ブラカワニ「ん?…おお!」

ラトラーター「あれ、知り合い?」　ちゃっかりトライドに乗った

ガタキリバ「ラト、…てめ、走れよ…!」

サゴーズ「ゼエゼエ…」　死にそう

シャウタ「きゆう」　サゴーズに運ばれた

タジャドル「…ラトラーター、お前帰りトライドから降りろ。シャ

ウタとサゴーズが死に掛ける」

タトバ「……俺もいいですか…!?!」　息切れ

ブレイド「…どこからどこまで家族で、どこからどこまでペット?」

ブラカワニ「プトティラとトライドがペットかな?まあ、俺にとつては全員息子みたいなもんだけどね…あ、プトティラメスだから、娘か」

プトティラ「ふうだよ?」

ブラカワニ「更に訂正。性別が“ふう”でした」

ブレイド「あー…」

タジャドル「あの、ところで、あなたは一体？」
ブレイド「立ち話もなんだし、どこかでゆっくり話そうか。プトテ
イラも色々誤解してるし」
プトテイラ「きゅ？」

某喫茶店。

タトバ「ええええええ！？親父の働き先の、店長さん！！？」
ブレイド「そう」
ガタキリバ「じゃあ、あなたが親父を採用したんですか！？」
ブレイド「うん」
ラトラーター「親父のどこが良かったんですか！？」
サゴーズ「なんで親父なんですか！？」
シャウタ「蛇で脅されましたか！？」
タジャドル「何を思い立ってそう考えたんですか！」
ブレイド「おい息子達、言い分酷いぞプトテイラ見習え」

タジャドル「で、…何故？」
ブレイド「学生さんのバイト希望は多いんだけど、皆、夕方からの
希望が多くてねえ…。昼に勤務できる人がちょっと少ないから、で
きれば毎日入れそうな人を探していたんだけど」
シャウタ「で、暇人の親父を雇ったんですか？」
ブレイド「…ブラカワニさん本人が、面接の時に、『金曜日と日曜
日以外なら毎日、どの時間でも入れます』って説明して…」
タトバ「気になってたんですけど、なんで、金曜と日曜なんです？」

ブレイド「『金曜日は娘みたいに可愛がってる子とお風呂の日だから、確実に家には居たい』から…なんだって」

ガタキリバ「でも、シフトは一応10時からなんですよね？」

ブレイド「そうなんだけど…いつ何があるか分からないし、急な用事ができた人のために、シフト外に入ってもらう必要があるから…一応本人の希望には、沿いたいんだけどな」

サゴーズ「そうなんですか…」

ブレイド「ちなみに、日曜日は『仕事することになったら思いっきり散歩できないだろうから、その日に遊んだりしたい』って…子供（って言うかむしろペット）思いのいい人だよ」

シャウタ「だから採用したんですか？」

ブレイド「+ で、面白かったから」

ラトラーター「そこ一番納得できない！」

ブラカワニ「まあ、説明すべきことは全部店長が言っちゃったなあ」
プトティラ「ぱばあああん！ごめんなしゃああああい！！> <」

ぎゅー

ブラカワニ「分かればいいんだよ…後プトティラ、ちょっと加減して初出勤前に骨折れそうすぐ治るけど」

プトティラ「ぶりえ…ぶりえい……」

ブレイド「…」

シャウタ「すいません、たまにちよつと上手く発音できない部分があるんです」

ブレイド「あ…何となく気持ちは分かるから気にしないで。……従兄弟の赤いほうによく、『うえい』って呼ばれてるからそれでもいいぞ？何となく発音似てるし」

プトティラ「うえい！」

ブレイド「はい、どうした？」

プトティラ「パパンのこと、よろしくお願いしましゅ！〇 〇」

ブレイド「…おい息子達。お前らよりよっぽどいい子供だぞコイツ」
オーズ兄弟「…親父の過去を聞けば誰だって俺達のようにますよ…！」「」

ブレイド「聞いたよ？ご本人から」

シャウタ「黒歴史まで喋って尚、採用なの！？」

タジャドル「いい人飛び越して、観音様だよ店長さん！」

ラトラーター（被害者二人は語る…か）

ブレイド「だってあんないい話（+面白い雑談2時間分）聞いたら、採用しないわけには行かないじゃないか」

タジャシャウ「途中まではいいけど、+した部分は基準に入れたら駄目エエエエ！？」」

ラトラーター「マジ仏様だわ、ブレイドさん」

060: プト介と始業式

AM 7:25

タトバ「…行つてきまーす！」

シャウタ「タトバ、弁当！」

タトバ「うわあああああそうだったあああああああ」

AM 8:00

ガタキリバ「俺達も行くか」

ラトラーター「だな」

サゴーズ「じゃ、行ってくるね」

シャウタ「飯は準備してあるから」

タジャドル「行つてらっしゃい」

ブラカワニ「頑張れよー」

トライド『ガオン…』 日光浴充電中

プトテイラ「ベンちゃん太陽でお腹いっぱいなるの？」

トライド『ガウ（訳：そういう造りだし）』

プトテイラ「なんていつてるか分からないからいいや」

トライド『オオン（訳：おい）』

AM 8:45

ブラカワニ「パパンも初出勤行ってきまーす」

プトティラ「もう行くの？」

ブラカワニ「パパンは新人さんだから、早めに行かないといけ
ないだよ」

プトティラ「分かったー…頑張つてねパパン！〇〇」

A M 8 : 4 7

タジャドル「さてと…」 新聞広げる

プトティラ「…」

タジャドル「なんだ」

プトティラ「なんでタジャドル大学行かないの？」

タジャドル「夏休みだから」

プトティラ「夏休み終わったんだよ！」

タジャドル「残念ながら、大学生の夏休みは長いんだ。9月の中旬
まである」

プトティラ「…ふこーへーだー！なんでシャウタは学校で、タジャ
××は夏休みのー！？><」

タジャドル「悪かったな！…それと、俺も12時からバイトだから
プトティラ「><」

タジャドル「ライ嬉しそうな顔すんな、いつものことだけど」

A M 9 : 2 0

ジリリリリリリン

タジャドル「あ、電話だ。…もしもし」

プトティラ「きゅー」 トライドとじゃれてる

タジャドル「…そうですか、分かりました。おいプトティラ」

プトティラ「なにタジャ
」

タジャドル「電話、スカイライダー先生からだった。学校行ってこ
い」

プトティラ「なんでプトの予定をタジャドルに命令されないといけ
ないのぉ…？」「m」

タジャドル「サゴーズが宿題忘れまいとしていたのはいいが、宿題
以外の物を全部忘れたそうだ。トライドに乗せて持って行ってやれ」
プトティラ「タジャドルが行けばいいのに… - m - 」

タジャドル「後、」

プトティラ「なに」

タジャドル「シャウタが自分の弁当忘れたらしい」

A M 9 : 2 3

プトティラ「ベンちゃんいくよー！」 トライド騎乗

トライド『グオオオン！』 自動操縦

タジャドル「なんでシャウタ絡みだと行くんだよ…サゴーズ、なん
か哀れだ…」

A M 9 : 3 0

Z X「お、プトティラ…と…第二ペットのトライドベンダー、だっ
たっけ…？」 掃除中

プトティラ「ゼクロシュせんしえ！シャウタとサゴーズ、どこ？」

Z X「シャウタは2階の1年A組…サゴーズは3階の2年B組のは
ずだけど」

プトティラ「O O？」

トライド『…？』

ZX「…誰に頼まれてきたのかな？」

プトティラ「しゅかいらいだーせんしえ」

ZX「……（携帯操作中）…スカイライダー先生？ちょっとプトティラ案内してやってくれませんか、俺事務員の仕事なので」

AM 9:36

スカイライダー「お待たせー」

プトティラ「せー」

ZX「じゃ、後は宜しく」

スカイライダー「じゃあ、行こうか」

プトティラ「…サゴーズの荷物重いよう」

スカイライダー「あー…俺が持つから、プトティラは弁当。じゃあ、まずはシャウタのところまで行こうか」

プトティラ「ぷい！」

トライド『ガオーン（訳：行つてらっしゃーい）』

AM 9:40

スカイライダー「あ、ここだ。1年A組」

プトティラ「シャウター！」

シャウタ「プトティラ！」

プトティラ「はいおべんと！」

シャウタ「わざわざありがとな」 頭なでなで

王蛇「ん…？なんだ、この紫のは…」

プトティラ「紫のじゃないもん」

スカイライダー「プトティラ。シャウタの家のペットだ」

リュウガ「あと王蛇、お前も紫だろ」
オーガ「わー、可愛い」

キックホッパー「お前は……あの時の……」

パンチホッパー「そうだね兄貴……」

「プティラ
ぶえっ」

シャウタ「あー、ごめんプティラ、説明忘れてた…こいつら俺のクラスメートなの」

「プロティオ」

リュウガ「非常に残念なことにな……」

「オムみゃうのトマト……トマエぶ……ぶ」

キックホッパー「ほう……やる気か」

パンチホッパー「闇の恐ろしさを見せてやるうよ、兄貴…」

王蛇「面白い…俺を楽しませろ…」

シャウタ「こらこらこらこら！お前ら、落ち着いて……」

プ
テ
ィ
ラ「ぶえええええええ！りゃとりゃーたあああー！！」

「どしたー？」
「ラトラーター」
ダッシュ豪快

「シャウリユウ」「速ッ！」

プトティラ「トマト…トマトオオオオ」

ライター「……お前らまた何か食ったわけ？」

リュウガ「ヤバイ、シャウタ、お前逃げろ」

シャウト「言われなくても逃げる！」
ダッシュ

スカイライダー「時間かかりそうだし、サゴーズの荷物は俺が届けておくよ……じゃあ！」 逃走

ライター「ライオディアスウウウウ！」

A M 9 : 5 1

プトティラ「おじゃまします」

V 3「お、プト介」

プトティラ「プト介じゃないもん」

V 3「どうした？今日は学校に行く予定はないと聞いてたんだが」
プトティラ「忘れ物届けにきたの！でね、タジャ××とご飯食べた
くないから、ここで食べるの」

V 3「そうか…お、そうだ、ちょっとこっち来いプト介」
プトティラ「プト介じゃないもん」

V 3「じゃじゃーん」 ケーキの箱取り出しながら

プトティラ「ケーキ！O O」

V 3「この階の職員室の皆で食べようと買ってきたんだが、1つ余
つてな。俺が2つ食べてもいいんだが、それだと不公平なのでプト
介に好きなのやるぞ」

プトティラ「プト介じゃないもん。でもケーキくれるの！？」

V 3「何がいい？早い者勝ちだぞ…あ、俺はこのチョコケーキだか
ら」

プトティラ「うーと、うーと、うー…イチゴたくさん！」

V 3「イチゴのタルトな。よし、ばれないうちに食つとけ」 フォ

ーク渡しながら

プトティラ「ありがと！」

A M 1 0 : 1 5

プトティラ「ごちそうさまでした！」

V 3「暇だなー」

プトティラ「そだねー」

V 3「亜種ゲームでもやるか？プト介」

プトティラ「プト介じゃないもん。でも負けないよ！」

68 亜種・3コンボ言つてプトティラがサゴリタ被りました

A M 10:49

スーパ―1「あれ、V3先生、プトティラ来てたんですか？」

V3「ああ。今、保冷剤のお世話になつてる」

プトティラ「ぷきゅん…O O」

スーパ―1「保健室に寝かせてやりましょうよ…」

V3「それもそうだな。おいプト介、保健室のデルタ先生に見てもらうぞ」

プトティラ「プトしゅけじゃないもん…」

スーパ―1（ツツコミを入れる元気は残っているんだな）

P M 12:44

プトティラ「ぷつきゅー！」 今まで寝てた

デルタ「あら、もう元気になったの？」

プトティラ「うん！ シャウタとご飯食べてくるー！」

デルタ「行つてらっしゃい」

P M 12:48

プトティラ「シャウタ！ ご飯食べよー！」

シャウタ「分かった。…あ、リュウガやオーガと一緒にでもいいか？」

プトティラ「いいよ！」

シャウタ「じゃあ行こうか」

キックホッパ―「ははは！ 待ちに待った、昼食の時間だねー！」

パンチホッパ―「太陽の下のご飯…きつと素晴らしいよー！」

王蛇「法の世界に光が満ちる…」

オーガ「ねえ、あれ…」

リュウガ「もう何もツツコむな」

エターナル（ライオディアスの浄化パワー、凄まじいな…）

P M 17:15

プトティラ「ただいま！」

トライド『ガオン！』 プトティラがZ Xと遊んでいる間、昼寝（日光浴）してた

シャウタ「ただいま」

ラトラーター「おかえりー」 部活ないので早帰り

ガタキリバ「トライドまで行ったのか…ぜんぜん気付かなかった」

上に同じく

トライド『ガウン（訳：穴場でチャージしてたからなあ）』

タトバ「久しぶりの学校楽しかった？」

プトティラ「うん！…でもね」

シャウタ「でも？」

プトティラ「ぶいすりゃーせんしえーが名前覚えてくれない」

ガタキリバ「…あの人ののは、もう『プト介』が愛称なんだよ…ほら、お前もトライドに『ベンちゃん』って付けてるだろ。それと一緒にだ」
プトティラ「ぷう - -」

061:1 週間お風呂事情

プトティラ「お風呂 お風呂」

タトバ「あ、そうか、今日は俺がお風呂当番かー」

プトティラ「きゅっ><」

タトバ「じゃあ、アヒルちゃんて遊ぶ？」

プトティラ「アヒルちゃんーくわっくわー」

シャウタ「タトバと風呂に入る日は、アヒルちゃんて遊べるからなあ」

ガタキリバ「いや、それ以前に、…タトバが中三にもなってアヒルちゃんを持つていることにツッコミを…」

ラトラーター「別にいいんじゃない？」

サゴーズ「タトバ！プトティラの頭を洗うときの、シャンプーハット忘れないでねー!!」

タトバ「はい！」

スーパー「何だ、プトティラとの風呂は交代制なのか」 自前の
焼き鳥食べながら

V3「てつきりシャウタとしか入っていないと思ってたぞ」 自前の
焼酎飲みながら

タジャドル「なんでうちに居ついているんですか、先生…!!」

スーパー「この家が一番、月が見えるから（十五夜に最適）」

V3「シャウタの月見団子を食いに来たから」

シャウタ「…ホント、白玉粉と餡子と黄粉まで持ってきた時にはマジで驚きましたよ…」

アマゾン「団子、まだできない？」 V3がいる「美味しいものがある」と認識済み

シャウタ「今茹でてるよ」

X「本当にすまない本気ですまない…！」 アマゾン追ってきた
ラトラーター「いや、俺達こそマジですいません…この間お米の袋貰っちゃって…」

ガタキリバ「しかも今日も、【かざみこまち】を1袋貰っちゃってすいません…」

サゴーズ「お陰様で、スーパー1先生の焼き鳥も含めて給料日まで生きられそうです…！」 泣きながら焼き鳥食べてる

X（本当に普段どんな生活を送っているんだろう…）

スーパー1（意外と広いこの家に住み続けているあたり、食費が死活問題クラスなんだな…）

V3「あ、味噌切れてたから買い足しておいたぞ」

タジャドル「なんでうちの台所の調味料の具合を知っているんですか！？」

プトティラ「ぷい…」

タトバ「あー、いいお風呂だった」

X「見た感じ、水道や電気は止まっていななんですけどね」

スーパー1「タジャドル達4人のバイト代が“自給730円×3時間×15日分”と仮定すると、一人当たり3万2850円で4人合計して13万1400円…」

V3「シャウタとタトバがやってる内職は、確か1ヶ月で約2〜3万だったか？」

X「それで合ってると思いますよ。いやあ、
本当に合計約15万1400円でよく生活できるなあと…」

全員数学教師ではありません（V3 国語、X 社会、スーパー
1 体育）

タジャドル「シャウタの節約術と、母さんの…仕送りのお陰です…
！」 号泣

シャウタ「…俺達と親父が不甲斐ないばかりに、単身赴任中の母さんは自分の稼ぎで自分の生活を支えないといけないのに…！」 上に同じく

V3「あー、だから部費払えてるんだな…」

スーパー1「何気に、オーズ一家の生々しい現実を見た気がする」

X「ここはプティラに癒されましょう。そうしましょう」

サゴーズ「現実逃避開始ですか」

アマゾン「アマゾンも、風呂、入る！」

X「こら、うちに帰ってからにしないさい…ここで風呂に入ると、そのまま寝そうだから」

スーパー1「ところで、風呂当番の話に戻るが…」

サゴーズ「あー、うち、できるだけシャウタのみが苦労しないように、風呂だけは分担してるんです」

V3「他の家事できるようにならうか」

ガタキリバ「そこについてはごめんなさい！」

ラトラーター「いやー、初期はホント大変だったんですよ」

〈最初の風呂回想〉

*タトバの場合

プトティラ「う、う、う」

タトバ「頭気持ちいい？」

プトティラ「…うきゆううううん！」 テイルディバイダー暴発

タトバ「ぐはあああつ！？」

プトティラ「ぶええええ…目が、目があああああ」

シャウタ「 タトバ！駄目だろ、プトティラにシャンプーハット
させないと…！」

タトバ「そ、そうだった…ガク」

翌週はちゃんとシャンプーハットを使いました

*タジャドルの場合

タジャドル「 氷付け

プトティラ「シャウタあああああ」

シャウタ「うわあ、見事な氷のタジャドル…」

プトティラ「タジャ太郎には体触られたくないよう、タジャの介と
一緒のお風呂なんてやだよ…」

シャウタ「あ…はいはい。次から俺と入ろうね…」

翌週から火曜日もシャウタになりました

*シャウタの場合

プトティラ「…」 ご満悦

シャウタ「シャツシャツシャウター」 背中洗正中

*ガタキリバの場合

ガタキリバ「 頭に打撃痕

プトティラ「シャウタアアアア」

シャウタ「何があった…」

ガタキリバ「カマキリソードが、プトティラの、頭に…当たって…」

シャウタ「お前らは四日連続で俺にやらせる気が…？」　この時まだパパンは蒸発中

プトティラ「…タジャ丸じゃないから我慢しゆる…omO」

シャウタ「ほら見るプトティラが気を遣った！」

ガタキリバ「反省します…ガクツ」

翌週には仲良くアニソン歌いながらお風呂に入っていました

*ブラカワニの場合

プトティラ「ぷいー…」

ブラカワニ「（やっぱシャウタの日が減って寂しがつてるなあ…）」

よし、プトティラ、パパンがいいものを見せてやろう！」

プトティラ「きゅ？」

ブラカワニ「秘技、…泡のネコさん」　泡で猫耳作りながら

プトティラ「ぷひゅ、」

ブラカワニ「それから…、　パパンの胸がこんなにおつきくなっちゃった！」　泡でおっぱい作りながら

プトティラ「もっとやって！O O」

ブラカワニ「いいぞマイペットよ！今度は…」

この後、10回連続でやってシャウタに「さっさと泡流せラトラーターを汗臭いまま放置する気か」と怒られました

*サゴーズの場合

サゴーズ「　ウィンドステインガー直撃痕

プトティラ「しゃうたああああー！」

シャウタ「サゴーズ…お前、何した」

サゴーズ「…背中擦ったら、痛すぎたみたいで…」

プトティラ「ぐすん」

シャウタ「ああもう、力加減しなさい…」

サゴーズ「はい……ガクッ」

翌週はきちんと力加減して擦りました

＊ラトラーターの場合

ラトラーター「風呂の中で犬神家の一族状態

プトティラ「ぶえええええん！Ｔ　Ｔ」

シャウタ「何したラトラーター！」

ラトラーター「ゴボゴボゴボ…」

シャウタ「ワケ分からん！プトティラ説明しなさい！！」

プトティラ「ラトラーターが適当に済ませた…」

シャウタ「だから普段からあれほど、体を洗う時は隅々までやれと言ったのに！」

＊ラトラーターの場合２

ラトラーター「メダガブリュー頭に刺さってる

プトティラ「シャウタアアアア…」

シャウタ「何やった」

ラトラーター「俺はただ、いつものように、早く風呂から出たかっただけなのに…ガクッ」

シャウタ「お前の風呂は早すぎるんだよ！プトティラとやる時だけでも長く入れ！！」

プトティラ「ラトラーター嫌い！タジャドルほどじゃないけど嫌い！！一緒に風呂入りたくない！！！！」

シャウタ「ほれ見る嫌われた！」

ガタキリバ「つか、プトティラがあそこまで癩癩起こすって相当だろ…」

結果、トマトの件で完全に懐くまでプトティラのほうから拒絶されていました（それまで担当はガタキリバとシャウタのローテーシ

ヨン)

〈回想終了〉

スーパー「ラトラーター、お前そりやあないわ……」

ラトラーター「だって……だって……！orz」

X「ま、まあ……今は大丈夫なんだよな？」

プトティラ「ぷ」

V3「子供は、お風呂はお風呂で楽しむからなあ。プト介はペットだが」

プトティラ「プト介じゃないもん」

スーパー「ところで、トライドは……」

タタタジャガタサゴシャウ「……洗車」……」

X「ペットなのに洗車……あ、いや、……バイクだったか……あいつ……」

プトティラ「ベンちゃんとお風呂入りたいのに、駄目だって言われた……omO」

ラトラーター「トライドと風呂に入りたいのに、するなって怒られた拳句にオクトバニツシュされた……」

シャウタ「当たり前だ！あんなでかいの、どうやって風呂に入れるんだ……！」

V3「いや、トライドの本体ってある意味トラカン部分なんだから、トラカン風呂に入れればいいんじゃないか？」

オーズ兄弟「……あ……」

プトティラ「ぷえ」

トライド『クウン…orz』 V3に言われるまでその発想自体考
えなかった

プトティラ「ごめんねベンちゃん、明日から一緒に入ろうね…」

ラトラーター「俺も…よしプトティラ、日曜日は俺とお前は一緒の
日だから、三人(?)一緒に入ろう。それ以外は、交互にトライド
と入ろう」

プトティラ「ぷい」

062：01弾でもカオス一家

タトバ「今日から、ガンバライド01弾が稼動！」

ブラカワニ「パパンもレジエンドレア（以下、LRと表記）で登場だよー！」

ガタキリバ「orz」スーパーレア（SR）止まり

タトバ「なんか…なんか、ごめん。凄まじくごめん…！」

プトティラ「なんでガタキリバ落ち込んだにゅっ」口押さえられた
シャウタ「……それ以上はやめておきなさい、プトティラ……」

タジャドル「まあ…名前の誤植とか、一生スキニングチャージ技
の出せない奴に比べたらいいほうだろ……」

ラトラーター「orz」ライオディアス誤植

サゴーズ「orz」バゴーンプレッシャー

シャウタ「それは津波エフェクト消えた奴へのあてつけか？」

ブラカワニ「そこは仕方ないと思うよ、マイ息子シャウタ」

プトティラ「でも、プトも名前違う！“メダガブリューシユート”
になってるの…！」

サゴーズ「…元の名前は？」

プトティラ「えと、……しゅとれいん…すちよれいん…しゅちよれ
…すとりえいん……ぶええええT T」

シャウタ「久々にメシ抜きにするぞ？」
サゴーズ「ごめんなさい！」
タジャドル「ストレインドウム、な」

ブラカワニ「パパンなんて、“ブラカワニ・デンジャラス・スリー”だよ？」

ラトラーター「まあ確かに危険だけどさ」

ガタキリバ「毒とか蛇とか」

シャウタ「存在そのものが」

タジャドル「爆発物じゃないだけいいが……」

サゴーズ「そういえば昔、二回ぐらい警察のお世話になってなかった？」

タトバ「何したの！？」

ブラカワニ「…パパンくじけないもんorz」

プトティラ「……」

シャウタ「どうした？」

プトティラ「プトの何とかスリーって…どんなのだっけ？」

シャウタ「…あー、そうか、その時のLRがメダガブリューシュートだったから……」

タトバ「あのねプトティラ。プトティラのは、“プトティラ・アルティメット・スリー”っていうんだよ」

プトティラ「ぷとちら・ありゅちめつと・しゅりー……言いくいようー!!」

ラトラーター「それより俺は、何故アルティメットなのか知りたい」

タトバ「これまでのガンバライド技名（高レアに限る）を纏める

と…」

* スリーの場合

タトバ・ダイナミック・スリー

タトバ・バスター・スリー

ガタキリバ・スラッシュ・スリー（SR）

ラトラーター・ストーム・スリー

サゴーズ・クエイク・スリー

タジャドル・フレイム・スリー

シャウタ・ウェイブ・スリー

プトティラ・アルティメット・スリー（メガシュがLRのため、SR）

ブラカワニ・デンジャラス・スリー

* 劇中技の場合（プトティラ以外は大抵SR）

タトバキック

ガタキリバキック

ライオディアス（正しくは“ガッシュクロス”らしい）

バゴーンプレッシャー（SC技ではない）

プロミネンスドロップ

オクトバニッシュ

メダガブリューシュート（正しくは“ストレインドウム”）
なし（ワーニングライド）

ガタキリバ「…うわあああああ！俺だけ、俺だけなんで…
んでええええ！？」

シャウタ「なんかごめん」

タジャドル「何となくごめん」

ブティラ「ごめんねガタキリバ…」

ラトラーター「こうなったら、映画のアレがLRになるように祈ろうぜ…オールコンボリンチ」

サゴーズ「リンチ言わない！」

タトバ「でも、ガタキリバ…お前は俺達に、謝らなければいけないことがある」

ガタキリバ「何が!？」

タトバ「……お前、今回の難しいモード…ガタツクだけじゃなく、クウガ一家のライアルさんと一緒に出てるじゃん」

ガタキリバ「それぐらいなんだってんだよオオオ!？」

タトバ「羨ましいんだよおまああ!」

ラトラーター「タトバ、キャラ見失ってる。俺が言うべきポジションだ、それ！」

タトバ「こうでもしないと個性がないんだよオオオオ!」

タジャラト「そこはとりあえずごめん!」

ガタキリバ「そうさそうさ、俺はどうせSR止まりがお似合いさ…シャウタがメダルチェンジで俺の緑メダルを使い、50ガタキリバVS1ガタキリバなんて事態を引き起こす様がお似合いなのさ!」

シャウタ「あの時はマジごめん!」

タトバ「うわわ、このままじゃガタキリバが不良になる…地獄兄弟の仲間入りをする!」

シャウタ「ライオディ阿斯、準備!」

ラトラーター「無理だろ、ガタキリバの奴絶対抗体できてるって!寝相も含め、これまで何百回あいつにやってきたと思ってるんだ!？」

タジャドル「嘘つけ、1000超えるか超えないかだろ!」

プティラ「…ぷえ、……ガタキリバ…プトのトマト食べたのと一緒になるの…？」

タトバ（あ、ヤバイ）

プトティラ「そんなのやだあ……TmT」

ブラカワニ「よし皆、ガタキリバから離れるぞ！」

タジャラトサゴシャウ「「「賛成」」」

[illegible]

！！T
T
グランド・オブ・レイジ3秒前

「ガタキリバ、ぎゃああああああ！ プトティラ、ごめん、悪かったから……それだけはああ！ ！？」

プトティラ「ぶえええええん！」
暴発

ガタキリバ「ぎゃあああああああ！」

タマシー「通りがかってきてみれば…何やってんだお前ら!？」

タトバ「あ、今回EXステージに出るタマシーだ」

タジャドル・プティラがシャウタが忘れたが、とにかくどっちかに派手に負けてきたタマシーだ」

タマシー「言うな！思い出すだけで泣けてくる」

「ガタキリバ
頭にでかいタンコブ

「サゴーゾアレだけで済むって、ギャグの世界怖い」

ライター「普通なら、メダル碎けてるよな」

プティラ「ぶっきゃぶ…ぶっきゃう…」

シャウタ「よしよし……ガタキリバはもう大丈夫だからね、うん」

ブラカワニ「それより、救急箱持つてこないとなあ……それか氷嚢」

プトティラ「ところで、【えくしゅとらステージ】って何？」
タトバ「難しいで3ターン以内に勝つと、ランダムで特別なバトルが始まるんだよ」

シャウタ「ちなみに、確率は低いけど次の弾に出てくる人が1人確実に顔見せしに来るH E Xステージもあるんだよ」

タジャドル「そういえば、今弾のH E Xステージって誰が？」

ラトラーター「…お前が、射的で精神ガーツタガタガタキリツバガタキリバ にした人だよ…」

ガタキリバ「……ああ、龍騎がそういえば言ってたな…」 何とか復活

シャウタ「……タジャドル、お前、メダルチェンジかプロドラで行ってきたら？（難しいモード）」

タジャドル「死ねってか」

シャウタ「むしろ逝ってこい」

プトティラ「さよならタジャドル！」

タジャドル「ヲイ」

ブラカワニ「ちなみに、スキルは無視してでも“オーズ兄弟チーム”で行きたいって場合は、タジャドルを例に挙げて…」

* L R タジャドル・フレイム・スリーの場合【攻撃ベスパ】

0 0 3 弾 タトバ（タトバキック）

0 0 5 弾 シャウタ（オクトバニッシュ）

0 0 6 弾 ラトラーター（チェンジメダル）

* S R プロミネンスドロップの場合【防御ベスパ】

003 弾ガタキリバ（ガタキリバキック）

006 弾タトバ（チェンジメダル）

006 弾シャウタ（チェンジメダル）

01 弾ブラカワニ（デンジャラススリー）

*006 弾CPCタジャドル・チェンジ・ザ・メダルの場合【必殺
ベスパ】

004 弾シャウタ（コアチャージャアタック）

005 弾プトティラ（メダガブリューシユート）

006 弾ガタキリバ（チェンジメダル）

ブラカワニ「…が、おすすめかな！」

タジャドル「何してるんだ親父イイ！？」

タトバ「余談だけど、体力ベスパは…LRシャウタ、SRサゴゾ、
サゴゾCPC、プトティラCPCだよ！」

ラトラーター「スキルなんて気にするな！気合いで行けば何とかな
る！！」

タジャドル「おおーいッ！？ガンバライドしてない人、置いて行か
れてるから！完全に置いて行かれてるから！！」

プトティラ「逝ってらっしゃいタジャドル！でも、シャウタとは組
まないでね！！○○」

タジャドル「おいコラアアア！」

063: プトも出たいよ！運動会

プトティラ「○○」 真っ白

タジャドル「ただい…うわ、なんだこの真っ白に燃え尽きてるのは」
タトバ「あー、おかえり。人の中学最後の運動会だっというのにバイト行つてた人」

タジャドル「急に休みになった人がいたんだから仕方ないだろ！…で、あそこの化石はどうした？」

サゴーズ「実は…」

〈数時間前〉

ラトラーター「おー、そこだタトバ、頑張れ！」

プトティラ「ねーねーねーねー」

ガタキリバ「ん、どうした？」

プトティラ「プトも運動会やりたい！どうしたらやれるの？」

サゴーズ「えーっと…あ、この『玉入れ乱舞』っていう競技なら皆出られるよ」

プトティラ「プトも、走ったり綱引きしたりしたい！」

シャウタ「あー、プトティラ、あのね。……プトティラはお客さんだから、参加できないの」

プトティラ「ぷえ？」

サゴーズ「運動会って言うのは、学校に通っている生徒の皆でやるものだから……」

ガタキリバ「その、言いくいんだが……」

ラトラーター「……プトティラはこの中学の生徒じゃないから……」

ブラカワニ「……玉入れ以外は無理、かなあ」

プトティラ「やりたい！やりたいー！！何でプト駄目なの！？」

シャウタ「誰か、プトティラに嫌われる覚悟で言える人……」

サゴーズ「……現状維持で」

ガタキリバ「同じく……」

ラトラーター「……」

ブラカワニ「プトティラ、」

プトティラ「ぱぱあん……何でプト駄目なの……Ｔ　Ｔ」

ブラカワニ「　　運動会は練習とか色々しないといけないから、練習してないプトティラが出るのは非常に危険なんだよ」

プトティラ「練習すれば出られる！？」

ブラカワニ「今からじゃ無理かなあ……ごめんマイペット。こればかりは、パパン達にもどうにもできないのだよ」

プトティラ「Ｏ　Ｏ」

（回想終了）

タジャドル「ああ、それで真っ白になっているのか…」

プトティラ「○○」

タトバ「ショックすぎて、玉入れすら出来なかったからねえ…いや、ガタキリバとラトラーターみたいに玉入れでぶつけ合いするよりはいいけど」

ラトラーター「だってバカキリバのノーコンが…」

ガタキリバ「アホラーターのノーコンが…」

サゴーズ「どっちもノーコンすぎるんだよ…」

シャウタ「特にガタキリバ、お前、それでよく6年間バスケット部にいられたな」

ブラカワニ「どーしたもんか…」

X「あの一、すいません」

シャウタ「あ、X先生。どうしたんですか？」

X「タトバが学校に体育帽忘れていたから、届けに着たんだけ」
タトバ「げっ、そういえば忘れてた…！」

プトティラ「○○」

X「……で、あれは…何が？」

シャウタ「かくかくしかじか…」

X「これこれうまうま。 成程…それはショックだっただろうなあ…」

ラトラーター「どうしたらいいんっすかね」

ガタキリバ「馬鹿、X先生にはどうしようもないだろ」

X「まあ確かに、ガタキリバの言う通りなんだが。……うーん、そういうえば、お前達の高校って体育祭はいつ頃だったっけ」

サゴーズ「10月の中旬です」

X「だったら…今頃はスーパー1先生達がまだ、競技について話し

合ってる時期だな」

タジャドル「で、」

V3「だから、今年の教師対抗・障害物競走は響鬼先生に50tの重りのハンデを…」

スーパー1「50tでハンデになると思ってますか！？100tだ！」

響鬼「うーん、やっぱり、俺出ないほうがいいんじゃない？」

ライダーマン「それだと、生徒達から不満の声が挙がるんですよ…特に、C組から」

スカイライダー「響鬼先生だけ、10秒遅れでやるとか」

威吹鬼「それだったらスーパー1先生も5秒遅れスタートでいいんじゃない…」

アメイジング「そもそも、響鬼先生は何で保健体育なのに毎回トップを掻つ攫うんですか！そのせいで、『響鬼先生いれば勝つる』というジンクスが出来ているんですよ！？」

バイオライダー「俺は怒りの王子！」

ZX「あの、事務員明らかに関係なさそうなので、俺帰っていいですか」

タジャドル「なんで先生達がここで会議をするんだーッ！」

X「うん、すまない」とりあえず茶菓子買ってきてくれた

V3「で、何でプト介は灰になってるんだ？」茶菓子持ってきてくれた

プトティラ「O O」

スーパー1「ツツコミを入れる元気もないみたいだな…」お茶持ってきてくれた

X「かくかくしかじか」

ライダーマン「これこれうまうま。……ああ、それは確かにシヨツクだな……」

ZX「どうします？こっちも、玉入れ競技ぐらいしか入れられないですし」

$$\begin{matrix} V \\ 3 \\ \vdots \\ L \end{matrix}$$

スーパードット

スカイライダー（あ、あのドS二人何か悪いこと考えたんじゃない…）

V3「よおおおっし！だったら、今年の教師対抗・障害物競走は……響鬼先生に代わってプト介出場だ！！」

スーパー1「許可!!!」

オーズ一家「ええええええええええ!!?」

スカイライダー「言い出すと思った！」

「プティラ……プトでられるの……？」

ライター「やった、プロティラが息を吹き返した！」

V3「だって響鬼先生出ると、パワーバランスが明らかに偏るし（障害物ぶち破るし足速いし）」

スーパー1「正直、あんた体育教師しろって感じですねー」

Z
X
「おい体育教師」

ライダーマン」というか、いいんですか響鬼先生、勝手に決められてますけど……」

響鬼「いいんじゃない？あのまま灰になったままだと、何か可哀想だし」

プティラ「プも運動会できるの……?」

シャウタ「そうみたいだから、先生達に感謝しなさい……あと、お菓子持ってきてくれた上にきっかけ作ってくれたX先生にも」
プトティラ「…ありがと！タジャドルより大好き！！><」
タジャドル「おい、それ先生達の扱いが俺の次つてことになるぞ」
ガタキリバ「それは流石に失礼だから、タトバかサゴーズより上に持ってきてやれ」
プトティラ「そだね」
タトサゴ「ちょ…orz」

スーパーー「ところでシャウタ、お前、…なんで応援団長になつてんだ？」

タトタジャガタラトサゴ「…えっ！？」「」

ブラカワニ「なんで！？マイ息子！」

シャウタ「だ、だって、…応援団各クラス何人か出すって言われても、リュウガは放送係だしオーガは保健係で…残りはやる気なし。

…そして、話し合いでも流れるにそうなっちゃって…」

ラトラーター「なんで？」

シャウタ「……お前の弟だからだよおおおお！！！」

V3「あー、そういえばラトラーターやガタキリバは、今年も応援団長か…」

ラトラーター「うん。俺C組」

ガタキリバ「俺はB組だな」

サゴーズ「俺もB組だけど、普通に応援団員（旗持ち）だし…」

シャウタ「ふふふ…今更だけど、A組に味方はいないんだな…！」

タジャドル「なんか……ごめん。俺、バカキリバ達より一つ上で」

A組出身

X「　　そういえば、ラトラーターのいる応援団って確実に応援合戦で優勝しますよね…不思議と」

ZX「あの性格だし、動きも身軽だからなあ…」

V3「ガタキリバの一人ピラミッドも壮観なだけだな」

シャウタ「もうやだ運動能力だけ高い兄のせいで応援団長確定って…orz」

プトティラ「OO」

ガタキリバ「あ！　プトティラが　期待の眼差しで　こちらを見ている」

サゴーズ「どうやら　応援団に　興味を持ったようだ」
タトバ「どうしますか？」

ブラカワニ「　迎え入れる　断る　誤魔化す　ぷう」

シャウタ「何このRPG風会話」

タジャドル「…個人的に、『ぷう』が気になるぞ」

シャウタ「個人的には、自粛しなさいって意味で『断る』にしたい…」

ブラカワニ「迎え入れる　断る　誤魔化す　ぷう」

プトティラ「…omO」

ガタキリバ「プトティラが　泣きそうな目で　こちらを見ている」

サゴーズ「プトティラの　ハートに　100のダメージ！」

タトバ「プトティラの残りHP　20/120」

シャウタ「だから…」

タジャドル「これ以上我俣言っな！」

ブラカワニ「迎え入れる　断る　誤魔化す　ぷう」

プトティラ「ぷっきゅーい！><」

タジャドル「げほう！？」

サゴーズ「プトティラの テイルディバイダー！」
ガタキリバ「タジャドルに 9999のダメージ！」
タトバ「タジャドルは 倒れた！」
シャウタ「お前ら本当に楽しそうだな!？」

ラトラーター「面倒くさいなーもー、シャウタのところの応援団に入れればいいじゃん…」

ブラカワニ「迎え入れる 断る 誤魔化す ぷう」

スカイライダー「誤魔化す部類なんだ!？」

プトティラ「きゅっ○○」

V3「喜んでるな」

スーパード「狙っていたが如く喜んでいるぞ」

X「まあ、シャウタという保護者がいるなら大丈夫だろうな…」

ブラカワニ「迎え入れる 断る 誤魔化す ぷう」

シャウタ「…やりたいの？」

プトティラ「うん」

シャウタ「……俺も心細いし、プレッシャー強いし、一緒にやる？」

プトティラ「わーい!><」

タトバ「よかったね、プトティラ」

トライド「…」 羨ましそうに窓から見ている

ラトラーター「先生、トライドもOKいいですか？」

スーパード「……お前の代わりで短距離走に出すぞ？」

ラトラーター「もちコース!」

ガタキリバ「いいのかよ!いや、お前出ないならA組とB組が喜ぶ

からいいんだけど!!」

064：応援練習するよ！

サゴーズ「よし！今年も頑張るよB組！！」 2年

ストロンガー「おおー！」 1年

ガタキリバ「おい旗持ちそれ俺のセリフ！」 3年（団長）

ラトラーター「C組ファイター」 3年（団長）

ドラゴン「シャウタさんが応援団長って聞いたのに：orz」 1年

マイティ「本格的にアホだろお前」 2年

シャウタ「無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理」 1年（団長）

タイガ「大丈夫かな、今年」 3年

ダークキバ「無理じゃない？」 2年

プトティラ「シャウタアアアア」 ペット

響鬼「いやあ、青春だねえ」 2年C組担任

スカイライダー「そんなこと言っている場合ですか！？シャウタ全力スルーですか！！？」 3年C組担任

イクサ「よし、今年はイクササイズで決まりだな！」 1年C組担任

スカイライダー「させません！」

ラトラーター「やりたくないっす！」

V3「ガタキリバ今年は50人でサンバ踊れ」 2年B組担任

スーパードール「それかサゴーズの重力操作で浮け」 3年B組担任

威吹鬼「鬼だこの人達……！」 1年B組担任

歌舞鬼「……」 1年A組担任

ライダーマン「……シャウタ……」 3年A組担任

アメイジング「……生きる……！」 2年A組担任

ZX（そして誰もプトティラにはツツコミを入れない……） 事務員

プトティラ「応援団って何するの？」

シャウタ「まずそこから説明！？」

プトティラ「うん」

シャウタ「あー……あのね、応援団って言うのは、……応援する人達なの」

プトティラ「きゅい」

シャウタ「それでね、応援合戦でエールの交換をしたり、他の試合でも率先して声を上げて応援したり」

プトティラ「ぷいぷい」

シャウタ「肉体労働激しいの」

プトティラ「シャウタ」

プトティラ「……なんでシャウタ団長さんになったの？O O」

シャウタ「……なんでだろう……！orz」

ライダーマン（ラトラーターとガタキリバの、三年間応援団長コンピのせいとは言いにくい……）

アメイジング（そして、歌のタイトルが『Shout out』だからとも言えない……）

歌舞鬼（そして、ぶっちゃけ適当というのは一番言えない）

ドラゴン「何で俺、C組なんだろう…！」
ペガサス「兄さん…いい加減にしないと、犯罪者になりますよ？」
マイティ「しつかし、……俺達兄弟はタイタン以外C組か…」
タイタン「すっげえ泣きたい（一人ぼっち的な意味で）」

シャウタ「…きゅいきゅいきゅいきゅい」 プトティラの後ろに隠れる

プトティラ「- -」 満足

サゴーズ「プトティラの周囲にお花畑ができてる…」

ガタキリバ「タジャドルもいない上に、シャウタに頼られる（盾として）ポジションだからなあ」

ラトラーター「あいつよく面接で受かったな」

ドラゴン「うおおおおー！シャウタさん俺が今すぐ助けにイイイイイ！」

V3「やめんかお前はC組だC組！」 ラリアット

スーパード「エレキ光線」 何となく追撃

ドラゴン「ぐわばばばばばば…！」

タイマイ「もっと殺ってくださいお願いします」

ペガサス「申し訳ありません、あんな兄で…」

スカイライダー「それにしても、」

エターナル「地獄の応援合戦を楽しみな…！」
ネガ電王「へっ、かつたるいぜ…」

牙王「…」

幽汽「…」

インペラー「なんか暑苦しいのって苦手なんだよなあ」

ガイ「そうそう」

スカイライダー「今年もA組って…大変そう、ですね……」

アメイジング「正直、成績がいいばかりにA組になったタジャドルとライアとシャウタに申し訳ない（後リユウガ）」

V3「あれ、ギャレンは？」

アメスカ「あれは…なあ……」

プトティラ「おーえん合戦するよ！シャウタもやるー」

シャウタ「うん…」

スカイライダー「プトティラが唯一の癒しですね、マジで」

V3「プト介頑張れよー」

プトティラ「プト介じゃないもん！」

ライダーマン「流石にツツコミは入れるのか」

歌舞鬼「じゃあまずは、扇子を持ってこう・こう・こう…やってみる」

プトティラ「ぶ、きゅ、きゅぷい！」 V3の方見てた

シャウタ「…」 出来てるけど気力ない

他A組「…」 サボり大半、残り無言でやってる
ライダーマン「 プトティラ以外元気がないツツツ!？」

アメイジング「しかもプトティラ、歌舞鬼先生を見なさい！V3先生別のクラスだから！！」

歌舞鬼「もう一回！」

シャウタ「……」 元気がない

他A組「……」 変化なし

プトティラ「ぷー！」 スーパー1の真似し始めた

ライダーマン「プトティラは梅花の型しな〜い！スーパー1先生も梅花の型を取り入れな〜いッ！！」

歌舞鬼「……orz」 意気消沈

アメイジング「ああつ、歌舞鬼先生ッ！？歌舞鬼先生ーッ！！？」

ライダーマン「もう最終兵器呼びましょうマジで」

アメイジング「……大丈夫ですかね？」

ライダーマン「放課後だし大丈夫ですよ。……あー、もしもし……」

で。

X「……なんで私が呼ばれないといけないんですかーッ！？」

ライダーマン「ホントすまんでも正直助けて」

アメイジング「既に、歌舞鬼先生が再起不能なんです……！」

X「何で見た目は悪そうに見えても、内心デリケートな人にA組を任せたんだ校長は！」

シャウタ達の高校の校長は1号です

X「…で、何をすればいいんですか？正直アマゾン学校に置きっぱなしなんで早くしたいんですけど」

ライダーマン「A組に喝を入れてください」

アメイジング「ただし、シャウタの歌舞鬼先生以上のガラスメンタルは傷つけないようにお願いします」

スカイライダー「後、プトティラにトラウマは作らないようにお願いします」

X「はあ…じゃあ、シャウタとプトティラは適当に理由をつけて離しておいてください」

V3「任せろ、それ超得意」

V3「プト介ー」

プトティラ「プト介じゃないもん」

V3「体育館倉庫の中に興味ないか？」

プトティラ「楽しい？O O」

V3「トランポリンとかあるぞー。スーパー1が用具点検に行くついでに、一緒に連れて行ってもらえ」

スーパー1「終わるまでトランポリンで遊ぶか？」 本当は終わってるけど空気読んだ

プトティラ「きゅ！> <」

V3「シャウター」

シャウタ「はい…？」

V3「ほれ」 校長室のふかふかクッション
シャウタ「！！！！」

V3「ほーれほーれ」 全力疾走
シャウタ「…もふもふううううう！」 全速力

ガタラト「V3先生スゲエ…」

サゴーズ「人より一年長くいて、あの先生に対する感想がそれ？正直今更だと思う」

ガタキリバ「いや、そう思うんだけど…」

ラトラーター「よしサゴーズ、お前もちょっと離れたほうがいい…トラウマ作るぞ」

サゴーズ「ええ…？」

ガタラト「正直、冗談じゃないからな？」

サゴーズ「…はい」

アメイジング「ペガサス達も逃げとけー、見たらトラウマものだぞ」

X「何段階ぐらいいいですか？」

スーパード「100段階中の99段階目で」

ライダーマン「…5段階中の4段階目で！」

スカイライダー「10段階中の…9段階目ぐらい？」

X「いや、それほど意味合い一緒ですよ？ 面倒だし中間ぐら

いでいいや、もう…」

ストロンガー「一体何が始まるんだ？」

ガタキリバ「馬鹿、ストロンガー、お前も逃げ…」

X「ガイ？」

ガイ「ん、一体な…げっ!？」

X「 高校に進学したら俺を呼ぶ事態を起こすなって、卒業する時に言つたよなあ…？」 満面の笑みで頭鷲掴み

ガイ「ぎゃああああああ！ごめ、頭割れる…頭蓋骨までミシミシ言ってるウウー!？」

X「エターナル以下省略も、…練習…真面目にやろうか？」 超

いい笑みで力込める上に相手持ち上げる

ガイ「頭…頭がアアアア!!」

A組集団「…すいませんでしたアアアアッ!!」
全
力土下座

ストロンガー「……」 蒼白

ガタキリバ「うちの中学な、…問題児の多さはかなりのもので…」

ラトラーター「教育指導としてX先生が来てから、それなりに問題行動は減ったんだよな」

ガタキリバ「しかし…懐かしいな、あのアイアンクロー…」

ラトラーター「二人一緒に宿題忘れて、二人一緒にやられたときはいい思い出だった」

スカイライダー「……え、お前ら、なんでそんな平然としてんの？」

ガタラト「被害者は語る」

ライダーマン「…そりゃあ、10回以上も指導室のお世話になっていれば、慣れるよな」

ストロンガー「いや、無理だろ…10回やられたら完全に永遠のトラウマだろ普通!？」

アメイジング「それがあの双子」

シャウタ「校長室のクッションもふもふだった…」

プトティラ「ふわんふわんしゅるー」

スーパード「戻ったぞー」

V3「で？」

ガイ「…応援合戦の練習、気合入れて行くぞ!」

A組集団「…オーッ!!」

シャウタ「あれ、何でやる気満々に…？」

プトティラ「ぷ？」

サゴーズ「知らないほうが、いいよ…！」

こっそり見て後悔した

065：白熱運動会！行進編

運動会当日…

タトバ「見事に晴れたねえ」

ブラカワニ「朝から雨って予報だったのになあ」

タジャドル「そりゃあ、あれだけ執念の籠ったてるてる坊主作れば晴れるだろ…」

サゴーズ「うわっ、窓にびっしりとてるてる坊主が！」

ガタラトプト「ZZZZ」　てるてる犯

タトバ「ソファで寝てるし」

サゴーズ「床にも10体ぐらい、てるてる坊主散らばってるし…」

シャウタ「こいつら、ティッシュ大量無駄遣いした罪で怒っておくべきか？」

タジャドル「おかず一品抜きにしておいてやれ、今から怒ると無駄に疲れるぞ」

トライド『グオオン（訳：執念って凄いな）』

くそして学校く

ZX「おー、流石に早いな」

プトティラ「おはようございます！O O」

オーズ兄弟「「おはようございまーす」「」

ZX「何だ、タジャドルも来たのか」

タジャドル「ええ…まあ」

タトバ「俺の運動会の際には来なかったんですよ」

タジャドル「だからバイトで仕方なかったって言ってるだろ！？」

ブレイド「あれ、お前らも来てたの？」

プトティラ「うえいだ！」

シャウタ「おはようございます」

サゴゾ「え？なんで、うえいさん…違った、ブレイドさんまで？」

ブレイド「実は、従兄弟の応援に言ってくれないかって二人の両親に頼まれてさ。何か用事があったみたいで」

ガタキリバ「そういえば、うえい…ブレイドさんの従兄弟って？」

龍騎「おー！うえいだー！」

リュウガ「いい加減ブレイドって覚えてやれアホ兄貴」

ブレイド「4日ぶりー」

ラトラーター「知り合い？」

ブレイド「こいつらが俺の従兄弟」

ガタキリバ「初耳なんですが！？」

龍騎「だって言っていないもん」

リュウガ「触れてもいないしな…」

X「皆早いな」

シャウタ「おはようございます、先生」

タジャドル「ああ、X先生を見たうちの中学卒業の問題児共が震えている…」

アマゾン「アマゾン、プトティラ出る聞いた。だから遊びに来た」

X「俺はその保護者…」

サゴーズ「休みなのにわざわざどうもです」

ブラカワニ「場所って何処陣取る？」

トライド『グオン（訳：陣取るのかよ）』

X「昨日の予報じゃ雨だった割には、今日になって降水確率0%の上に日差し強いからですね…テントか、日陰のある場所がいいですよ」

ブレイド「やっぱそうだよなあ」

X「あと、シャウタは暑いと70%の確率で死にかけるから、水分補給できる場所がいいですね。っていうかプトティラとシャウタはこれ持ってなさい」ポカリ手渡し

ラトラーター「流石アマゾンのオカン」

ガタキリバ「流石シャウタの元担任…親父より分かってるぞ」

タジャドル「後、何かもうごめんなさい色々と…！」

キックホッパー「いい日陰だ…」

パンチホッパー「ジメジメしていい感じだね、兄貴…」

王蛇「ふん…」

龍騎「日陰に薄暗いのが集まってるな」

リュウガ「…アマゾンとプトティラに悪影響ありそうだし、あそこは却下だな」

ブラカワニ「えー、でも、もう場所なんてないんじゃない？」

サゴーズ「皆、場所取るの早いなあ…」

ラトラーター「X先生、職権乱用してくれませんか？」

X「何故に!？」

V3「おー、早いなプト介」

プトティラ「プト介じゃないもん」

シャウタ「こらプトティラ、反射的なツッコミを返すんじゃないで、挨拶は？」

プトティラ「おはよーございます!○○」

ライダーマン「元気だなあ」

V3「で、お前ら何してるんだ？」

タジャドル「かくかくしかじか」

ライダーマン「これこれうまうま。…あー、こればかりはどうしようもなあ」

ブラカワニ「とりあえず、マイペットとシャウタが熱中症にならないければそれでいいんだけどなあ…」

V3「それなら、いい場所があるぞ」

スカイライダー「で、教員用の席に呼んだんですね？」

V3「うん」

スーパード「理由は？」

V3「シャウタとプト介の避暑地がなかったのと、シャウタの作った弁当を拝借できると思ったから」

スカイライダー「そのお陰で、あぶれた教師が居ることも忘れずにあぶれた人

V3「うん、あとで饅頭やるから」

スーパード「…しょうがないから、来賓席で座っておくか…」 あぶれた人

アメイジング（うち、父さんが場所とつていてくれて助かった…）
あぶれた人

シャウタ「ほらプトティラ、行進するから一緒行くよ」

プトティラ「…行進つまんない… - m -」

リュウガ「つまんない言うなら帰るか？」

プトティラ「やだ！」

リュウガ「じゃあ行け」

プトティラ「ぶきゅーい…」

プトティラ「なんでリュウガはしないのに、プトはしないといけなの？」

シャウタ「リュウガも龍騎も、放送係だからです」

ラトラーター「しつかし、龍騎三年連続だよな」

ガタキリバ「何だかんだで人気だからな、あいつの実況」

サゴーズ「リュウガは何年連続になるかな…」

龍騎「それでは第753回、本郷町立一文字高校の体育大会を開始します。実況は3年B組龍騎、解説は1年A組のマイ弟で行います」
リュウガ「おいどつかの放蕩親父みたいな呼び方やめろ。教員席にいるオレンジも「パパンシヨーク」って叫ぶな泣くな本来その席に座るはずだったスーパー1先生に謝れ」

龍騎「そんなことはともかく、まずはA組の行進です」

リュウガ「今年の応援団長は、ほぼラトラーターとガタキリバのせいで強制的に決められてしまった、1年A組のシャウタです」

シャウタ「…」 右手と右足が同時に出ている

リュウガ「お前本当になんで応援団長なんだよ！」

龍騎「アガリ症にやらせるA組、本当に人選がいい加減です。副団

長は、X先生の力技によって強制決定された2年A組のダークキバです」

リュウガ「お前は後でX先生に真空地獄車されてこい」

龍騎「さて、次はB組の行進です」

リュウガ「聞けよ！」

龍騎「B組の応援団長は、3年B組のガタキリバ…副団長は、その弟である2年B組のサゴーズです」

リュウガ「サゴーズの旗持ち似合うな、ダークキバ以上に」

ダキバ「ひどっ!？」

サゴーズ「え、そう？」 力緩んだ

ガタキリバ「ぎゃーっ!？」

サゴーズ「ぎゃあああああ!ガタキリバごめええん!？」

龍騎「褒められたサゴーズ、力が緩んで先頭のガタキリバに旗を当てました。リュウガが8割悪いですねこれ」

リュウガ「俺か!?俺なのか、いや俺なんだろうけど、それでも8は多いぞせめて6!」

龍騎「生徒最後の行進は昨年度優勝のC組です」

リュウガ「スルーすんな!」

会場内（（人気あるの分かるわ…））

教師勢（（弟入ったせいで、ツツコミ側もうまいことになってるな…））

ガタツク（良かった、今年は弟がやってくれて…!） 2年連続解説という名のツツコミ

龍騎「C組の応援団長は、3年C組のラトラーター。第二ペットのトライドに乗っての登場です」

ラトラーター「高校最後の運動会、楽しむぞー!」

トライド『グオオン！』

全校生徒「……ちよい待てそれいいの!?」

龍騎『許可はスーパー1先生と1号校長が出しました』

全校生徒「……おい体育教師と校長!」

龍騎『C組の副団長は、1年C組のクウガ・ペガサス。いやー、女の子がいるだけで華がありますねえ』

リュウガ『親父臭いぞそこ』

龍騎『流石に女の子に旗を持たせての行進はキツイので、兄である2年C組のマイティが旗持ちを代行しています』

リュウガ『まあそうだな』

龍騎『さて、クウガ兄弟はサゴーズとタイタンが友達だったり、ご両親とブラカワニさんが仲良しだったり、プトティラとグローイングが仲良しだったり、シャウタとペガサスとドラゴンの変な三角関係だったり、オーズ兄弟と関わりが深いです』

リュウガ『そこ関係ねえ!そしてお前はサラッと何を言っている!』

龍騎『そんな中、兄弟と密接な関係のないマイティは……タイタンのテコ入力でサゴーズとでも仲良くしないと、キヤラ的に危ないぞ』
リュウガ『そんなご本人が分かっていそうなことを言うなアア!』

龍騎『最後は、教師陣の行進です』

リュウガ『今年は、毎回響鬼先生がチート過ぎるせいで、教師対抗障害物競走や教師&生徒対抗二人三脚ではプトティラが代走となります』

龍騎『あと、短距離走ではラトラーターの代わりにトライドベンダーが走ります。ラトラーターの出番は、応援合戦とクラス対抗リレーと綱引きと二人三脚です』

C組生徒「……それ初耳なんだけどおおおお!?!」

A B 混合「……よっしゃああああああああああ……」
ガタキリバ（…実際は、プトティラもトライドも速いけどな…!）

龍騎「後、プトティラは赤心少林拳学んです」

リュウガ「その個人情報一番いらねえええええ！」

龍騎「さあ、次回から、開会宣言すつ飛ばして競技だよ！」

リュウガ「すつ飛ばすな！1号校長の出番が極端に減るだろおお
!?!」

でもすつ飛ばします

066：白熱運動会！競争編

龍騎『宣言通り、開会式はすっ飛ばしてエール交換です』
リュウガ『本当にすっ飛ばしやがったこの兄！』

1号「…」パイプ椅子の上で体操座り
スーパードンマイ「どんまい」
V3「饅頭食べます？」

シャウタ「きゅいきゅいきゅい」　プトティラガード
プトティラ「…」ご満悦
ガタキリバ「A組、もう腹括ってやってくれ」
ラトラーター「無理ならプトティラ頑張って」
龍騎『シャウタの対人スキルの悪さが裏目に出ています』
リュウガ『すまん否定できない』
龍騎『シャウタはいつそ、目の前の相手をカボチャとか思えないなら、自分の好きなもふもふで考えればいいと思います』
リュウガ『何言い出してるんだ馬鹿兄！』

シャウタ「もふ…もふ…」　ロックオン
ガタキリバ「おいやめるシャウタ、真に受けるな、俺はもふもふじゃないガタガタだ！」
ラトラーター「ついでに俺はラトラトだからね」

プトテイラ「プトはプトプトね！」

リュウガ「いいからさっさとエール交換済ませてくれ！」

シャウタ「もっふううううう！！！」

龍騎「ハイ、では次にB組」

リュウガ「駄目だろ！やり直させる！！！」

ガタキリバ「…にくきゅうううううー！！！」

リュウガ「何でお前もまともにしないんだよ！」

龍騎「では、最期にC組のエール交換です」

リュウガ「スルーすんなよ！」

プトテイラ「ぶつきゅん！><」

リュウガ「何でお前がやるんだよ！」

トライド「ガオオオオン！」

リュウガ「何言ってるのか分からないし！お前も混じってどうするんだ！！！」

ラトラーター「A組、B組、C組の健闘を願って…フレー！フレー！ABC！！！」

リュウガ「一番のチャランポランが一番ちゃんとしてくれたよ！」

龍騎「それじゃあ、最初の競技は…1年生によります短距離走です。」

リュウガはさっさと行きましょう

リュウガ「畜生！ガタツクよく耐えられたなこの苦痛に！！」
でもダッシュ

龍騎「リュウガがいないので、暇そうにしていたタイタンを連れてきました」

タイタン「連行されましたタイタンです」

龍騎『短距離走は、各クラス3名代表を選出してのガチンコバトルです。A組代表はリュウガ・オーガ・エターナル、B組代表はストロンガー・キババッシャー・G3、C組代表はドラゴン・ペガサス・レンゲルとなっております』

タイタン『各クラス、遅そうなのが一人ずついますね!』

オーレンG『『『言わないで気にしてるから!』『』『』

タイタン『さあ、最初はオーガ、G3、レンゲルが定位置に着きます』

1号『位置について、よい……』

リュウガ『なんで校長がピストル持ってるんだよ!』

龍騎『出番がないので、スーパー1先生から強奪してきました』

タイタン『嘘だよスーパー1先生も合意したよ!』

リュウガ『嫌だこいつらの司会、ツツコミがない!』

1号『ドン!』

タイタン『さあ始めました、短距離走!予想通り、オーガは衣装のビラビラで走り辛く!G3はそもそも重装甲、レンゲルに至っては腹が』

リュウガ『腹言うなアアアア!』

龍騎『ちなみにリュウガは、王蛇VSリュウガの時はリュウガの中に高岩さんがいたので、スーツが若干余りまくりでした』

リュウガ『お前殺すマジ殺すあの兄!』

エターナル『しかも、メタ過ぎる』

この世界のリュウガは中身高岩さんで脳内補完してください

タイタン『続きまして、エターナル、ストロンガー、ペガサスです』

龍騎『女の子出すってどんな神経してるんでしょうね、1年C組』

ストロンガー『うおおおおおー!』

エターナル「地獄のパーティタイムだ！」

ペガサス「…なんで私、この人達と走っているんでしょうか…！」

シャウタ「……」 シャチ放水

エターナル「ごぼっ!？」

ストロンガー「ぶほっ!？」

リュウガ「 お前もお前で何してるんだアアアー!？」

タイタン「プトティラだともっと凄い事してたと思うのは、俺だけでしょか」

龍騎「プトティラ足速いから大丈夫」

ストロンガー「いや、まず反則取れよ!っていうか自分のクラスの奴巻き込んでるんだけど!？」

龍騎「ごめん。俺でもきつと妨害した(男2人に女の子1人だし)」
ストロンガー「おんどりゃあああああ!？」

タイタン「最後は、リュウガ・ドラゴン・バツシャーの三人です」

龍騎「変態はどこまで食い下がるでしょうか」

リュウガ「おい変人」

ドラゴン「俺、一番になったらシャウタさんと」

リュウガ「お前もう一生寝てろよ!」 拳骨

ドラゴン「ぎゃん!？」

龍タイ「うむ正解」

1号「よいドン!」

リュウガ「マジ殺すあの兄マジムツコロ」

バツシャー「速ッ!？」

タイタン「兄への恨みを糧に、リュウガ独走!……その一方で、ドラゴンは地面に埋まっています」

ドラゴン「 頭だけ地面から出てる

龍騎『試合終わるまで引っこ抜かないでね』

リュウガ「抜かねえよ！抜くもんか抜かないけどお前はぶっ飛ばすよバーカー！」

タイタン『リュウガ壊れてます』

龍騎『えー、続いては、3年生によります…綱引きです』鉄

仮面なのでリアット平気

リュウガ『…さっさと行けよ馬鹿兄貴…！』右腕押さえながら

タイタン『お前も、何で普通に気付かないかな…』

タイタン『最初は、B組とC組の戦いです』

ブトティラ「きゅーオーオー」

ラトラーター「C組頑張るぞ！」

アギト「おー！」

カブト「ちよつと待て、何か混じってるぞ！」

ファム「白熱する綱引き、その最中、自分と相手の手が重なって恥らうロマンス…！」

スカイライダー「…誰か、今すぐにでもファムを抜かして別の入りなさい。何か危ない」

カリス「C組に負けるな！」

ガタキリバ「アホラーターに負けるな！」

キバーラ「ああつ、運動会ってテンションハイになります！B組のいいエサです…！」

トライド『ガオオン！』

ガタック「つて、こっちもなんか混じってるし…こいつむしろC組だろーッ!？」

スーパー1「死ぬ気で逝けよお前ら！」

ガタツク「漢字が違ーう！」

1号「よいドン！」

タイタン『さあ始まりました、白熱した綱引き対決！』

リュウガ『今の所、無駄に運動能力の高いC組がリードしています
が…B組も負けていない！』

プトティラ「ぷにゅううう…！><」

ラトラーター「くっそ、負けるか！」

トライド『グウウウ…！』

ガタキリバ「ぬおおおおお…！」

V3「プト介ファイター」

プトティラ「…プトしゅけじゃないもおーん！」 怒りを綱にぶつ
けた

3年B組「…ぎゃあああああー！？」

トライド『ウォーン！？』

タイタン『プトティラが一気に引き上げたああー！？』

龍騎『プト介強すぎます』

プトティラ「プト介じゃないもん！」

タイタン『つか、V3先生ってプトティラがメスって…』

龍騎『分かってるらしいよ。でもプト介』

スーパー1「あれで生きているだけ、V3先生は幸運だと思っんだ
が」 プト太郎と名付けて1回凍らされた人

スカイライダー「うんうん…」 飛んただけでストレインドウム
浴びた人

この後、3年A組の全敗で綱引きは終了しました

龍騎『次の競技は、2年生によります、借り物競争です』

リュウガ『A組からはダークキバ・牙王・幽汽、B組からはタイタン・サゴーズ・キバドッグ、C組からはマイティ・サソード・ダークカブトが出ます…っ！何だこのA組とC組のマイティ以外のネガ要素』

龍騎『ネガ要素であるはずの弟が言っちゃったよ』

1号「ドン！」

サゴーズ「早ッ！？」

龍騎『さあ始まりました、借り物競争！BGMは【Time judged all】でいきましょう』

リュウガ『選手の何人かがその場で判決くらいそうで怖い（judged的な意味で）な！』

ダキバ「呼んだ？」

リュウガ『呼んでないから走れよ！』

龍騎『先頭は、幽汽・マイティ・牙王・ダークカブトです！』

リュウガ『さあ、借り物は一体…？』

幽汽「…ウナギ…？」

マイティ「…ト、ラ？」

牙王「……ワニ？」

ダークカブト「カマキリ？」

リュウガ『とてつもなく限定的なものが来たー！！』

幽汽「…うおおおシャウタアアア！！」

シャウタ「ぎゃああああああ！？」

プトティラ「シャウタ駄目、別の探して！><」 プテラ氷結

タジャドル「凄まじく同意！」 クジャクファンネル

幽汽「めておっ!？」

ドラゴン「シャウタさあああん!」

スーパー「どさくさに紛れるなお前はアアア!」 スーパーライ

ダー閃光キック

ドラゴン「おりおんっ!？」

マイティ「タトバ…ラトラーターアアア!」

タトバ「ぎゃー!ぎゃー!ぎゃー!!!」

ラトラーター「それ逃げる」 楽しがつてる

トライド『ガオーン』 上に同じく

牙王「…うおおおおお!」

ブラカワニ「パパンダーッシュ!」 ワニレッグによる地すべり退避

プوتهイラ「パパンも駄目!」 ワインドスティンガー

牙王「とろざうるすっ!？」

リュウガ『っ!か、お前そのままでもいいだろ…』

ダークカブト「カマキリのライダー…誰だったっけ」

ガタキリバ「… テメエ失礼にも程があるぞ」

カリス「…(コクコク)」

龍騎『さーて、次々と無理難題(?)が発覚してきますねー』

ドッグ「… X先生!クルーザー、クルーザー!」

X「ごめん、それ実家の車庫に置いてある!」

サソード「… ア・マゾーン?」

X「貸さないぞ!」

ダキバ「… ライドルロングポール…?」

タイタン「ダイナモって何!？」

リュウガ『X先生いなかったら成立しないのばかりだな!？』

サゴーズ「…これならいける！」

龍騎『サゴーズは一体何を拾ったのか！？』

リュウガ『拾うのかよ！』

サゴーズ「すいません、スーパー1先生！来てください！！」

スーパー1「別にいいんだが…何が借り物なんだ？」

サゴーズ「【ドS】」

スーパー1「……………」

龍騎『借り物競争が、一転してサゴーズとスーパー1先生の追いかけっこに変わりました！』

スーパー1「サゴーズオオオオオー！！」

サゴーズ「……ぎゃあああああー！？」

リュウガ『いや、間違ってないよ！ドS的な意味で！！』

龍騎『無理なら隠れドSのX先生もおすすめだよ！』

リュウガ『お前本気で怒られてこい！』

借り物競争はサゴーズ、ダブト、ダキバの順でゴールしました

067：白熱運動会！不幸編

トライド『グオオオオン！』

ガタツク「ちよっ、待、…速過ぎるあいつうう！？」

インペラー「バイク反則…反則ーッ！？」

龍騎『さあ、三年の短距離走はトライドが猛威を振るう！』

リュウガ『猛威と言うか、ドラゴン食われてるぞ！登録し忘れていた1号先生轢かれてるぞ！！』

龍騎『戦わなければ生き残れない！（ドヤアッ』

リュウガ『どや顔で言うなどや顔でエエエ！』

龍騎『そんなこと言っている間に、トライドー等賞です』

リュウガ『一等賞とかそういう問題じゃねえよ！何故許可出したスパー1先生！！』

龍騎『続いては、一年生によるパン食い競争です』

リュウガ『1年A組はシャウタとプトティラ（俺の代走）、1年B組はストロンガーとG3、1年C組はドラゴンとナイトブランク体…ああ、ある意味地獄のパーティー確定』

龍騎『プトティラに期待しましょう』

ドラゴン「うおおお！シャウタさああん！！」

シャウタ「きゃー！！？」　プトティラガード

プトティラ「シャウタ泣かせないで！><」　　windスティン
ガー発動

ドラゴン「ぶごっ!？」

リュウガ「今からでも別の奴走ってくれよ、割とマジで」

龍騎「レンゲルは別に良さそうですが、これ以上腹の肉の足しにし
てしまうのもアレですしねえ」

リュウガ「だから腹言うなアアア！」

リュウガは高岩さんで脳内補完してください

龍騎「1号先生が重傷なので、ピストルはスーパー1先生が代行し
ます」

リュウガ「元々あの人の仕事だぞ!？」

スーパー「よい、ドン！」

龍騎「スタートしましたパン食い競争!トップに躍り出たのは…」

プトティラ「ぷきゅーん！」

ストロンガー「待て、…あいつも速過ぎるウウウ!？」

G3「何この拷問！」

ナイトブランク「色々と酷すぎる！」

リュウガ「流石に、ラトラーターとトライド以外制御の利かないプ
トティラだな…」

ドラゴン「うおおおおお!シャウタさああああん!！」

シャウタ「うわああああああああん!？」

リュウガ「そしてあの変態殴りたい!！」

龍騎「何でプトティラ代走にしちやったの？」

リュウガ「…俺は今、無性に自分を殴りたい!ついでに馬鹿兄も殴
りたい!！」

プトティラ「……シャウタのストーカーしちゃ駄目ー!！」　　スー

パー１直伝ドングリ礫

ドラゴン「せきしんっ!？」

スーパー１「よし、動く標的に当てることが出来たな! プトティラ
!!!」

タジャドル「先生何教えてるんだアアア!？」

龍騎「防御が豆腐なドラゴンなんて無視して、まずはプトティラが
パンコーナーに辿り着きました」

プトティラ「どれ食べよう…○○」よだれだらだら

リュウガ「そうだ、食い意地張ってるんだったコイツ…」

龍騎「続けて、ストロンガー・ナイトブランク・シャウタ・G3の
順番で辿り着いてきております…あ、ドラゴンは轟沈してますね」
プトティラ「ぷいぷいぷい」手を伸ばそうとする

ストロンガー他「…このおお!」

龍騎「ちなみに、仮面ライダーらしく…パンは100mのジャンプ
でやっと届く距離に設置しております。ついでに、ハンド禁止ね」

リュウガ「もう鬼だろこの競技」

シャウタ「とう」ジャンプしながらウナギムチで叩き落そうとする
リュウガ「反則すんなそーッ!」

龍騎「結局届きませんでしたけどね」

シャウタ「じゃ、これ」シャチ放水

リュウガ「だからあああああ!」

ドラゴン「うおおおお! せめて一等になってシャウタさんに褒め
てもらうぞオオオオ!」大ジャンプ

龍騎「ドラゴン復活しちゃいました」

リュウガ「しかし、高い! これは…」

シャウタ「あ」

ドラゴン「そなーっ!？」 放水直撃

龍騎『さ、皆頑張れー』

リュウガ『放置かよ! ツツコミしてやれよ!-!』

プトティラ「ぷえぷえぷえ…>m<」

龍騎『手をぶんぶん振り回してるだけじゃ届きませんよープトティ
ラー』

プトティラ「ぷきゅん…omO」

リュウガ『ん? プトティラが来賓席…って言うか職員席に向かって
いるぞ?』

龍騎『まさか…』

プトティラ「えつくすせんしえ、ライドル貸して! omO」

X「何故に!？」

リュウガ『ライドル禁止ーッ!』

龍騎『ロングポールですか、そうですか』

プトティラ「omO」 泣きそう

アマゾン「omO」 訴える目

V3「…」 無言で両手ボキボキ

スーパード「…」 無言で梅花の構え

X「何この完全アウエー!？」

スカイライダー「ドンマイ…」

シャウタ「…」 タコレッグ展開

リュウガ『おい、あいつも嫌な予感しかない』

龍騎『うん』

シャウタ「…」 タコレッグで柱よじ登る

リュウガ『やりおったあの馬鹿!』

ストロンガー「だああああ! こうなったら、エレクトロファイヤー
じゃあああああ!-!」

Gブラン「やめろおお!?」
ドラゴン「屍のまま」

プトティラ「きゅー」　ロングポール使って取ろうとする
アマゾン「クエー」　プトティラの手伝い

V3「プト介、もう少し右!右だ!」
プトティラ「プト介じゃないもん!」

スーパー「いや、左!あー行きすぎ!」

ブラカワニ「頑張るんだぞ、マイ息子!マイペット!」
リュウガ「もう嫌だこの競技!」

激戦の末、シャウタ・ストロンガー・プトティラ・ナイトブラン
ク・G3の順でゴールしました

龍騎「続きまして、二年生の依担ぎ競争…は尺の都合で簡略して」
二年「…おおおおーいッ!?」

リュウガ「飛ばすなああ!」

龍騎「結果だけ言つなら、サゴーズ一等賞・二等賞タイタン・三等
賞マイティです」

サゴーズ「やめて!貴重な出番が…!!」

マイティ「活躍の場が…」

龍騎「どうでもいいんで、次、学年対抗で行われる教師&生徒対抗
二人三脚!俺選手なんで、その辺ぶらついてたZX先生に任せたい
と思います」

ZX「何それプレッシャー!」

リュウガ「学年ごとに、担任と生徒がタッグを組んでゴールを目指
す競技。響鬼先生とラトラーターはマジチートでした」

ZX「ああ…あと、タジャドルとアメイジング先生は反則だった…」

リュウガ『ついでに言えば、V3先生とガタキリバタツグも酷かった気がする』

ZX『今年は、この面子で行われます!』

1年代表

- ・シャウタ&X（代走）
- ・プトティラ&V3
- ・エターナル&歌舞鬼

2年代表

- ・サゴーズ&響鬼
- ・マイティ&アメイジング
- ・ダークキバ&サイガ

3年代表

- ・ガタキリバ&スーパー1
- ・ラトラーター&スカイライダー
- ・龍騎&ライダーマン

リュウガ『何でX先生が巻き込まれているんだああああ!』

X『何で俺が参加させられているんだああああ!?』

V3『A・シャウタが人見知り過ぎるから』

スーパー1『答：本当はイクサ先生だったけど、シャウタの神経が耐えられそうになかったと判断されたため』

ZX『ところで、何でV3先生は2年生裏切って1年側にいるんですか!?』

スカイライダー『Answer・その場のノリ』

X『あんたら後で全員真空地獄車』

リュウガ『教育指導スイッチ入っちゃったぞ！？今すぐ土下座した方がいい、先生達！』

龍騎「懐かしいなあ…100段階中の100段階目は凄まじかった」
ZXリュウ『なんでお前は樂觀的に凄いことを言えるんだアアアアア！！』

龍騎「どうでもいいからスタート」

リュウガ『自分のことだぞ、自分のこと！』

タジャドル（なんかもう…龍騎が自由すぎる…毎年だけど）

1号「よいい…ドン…ガクツ」ピストル鳴らして力尽きた

ZX『無理しないで病院行ってエエエ！？』

リュウガ『これは学年対抗なので、どのクラスが勝ってもあまり関係ない…っていうか、1年が既にA組代表3人いるし』

ZX『トップに躍り出たのは、毎度おなじみラトラーターと響鬼先生』

ラトラーター「うおおおおー！」

スカイライダー「後頭部引き摺られながら

響鬼「負けないよー！」

サゴーズ「顔面引き摺られながら

タジャドル「…スカイライダーせんせええい！サゴーズオオオオオー！？」

リュウガ『何か凄い大惨事だああ！？』

ZX『一方的過ぎる！ちゃんと二人三脚しないと、反則以前に二人が死ぬから！！』

アメイジング「うおおおおー！」

マイティ「スカイライダー同様の惨事

サイガ「はりきってGoでいきます！」飛行

ダークキバ「宙吊り

歌舞鬼「ぬおおおおおお！」

エターナル「サゴーズ同様の惨事

リュウガ「どいつもこいつも平和的じゃねええ！後、サイガ先生飛ぶな！！」

ZX「まともに走っているのって、龍騎&ライダーマン先生組とシヤウタ&X先生組、ガタキリバとスパー1先生組じゃ…」

リュウガ「いや、チーム馬鹿&生真面目と、チームバカ&ドSだけだった」

ZX「悪い意味で息が合いすぎなおかんタツグです……ん？」

プトティラ「ぷっきゅーん！○○」

V3「速すぎだプト介ー！」でも付いて行っている

プトティラ「プト介じゃないもーん！><」

リュウガ「いたああああ！ありえないタツグがいたあああああつ！？」

ZX「ちゃんと二人三脚できてるし！V3先生あんた何者なんだよ！！！」

プトティラ「ゴール！」

リュウガ「ちゃんと二人三脚していたので、文句なしの一番です！…続けて、馬鹿とライダーマン先生・バカとドS先生が到着！！」

全「ライダーマン先生以外ヒデエ！！！」

ZX「次々とゴールしていく（反則まがいの）人達がいる中……」

シャウX「……orz」 滑った拍子に簡易地獄車してタジャ
ドルに衝突した
タジャドル「 気絶
リュウガ『何、不幸と不憫の相乗効果怖い』
ZX『タジャドルドンマイ……』

068：白熱運動会！攻受編

龍騎『午前中の競技は一旦終了して、皆のお待ちかね・昼食タイムです』

リュウガ『ああ、やっと休める』

龍騎『さて、シャウタの作った稲荷寿司食べに行くか』

リュウガ『何でお前は人ん家の重箱の中身に詳しいんだよ！？』

タトバ『うわー！凄く美味しそう！！』

プトティラ『きゅーい！』

タジャドル『おー、どれど…』

プトティラ『タジャ××の弁当はパセリだけだよ』

サゴーズ『何もしてないもんな』

タトバ『人の運動会に来なかったしね』

シャウタ『親父はレモンだけな』どさくさ

タジャドル『ちょおおおい！』

ブラカワニ『パパンシヨック！orz』

ラトラーター『俺、唐揚げ』タジャドル弄りすら放棄した人

ガタキリバ『俺はタコウインナー』上に同じく

龍騎『俺には稲荷！』

リュウガ『こら！せめて餃子と等価交換にしろ！！』

ガタキリバ『餃子屋だからって、弁当に餃子かよ！？』

トライド『グオオン…（訳：俺ならまず食いたくねーわ）』
ラトラーター「餃子じゃなくてプリン頂戴」
ガタキリバ「お前もちやつかり何してんだよ！」

V3「おやつのおはぎくれ」 交換用の豚カツ出しながら
スーパー1「俺は唐揚げ」 交換用の大学芋出しながら
スカイライダー「稲荷」 交換用のハンバーグ出しながら
ZX「タコウインナー」 交換用の生姜焼き出しながら
ライダーマン「あんたら何してんですか」
X「そして、等価交換として何かがおかしい件について」

アメイジング「……誰か、カレーとおかずを交換してくれないか…」
マイティ「うち、ご飯とカレーしか…なくって…！」
タイタン「唐揚げとか…コロッケとかあったら、なんとか豪華になるんです…！」

ペガサス「ごめんなさい…朝、寝坊してしまつて弁当作り忘れたんです…」

シャウタ「…カレー屋つて大変なんだなあ…」

X「そして、やっぱり等価交換としておかしい件について」
スーパー1「この光景見ると、オース兄弟が食費関係で逼迫しているなんて到底思えないんだが」

V3「むしろ、クウガ一家のほうが生活アレじゃないか？」

キバーラ「ああつ、運動会つてB1の宝庫です！」 ビデオカメラ
装備

ファム「ちよつと、誰か男同士で『あーん』ってしなさいよ！」

デジカメ装備

ガタラト「腐女子キターッ!?」

ライダーマン「しまった、ここ何気に腐女子の餌場になっていないか!？」

プトティラ「ふじよし?○○」

ブレイド「…プトティラとペガサスに悪影響あると思うし、こいつら離しましょうよ…俺の勘だと、彼女達昼食時間中ずっとここに居付きますよ」

リュウガ「その勘、正解」

X「…っていうか、グロージングやアマゾンにも悪い影響与えそうだし…4人はデルタ先生の所に行つて、ご飯食べてなさい」

ペガアマ「…はい」

グロージング「にゅ!」

V3「プト介ー、ほれ茶巾絞り」

プトティラ「プト介じゃないもん!でもくれるの?」

V3「はいあーん」

プトティラ「あー○○」

スカX1「…言ってる傍から何してんだあんたら!」

ファム「あ、プトティラメスなんでしょ（龍騎情報）?ペットだし、ノーカンノーカン」

ZX「あら…意外とその辺適当なんだな」

ブラカワニ「マイペットー、おはぎもあるからアマゾン達の方も持つて行きなさい」

プトティラ「ありがとパパン!」

ファム「鉄板はガタキリバ×ラトラーター、タジャドル先輩×シャウタ、サゴーズ×タトバ、タイタン×マイティ、シャウタ×ドラゴン、V3先生×ライダーマン先生、スーパー1先生×スカイライダー先生、X先生×シャウタ、リュウガ×シャウタよね!」

キバーラ「漫画版で考えるならZX先生×ストロンガーもなかなか

…！」

ラトラーター「弁当が腐れる発言すんな！」

ガタキリバ「そして、なんで龍騎ナチュラルスルーなわけ！？」

ファム「……この間、あいつにBL漫画見られてね。ライダーマン先生×ダークキバで、理科の実験の補習で（以下省略）」

ライダーマン「何故私なんだアアアアア！？」

X「そしてそれは誰得なんだああああ！」

タジャドル「誰得とか言わないでええええええ！」 トリハダ

ファム「で、その×××シーンが偶然見られて…そしたらあいつ、なんて言っただと思う？」

龍騎「プロレスしてるんなら、もっと血湧き肉踊るような激しいバトルにしないと駄目だろ！」

教師勢「「プロレス扱いかよ！」「」

オーズ兄弟「「その誤解能力も凄まじすぎる！」「」

ファム「ええ…でもその言葉をきっかけに、マシンガンアームで（以下ダキバとライダーマン先生の名誉の為に省略）」

ライダーマン「何故そうなったアアアアア！？」

V3「色々やってるんだな、お前ら…」

ライダーマン「…」 再起不能

スカイライダー「ライダーマン先生、大丈夫ですか…」

タジャドル「つか、何でその組み合わせになったんだ…」

シャウタ「相当変なことしないと、思いつかないよな？」

ファム「適当に溜まってたガンバライドカードから2枚引いたの。
……いやー、1/18の確率でしか当たらないはずのキバ（キバF）
を2枚引いた時は焦ったわ」

X「それも凄い……」

キバーラ「前に一回、似たようなルールでアギト×マイティってや
りましたよね」

マイティ「……?!？」

ファム「そうそう。そういえば、Z×先生×マイティもやったわ……」
マイティ「俺引かれすぎじゃない!?俺狙われすぎじゃない!?!」
サゴーズ「相当マイティ引いちゃったんだね、きつと（ガンバラ
イドで）」

キバーラ「響鬼先生×ライダーマン先生もやりましたよね」

ライダーマン「……トドメ

スカイライダー「ライダーマンせんせえええい!?!」

ファム「エターナル×ドツガもやったわよね」

キバーラ「スーパー1先生×サゴーズとか……」

サゴーズ「何してんのあんたらああああ!?!」

シャウタ「いくら白くて重力操作系だからって!」

ファム「ガタキリバ×ディケイドとか」

ガタキリバ「やああめろおおお!」

キバーラ「ラトラーター×ガタツクとか……」

ラトラーター「やめえええい!」

ファム「あとはX先生×シャウ……」

X「……飯、食おうか?」 弁当のイチゴつまみ食いしようとし
たV3絞めながら

V3「ゴボゴボゴボ」

ファキバ「…はい…！」

ガタラトサゴ「「教育指導スイッチ入ったアア!?」」
リュウガ「V3先生何してんだあああ！」

スカイライダー「そこじゃなあああい！」

スーパー1「シャウタ！シャウタは」

シャウタ「おい見えない！何が起きてるんだ!?」

タジャドル「……………！」 目隠し中

ZX「ブラコンパワーは偉大だったあああ！」

タトバ「…なんで俺は防御してくれないわけ…？」 見ちゃった人

龍騎「タトバとタジャドルは距離離れてるからじゃね？」 タトバの隣 فقط 隠さなかった人

ブレイド「……………」 見ちゃった人

ライダーマン「… 死んでいる人

タイムイドラ「「…」」 見ちゃった人達

龍騎「で、何でV3先生狙い？」

X「イチゴつまみ食いたのと、近くにいたのと、流石に女生徒に10段階中の6段階目はさせられないため」

V3「… 窒息寸前

スーパー1「もうそれぐらいにしてやってくれ頼むから（棒）」

スカイライダー「スーパー1先生本心で言ってないな！…もう、切実にお願い!!」 懇願

ブトティラ「シャウターおやつー」

シャウタ「タジャドルおやつ取れない」

タジャドル「X先生！V3先生はその辺に捨ててください、じゃないと俺が死ぬ!!」

タイタン「どっちにしろ、どちらかが死ぬと思いますけど…（シャウターV3先生的な意味で）」

ブレイド「プトティラ！イチゴ饅頭あるから食べるか！？」

プトティラ「食べる！」 視線逸れた

X「ライドルロープ」 ほつりなげロープで証拠隠滅

スカイライダー「ブイスリヤアアせんせええええーいッ！？」

シャウター「ブラコン自重！」 肘打ち

タジャドル「ごふうっ！？」

トライド『グオン（訳：それだけで済んだだけでもマシな方だな…）

』

ラトラーター「別にどうでもいいと思うけど、昼食時間残り15分だぞ？」 稲荷もぐもぐ

全「「お前ちゃっかりしすぎだろ！」「」

ライダーマン「」 もはや屍

V3「」 地面に『X』とダイイングメッセージ

プトティラ「楽しそうだね！O O」

ブラカワニ「あー、プトティラにはアレが楽しそうに見えるのね…

…」

069：白熱運動会！保護編

リュウガ『さて、昼食も終わって…続きまして、保護者による玉投げ！』

龍騎『お手玉は生徒の夏休みの宿題としてノルマ1人5個でしたが……前回、お手玉の中に小豆じゃなくて石詰め込んで、それが俺に当たったことがありますからねー』

リュウガ『リアルに怖いなそれ！鉄仮面じゃないとあぶないだろ！』

龍騎『さて、今年は一体何が詰まっているんでしょうか』
リュウガ『詰め物に期待するなよ！』

タジャドル『…参加するのは初めてだが、なんだろう、この……嫌な予感』

ブラカワニ『パパンも感じた』

タトバ『頑張ろう。俺達、ここでしか見せ場ないから』

プトティラ『ぶきゅん！』

トライド『ガオン！』

ブレイド『俺も参加していいのか…？』

アマゾン『ケケ？』

龍騎『スタート！』

ラトラーター『あ、そういえば、今年何詰めた？……俺は砂』

ガタキリバ「掃除機の中の埃」

サゴーズ「バナナの皮」

シャウタ「んー、汚れてボロボロになった雑巾」

リュウガ「お前ら…入れる小豆や米がないからって、ラトラーター以外酷すぎだろ！」

ブレイド「通りで臭いと思ったら、これ、バナナの皮か…！？」
サゴーズのお手玉当たった

龍騎「俺は岩塩詰めたけどね」

リュウガ「塩！そこはせめて塩ーッ…！」

タジャドル「…かしおぺあっ！？」 岩塩クリーンヒット

リュウガ「そして安定しすぎているぞ、タジャドルウウウ！？」

龍騎SV「あれ、今誰かに当たった？」 犯人

グローイング「えい！」 頑張るけど届かない

ブラカワニ「…パパン負けないもんorz」 グローイングの投げた玉が総て当たっている

龍騎「さつきから、砂入りやら石入りやら粘土入りのお手玉が、ブラカワニさんを襲ってますねー」

リュウガ「まだ幼いんだから仕方がない…むしろ、トライドが器用すぎて泣ける」

トライド「牙吠！」 口にお手玉加えて、衝撃波に乗せて飛ばしている

エターナル「そういえば俺、1つだけその辺で拾ったリスの死骸入れたな」

キックホッパー「俺達の玉なんて、Gで充分だ…」

パンチホッパー「そうだね兄貴…」

王蛇「俺は蛇（生きてる）だ…感謝しろよ？食料をお手玉にしてやっているんだから…」

タトバ「ぎゃあああ！？何か触感が変だと思ったらアアアッ！」

エターナルの持ってた

ZO「ぎゃー！ぎゃー！！」 ホッパー兄弟の持ってた

龍騎「今年は、1年A組がカオスすぎてお手玉もカオスです」

リュウガ「…え、もしかして、真面目に小豆で作ってきたのってオ
ーガだけ…？」 小麦粉詰め込んだ

龍騎「えー、今年は例年以上に酷いお手玉でしたね！」

リュウガ「玉がな！」

龍騎「続きましては、教師対抗の障害物競走！」

リュウガ「無視かよ！……響鬼先生は毎年チートと言われるので、
代走はプトティラです」

ライダーマン「嫌な予感しかしない……」

アメイジング「気のせいですよ、きつと……！」

V3「よし勝つぞ」

スパー1「赤心少林拳の底力、見せてやる…フッフ」

スカイライダー「泣きたい」

プトティラ「ぷきゅん！」

リュウガ「障害物競走は、まずはスパイダーショックの糸で作られ
た網を潜り、跳び箱を10段跳んで、封筒の中にある紙の指定に沿
った仮装をしてゴール！」

龍騎「ちなみに、仮装の種類は…チャイナ服・セーラー服・ナース
服・スチュワート・デス・ビキニ・バニーガール・羊の着ぐるみ・ウエ
ディングドレスのいずれかが入っております」

全「…誰だ採用したのオオオオオ！！？」

龍騎「1号校長」

教師勢「「あの嫌だああああ！」」
X「中学に転任されて良かったー！！」

龍騎『よいドン』

リュウガ『お前がやるんかい！』

龍騎『…と、リュウガが言ってスタートです』

リュウガ『俺かよ！もう何人かフライングしてるだろ…プティラ止まってるし、引かかてるし！！』

プティラ『ぶきゅえええええーッ』 網でバタバタ

リュウガ『気を取り直して、…よいドン！』

プティラ『ぶきゅーい！』

アメイジング『うわ速い！？』

龍騎『先頭に出たのはプティラ！さて、最初の網潜りでは』

プティラ『ぶきゅえええええええんッ』 再度バタバタ

リュウガ『また引かかてるー！？』

龍騎『まあ、オーズ兄弟って皆色々引かかりそうですよねー。シヤウタ以外』

リュウガ『網に捕らえられるはずの海産物コンボが、網で捕まらないのも考え物だけだな！？』

スーパードット『…』 無言で編み持ち上げる

V3『…』 上に同じく

ライダーマン『…』 言わずもがな

スカイライダー『……』 上三人に脅された

龍騎『網に捕まって出られないプティラのために、網を持ち上げている先生がいますねー』

リュウガ『あんたら勝負の世界って忘れてないか！？』

龍騎『続いては、跳び箱10段！先生達には軽いでしょぅが…』
アメイジング「とおっ！」

スーパ―1「それ！」 ジャンプで飛び越し

スカイライダー「セリングジャンプ！」 重力低減装置

リュウガ「その重力組、ちゃんと正規の跳び方で越えろ！」

プトティラ「ぷー！」 跳び箱蹴散らした

リュウガ「障害物を破壊するなー！」

プトティラ「ぷきゅ！」

龍騎『プトティラ、再度チャレンジ！これは…』

プトティラ「O O」 跳び箱の上にちよこん

リュウガ「1ジャンプで飛び越えられなかったーッ！？」

プトティラ「O O」 そのままよじよじ

龍騎『何とか“跳んだ”と言う事実にしよぅと、座ったままで移動
してますプティラ』

リュウガ「…あいつだけ5段にしてやれ」

プトティラ「O O」 またちよこん

リュウガ「何故また座る…！orz」

龍騎『もうラトラーターお手本やりに行つて』

ラトラーター「強制！？」

ガタキリバ「行つて来い…先生達も、羊の着ぐるみを当てるために
読み合いしてるから」

龍騎『さて！律儀にスタートラインから助走をつけてやって来た、

ラトラーターのお手本は…！』

ラトラーター「とぅっ！」 手をついて飛び越え前方3回転しながら
着地

全「「「おおおおー!!?」「」」

龍騎『いやー、最高のパフォーマンスありがとうございました!』

リュウガ『…いや…パフォーマンス競う奴じゃないから!跳び箱、跳び箱だからー!!』

プトティラ「きゅぷい!」 ラトラーターの真似した

リュウガ『何で普通に跳べないくせに、ラトラーターの真似はできるんだよ!』

ブレイド「……お前ら、同じことできる?」

シャウタ「液化化しないと無理です」

サゴーズ「重力操作ありなら…」

ガタキリバ「出来ないことはないけど…」

タジャドル「ああ…」

タトバ「普通の奴にあの動きをやれと?」

龍騎『さて、遅れてやってきたプトティラ!プトティラが選んだのは…』

プトティラ「うえいでいんどれしゅ?」

龍騎『ウエディングドレスかよ!そして残りの先生達は…』

スカイライダー「嫌だああああ!セーラー服なんてえええええ!」

V3「スチュワーズ…」

アメイジング「バニー、ガール:orz」

ライダーマン「…ビキニ…だとorz」

スーパード「チャイナ服…」

リュウガ『見事に拷問クラスの奴しか当たってないな』

龍騎『余った羊は…』

シャウタ「もっふー!!!」 全力で奪い去っていく

龍騎『シャウタが大喜びで盗んでいきました』

リュウガ『シャウタ戻ってこい!シャウター!!』

シャウタ「もふもふもふもふ」

タトバ「誰か助けて」 着ぐるみ着せられた

龍騎『ですよー。自分が着たら、もふもふできないよねー』

リュウガ『哀れ、弟ポジション…』

ペガサス「……」 シャウタに混じりたそう

マイティ「あー、お前もぬいぐるみとかそいつの好きか…」

ドラゴン「わくわく」

タイタン「お前はやめとけ、犯罪だ」

プトティラ「ぶきゅうつうつ…omO」

龍騎『あつと、プトティラ未だにお着替えできない!』

リュウガ『まあ、一番難しいよな…』

プトティラ「ぶにゅん・m・」

龍騎『遂には諦めちゃいました』

リュウガ『先生達は、恥を捨てて着ております!…最初に着替え終わったのは、一番抵抗の少なかったスーパー1先生!!』

スーパー1「抵抗はそれなりにあるぞ!？」

プトティラ「着にくい!やだ!!><」

龍騎『遂にはプトティラも駄々を捏ねる!ビリになるのは一体…』

V3「あーもー、手袋してベール被るだけだろうがプト介」

プトティラ「プト介じゃないもん!」

スーパー1「ベール曲がるから暴れるな!」

ライダーマン「あー、着せてあげるからプトティラ動くな…」

龍騎『学校での保護者達が自重しませんね』

リュウガ『あんたらプトティラにやるぐらい、生徒にも優しくしてくれよ!』

龍騎『さて、最初にゴールするのは！？』

プトティラ『ぷー！』

アメイジング『だから速いーッ！？』

リュウガ『着せてもらうと速いな！お前は！！』

龍騎『最初にゴールテープを切るのは、プトティラか！？』

プトティラ『…O m O』 急停止

リュウガ『どうした？プトティラ、突然停止したぞ！』

プトティラ『皆とゴールしたい…』

リュウガ『勝負の世界で何か言い出しおった！？』

プトティラ『せんしえーたち、プトを運動会に入れてくれるために頑張ったのに、プトだけゴールできないもおおん…T T』

龍騎『めっちゃいい子！』

V3『よしゴールだ！』

X『 空気を読めあんたはアアアア！！』 ライドルロングポール

ストロンガー『一緒にゴールしてやれえええ！』 エレクトロファ

イヤー

V3『でねぶっ！？』

リュウガ『この空気じゃX先生とストロンガーが正しい！』

V3『 撃沈

スーパードーはい、じゃあ、いちにー』 V3担ぎながら

全『…さん！』

龍騎『感動的な全員同時ゴールです！V3先生気絶してるけど』

リュウガ『そこで全部台無しになってるぞ兄貴！』

070：白熱運動会！応援編

龍騎『運動会も、いよいよ大詰め！続いては、応援団による…応援合戦です！！』

リュウガ『今年からは、応援合戦とは別に各組のパフォーマンスもあるぞ！』

シャウタ「……………へ？」

リュウガ『は？』

龍騎『ほえ？』

シャウタ「何それ初耳なんだけどオオオオオ！？」

リュウガ『何でお前団長なのに知らないのオオオオオ！？』

龍騎『いやあ、面白くなってきましたねー』

リュウガ『面白くねえよ！大問題だ！！』

タイガ「ねえ、誰か連絡いった？」

インペラー「いや、俺は知らないけど…」

ネガ電王「ケツ、俺が知るかよ」

牙王「…」

幽汽「…」

ガイ「俺聞いてないよ？」

エターナル「おい、副団長。お前聞いていないのか」
ダキバ「……………」

エターナル「まさか」

ダキバ「ごめええええん！シャウタが家の事情で早く帰った日に、ライダーマン先生から聞いたけど……言っの忘れてたああああー！」 土下座

エターナル「このアホンダラアアアア！地獄のパーティータイム行つてやるるかアアアアッ！？」

インペラー「落ちてけエターナル、怒るな！キャラ崩壊するな！！」
龍騎「キャラ崩壊と言っても、皆元々そんなに出番ないじゃないですかーやだー」

タイガ「君、クリスタルブレイクで逝く市井引き摺り回しの刑にするよ？」

リュウガ「…やってみろ、うちの馬鹿兄貴、きつと死なないから」

プトティラ「ぱふおーまんしゅって？」

シャウタ「まあ、派手な見世物をしたり…歌ったり、踊ったりすること」

プトティラ「OmO？」

シャウタ「…障害物競走のラトラーター」

プトティラ「O O！」

シャウタ「それで分かるのね…」

龍騎「ちなみに、応援合戦とパフォーマンスが分けられた原因は…跳び箱15段使つてアクロバティック演技をしたラトラーターと、50体組体操を始めたガタキリバのせいです」

リュウガ「尚、タジャドルがクジャク羽広げて小林 子並みの豪華さを見せたり…サゴーズの重力操作で50体のガタキリバが宙を浮いたのも原因とか」

ブラカワニ「お前ら、何で運動会の歴史塗り替えちゃってんの？」
タトバ「マジありえない…ハードル無駄に上げないでよ、俺、来年
シャウタの末路確定なんだから」
タジャドル「すいません」
ガタラト「ごめんなさい」

龍騎「そんなわけで、応援合戦飛ばす？」
全「」「飛ばすなよ！」「」

でもかつ飛ばしました

リュウガ「俺の兄貴の権力謎過ぎる」
龍騎「さて、パフォーマンスは…最初はC組からですね」

ラトラーター「皆行こうぜ！」
C組応援団「」「あんただけで行ってください！」「」
龍騎「曲は【Shout out】でも掛けておきましょうか」
リュウガ「それシャウター！！」

マイティ「よし、準備完了！」
リュウガ「マイティが持ってきたのは…え、なんだこれ、フラフィー？」

龍騎「30本ありますねー」
ダークカブト「後、これも！」
リュウガ「竹馬？」
龍騎「嫌な予感しかしません」

ライター「よっと」 逆立ち

リュウガ 「逆立ちしながらの……」

マイティ「それ！」

ペガサス「えい！」

「うおおおおおおお！」

逆立ちしながらフ

ラフープ

リュウガ^ㇿ あいつ本気でありえねえええええ！？^ㇿ

「運動神経のみで生きているだけありますね」

リュウガ「お前人のこと言えねえよ！」

サソード「では、やるか」

ダブト「うん！」

龍崎「そして、両側からサソードとダブトが竹馬を持って……？」

「サソダブ、トン、カツ、カツ！トン、カツ、カツ！」

リュウガ^ㇿ竹馬を一定のリズムで動かしてるー！？^ㇿ

「そいや！ほっ！！」

ラトラーター「竹馬が当たらないように逆立

ちしたままジャンプ

リユウガ「お前もう新体操の道に行けエエエエエ！それか中国雑技団！！」

龍騎『いやー、俺、てつきり逆立ちフラフラした状態で、更に竹馬の上に乗るのかと』

リュウガ「なんでやねん！」

ライター「せいやッ！」

マイティとダブトが立てた竹馬に乗った

リュウガ「…もう嫌だこいつらあああ！」

龍騎『続きましては、B組のアピールです』

リュウガ『B組は、応援団+GKB50によるダンスらしいですが……』

龍騎『曲については、【もってけ！セーラーふく】、【暴れん坊將軍の歌】、【カチューシャ】、【仮面ライダースーパー1】、【コネクト】、【戦え！仮面ライダーV3】、【めざせポケモンマスター】、【Sun goes Up】、【メリッサ】をメドレーにしたものらしいです』

リュウガ『B組、前からオタク集団だと思っていたが、やはりそうだったのか！？』

龍騎『え、俺とカブトとアギトは？』

リュウガ『お前はともかく、カブトとアギトはそれぞれ妹フェチと火曜サスペンスマニアじゃねーか！』

タトバ（俺B組にはなりたくないッ！？）

タジャドル（つーか、曲が凄まじくカオス過ぎるー！！）

シャウタ『これこそ飛ばすべきだと思うんだ』

エターナル『ああ……』

インペラー『つーか、なんで先生達の歌入ってんの？』

V1『なんとなく』

龍騎『さて、今度は【コネクト】に映りました！GKB50のうち

5体が、魔法少女の仮装をさせられておりますー！』

リュウガ『キバーラにやらせろよ！』

龍騎『彼女は白いからってQBです』

リュウガ『それも酷い！』

B組『……うおおおおー！』『……』

X「この盛り上がり方の意味が分からない私は、異端なんでしょうか」

スーパー「ごめん、俺もあまり分かってない」

スカイライダー「ごめん、暴れん坊將軍しか乗れない…」

V3「しかし、アップダウン激しいな」

ライダーマン「まあ、曲の順番が…あれですから…」

ブラカワニ「個人的には、みなしごハッチが欲しかったな」

シャウタ「どうしようどうしようどうしよう」

エターナル「これは、もう、副団長の責任だな」

ダキバ「分かった…だったら、ドジョウ掬いでもなんでもやるよやればいいんだろオオオ!？」

エターナル「いや、シャウタいるならウナギだろ」

シャウタ「おい」

プトティラ「プトにおまかせだよ!」

牙王（あれ、何故か嫌な予感しかないんだが）

龍騎「いやー、よく分からないテンションでしたね」

リュウガ「さあ、最後はA組…どんなパフォーマンスになっても、誰も責めないからひたすら頑張れ」

プトティラ「マイク貸して!」

龍騎「予備の一個使う?」

プトティラ「ありがと!」

リュウガ「マイクで何をするんだ、あいつは…」

プトティラ「プト、歌います!」

全「え」

ライダーマン「嫌な予感がする」

X「とてつもなく嫌な予感がした」

プトティラ『タイトル、【プトプトげんきだもん！（暫定）】…曲
作った人、ライダーマンせんしえ！歌作ってくれた人、Xせんしえ
！！』

教師勢「「あんたら何してんのオオオオオ！？」」

ライダーマン「やつぱりいいい！」

X「待てプトティラ、それ、ある意味俺の公開（後悔？）処刑！」

龍騎「ちなみに、この前オーズ家で何人が集まってブラカワニさん
と一緒に持ってきたお酒飲んでた際、酔った勢いでプトティラに
口約束・翌日本当に作らされたという逸話が」

リュウガ「だから何でそんなこと知ってるんだよ！」

龍騎「ちなみに、歌詞はX先生の担当ですが…シャウタとラトラ
ーとガタキリバの乱入で、プトティラっぽく書き直されました」
タジャドル「あいつらも関わってるのかアアツ！？」

プトティラ「あくびして目が覚めて、シャウタのおいしいご飯食べ
よう」

～ 曲

タトバ（ちゃんとした曲できてるー！）

プトティラ「ベンちゃんと遊びながら、商店街探索しよう」

八百屋さんにおでん屋さん お肉屋さん魚屋さん

龍騎の餃子屋さんで一休み お腹が空いたらお家に帰ろう

笑い声絶えないね みんな大好き本郷町

プトティラ「青い空見ていたら、タジャドルいたからすちよれいん
どうーむ」

B組「「プットッティラーノ！」」

ライダーマン「勝手に掛け声できたー！？」

リュウガ『オタク軍団を味方に引き入れてのパフォーマンス、もとい、カラオケ大会だー!』
タジャドル「なんでそうなってんだよ最後オオオ!?」

プトティラ『サゴーズのバナナパイ、食べたラトラーター殴られていたよ』

リュウガ（現実にあるから怖い）

プトティラ『タジャ××とタトバはね、昼ごはんの唐揚げに何故か泣いてた』

アマゾン「クエー」 曲に乗って踊り始めた
グローイング「うにゅー!」 上に同じく
龍騎『乱入者出ちゃってますね』

パパンはソファの上で ゴロ寝して怒られた
ガタキリバはスーパールの大安売りに 泣きながら行つたよ
プトはまだむつかしい 大人のじじょうは知らないけど

プトティラ『青い海見ていたら、シャウタのご飯食べなくなったよ』

B組「「プットツティラーノ!」」
アメijing「 うおおおおー!可愛いぞグローイングウウ
ウー!」 グローイングカメラに撮りながら
スカイライダー「アメijing先生壊れたー!」

X「スカイライダー先生、」
スカイライダー「X先生!あれ何とかして…」
X「アマゾンの写真が撮れないのでどいてくれませんか」 超真顔
シャウタ「うちの子の写真撮りたいんでどいてくれませんか」 超
真剣

スカイライダー「嫌だこのWオカン!」

その後、3番の内容でスカイライダーがスイカ的な意味で号泣しました

龍騎『さて、色々ありましたが、結果発表!』

リュウガ『ちなみに: 1号校長は入院した為、放送席で優勝クラスの発表となります』

全『…』

龍騎『まず、応援団の部: 1位、C組!』

C組『…やったー!』

リュウガ『そして、2位は…: A組…うつそだろおお!?』

A組『…あの歌で!?』

B組『…プットツティラーノ!』

龍騎『競技の部: 1位、C組! 2位はB組!』

リュウガ『この時点で、総合優勝はC組となりました!』

C組『…おおー!』

サゴーズ『あーあ、今年もC組の優勝か…』

ガタキリバ『ラトラーターの存在自体が酷かった』

ラトラーター『お前の言い分も酷かった』

シャウタ『やっと…寝られる…解放される…』

プトティラ『楽しかった!』

龍騎『でも、来年もタトバ共々巻き込まれるだろうけどね。シャウ
タ』

タトシャウ『』石化

リュウガ『トドメ刺すなアアア！』

071：投票結果発表！

龍騎『龍騎と！』

ガタキリバ『ガタキリバの、』

龍ガタ『学校放送局〜！』』

龍騎『はい、そんなわけで、本当ならリュウガを迎えてやる予定だったんですけどねー。リュウガが拒否ったのでガタキリバ呼びました。仕方なく』

ガタキリバ『しかたなくかよ！俺の昼食時間返せよ！！』

龍騎『さて、BGMはそんなガタキリバからの要望で、【Sis puella magica！】（通称：営業のテーマ）でお送りしております』

ガタキリバ『そんなことばらすなよ！』

ラトラーター『どおりで、テンション下がる曲だと…』

サゴーズ『昼食中に何流してるんだろうね、あの馬鹿二人』

タジャドル『というか、俺、なんでここににいるんだろう』

タトバ『っていうか、今日休日だよ。何で俺達ここににいるんだろ
う』

シャウタ『さあ…先生達とかも呼ばれたみたいだし』

龍騎『さて、そろそろ“折角の休みの日に何呼びつけてんのこいつ

ら？”って文句が、タトバあたりから来ていると思いますが」

ガタキリバ「何故限定的！？」

タトバ「なんで分かるの！？」

龍騎「今回は、第一回・オーズ兄弟人気投票の結果を発表する為に、皆様をお呼びしました。わーパチパチパチ」

全「……なんだとおおお！？……」

ガタキリバ「えー、ルールとしては、各部門ごとに5人ずつ選び……順位によってポイントが変動します」

龍騎「なので、同じ票数を持っていたとしても……何位だったかで差は大きく変わってきますよー」

ガタキリバ「ちなみに、好きな組み合わせ部門に関しては票をくれた人数を調べる意味でも、1枠しかないらしいです」

プトティラ「誰が1位かな！○○」

トライド「グオン（訳：お前とシャウタ辺りは強いだろうな……）」

龍騎「ちなみに、兄弟部門での最大票数は……タジャドル・シャウタ・プトティラの35票」

全「……何イーツ！？……」

ガタキリバ「何それ集中しすぎだろー！」

プトティラ「えー……タジャ××なの……やだ……」

タジャドル「心底嫌そうな顔するなよ！」

龍騎「住人部門の最大票数は、リュウガの25票……しかし！さつきも言った通り、票が多いからといって1位になるとは限りません！……」

スーパー1「まあ、それはそうだろうな」

龍騎「それじゃあ、放送室の鍵空けてくれたZX先生が……最初の好きな組み合わせ部門の発表を行います。というか、順位関係は総

て先生の担当です』

高校教師勢「……ZX先生何してんの!?」

ラトラーター「事務員の職権乱用を強制させるなよ!」

ZX『巻き込まれたZXです……ぐすつ』

X（泣いてるなあ……）

スカイライダー（ZX先生マジ不憫）

ZX『今回投票に参加してくれた読者は、42名……皆さんありがとうございます。さて、それじゃあまず……組み合わせ部門から』

全「……」

ZX『11位に輝いたのは……以下の組み合わせ!』

・プトティラ×ブラカワニ

・リュウガ×シャウタ

・プトティラ×トライド

・ガタキリバ×ラトラーター

・プトティラ×タジャドル

・V3×プトティラ

・プトティラ+グローイング+アマゾン

スーパー1「プトティラの安定性イイ!」

龍騎『ちなみに全部1票です』

ラトラーター「いや、言わなくても分かるから!むしろ……リュウガとシャウタこそ!?!」

ガタキリバ『いやあ、本当に、……今頃どこかの腐れたミカンと黒い白鳥がいるかと思えば……』

ZX『……辛いよなー』

腐女子コンビ「ガタラトにリュウガシャウ!」

龍騎「あれプロレスじゃないの？」

全「」「」
違えよ！
「」「」

ガタキリバ　「お前の発想酷いわ！」

龍騎「じゃ、今度は得票数2票の…4位の発表です」

タトバ「そして安定の鬼進行！」

ZX 「それじゃあ、発表しよう」

- ・プトティラ×ラトラーター

- ・シャウタ×ドラゴン

- ・タジャドル×ライア

- ・シャウタ×ファイズ

- リュウガ×オーガ

・アギトBF×カブトHF

- ・プトティラ×シャウタ

バーニング「何故俺とハイパアアアー!!!？」

龍騎「今頃バーニングさんが叫んでいると思うので一応解説します」

と

バーニング「何あいつエスパー!？」

龍騎「
す」
どっかの教組と絶叫王に、ダブって見えたからだそうで

バーニング「orz」

ガタキリバ「個人的には、ドマイナーなタジャドルとライアが入る
とは思わなかった」

Z
X
↳
確かに…↳

龍騎「絡み少ないですねー」

ライア「失礼な奴らだな」

龍騎『触れてはいけない青色同士は放っておいて、』

ガタキリバ『その時点で触れてるだろ!』

龍騎『どんどん言っちゃってください、ZX先生』

ZX『ああ…それでは、3位は…得票数4票!ブラコンとファミコンの果てしなきカオス・タジャドルとシャウタ!』

プトティラ『OO』

ライダーマン『ああつ、プトティラが放心状態に!』

スカイライダー『無理もないですよ…』

デルタ『プトちゃん大丈夫かしら』

ガタキリバ『俺、今頃プトティラが化石になっているかと思うと、タジャドル刺したくて仕方がない』

タジャドル『おまツ!?!』

ラトラーター『あいつも順調に悟りを開いてきてるな…』

サゴーズ『龍騎のクラスメートだしね…』

龍騎『後で復活して大泣きストレインドゥームしてますよきつと』

ガタキリバ『無責任だな、お前!』

ZX『続いて、得票数7票…第2位!もふもふ純情・シャウタとペガサス!』

ペガシャウ『?!?!?!』 赤面

タジャドル『orz』

ガタキリバ『今頃、どつかの赤いアホドルが落ち込んでいるかと思うと、消防士のファイヤーステイツさんにあの尻蹴ってほしい気分だわ』

ZX『ガタキリバお前容赦ないな』

龍騎『プトティラが制裁するから大丈夫。もうくっつけばいいのに…シャウタがドラゴンを“義兄^{にい}さん”と呼ばなくちゃいけない恐怖が待っているけど』

ラトサゴ『恐ろしいこと口走るな!』

タトブラ「でも否定できないから怖い！」

ドラゴン「…それもまた、いいかもしれない！」

ガタキリバ「X先生、スーパー1先生、そこで鼻血出していそうな変態DM矯正してやってください」

ドラゴン「Xとスーパー1とV3に殺られた

ZX「そして…得票数10票、文句なしの1位は…カオスとしか呼べない兄弟漫才・龍騎とリュウガ！」

リュウガ「ぐああああああ！悪夢だ！悪夢だああああ！！」

龍騎「やったなマイ弟！」

リュウガ「だからブラカワ二的な何かはやめい！」

龍騎「さて、今度は…住人部門から発表しちやいましょうか」

ZX「そうだな…さて、30位と23位を一挙に発表するぞ！」

ガタキリバ「ちなみに、順位は得点の低い順からの発表だ！」

30位：1点

・シャイニング

・ZX

・1号

・アメイジング

23位：2点

・ドラゴン

・タイタン

・ダキバ

・龍騎SV

・デルタ

・ライア
・タマシー

龍騎『ZX先生29位ですか』

ZX『：ちなみに、事務員の仕事って忙しいからな！？orz』

ガタキリバ『クウガ兄弟は、この時点で3人アウト：マイティは息をしているのだろうか』

マイティ「」 窒息寸前

タイタン「マイティイイ！」

ZX『続いて、22位から10位までの発表！』

22位：3点：ディケイドCF

21位：4点：マイティ

20位：6点：ライダーマン

18位：7点：バーニング、エターナル

16位：8点：サイガ、スカイライダー

13位：10点：ハイパー、キバラー、アマゾン

12位：12点：ディケイド

10位：13点：ファイズ、ファム

マイティ「やった：やったあああ！無駄にキャラだけ濃いドラゴンより上だったああああ！！！」

龍騎『個人的に、マイティ想定外ですけどねー』

マイティ「orz」 激しく落ち込み中

タイタン「あの人、持ち上げたいのか叩き落したいのかどっちなんだ！」

ZX『ここからは、純粹に一人ずつ発表です。』

9位は17点、

影は薄めだけど良識人・オーガ!』

オーガ「やったー!」

1年A組軍団「『こいつが10位以内に入っていて…どうせ俺らなんて…』」

エターナル(俺は…この中に混じらない方がいいな、うん)

ZX『8位は29点、プティラとは違った萌えでランクイン・グロ잉グ!』

龍騎『萌えは重要ですね』

グロ잉グ「やたー!」

アメijing「やったぞおお、グロ잉グ、グロ잉グうう」

スーパ―「何あれ気色悪い」

スカイライダー「そんなはつきり言わなくても…X先生も似たようなものじゃ」

スーパ―「あいつはライドル関係じゃなければ、あそこまで煩く叫ばないだろ…」

ZX『7位は32点…見てはいけない100段階目・X先生!』

X「なんか嬉しくない!」

龍騎『マジ凄いつすよ、100段階目』

ガタキリバ『どんな感じなんだよ』

龍騎『天国の階段を登りかけた?』

全「『どんだけ!?!?』」

X「…じゃあ聞くが…遅刻寸前とはいえ学校の窓ガラスを割って駆け込み、教室のドアを蹴り破って席に着こうとしたらクラスを間違えてサゴーズと正面衝突、その拳句に勢い余って反対側の窓破壊および校長の盆栽を2点台無し…これでブチ切れないほうが教育指導員としておかしいと思います」

リュウガ「…あの馬鹿兄貴、そういつそ階段登りできればよかった

のに……」

龍騎『でも登りかけた所にX先生が氷水ぶっ掛けて蘇生、その後屋上に吊るされました』

ラトラーター「そりゃあ、そのまま死なすわけないだろ……」 シャ

ウタの耳塞ぎながら

プトティラ「O O」 そもそもシヨックで聞いていない

ZX『…えー、続いて6位。35点…もはや拷問級の指導、DSと名高いスーパー1先生!』

スーパー1「あいつ後で赤心少林拳諸手頸動脈打」

龍騎『死刑宣告食らいましたね、先生』

ZX『しまったあああ!orz』

ガタキリバ『えー、続いて5位は43点!神か、仏か、菩薩様が…捨てる神あれば拾う神ありとはまさにこのこと・ブレイドさん!』

ブレイド「あ、意外と俺高かった…欄外だと思っていたのに」

サゴーズ「それはまずないかと」

龍騎『4位は68点!マイ弟リュウガ!』

リュウガ「だからあああ!」

ガタキリバ『リュウガでここだと、…え…あと誰残ってた!?!』

ZX『3位は69点、女性人でも比較的まともな純粹担当!ペ

ガサス!』

グローイング「ペガねえちゃ、やったー!」

ペガサス「えっ、あ、…皆さんありがとうございますっ」

龍騎『いやぁ可愛いですね』

リュウガ「お前ここの様子見えてるだろ!」

龍騎『X先生の100段階食らってから、なんか、大体分かるんだよなあ』

全()(100段階目を食らえば悟りを開くのか!?!)()

ZX『続いて、2位は…72点！もはや一文字高校のトラブルはこの人が起こす・V3先生！！』

高校教師勢「『なんだとオオオ！？』『』『』

V3『おつしゃー！』

シャウタ「ん？そうになると、1位つて」

ガタキリバ『ちなみに1位は92点という、V3先生と20点差で大勝利した……龍騎だ』

龍騎『テヘツ』

全「『あつのヤロオオオオ！！？』『』『』

龍騎『さて、問題のオーズ兄弟組だよ！』

ガタキリバ『誰が1位かで、今回俺とZX先生の味わった苦痛を受けることになるぞ』

リュウガ『それはいい…是非とも、タジャドル辺りを』

タトラトサゴ「『激しく同意』『』『』

タジャドル『おおいッ！？』

ZX『まずは10位…1点！セリフはたったの一言なら仕方がない、ママン（正体未定）！！』

ブラカワニ「ママンは…仕方がないよ…」

ZX『9位は…9点。お前タトバより個性あったほうなのに……サゴーゾ！』

サゴーゾ「ぐあああああ！！」

龍騎『タトバと違って、幼少期に萌えがなかったのが惜しい』

ガタキリバ『（兄弟以外含め）サゴーゾ好きじゃない奴、そんなに多いのかね』

シャウタ「もうやめてあげろよお前らアアア！」

ZX『8位は一気に跳ね上がって29点！もはやハイテク兵器ペツト・トライドベンダー！！』

トライド『グオオオオン（訳：ハイテク破壊兵器）！？』

ラトラーター「やったなトライド！」

トライド『グオオオオオ（訳：まったく嬉しくないんですが）！』

ZX『続いて7位：34点、双子の弟との差はブティラ回だったと思う・ガタキリバ！』

ガタキリバ『俺ギャグNOVEL大戦の初期頑張ったのにイイ！』

龍騎『喧嘩した理由がダメすぎるんだと思う、あと、あれほぼタジヤドルとシャウタに持っていかれてるから』

ZX『それと、NOVEL大戦だったら：V3先生とかスカイライダー先生のほうが、まだ……個性の発揮をしていたというか。X先生はトマト刺さっていたというか：むしろ、アレのお陰でスカイライダー先生のスイカ弄りが確立されていたというか』

ガタキリバ『orz』

ラトサゴ『orz』

スカX『orz』

ZX『6位は41点！無個性も個性：でも正直幼少期票が強すぎると思う・タトバ！！』

タトバ「今の俺はそんなに無個性ですかアアア！」

龍騎『うん』

ガタキリバ『何正直に言ってるかな！？』

タトバ「うわあああ……！orz」

ZX『……えー、5位は64点。初期のイメージ何処に行った（いい意味で）、ブラカワニさん！』

ブラカワニ「パパンやったよー！」

タトサゴ「親父に負けるなんてエエエ……！orz」

ZX『4位は71点！トマト回と運動会での挽回が物凄かった…アホ……ラトラーター！！』

ラトラーター「アホ言いかけたな先生！？」

サゴーズ「別にいいんじゃないー？」

タトバ「良かったねー」

ラトラーター「凄い棒読み！」

ガタキリバ「次からは、35票同士の殴り合いか……」 無視

龍騎「正直言つて、1位を多く取ったからって1位になるとは限らないんだよ？」

ZX『何だそのフラグ。 3位は119点、オーズ兄弟のおかん

！正直、リア充フラグが気になる…シャウタ！！』

シャウタ「3位…俺が、3位…何かの間違いだよな……俺は欄外だと思っていたのに」

X「自分に自信を持ちなさいシャウタ」

V3「あと、サゴーズじゃあるまいし欄外はありえないから」

サゴーズ「V3先生あんたって人はアアア！」

ガタキリバ「2位は…128点！焼き鳥・タジャxx・タジャの助…様々な不遇な扱いを受けつつも、長男の面子は保ったタジャドルウウウー！！」

タジャドル「はあああ！！？」

龍騎「ちなみに、兄弟の中で1位をとった数は彼が最高の18票です」

タトバ「それでなんでビリ…はっ！」

龍騎「なお、俺のマイ弟は1位を10票分取っても7票分の俺に負けました」

サゴーズ「そうか…1位は5点、2位は4点、3位は3点のルール

だ……！」

ラトラーター「成程、2位か3位で地味に稼げばタジャドル追い抜けるよな……って、もう一人って言うか一匹しかないけど！」

龍騎『発表します！オーズ兄弟部門、栄えある1位は……やはり萌えは強かった！萌えっ娘恐竜ペット・プトティラ……！』

プトティラ「プト……1位なの……？○○」

シャウタ「やった、復活した！」

V3「そうだぞプト介！」

プトティラ「プト介じゃないもん……2位は誰なの……？」

ブラカワニ「タジャドルだよー」

プトティラ「……タジャ××とわんちゅーふいにつしゅなんてやだああああ！><」 ストレインドウム

タジャドル「ぐああああああー！？」 直撃

ズドゴオオオン！

シャウタ「タジャドルウウウ！」

龍騎『タジャドルの存在を消しても、既定事実は覆せませんよー』

ガタキリバ『つか、地味にお前の予言当たってるじゃないかよ！お前ライアの立ち居地奪うな……！』

ラトラーター「X先生に絞められれば、テストの山勘当たるようになる……！？」

X「……勉強はちゃんとうか？」 拳ベキボキ
ラトラーター「ごめんなさい！」

ライア「 さて、次回はプトティラと龍騎の主役話だ」

全「……そうだ、確かそんな賭けしてた！」「」

072:プトの一日龍騎の子！

龍騎「【プトティラの一日龍騎家のペット企画】ゝ！」
プトティラ「ぷえ？」

龍騎「プトティラは、今日一日うちのペットだからな」
プトティラ「シャウタは？シャウターシャウター〇〇」

龍騎「明日になったらお家に帰れるぞ」
プトティラ「あう？」

リュウガ「兄貴…まずは、プトティラにちゃんと趣旨を説明しろよ」

龍騎「前回、人気投票の結果で1位になったのは？」
プトティラ「プト！」

龍騎「と？」
プトティラ「シャウタ！」

リュウガ「脳内改変しやがった！ちなみに、正しくはこの馬鹿兄貴だからな！！」

龍騎「作者はどんな企画を立てていましたか？」
プトティラ「うーと、…1位の人でお話作る…？」
リュウガ「そこは覚えていたのか」

龍騎「というわけで、【プトティラの一日龍騎家のペット企画】が始まりました」

プトティラ「おうち帰っていい？O O」

龍騎「明日になったら帰っていいよ」

プトティラ「今日…ベンちゃんとお風呂の日だったんだよ…？O m O」泣きそう

龍騎「お風呂の時だけ帰っていいよ」

プトティラ「わーい！」

リュウガ「ちょっと待て、それ、明らかにそのまま自分の家で寝るフラグー！！」

龍騎「というわけで、まずは散歩だ！」

プトティラ「おしゃんぽ！」

リュウガ「おい、大丈夫か、確かプトティラって」

プトティラ「ぷーい！> <」

龍騎「ああああああああああああああああああ」早速引っ張られている

リュウガ「やつぱりー！」

ブレイド「ふー、掃除完了っ」と

ブラカワニ「店長ー、在庫発注ちょっとおかしいんだけど、どうなのかね？」

ブレイド「んー…げっ。轟鬼君また発注ミスってるし…！とりあえず、こっちで調整してみるから…ブラカワニさんは、レジのほうを」
プトティラ「ぷっきゅーん！」

龍騎「うおっほほほほほほなんか意外と楽しいー！！」

ブレイド「龍騎がまるで風揚げの凧のように引っ張られているうううううー？」

ブラカワニ「アレは新しい引っ張られ方だよ！」

プトティラ「甘くて美味しいね！」

龍騎「ホントだなー。これ、買ったんですか？」

X「実家のリンゴ。傷が付いているから売りに出せなくて、よく送って来るんだ」

プトティラ「ほんとだー」

X「でも、傷が付いたリンゴっていうのは、傷を治そうとして一層甘くなる……らしい」

龍騎「なんか聞いたことあるなー。リンゴや梨のヘタの部分に傷をつけて何日か経つと、普通のより甘くなるって」

プトティラ「ぷえゝぷえゝぷえゝ〇〇」

X「懐かしいな『へえゝ』ボタン！」

プトティラ「リンゴありがとーございました！〇〇」

龍騎「美味しかったす」

X「じゃ、これで」

プトティラ「ばいばーい！……おしゃんば再開だよ！〇〇」
猛ダッシュ

龍騎「うおっはあああああああやっぱ普通の絶叫マシンより楽しいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii やっぱり重
力に逆らった引っ張られ方

X「…龍騎は…生きていられるな、うん……うん」

ファイヤーステイツ「暇だな…まあ、滅多に火事なんて起こらないし…」

龍騎「ファイヤーステイツさんこんにちはーっす！」

プトティラ「こんにちはー！><」

ファイヤー「おー龍騎、今日はプトティラに引っ張られ……ええええええええええー！」

龍騎「じゃあねー」

プトティラ「ぷーい！」

ファイヤー「え…えええ…えええええ…？」

カプトHF「ゝ」

龍騎「こんにちはー！」

プトティラ「ちわー！><」

カプトHF「おお、こんにちはー」

カプト「いや、父さん。アレはツツコミを入れる…あんなアグレッシブ・散歩を流さないでくれ！」

アギトSF「いらつしやいませ」

デルタ「すみません。人参とジャガイモを…」

龍騎「シャイニングさんとデルタ先生ー！」 全力引つ張られ

プトティラ「こーんにーちはー！○○」 全力疾走

アギトSF「あらこんにちは」

デルタ「プトちゃんは今日も元気ね」

ライアサバイブ「……ツツコミを入れたほうが、いいのだろうか…！」

プトティラ「ぷうーい！」

スカイライダー「あれ、プトティラと龍騎じゃ」

V3「あ、本当だな。おーい、プト介ー」

プトティラ「プト介じゃないもん！」 急停止

龍騎「…ペンすいつちツ！？」 慣性の法則

スカイライダー「かせつとあーむツツツ！？」 龍・騎・激・突

プトティラ「プト介じゃないもんプト介じゃないもんプト介じゃないもんプト介じゃないもん（以下省略）><」

V3「プト介プト介プト介プト介プト介プト介（以下省略）」

スカイライダー「…スィカじゃないスィカじゃないスィカじゃないスィカじゃないスィカじゃない（以下省略）」

龍騎「皆仲いいな」…って、あれ？仲がいいといえば、スーパー1先生とライダーマン先生は？」

V3「二人とも学校だったはずだが？」

スカイライダー「スーパー1先生ね…あだだ、確か前に飲みに行つた時、先生に何か愚痴つてたような…でも思い出せない」

龍騎「ま、いや。それじゃあそろそろ、家に帰って風呂の準備するか」

プトティラ「ぷつきゅーい！><」全力疾走

龍騎「それじゃあさようならー！」やっぱ引つ張られるスカイライダー「あいつ、もう、体内に重力低減装置あるんじゃないかな」

V3「知らね」

そして風呂の時間…

プトティラ「…」ご満悦

龍騎「ふいー」

トラカン『トラー（訳：なんで龍騎までこの家の風呂に…そして入れなかったサゴーズご愁傷様すぎる）』

龍騎「それじゃ、帰るか！」

プトティラ「プトのおうちここだよ？omO」

龍騎「明日までプトティラは龍騎家のペットです」

プトティラ「えう、やだやだ、おうちがいい！」

龍騎「今日の夕飯はステーキです」

プトティラ「しゅてーき……でもシャウタのご飯がぁぁー
ー」

龍騎「ステーキ肉は、この間ディケイドがおつかいに来たグローイングに高い肉買わせようとする前に……リュウガが絞めてくれたお礼として、コンプリさんから貰いました」

プトティラ「でもぉぉー」

龍騎「今日の夕飯はオーズ家も御呼びしています」

プトティラ「しゅてーき、しゅてーき > <」

シャウタ「なんかごめん……龍騎……」

龍騎「別に、コンプリさんから貰った肉だし気にしないでいいよー」

シャウタ「そうじゃなくて、……うちの子お泊りとかあまりしたことない子だから……我儘言っただんじやないかと」

龍騎「いや、基本的に散歩で一日終わっただようなものだから大丈夫だけど？」

タトバ「本当に、あれ、凄かったよ……」

サゴーズ「龍騎マジ龍騎としか言えなかった……」

ガタキリバ「プトティラ。とりあえず、普段家では食べられないお肉タダで食べさせてもらえるんだから……龍騎の家で最後までお泊りしてやれよ？」

ラトラーター「タジャドルより懐いているなら耐えられるって。それに、ガタキリバが硬くなったようなものだと思えば平気だし」

ブラカワニ「明日の朝、パパンが迎えに来てあげるから仲良くネンネするんだぞー」

プトティラ「んー、分かったーomom」

この夜、龍騎とプトティラと龍騎SVの軒でリュウガとリュウガ
サバイブがオーガ家に避難しました

073：ファイズと地獄万力裏話

この物語は、プトティラが龍騎とアグレッシブ散歩をしていた時の話である…

ファイズ「お邪魔しまーす」

タジャドル「ん、ファイズか」

ファイズ「あれ、シャウタは」

ガタキリバ「隣町まで買い物。プトティラは…“龍騎家の一日ペット企画”に巻き込まれた」

ラトラーター「ちなみに、関係ないけどサゴーズはスカイライダー先生の家に時代劇のDVD返しに…タトバは、電王プラットやベースステイツと一緒に図書館で受験勉強」

トライド「ガオン（訳：ちなみに親父さんはバイト、双子は受験勉強）」

ファイズ「あー、成程な…」

タジャドル「すぐに茶を出そうか」

ファイズ「いや、別にいいんで」

ガタキリバ「お願い、一緒に茶を飲もう。そして俺達に休息を」
ラトラーター「朝からぶっ通しで疲れてるんだよ…！」

ファイズ「…前言撤回。ちょっと休んでから帰ります」

ガタキリバ「え、お前の父さん…本郷町の郵便局の局長になったんだ！」

ファイズ「はあ。正式に就任するのは4月からで、その都合で3月半ばにはこっちの方に越してくることになったから」

タジャドル「だが、お前の実家って確か4駅隣なんだろう。今通っている高校からは、だいぶ遠くなるな」

ラトラーター「そうになったら、うちの学校に転校して来るんだ！」

ファイズ「と言っても、4月の話だからな…それに学校も一文字高校って決まってるわけじゃないし」

タジャドル「何故だ？一文字高校なら、シャウタやリュウガもいるし…」

ファイズ「…俺の話、シャウタから聞いてるだろう。一文字高校には、ベルデって先公がいるじゃねーか」

タジャドル「あ、確か、俺が2年の時に転勤してきた…」

ファイズ「一年の時あいつが担任だったんだけど、…凄く苦手でさ。なんていうか、俺ん家が父子家庭で…俺がちよつと態度悪いからって、何かと煩かったんだよ」

ガタキリバ「あー、分かる分かる！陰険って言うか、ネチネチしてるっていうか」

ラトラーター「今、俺のクラスの副担やってんだけど、…進路相談中に家庭環境のことしつこく言ってきた上に、スカイライダー先生にまでネチつこく言ってるさあ…」

タジャドル「何言われたんだ…（スカイライダー先生が）？」

ラトラーター「『担任がしっかりしてないから、成績伸び悩んでいるんじゃないですか？』って…あーもー考えただけでライオディアスしたくなった！」

ファイズ「……俺なんて、何か悪いことがあつたらすぐ疑われてさ。

まあ、仕方ないとは思っただが」

…ピンポン

ファイズ「客か？」

X「おい、リング持ってきたぞ」 箱持ってきたながら

タジャガタラト「…あ、はい」…

ファイズ「げっ」

X「あれ、ファイズじゃないか。久しぶり」

ファイズ「…ども」

ラトラーター「あれ、そういえばファイズって、X先生と面識あるんだっけ」

ファイズ「あるだろ…2年と3年は、この人が担任だったんだから」
ガタキリバ「あつれ、シャウタと3年連続の印象しかなかった…」

X「今、高校ってどんな感じなんだ？」

ファイズ「…まあ、まずまず…っすかね。まあ、中学1年の頃よりは居心地はいいんで」

X「まあ、お前は色々疑われて大変だったからな。学校の窓ガラスを壊したとか、校長の像に落書きしたとか」

タジャドル「あ…それ、サゴーズやシャウタから聞いています。何でも、犯人は当時3年だったインペラーやガイだったけど、ベルデ先生が『ファイズがやった』と決め付けていたって」

ファイズ「…ま、さっきも言った通り、疑われても仕方ないような生徒だったしな。だけどさ…」

く回想く

ベルデ「いい加減に、正直に言ったらどうなんだ？お前がやったんだろ！」

ファイズ「だから…俺はやってないって言ってるんだろ」

ベルデ「理由はなんだ？腹いせか、ん？」

ファイズ「…」

X「まあまあ、ベルデ先生。本人もやっていないって言っているんです、生徒のことを信じて、本当は誰がやったのか探し出す方が」
ベルデ「そうは言いますけどねえ。…そもそも、教育指導としての指導が足りないんじゃないですか？こんな不良生徒を野放しにしておくなんて」

ファイズ「ちつ、もう好きにしろよ」

X「あ、ファイズ！」

ファイズ「…」

X「お前がやったわけじゃないんだろう？」

ファイズ「いいよ、どうせ皆俺がやったって思っているんだろうさ。先生も、腹の内ではそう思ってるんだろ」

X「別に、そんなことは」

ファイズ「ま、もう諦めてるし。こういう捻くれた性格になったのは、母親がいないからっていつも言われてきていたからさ…つか、先生は王蛇とかは徹底的にアイアンクローで絞めてるのに何で俺にはそういうことしないんだよ」

X「教育指導だからって、いつもアイアンクローがましてると認識をするのもどうかと」

X「俺が指導してるのは、お前みたいに“やっていないけどやったと疑われている生徒”じゃなくて、“悪いことをやった証拠がきちんとある生徒”だよ」

ファイズ「俺がやったって疑ってないのか？」

X「お前は、確かに口も悪いし態度も悪いけど……学校のものを無闇に壊したりする奴じゃない。それと、」

ファイズ「？」

X「……なんだろう、お前と大体同じなんだよな。……両親が早くに他界して、今の実家の方に引き取られてさ」

ファイズ「……」

X「育ての両親と血が繋がっていないってだけで虐められたりしたし、ファイズみたいに……何か学校で事件があると、自分は何もやっていないのに周りから疑われたりして」

ファイズ「……それで、どうして教師に」

X「自分みたいに、何もやっていないのに濡れ衣を着せられる生徒を……見たくなくて、助けたくて、かな」

ファイズ「……」

X「だから、お前がやっていないって言うなら信じる。本当にやったのが誰か探して、二度としないように指導する。……それが教師として、教育指導としての仕事」

ファイズ「……俺さ、」

X「？」

ファイズ「……あんたのこと、ガイや王蛇といった凶悪生徒をアイアンクローで絞め落とす地獄万力教師って思ってたけど」

X「ちょ」

ファイズ「……あんたみたいな先生に、早くに会いたかったって思うよ」

〽回想終了〽

ファイズ「あんたのお陰で、今よりもつと捻くれずに済んだ。
あんたがいなかったら、俺は間違った道に進んでいたかもしれない」
ガタラト「……ずびーっ……」 ティツシユで鼻かみ
タジャドル「……ええ話や……」 ハンカチ装備
X「そつか。それで……ファイズブラスターさんから聞いたんだけど、
来年の3月に越してくるんだって？」

ファイズ「予定だけだな」

X「学校は？ やっぱり、一文字高校なのか」

ファイズ「……どうだろうな。ベルデ先生がいるから、やっぱ分らない」

X「スカイライダー先生やライダーマン先生もいるから大丈夫だよ。
……あと……（フリーダム的な意味で）期待していいのか分からない、
スーパードクター先生とV3先生も」

ファイズ「……ま、ゆっくり考えるところか」

X「あ、そうだ、リングいくつか持って帰るか？」

ファイズ「……じゃあ、3個ほど」

その頃。

スーパードクター「ベルデ先生、ちょっといいですか」
ベルデ「はい？ どうかしめましたk」

スーパー1「いや…昨日飲みに行った時、スイカ…否スカイライダー先生が号泣しだしたもんで」

ベルデ「は？」

スーパー1「事あるごとに、担任の指導が悪いだの、担任がしつかりしていないからアホラーターの成績が悪いだの…自分にネチネチネチネチネチネチネチ言ってくるってマジですか」

ベルデ「マジって、事実だから仕方g」

スーパー1「アレ虐めていいの俺（+V3先生）だけですからね？そこんとこ理解しとけカメレオン野郎」 X直伝アイアンクロー（パワーハンド使用）

ベルデ「ヒイヒイヒイ！？」 顔面蒼白

1号「んー」

ライダーマン「あれ、どうしたんですか校長」

1号「いや…今度バイオリライダー先生が、オルタナティブ・ゼロのところの中学に転勤することになって…入れ替わりで誰を補充しようかなーって」

ライダーマン（キャラが足りなかったがばかりに…バイオリライダー先生…！） 号泣

1号「来年もそれなりにアクが強いにいるみたいだし、歌舞鬼先生は今の1年A組の相手辛そうなんだよなあ」

ライダーマン「胃薬への出費が増えた、と言っていますからね…」

1号「あ、よし、じゃあ…X先生戻すか！来年からアマゾン来ることになったら、そっちの方がいいだろうし」

ライダーマン「わあ…ただでさえ多い社会系統が増えた…」

1号「ん？スイカライダー先生の話だと、あの人英語と国語もいけたって聞いているから…足りない国語科でよくないか??」

ライダーマン「いいのかそんな適当で！そして、来年度の教育指導層が凄まじいことに！！」

現在の一文字高校の教育指導員はスーパー1

074：お鍋パーティー！帰還編

タジャドル「今日は皆で…」

プトティラ「お鍋だよー！><」

シャウタ「鍋ってホント楽でいいわー作る手間省けるわー」　コタツからシャシャシャウター

ラトラーター「おいシャウタ、お前コタツに入りすぎると死ぬから気をつける」

ガタキリバ「それを言うと、鍋してる時も熱気が籠っているせいで数十分後にのぼせてるから…ホント気をつけるよシャウタ」

サゴーズ「ポカリ×3、よし！クーラーボックスの氷よし！…氷水の入った金ダライよし！」

タトバ「保冷材準備よし！」

ブラカワニ「それじゃ、早速鍋に具を入れよう！」

ピンポーン

オーズ兄弟「…」　意気消沈

ブラカワニ「パパンが出た方が…あーでも寒い」

プトティラ「プトが出るー」

タジャドル「なあ、この場合、誰がくると思う」

シャウタ「V3先生だった日には最悪」

ラトラーター「あーでも、先生達この時期は忘年会だから…なんとか」

ガタキリバ「アホ。何があっても来るのが先生達だぞ…そこに料理があるなら！」

プトティラ「パパーン〇〇」

ブラカワニ「うおー、どうしたマイペットー」

プトティラ「プトの知らない人だった」

ブラカワニ「パパン寒いよん」

サゴーゾ「タジャドル出て行ったら？」

タトバ「炎のコンボだし、コタツから出ても支障ないでしょ」

タジャドル「お前ら…魚のすり身食わせないぞ」

シャウタ「いいから行つて来い」 豆腐入れながら

ぎゃああああああああああああああああああ

ラトラーター「何があつたあの兄」

ガタキリバ「さあ」

プトティラ「食べられた？」

シャウタ「生体反応は残ってるよ」 ソナー機能使用中

タジャドル「たい、たい、たい、たい、たい…」

シャウタ「たい焼き？」

プトティラ「たい焼き…Xせんしえーのくれた、たい焼きおいしか

つたなー〇〇」 よだれ

タジャドル「違ーう！大変なんだよ、か、かかか…」

サゴーゾ「家政婦を見た！」

ラトラーター「火曜サスペンス劇場！」

ガタキリバ「カテナチオカウンター！」

タトバ「海パン！」

タジャドル「だからあああ！」

ママン「ただいまー」

タトガタラトサゴシャウ「「母さああああああん！？」」

「」

ブラカワニ「ママン！？」

プトティラ「この人ママンなの？」

ママン「こんばんは、プトちゃん」 プトティラなでなで

プトティラ「…なんでママンはタジャ××と同じ頭なの…？ O O」

タジャドル「お前母さんに失礼！」

タトバ「まあ確かに、残念がる気持ちは分かるけど！」

タジャドル「おおいッ！？」

ラトラーター「ところで、他はいいのか？ 他は」

ガタキリバ「トラとか、バッタとか、突っ込まないのな」

サゴーズ「お前らも大概失礼」

シャウタ「…」 サゴーズガード

ママン「シャウタ？」

シャウタ「…いや、脈絡なく帰ってきたから、うん」

ブラカワニ「相変わらず恥ずかしがり屋だなあ」

ママン「トイトイトイ」

シャウタ「俺、鳥じゃないよ！？」

ママン「ところで、外にいたこの子が前に言ってたトラベンちゃん？」

トライド「クウーン（訳：寒かった）……」

全「……あ、トライド忘れてた」「」

プトティラ「ごめんねベンちゃん……omO」

V3「ういーっす、鍋だ鍋ー」　ビール持参

スーパー「おー、温かいなここ」　ミカン持参

スカイライダー「あー寒かった……スーパー先生が冷熱ハンドの寒
い方吹きかけてくるから、尚更……」　おつまみ持参

ライダーマン「お邪魔します」　焼酎持参

ZX「おお、もう準備できてる」　餅持参

タトバ「なんであんたらも普通に來てるんだアアア！」

X「ホントごめんホントごめんorz」　肉と野菜としいたけと豆
腐持参

シャウタ「いえ、……こっちだってマジすいませんX先生……！」　土
下座

サゴーズ「正直、V3先生達のことを考えると……食材がX先生便り
でした！」　上に同じく

アマゾン「アマゾン、鍋、食べに來た」

ママン「いらっしやいませ」

V3「やー、タトバ達のところのお母さんもいるなんてなー」

スカイライダー「結構美人ですよなー」

ライダーマン「タジャドルって言うよりシャウタの母性とプトティ
ラの癒しを足したような人ですよー」

V「ライXスカ1Z」「……オーズ一家の奥様アアアア！！？」「」
ガタキリバ「今更かい！」

ママン「息子達がお世話になってます」

X「なんか凄い癒しのオーラ出ている……！」

スーパー1「頭タジャドルってマジ信じられないな……」

タジャドル「スーパー1先生あんたアアア！」

ラトラーター「でも、何で急にこっちに？」

ママン「今のお仕事がやつと片付いてね。こっちに戻ってこれるようになったのよ」

サゴーズ「じゃあ、これからずっと一緒なんだ！」

プトティラ「……」

シャウタ「どうした、プトティラ。母さんに会いたがってたじゃないか」

タトバ「まさか、タジャドルヘッドのせいで母さんに甘えたくても甘えられないとか……？」

タジャドル「おい……orz」

プトティラ「あのね、あのね、」

ママン「なあに？」

プトティラ「なんでママン……シャウタとサゴーズの部分ないの？O

O」素朴な疑問

V3「あ、それは確かに」

サゴーズ「うわああああああ……！orz」

シャウタ「それ凄く気にしてた、気にしてたのにイイ……！orz」

プトティラ「ぶえああああ！？OO」

ガタラト（うん……プトティラは間違ってないんだよ………プトティ

ラは…）」

タジャドル（でも、シャウゾにしても今度は逆に俺達に似ていないという…）」

タトバ（もうこの家マジ複雑）

プトティラ「ぷい…ぷええ…；；」

スカイライダー「ああ、泣き出しちゃった…」

X「プトティラ、よく聞きなさい」

プトティラ「ぷっきゅ…ぷっきゅ…；m；」

X「家族って言うのは、見た目が似ているだけが家族じゃないんだぞ…」今の両親とは養子縁組の家族

高校教師勢（（無駄に説得力あるんですがアアア！））

X「シャウタとサゴーズも、血液検査では二人の子供って分かっているんじゃないか…もっと自信持ちなさい、本当に」今の両親と血の繋がりのない人

シャウタ「…すいませんでした…Part 2」

サゴーズ「俺達がバカキリバでした…」

プトティラ「ごめんなしい…T T」

ママン「そうよね、ちょっと不思議だったわよね」プトティラなでなで

プトティラ「ぷきゅん…」

ママン「でもね、サゴーズもシャウタも私とパパンの子供なのよ。勿論、プトちゃんもトラベンちゃんも」

プトティラ「ところで、何でママンプトのこと知ってるの？omom」

ママン「タジャドルの手紙で、よく話聞いてたから」

プトティラ「omom」

プトティラ「ぶつきゅええーいッ！」 月面キック

タジャドル「ごふうっ！？」

タトバ「スーパー1先生の技アアアア！！！」

スーパー1「よし、だがプトティラ…空に月が出ている時にやるともっと映えるぞ！」

スカイライダー「そこじゃないッ！？」

プトティラ「プトの悪いとこたくさん書いたでしょ！かーいーたーでーしょー！！TT」 タジャドルぽかぽか

タジャドル「書いてないし！母さんの性格上、バラすの分かってるから書いてないし！！」

プトティラ「うしよだー！TT」 ぽかぽか続行中

ママン「本当に仲がいいわねー」

ガタキリバ「で、…実際あいつの手紙…何書いてあったわけ？」

ママン「そうね、……プトちゃんが来てから暫く落ち込んでいたシヤウタが元気になったとか、シヤウタの作ったお弁当のこととか、プトちゃんがシヤウタにべったりとか」

ラトラーター「おい、予想してたけどシヤウタのこと中心じゃねーか、あのブラコンタジャxx」

サゴーズ「案外、ドラゴンとタジャドルって気が合うんじゃない…？」

V3「よし、この豚肉俺の！」

ブラカワニ「何の！パパンはこっちの鶏肉なのだ！！」

全「「「あんたらああああー！」「」」

ママン「あらあら」

X「奥さん、ちよつと、シャウタとプトティラとアマゾン連れて避難してください」 両手ボキボキ

アイアンクロー制裁中…

Vブラ「」 轟沈

X「さてと、じゃあ気を取り直して、鍋食べますか」

プトティラ「もういいー？O O」

アマゾン「アマゾン、早く食べたい…」

シャウタ「あ、もういいっぱい…ってか親父とV3先生何されたの？」

ママン「何されたのかしらね？」 見てたけど超スルー

スーパード「あ、そうだ」

スカイライダー「はい？」

スーパード「デルタ先生も一応呼んだぞ、後から来るってさ」

タジャライスカズ「」 コタツからガタツ

シャウタ「コラ急に立つな！」

V3「え、俺アメイジング呼んじゃったんだけど大丈夫？」

全「「「何故に！？」」」

V3「両親が温泉旅行中らしい。だから、アメイジングとマイティ

とタイタンとペガサスとグローイングと…あと確かドラゴンも来る
ってさ」

シャウタ「」コタツからガタツ

ガタキリバ「おい言いだしっぺ自重しろ」

X「ところで、足りるんですか…具材…」

V1「さあ？」

X「買ってきます…！」号泣

ラトラーター「ストップ、X先生、先生はもういい…もう充分だからー！」

サゴーズ「呼んだ本人達！あんたらが準備してやれよおおー！」
タトバ「これ以上X先生の財布にダメージ与えないであげてエエエ
！」

結局、足りない具材はV3とスーパー1とスカイライダーとライ
ダーマンが買いに行きました

075：お鍋パーティー！酒飲編

デルタ「お邪魔します」

アメイジング「いやー、まさか鍋パーティーに呼んでもらえるなんて」

タイタン「ヘタしたら、またカレーだったもんな」

マイティ「うん…鍋マジ最高」

ドラゴン「シャウタさんとお鍋…！」

ペガサス「招待してくださって、ありがとうございます」

グローイング「ぷーちゃん、じえくろー、あまじょん！」

ママン「いらつしゃいませ」

シャウタ「うん、皆上がって。ドラゴン以外」

アメイジング「いやあ、オーズ兄弟の奥さんもいるなんて」

ペガサス「では、お邪魔します」

デルタ「皆でお鍋なんて、楽しみね」

クウガ一家「… オーズ家のお母さん！！？」

デルタ「…あら、えっと、初めまして？」

ママン「いつも息子達がお世話になっております」

ドラゴン「いえ、こちらこそ…お義母様！」

タジャガタラトサゴ「…誰が『お義母様』だ！？」「」

トライド『グオオオン（訳：こいつ…いつも通り過ぎる）！』

ドラゴン「」 ガタキリバに殴られて外放置

ライダーマン「デルタ先生、どうぞこっちに！」

スカイライダー「いえいえ、こっちに！」

ZX「こっち…」

グロージング「じゃえくろー」 ZXの開けた場所に座る

ZX「orz」

アメイジング「…グロージング…orz」

マイティ「複雑だなあ」

タジャドル「こっちの方が、具が取れますよ！」

ガタキリバ「お前も必死だな」

ラトラーター「その調子でブラコン治してもらいたいもんだ」

サゴーズ「ブラコンというより、シャウコンね」

プトティラ「…」 タジャドルの開けた席に座る

タジャドル「何故そこに座る！？」

プトティラ「シャウタの隣だから○○」

シャウタ「よしよし」 プトの頭撫で撫で

タジャドル「orz」

プトティラ「でもタジャ××の横はプトの神経耐えられないから、
ママンかデルタせんしえ入って…」

タジャドル「…！？」

ママン「あら、じゃあ私が…」

ガタキリバ「 母さん！俺とラトラーターのために思うなら、俺

とラトラーターの間に!!」

ラトラーター「マジお願い、タジャxxのブラコン完治は母さんの行動次第なんだ!」

ママン「?」 タジャドルの横に座り済み

ガトラト「アウチツ!!」

プトティラ「ママーン > <」

タジャドル「orz」

デルタ「それじゃあ、スーパー1先生とスカイライダー先生の間に」

スーパー1「それだとスイカ弄れないんで、俺とX先生の間で」

スカイライダー「嫌アアア! 色んな意味でデルタ先生俺とスーパー

1先生の間に入ってエエエ!!」

X「割と本気でお願いします!」

でもDSと地獄万力の間に座りました

パパンからサゴーズまで時計回りに座っています

パパン「さーて、お肉たくさん食べるぞー」

ガタキリバ「ってコラー! 早速高い肉食べんな!!」

ラトラーター「豆腐」

トライド『グオオン… (訳: 魚食べたいけど入ってねえ)』

タジャドル「…母さんの…馬鹿…orz」 ガチシヨック

ママン「タジャドルお腹痛いのかしら?」 悪気なし

プトティラ「おにくーおにくー」

シャウタ「…」 気まずい

ペガサス「…」 上に同じく

グロイーング「じえくろ、おはなし!」

ZX「はは…食べ終わってからな…orz」

マイティ（ZX先生も大概不憫だよなあ…）

スカイライダー「orz」 皿に豆腐ぶち込まれ中

スーパー「」 スカイの嫌いな豆腐ぶち込み中

デルタ「皆で食べる鍋って美味しいですね」

X「ええ…そうです、ね…（スカイライダー先生、救えなくてごめん…！）」

アマゾン「クエー」 生肉頬張り中

V3「あれ、俺の肉は？」

ライダーマン「もう食べたでしょうが！」

アメイジング「グロージングorz」

タイタン「タジャドル先輩もアレだけど、うちの兄貴のブラコンっていうかグロコンも酷いよなあ…」

サゴーズ「ホントにね」

V3「じゃ、そろそろお酒タイム！」

ライダーマン「未成年多いのに何やってんですか！」

スカイライダー「せめて、食べ終わってから飲みましょーよ！？」

V3「だってブラカワニさんもう飲んでるぞ」

ブラカワニ「パパン気分乗ってきたおー」

ガタキリバ「ああつ、既に呂律が回っていない！」

V3「タジャドル飲め」

タジャドル「何言ってますか！？俺、明後日誕生日ですよ！」

V3「あれ、そうだった」

タジャドル「紹介コーナーでは何故かもう既に19扱いされてるけど、実際の俺の誕生日って12月！つい最近決まったから多少過去の内容とズレが生じるけど、12月ですから！？」

シャウタ「タジャドル、メタい！」

デルタ「ところで、皆、血液型とか誕生日ってどんな感じなのかしら。私は、9月のO型なんですけど」

ブラカワニ「パパン、8月のO型」

ママン「私は4月のA型だったかしら」

タジャドル「12月のA…」

ガタキリバ「7月O型」

ラトラーター「上に同じく」

サゴーズ「えつと…3月のO型」

シャウタ「11月のA型」

タトバ「5月のO型だけど」

プトティラ「わかんないO」 2月のB型

V3「6月のAB」

スカイライダー「2月のAです」

スーパード「8月のB型」

X「11月のA型ですね」

ZX「1月のO型です」

ライダーマン「8月のAです」

アマゾン「？」 4月のAB型

アメイジング「1月のAですね…」

タイタン「俺とマイティは…」

マイティ「3月のB型です」

ペガサス「私とドラゴンさんは4月生まれですが、私がAでドラゴン兄さんがBです」

グロージング「うにゅ？」 10月のA型

デルタ「シャウタとX先生、月が被ってますね」

シャウタ「俺18日ですけど」

X「19日」

ペガサス「…」 話題が見つからなくて困ってる

X「……そういえばペガサスって春生まれなんだっけ？」 空気読んだ

ペガサス「はい。丁度、入学式の日に誕生日でした」

シャウタ「へえ…じゃあ、入学パーティーと一緒に誕生日もしたとか？」

ペガサス「そうですね。アルティお母さんの手作りケーキも、食べたりして」

タジャドル「…orz」 色んな意味で悔しすぎてつい血涙

ラトラーター「こいつそろそろ埋めるべきだろうか」

ガタキリバ「埋めたらシャウタ泣くから止めとけ…」

V3「いえーい」 ライダーマンのコップに焼酎注ぎまくり

ライダーマン「もお…いいれす…十分れしゅ……」 泥酔

サゴゾ「おおーっと、他人の会話や恋愛フラグなんてどうでもいい・V3先生の本気だアア！」

タイタン「ライダーマン先生泥酔してるし！どんだけ飲まされたんだ！…」

ブラカワニ「パパンパン」 酔ってる

マイティ「この人は、……いつも通りだ」

スーパー1「…うわああああああん、俺はなんて馬鹿なんだあ

あああああ…」 泣き上戸

スカイライダー「あつははは、気持ちいいー」 笑い上戸

アメイジング「どうせ俺なんてなあ、他の先生達に比べたら影薄いし…でもそれが何だつてんだ！」 怒り上戸

トライド『グオオオオオーン（訳：なんか崩壊してるー）！？』

ラトラーター「はっ、Z先生は…」

グローイング「じえくろ、ちゅくねー」 自分で取ったつくねZXの皿に入れる

ZX「おー、ありがとな」

ガタキリバ「よかった、グローイングがいるから飲まされてない！」
ラトラーター「間違えて飲んだら大変だもんな！」

V3「X先生も飲めーい」 コップにドボドボ

X「うわっ、注ぎすぎですよ！？…後、俺家でしか飲まないんで…」

V3「飲め飲め、今日は無礼講だー！」

タジャドル「完全に酔ってるな…」

プトティラ「おしゃけくしゃいOmO」

タジャドル「あー、母さん…プトティラとアマゾンとグローイングと、ついでにZX先生退避させて」

シャウタ「そのほうがいいかも…」

ママン「分かったわ」

ペガサス「グローイング、皆と茶の間で遊んでね」

グローイング「うにゅ」

X「うう、とりあえず一杯だけですよ…」

V3「イツキ、イツキ！」

ライダーマン「ふにゃあああ…」

スーパード「素直になれないあまりスカイライダー先生虐めてるって酷いよ俺エエエ…！」

スカイライダー「ほらほら、泣かない泣かない」

アメイジング「グローイングも、何でZ先生に懐くんだよ…俺の
ほうが、俺のほうが数倍可愛がっているのによおお…」

シャウタ「ところでスカイライダー先生って、泣き上戸と笑い上戸
なんだよね」

タトバ「あー、知ってる。確か、その日によってどっちになるか分
かないんだっけ」

サゴーズ「へー。俺、スーパー1先生焼酎3杯なら普通だけど4杯
目以降は泣き上戸入るって龍騎から聞いた」

デルタ「あら、でもX先生大丈夫かしら」

シャウタ「どういことですか？」

デルタ「私も龍騎君から聞いたんだけどね、」

ガタキリバ「龍騎の情報網マジ凄エ！」

X「　　テーブルに顔面打ちつけ

シャウペガ「せんせええええい！！？」

X「…むにゃ…ZZZ……」

ラトラーター「熟睡したアアア！？」

デルタ「お酒結構弱いみたいで、焼酎一杯飲んだだけで眠るって」

スカイライダー「あゝ昔言っていましたよー、酒の席に行くといつの
間にかマンションの布団で寝てたってーははは」

サゴーズ「【銀の地獄万力】の（アマゾン以外の）意外な弱点を見
た気がする！」

タジャドル「ところでデルタ先生って、お酒は…」

デルタ「酔ったことは一度もないわね…今のところ」

タイタン「つまり生粋の酒豪そこなしなんですね」

ライター「その酒耐性が1割でも、X先生にあげられたらよかったのに……」

076：銭湯にGO！

ラトラーター「風呂の水が…」

ガタキリバ「出ない！」

シャウタ「あー、これだ。ほら、『本郷町の一部で水道工事してます』ってチラシ」

サゴーズ「うげー、今日この地域だったんだ」

タジャドル「まずいぞ。どうするんだ」

ママン「どうしましょうかしら？」

ブラカワニ「もう、一日お風呂入らなくてもいいんじゃない？」

サゴーズ「ただでさえ親父臭いののに、これ以上親父臭くなる気か？」

タトバ「プティラの鼻が曲がるよ」

プティラ「おふりよ…O O」 シャンプーハット持ちながら

ブラカワニ「パパンシヨック！orz」

タジャドル「こうなったら、ギャレンの実家に行くぞ…！」

シャウタ「こんなところで無駄な出費したくないのに…親父とラト

ラーター臭いから、仕方ないか…orz」

ラトラーター「俺のは加齢臭じゃなくて、汗だからね！汗！？」

ブラカワニ「パパンスパーシヨック！」

そして。

オーズ一家「「「こんばんはー」」」

プトティラ「お風呂屋さんだー」

ギャレン「お、来たか」

ギャレンジャックF「息子から話は聞いているよ。とりあえず、子供は60円…高校生以上の大人は120円ね」

シャウタ「くッ、トライドはトラカンモードだからタトバのアヒルと同じ扱いでいいとはいえ…プトティラとタトバ以外120円なのが…！」

トラカン『トラー（訳：アヒルと同格）！？』

V3「すみません！アパートの水道止まったから来ました…あー寒いッ…！」

響鬼「右に同じく！」

ZX「これまた同じく！」

ライダーマン「例に漏れず！」

X「…うちのアパートも、水道止まりました…！」

アマゾン「クエー」

デルタ「私のところのマンションは昼のうちに終わったんですけど、私の部屋だけ水道の調子がおかしいみたいで…」

龍騎「龍騎家も来たよー！」

マイティ「クウガ家も来ますー！」

ガタキリバ「うわっ、多い！」

サゴーズ「水道トラブル多すぎでしょ！？」

タジャドル「あれ…そういえば、スカイライダー先生はともかく…
スーパー1先生は？」

ライア「スーパー1先生は、確かV3先生からライダーマン先生までと同じアパートじゃ…」

V3「あいつ、スカイライダーの実家の風呂借りに行っただよ…」
ライダーマン「そして、そのまま風呂を占拠しているとか」

ライアサバイブ「それ、もはや立て籠もりだな」

アルティメット「とりあえず、女性は早く入りますか」

ママン「そうですねー」

ペガサス「グロージングどうしよう、お母さん」

アルティメット「まだちっちゃいし、グーちゃん一緒に入りましょ
うねー」

グロージング「うにゅー！」

デルタ「それじゃあ、私も…」

タトバ（男風呂、絶対狭いんだろうなあ…）

プトティラ「ママンばいばーい」

男全員「…プトティラもあっち！」「…」

プトティラ「ぶええ…プト今日はガタキリバの日だよ、ベンちゃん
とも入る日だよ…アマゾンとも入りたいよう！><」

アマゾン「クエエ…」 訴えるような目

ZX「ところでアマゾンって、オスですか？メスですか？」

X「…さあ…？」

サゴージ「駄目だ、リンクさんじゃないと多分見破れない」

ドラゴン「シャウタさんと一緒のお風呂…だと…」

シャウタ「タジャドル助けて！！！」

ガタキリバ「馬鹿、タジャドルは逆効果だ、プトティラでも…銭湯が壊れるな！うん！！」

ラトラーター「とりあえずもう手遅れだった」プロドラ食らうドラゴン見ながら

ブラカワニ「うん、手遅れ！」ブラフリ食らうタジャドル見ながら

V3「なんでもいいから、風呂入るぞー」

ラトラーター「でっすよねー」

ギャレンJF「あ、そういえば…」

男性陣「「「「「「」」」」」」

女性陣「「「「「「」」」」」」

グロージング「ぷーちゃん！アマゾン！じえくろー！！」

プトティラ「ぐーちゃん、ママーン！><」

アマゾン「クエー」

男女混合「「「「「なんで大風呂部分が混浴になつてんの！？」」」」」

ギャレンJF「いやー、実は先日壁が老朽化で壊れちゃって…新しく作るのも面倒だし、いつそのこと男女風呂くつつけちゃったんですよ」

タジャドル「張り紙ぐらいしてください！」

ガタキリバ「何のための風呂分けなんだよ！」

シャウタ「まあ、救いは洗面所の壁は残っていることだな…」

タトバ「後、仮面ライダーであることもある意味救い」

プトティラ「ぷっぷー」（洗面器をビート板にしつつ）女風呂側に移動

グロージング「きゃっきゃー」（男風呂側に移動）

リュウガ「そこ、泳ぐな！」

ママン「もう混浴でいいんじゃないですか？」 大風呂ちゃぼん

ブラカワニ「だよねー」 大風呂ドボン

リュウガ「コラその暢気夫婦！」

龍騎「お、サウナもある！」

デルタ「電気風呂もあるわね」

ストロンガー「俺、電気風呂ー！」

タツクル「浴槽で走るのやめなさいよ！」

龍騎SV「露天風呂もあるなー」

リュウガSV「じゃ、私サウナで」

リュウガ「…もう…嫌だ、ツッコミなんて……orz」

シャウペガ「……」 どうしようか困惑中

ドラゴン「シャウタさん、風呂に入りましょ……ござんぞーらっ！

？」 洗面器ヒット

サゴーズ「お前は外で頭冷やせ」 投げた犯人

ガタラト「…ありがとう兄弟内であまりノーコンじゃないサゴーズ」

」

ペガサス「あ、じゃあ、私、女風呂側のヒノキ風呂で……」

シャウタ「じゃあ、俺、男風呂側の水風呂で……」

ライアル「こらこら、混浴なんて滅多にないんだし、どうせライダー

の姿で風呂というシュールな光景なんだし、大風呂入りなさい」

ライア「何気にメタいな」

タジャドル「どうする……『お背中流しましょうか』と言うべきか！
？」

ガタキリバ「誰にだよ」

ラトラーター「ちなみに、シャウタだとプトティラに殺され風呂が

ロゼ色に…デルタ先生だととりあえずX先生辺りの教育指導だぞ」
サゴーズ「それか、女性の中で割と常識的なタツクルとペガサスに
軽蔑されつつ風呂桶で殴られるか」

ライダーマン「くッ…！orz」

ライアSV「ライダーマン先生？」

V3「風呂と言えば、温泉卵だよな」

ライダーマン「何故に！？」

サゴーズ「ここ、銭湯！銭湯ですから！！」

響鬼「お風呂といえば、やっぱり…焼酎だよな」

タトバ「それも違います！」

ギャレン「そうだ、うち、露天風呂もあるぞ」

シャウタ「それ、本格的に…温泉だよな」

ギャレン「銭湯だ」

タジャドル「まあ、いいじゃないか…露天風呂って、誰か入って
いないのか？」

ギャレン「さあ？」

ライア「…ま、露天風呂は女性陣に譲るのが吉だな」

ストロンガー「…」

アメイジング「お、電気風呂もあるのか」

ブラカワニ「あ、入らないほうがいいかもしれないよ」
石風呂満
喫中

アメイジング「けど肩凝りとか解消したいし…早速、」
じゃぽん

アメイジング「」
仰向けにぷかあ…

マイティ「兄貴イイ！」

タイタン「うわっ、…よく見たらこの風呂だけ電気が進ってる！」

ストロンガー「あー、やっぱりこのぐらいじゃないと電気風呂じゃないよなあ」 自分の電氣流し込みながら

ブラカワニ「だから言ったのに…」 入ったけどパパンだからセーフ

シャウタ「…なんで皆普通に混浴してるわけ？」 水風呂から顔出しながら

ライア「ところでお前は冷えないのか？」

シャウタ「いつも、プティラの時以外は冷めた風呂に入ってますんで」

ライア「……」 シャウタに同情しきつた目でタジャドル見たジャドル「ごめんなさい…！」

グロイーング「じえくろー！おふりよ、おふりよ…！」

ZX「あーここら、風呂場で走ると」

X「…普通に歩いていただけで滑って頭ぶつけた

ZX「…ああなるぞ」

グロイーング「にゅ！」 こくり

ガタキリバ「Xせんせえええい…！」

ラトラーター「あの人も大概、運ないよな」

シャウタ「…だって熱い風呂入ると、すぐのぼせるから…」

龍騎「蒸しシャチウナギタコ？」

リュウガ「コラ」

龍騎SV「じゃあ、ぬるそうなお風呂に入るのがいいんじゃないか？」

リュウガSV「さっき行ってみたけど、露天風呂は丁度いい温度だ

ったわよ」

オーガ「入ってきたら？」

シャウタ「そうだな……」

ドラゴン「それじゃあ俺も！」

リュウガ「オーガ……俺と一緒に、雑虫駆除と言う名目で相乗りする
勇気はあるか……!?」

オーガ「主に暴力的な部分を、リュウガがやるなら！」

アマゾン「クエー」 石罅床に滑らせて遊んでる

ドラゴン「まきしまむどらいぶっ!?」 石罅で滑った

リュウガ「よし今だ、俺が袋叩きにするから屍となった奴を電気風呂に沈めろ！」

オーガ「僕の担当も充分暴力的ですが!？」

シャウタ「気持ちいい……」

トラカン「トラー」

シャウタ「あ、トラカンって言うかトライドもいたのか……ってか
トバのアヒルもいるし、グローイングの玩具も浮いてるし……」

ガタキリバ「なんで入る前に気付かなかったんだよ」

シャウタ「あれ?ガタキリバも入りに来たのか」

ガタキリバ「知ってるか……この銭湯、外に女子風呂含めて2つ露天風呂がある上に……五右衛門風呂まであったんだぜ……」

シャウタ「もう温泉だろここ」

X「……まだ気絶中

プトティラ「きゅっきゅー」 石罅をチョーク代わりにしながら

V3「えー、被害者はX先生……凶器は銭湯の濡れた床のように思わ

れます。グローイング刑事」

グローイング「にゅー。どりゃごんをたいほだー！」

タトバ「…酷い…（X先生的な意味で）」

サゴーズ「惨い…（気絶したX先生で遊んでいる意味で）」

X「うぐぐ…」

V3「あ、起きた」

プトティラ「ぷえ、えつくせんしえ…もうちよつと寝てて」

グローイング「いまからどりゃごんたいほ！」

X「何で俺で遊んでいるんですか！遊ばせてい…」

シャウタ「ぎゃあああああ！？」 足滑った

X「こんふあいんべんとツ！？」 シャチヘッド先端直撃

ガタキリバ「タコ仕事しろオオオ！？」

ラトラーター「そうじゃなくて、…X先生イイ！」

シャウタ「」 タコが仕事しなかったせいで気絶

X「」 シャチのせいで再気絶

V3「遺体役が増えたな」

ギャレン「じゃあ、まずはタジャドルの取調べを」

タジャドル「するな！まずは二人をどうにかしろオオオ！」

30分後に代表してV3がXにサマーソルトキック食らいました

077：サンタさんはいる？いない？

プトティラ「メリークリスマス！〇 〇」

タジャドル「今年もこの季節がやってきたな…」

ガタキリバ「ホント、これが来ると…」

ラトラーター「ああ…」

タジャドル「浮かれないのに来年受験、っていうプレッシャーがな…！」

ガタキリバ「ホント胃が痛くなるわあ…！」

ラトラーター「俺、正月明け早々って何なのイジメ？」

タトバ「なんでだろう、目の前が涙で霞む」

サゴーズ「来年は俺も…同じ目に遭うのか…」

シャウタ「そこ！プトティラが落ち込むからやめなさい…！」

プトティラ「サンタさんまだかなー、まだかなー」

サゴーズ「サンタかあ…うちには来たことがもぐっ」

シャウタ「…言うな…！」

タトバ「純粋な子供心を破壊したら駄目だよ…！」

ブラカワニ「サンタさんだよー！」 サンタの仮装しながら

タトタジャガタラトサゴシャウ「ナニヤテンダ親父」

プトティラ「パパーン！」

ブラカワニ「はっはっは。パパンではなくてサンタさんだよ」

ママン「あらパパン、ローストチキンが出来てますよー」

パパン「わーい」

プトティラ「パパンじゃん・」

トライド『グオン（訳：つかローストチキンでボロ出すなよ）…』

ブラカワニ「とりあえず、ママンにはハンカチのプレゼントだよー」

プトティラ「プトも選んだ！」

ママン「あら、ありがとね二人とも」

ラトラーター「俺達には？」

ブラカワニ「へ？」

ガタキリバ「俺達への…」

タトバ「クリスマスプレゼントは？」

ブラカワニ「本物のサンタさんに頼むのだ」

タトガタラトサゴ「っざけんな！」

タジャドル「落ちつけよお前ら…つか、ガタキリバトラータータ

トバは受験用の本がプレゼントでいいだろ」

タトガタラト「やだぁ！」

シャウタ「我俣言うとケーキなし」

サゴーゾ「ううっ…うちにはサンタさんが来てくれた試しなんて確
かにないけど、ってか本当はいないけど、せめて一回ぐらいはま
もなプレゼントを…！」

プトティラ「サンタさんいないの…？○○」 持ってたハンドベ

ル落としながら

サゴーズ「あ」

タジャシャウ「このアホ！」

プトティラ「いないの…？O m O」

サゴーズ「えっと、あの、あのな」

タトバ「サンタさんは…サンタさんは、ね…」

ガタキリバ「いや、サンタさんは…サンタさんはいるぞ！」

ラトラーター「うちにいつもプレゼントくれるじゃないか！X先生という名のサンタさんが！！」

タジャドル「なんでだよ！いや、まあ…確かにお米とかリンゴとか、助かってるけどさ！！orz」

シャウタ「ある意味間違っていないのが悔しい！」

タトバ「そして、なんだろう…最近の傾向から、クリスマスに大晦日に新年会…総てのイベントにおいて、先生達が乱入してきそうな予感は！」

プトティラ「サンタさん…来ないの…？プトいい子にしてたのに…」
タジャドル「お前、本当にいい子にしていたか…？」

プトティラ「してたもん！タジャドル以外にはいい子だったもん！」

タジャドル「俺に対しては悪ガキなの自覚してたのかよ！」

シャウタ「いい子悪い子はもうどうでもいい…あのなプトティラ、サンタさんは」

V3「メリークリスマス！」 サンタの格好しながら
タトバ「やっぱりキターッ!？」

プトティラ「ぶいすりゃーせんしえーだ」

V3「いやいや。俺はサンタだぞ、プト介」

プトティラ「プト介じゃないもん。やっぱりぶいしゅりゃーせんしえーだ」

V3「V3な、プト介」

プトティラ「プト介じゃないもん」

サゴーズ「で、何しに来たんですか？」

V3「飯食いに来た」

シャウタ「なんですですか！うちは教師のクリスマス会の溜まり場じゃないです！！」

V3「あと、今日はクリスマスなのでプト介にプレゼント持って来た。どうせサゴーズが口滑らせてプト介の扱いに困ってたんだろ？」

サゴーズ「なんでそこまで詳しいの！？龍騎並みに！」

プトティラ「プレゼントあるの！？」

V3「そうだぞー。ほれ受け取れ」

【解体新書】

ガタラトサゴ「なんで変なプレゼント贈りつけるんですか！」

プトティラ「やったー！」

タトバ「なんで喜ぶの！？それ貰って嬉しいの？正直虐めレベルだよ！」

V3「あと、ガタキリバとラトラーターとサゴーズとタトバにも」

ラトラーター「マジで！？」

シャウタ「…なんかメンバーに不安が…」

【受験対策用問題集】

タトガトラトサゴ「「orz」」

タジャドル「やっぱりな…」

シャウタ「これは酷い」

V3「それから、タジャドルとシャウタにはこれな」

タジャドル「えー…？」

シャウタ「何なんですか…いらん物なら投げつけますよ」

【ポセイドンのソフビ】

タジャドル「…」 無言でソフビ足蹴

シャウタ「…」 無言でウナギムチ連打

ブラカワニ「そういえばお前ら、マイ甥っ子ポセイドンと仲悪かったっけ」

ガタキリバ「なんで仲悪いんだっけ…？」

タトバ「ガタキリバは知らなくていいよ？」

サゴゾ「後ラトラーターも」

ラトラーター「大体分かった。ポセイドンの奴、プトティラに会ったら速攻嫌われるフラグだな」

シャウタ「蛇嫌いだって言うてんのに…！」 ソフビにタコ足殴打

タジャドル「人のベルトの中にナマコねじこみやがって…！」 ソ

フビにタジャスピ弾丸連発

サゴゾ「あの日奪われたバナナの恨みは忘れない」 ソフビにズ

オンストンプ

タトバ「毛虫の恐怖は忘れない…！」 ソフビにトラクロー衝撃波
トライド『クウン（訳：そりゃ嫌われるわな）』

ガタキリバ「…今更だけど、お前ポセイドンに何かされたっけ…？俺は覚えてないんだけど」

ラトラーター「俺も知らないし…つか、あいつともう3年近く会ってないだろ…」

ガタキリバ「タマシーとはたまに会うんだけどな…」

ラトラーター「まあ、ことあいつらの実家が離れているのがなあ。あ、タマシーは仕事の関係で別居してるけど」

V3「裏事情がどんどん暴露されていくなあ」

ママン「それより、皆でローストチキン食べましょう？」

プトティラ「お腹すいたよう…〇〇」

ブラカワニ「パパン、お腹空きすぎてウンメイノー寸前」

V3「爆発か、そうなのか」

シャウタ「爆発してしまえばいいのに」

ラトラーター「その肉俺の！」

ガタキリバ「いや、俺が最初に…」

サゴーズ「久々に…まともな食事のあるクリスマスだなあ…！」

シャウタ「お前らしい加減にしないとメシ抜きにするぞ、特にサゴーズ」

タトバ（まあ、去年は直前にシャウタをブチ切れさせて…白ご飯だけのクリスマスだったから…）

タジャドル（しかも、俺は何もしていないのに煮干1匹だけ…）

プトティラ「…ところで、本物のサンタさんはいるの？いないの…？？」

全「…まだその疑問持ってたのか！」「」

プトティラ「ぶいすりゃーせんしえ、サンタさんはほんとにいるの…？」

V3「ん？サンタならいつもこの家に来てるだろ…Xと言う名のサンタが」

タトバ「ああ、この人も同じ認識だった！」

タジャドル「むしろX先生マジごめんなさい！」

シャウタ「来年以降は迷惑かけないようにしたいです…！orz」

プトティラ「本物のサンタさんはいないの…？omO」

V3「あんなプト介」

プトティラ「プト介じゃないもん」

V3「サンタさんって言うのは、サンタさんを信じる子供の所にしか来ないんだ。分かるな」

プトティラ「だってサゴーズが、うちにはサンタさんこないって」

V3「そりゃ歴史関係以外ズタボロな点数取る奴には来ないだろー」
サゴーズ「悪うござんしたねえ…！orz」

プトティラ「でも去年はサンタさん何もくれなかったもん！><」

シャウタ「去年は全員悪い子にしていたからです！」

タジャドル「だから俺何もやっていないって！？」

プトティラ「ぷう…-m-」

ママン「それにねプトちゃん、サンタさんは…子供が寝ている時にプレゼントを置いて行くの」

プトティラ「なんで？」

ママン「夜更かししている悪い子には、サンタさんが来ないからよ。だから、今日一日いい子にして…いい子でお休みなさいしたら、プレゼントが来るかもしれないわね」

プトティラ「ふう…分かったー…〇〇」

その夜：

プトティラ「zzz」 就寝中

ブラカワニ「ぐがー」

スーパード「よし、ターゲット就寝確認」 サンタの格好

V3「そのままプレゼントを設置だ」

スカイライダー「あの、なんで俺巻き込むんですか」 トナカイの格好

V3「暇そうだったから」

スカイライダー「まあ、ケーキ食べて後はテレビ見るだけでしたけどね？」

スーパード「プレゼント、枕元に設置完了。退却するぞV3先生、スイカ」

スカイライダー「そして俺の必要性は？」

スーパード「何となく」

V3「さて帰るか」

スカイライダー「プトティラが起きるといけないから叫ばないでおくけど、ふざけんなー（棒）」

翌日

プトティラ「サンタさんからプレゼント来てたよー！><」

ガタキリバ「mjd!？」

ラトラーター「翻訳すると、マジで!？」

タトバ「それで、中身は？」

プトティラ「藁のお人形さんと、ノートと鉛筆と、それから国語辞典だったよ！O O」

タジャドル「おい1番目…」

シャウタ「なんかもう、小学校低学年のプレゼント交換会のレベルだよな」

サゴーズ「せめて、プトティラが一番欲しい物を…V3先生がいる間に言わせておくべきだったかな」

プトティラ「でもこれしゅかいらいだーせんしえー達のプレゼントの中身だよ。ぶいすりゃーせんしえー2つ目だけど」

ブラカワニ「しかもばれてるね」

ママン「…プトちゃん、『先生達のプレゼントの中身』ってどういうこと？」

プトティラ「あのねー…パパンの顔の上に、別の箱置いてあったの！」

ブラカワニ「何それパパン知らないよ!？」

プトティラ「中身がねー、プトの欲しかった鍵盤ハーモニカだったー><」

タジャドル「え…一体誰が？」

シャウタ「X先生じゃないことを祈る…」

プトティラ「Xせんしえーには前の日に『何か欲しいのあるか』って聞かれたけど、せんしえーにはリンゴとか貰ったからいいよーっ

て断ったよ？omO」

トライド『グオオオン（訳：そして、何気にX先生に対して空気読んだ件について）！』

タトバ「え、もしかして…本物…？」

サゴーズ「なの、かな…」

078：お正月だよ！親戚編

シャウタ「新年！」

プトティラ「あけまして！」

タトタジャガタラトサゴブラ「「おめでとーございまーす！」」「
トライド『ガオオン！』」

ママン「今年は賑やかなお正月が過ごせそうね」

プトティラ「おしょーがつ、しょーがつ　〇〇」

シャウタ「今年の御節は、ライアのお父さんから貰ってきた伊勢海老がいます！」

ガタラト「「おおーっ！」」

シャウタ「後ついでに」

タトバ「ついでに？」

シャウタ「　X先生が1万円出費してくれた上、御節作りを手伝ってくれました…！orz」

タジャサゴ「「本当にごめんなさい…！」」

X「いや、新年ぐらいは豪華なもの食べないとな…」

トライド『グウウン（訳：先生マジ万年サントさん）』

シャウタ「ついでに、昨日の大晦日に食べたお蕎麦はV3先生のくれた蕎麦粉や出汁で作りました（3000円相当）」
プトティラ「おそばおいしかったねー」

V3「新年！」

スーパード「開けましておめでとー！」

スカイライダー「ホントごめん…！でも御節が食べたくて…」

ライダーマン「本当にお邪魔します…！」

ZX「久々に美味しい御節が食べたくて…」

タジャドル「あんたら本当にレギュラー狙ってんのかってぐらい出るよな！？」

V3「だって御節食いたいし」

シャウタ「うちの御節を食べたいなら金払え」

スーパード「新年早々容赦ないな！」

スカイライダー「でも、確かに俺達本来なら部外者だし…で、いくらぐらいで？」

ラトラーター「5000円」

V3「マジで？」

シャウタ「5000円」

V3「2000円にまけてくれない？」

シャウタ「V3先生なら3000円まで値下げする、残りは5000円…ビター文まけん！」

X「じゃあ」 5000円札出しつつ

タジャシャウ「X先生はタダでいいですむしろタダにさせてください！」

スカイライダー「俺達からお願いします！もう出費しなくていいですあんたは…！」

ライダーマン「代わりにV3先生とZX先生とスカイライダー先生とスーパード先生が、1250円追加で出しますから！」

V3「いや、お前払えよ！何自分だけ逃れようとしてるんだよ…！」

結局、じゃんけんでスーパー1が勝ってライダーマン・V3・スカイライダー・ZXが+1250円払いました

V3「でも、いっぱい作ってたな」

シャウタ「総額25000円です」

X「とりあえず盛り付けなどを頑張ってみました」

プトティラ「アマゾンはプトとベンちゃんが面倒見てたよ」

スカイライダー「あれ、もしかして泊り込みで作ってました、X先生…？」

サゴーズ「でも食べられるかな」

タジャドル「プトティラがいるから大丈夫だろ」

ママン「あら、だけど今日は確か…アクアさん達が来るって聞いたけど」

タトバ「えっ、マジで!？」

アクア「あけましておめでとう」

ブラカワニ「おー、マイブラザー!」

アクア「ブラカワニ、久しぶりだな」

ラララ「ママンさんも元気そうで何よりです」

ママン「こんにちは」

タマシー「遊びに来たぞ」

サゴーズ「お年玉プリーズ」

タトバ「プリーズ!」

シャウタ「コラ！でも御節代は寄越せ従兄弟のよしみで一世帯6000円にしておくから」

ラララ「そうですね、あなた」

パパン「パパン達も負けないよー」 ママンにハグ
ママン「あらあら」

X「駄目だこの夫婦達、早く何とかしないと」

タマシー「それ、俺のセリフorz」

ポセイドン「正月ジョークだろ！正月ジョーク…それとも本物に近い造形の龍がほしかったか！？」

シャウタ「煩い黙れ玄関で正座しとけ」

プトティラ「一歩でも家の中に入ったら凍らせるよ」

タジャドル「それか焼きポセイ井にしてやるぞ」

サゴーズ「鯨の叩きもありだよな」

タトバ「とにかく敷居を跨ぐな、家が腐る」

ポセイドン「3年ぶりなのにヒデエお前orz」

ガタキリバ「お前さ…ポセイドン、何がどうなってシャウタ達に嫌われてるんだよ」

ラトラーター「正直ありえないぐらいに嫌われてるな、お前」

ポセイドン「いや、ただ昔…タジャドルのベルトにナマコやナメクジ突っ込んだり、タトバのパンツ隠したり、サゴーズのバナナ勝手に食ったり、シャウタに蛇の抜け殻とかGの死骸を見せたりしてか
らかっていただけなのに」

タトタジャサゴシャウ「…当然だ！」「」

プトティラ「ぷきゅん！>m<」

V3「後、地味にシャウタのShout out流れてる時に逆処刑ソングにしてたよな」

シャウタ「…そうだそれもあった」 相手にしてはいけないオーラ
ポセイドン「ちよつ待て、それ違う俺！違うお前…うぎやああああ
ああああああウナギ、ウナギがああああああああ！！？」
ガタラト「（シャウタの古傷抉るのは）やめたげてよお！」

シャウタ「ぐつぐつす」 ガタキリバに泣きつきながら
ガタキリバ「あーよしよし」

タトバ「で、なんでポセイドン生きてるの？」

ポセイドン「おい質問内容」

タジャドル「なんでポセイドン存在してるんだ？」

ポセイドン「おい不憫お前こそぞとばかりに俺でストレス発散して
るだろ」

サゴーズ「何しに來たのサメクジラオオカミウオ」

ポセイドン「怒るぞサイゴリラゾウ」

プトティラ「タジャ××以上に空気吸わなくていいよ、ポセイ井」

ポセイドン「何このペット初対面の相手に失礼過ぎる」

ラトラーター「もう諦めろよ…」

ポセイドン「お前にまで言われたら泣くしかないぞ同年代」

ガタキリバ「だつてお前の味方したら、シャウタの逆鱗に触れるし
…正直シャウタに嫌われたら大真面目に生きていけないんで、」

ラトラーター「…プトティラにもまた嫌われるつてことなんで…お
前に恨みはないけど、俺達お前の味方は出来ないから…」

ポセイドン「何この四面楚歌！！orz」

V3「ま、いいや。プト介ーお年玉やるぞー」

プトティラ「プト介じゃないもん。お年玉くれるの？〇〇」

V3「ほれ」 手の平に飴玉ポトリ
プトティラ「これ何？」

V3「飴“玉”を“落とし”だから……『落とし玉』」
タマシー「せこっ！」

プトティラ「ありがとー><」

ポセイドン「アレで喜んでるし！」

タトバ「まあ、お金の価値ってシャウタ基準でしか考えない子だから……」

スーパー1「じゃ、俺はビー玉」

ライダーマン「お手玉」

ZX「パチンコ玉」

スカイライダー「毛糸玉」 オレンジの毛糸玉

サゴーズ「先生達！玉だからってそれはないと思います！！」

プトティラ「ありがと！……シャウター、お年玉いっぱい貰った！！」

><」

シャウタ「ああ、うん、よかったね……毛糸玉に関しては、今度マフラー作ってあげるからね……」

X「じゃあ500円玉……」

タジャガタラト「……あんたはいいです！」「」

スーパー1「お前が金を出したら、俺達まで金を出さないといけな
いだろ！？」

タトバ「アレで誤魔化す気満々だったんですか！」

タジャドル「第一、お金貰ってもプトティラだから……『シャウター
お金貰ったからあげるねー、せーかつひの足しにしていよいよ！O
O』に決まってますよー！！」

シャウタ「いや稼げよ、分かっているなら稼げよ！」 超速ビンタ

タジャドル「おぶっ！？」

サゴーズ「新年早々不憫な兄や……」

ママン「だったら、プトちゃんが使いたいときに使えるように、貯金しておくのもいいわね」

プトティラ「ちょきん…ハサミ！〇〇」

ママン「切ったら駄目よー」

プトティラ「ぷうーい…」

サゴーズ「じゃあタトバの全然使ってない空の貯金箱使えば？ほら、ニワトリの」

タトバ「なんで俺の貯金箱事情に詳しいのかな！？」

プトティラ「ちゃりーん」貯金箱に入れつつ

ブラカワニ「よかったな、プトティラ」

プトティラ「パパン…」

ブラカワニ「ん？どうしたマイペット」

プトティラ「…すーぱー１せんしえからのお年玉入らないよう」

T「入れ口にビー玉ぐりぐり」

X「…近場の玉で済ませた弊害が…」

スーパ－１「すまんプトティラ、１００円とビー玉交代だ。そしたら入る」

ZX「じゃ俺５０円…」

ライダーマン「げつ、小銭が１０円しかない…まあいいや、１０円と交代しようプトティラ」

V3「じゃ１円」

ライスカX1Z「…１０円以上５００円未満！」「」

V3「…５０円」

スカイライダー「じゃあ俺も１００円あげようかな…」

シャウタ「いや、毛糸玉はください。マフラー作るんで…」

079：お正月だよ！遊戯編

プトティラ「おせち美味しかった！」

スカイライダー「本当に…5000円＋ 出ただけあるなあ」

サゴーズ「っていうか、シャウタはとまかくX先生料理できたんですね…」

X「まあ、基本は自炊だから…」

アマゾン「おせち、うまい！」

アクア「いやあ、こんな大人数で食べる正月もたまにはいいかもなあ。お前」

ラララ「そうね、あなた」

タマシー「いい加減、この灼熱ファイヤー夫婦を何とかしてくれ」

タジャドル「無理」

ラトラーター「一生無理だろ」

ガタキリバ「諦めるよ」

タマシー「泣くぞorz」

ポセイドン「…」 玄関に正座＋皿の上の伊勢海老の殻を眺めつつ

トライド『グウン（訳：流石に可哀想になってきたな）…』

V3「で、あれどうすんの？」

シャウタ「さあ」

タトバ「ポセイ井だしいんじゃないですか」

サゴーズ「伊勢海老の殻があるなら大丈夫」

タジャドル「大根の干瓢じゃないだけマシだろ」

プトティラ「もきゅー」 雑煮食べつつ

X「黒豆しか残ってないけど、食べるか？」

シャウタ「あまり優しくなくていいですよ、先生！」

タジャドル「ナマコの恨み！」

サゴーズ「バナナ！」

タトバ「パンツ！」

シャウタ「…歌…出番…蛇…その他諸々」

スーパードン「でも、本当にどれぐらいの悪行をやってきたんだ？」

ライダーマン「悪行確定ですか!？」

タトバ「それは…そう、あれは俺が4歳の頃だった」

〈回想〉

ポセイドン（当時7歳）「やーい、やーい、ここまでおいでー！」

木の上に登りながら

タトバ（当時4歳）「うええええ、タトバのぱんちゅかえしてえええ」

ポセイドン「仮面ライダーだからどうせ穿かないだろ!？」

タトバ「ぱんちゅうううううううううう」

シャウタ（当時5歳）「やああああああああああ!!!」 大泣

き逃走

ポセイドン「ほーれ、蛇だぞ蛇！」

シャウタ「やああああだああああああー！」

サゴーズ（当時6歳）「あれ…ここにあったバナナは？」

ポセイドン「…げ」 サゴーズのと知らなくて食べてた

タマシー（当時12歳）「やばっ…」 上に同じく

サゴーズ「ねー、バナナ…」

タマシー「ポセイドンこれやる」

ポセイドン「は！？ちよっ、なんでバナナの皮…」

サゴーズ「 うああああああ、ポセイドンが…ポセイドンが食べたああああああー！」

ポセイドン「ちよっと待てサゴーズ、…おい自分だけ逃げるなクソ兄貴イイイ！」

タジャドル（当時8歳）「うぎゃああああ！？なんか下半身がヌルヌルするうっうっうっ！」

ポセイドン「へっへっへ！掛かったなタジャドル…お前のベルトに、ナマコを挟んでやったのだー！！」

タジャドル「ちょお待て、ひゃう、…ぬるっぬるううう！？」

ポセイドン「面白いから写真に撮ろっつと」

タジャドル「アーツ！？」

〈回想終了〉

X「…サゴーズと…あと、タマシー君はちよつと俺の前に正座しようか…？」 教育指導スイッチ完全発動まで残り3%

サゴーズ「ごめんなさい！タマシーが関与していたなんて、全然知りませんでしたー！！」

タマシー「なんかよく分からないけどごめんなさい!？」 Xの殺
気を感じ取った

Z X「新年早々、X先生の裏人格呼び出すのやめてくれよ…マジで
…」

ラトラーター「影で凄いことされてたんだな、お前ら」

ガタキリバ「同年代の俺ら華麗にスルーしてんなー、お前」

ポセイドン「やろうとしたら、ライオディアスで1時間ぐらいヘブ
ン状態突入されるの目に見えてるし…50の大軍団に喧嘩売れる根
性あったら、今ここで膝震えてねえよ!？」 Xの殺気を感じ取り
足ガクブル

プトティラ「足痺れたの?」

ポセイドン「それもあるけど、それをぶち越えた何かに怯えてるっ
てことだよ!」

スーパー1「そんなことより、皆で羽子板で遊ばないか?」

V3「おー、よくそんなのあったな」

スーパー1「スイカの家のカナから引つ張り出してきた」

スカイライダー「なんで俺の家のカナを勝手に漁るの!?!あと、ど
うやって鍵開けたの!?!?」

タマシー「羽子板かぁ、懐かしいな」

プトティラ「この羽がついてるの、食べれる?」

シャウタ「食べられません」

ママン「食べちゃったら、羽根突きできないわねえ」

プトティラ「ぶええO O」

アマゾン「クエ…」

ブラカワニ「おー、パパン知ってるよ!羽根を思いつきり、羽子板
でスマッシュして…相手にぶつけければ勝ち!!」

タジャドル「んなワケあるか!？」

スーパード「え? 負けたら墨で相手を塗りたくるんだろ?? スイカが真っ黒スイカなるぐらいに」

スカイライダー「違いますから!」

V3「とりあえず、食後の運動に遊ぶか」

ブテイラ「ぷーい! > <」

アマゾン「クエー!」

タトバ「あ、俺もやりたい!」

ラトラーター「俺もー!」

ガタキリバ「だったら、俺も!」

アクア「子供達は元気だなあ」

ラララ「そうねえ... ねえあなた、久々にブラカワニさんの所の子供達に会って... もう一人ぐらい欲しくなっちゃったわ」

アクア「そうだなあ、じゃあ、ちよつとここのベッドが茶の間を借りて子作りしちゃう?」

X「おいそのバカ夫婦、そんな気軽に宣言するなちよつと座れ」

タマシー「俺のセリフ... でも、... なんかすいません一回本気で説教お願いします...! orz」

ポセイドン「こればかりは、流石に俺も同意だわ...」

トライド「グオオオオン(訳: バカ夫婦に教育指導入ったよ...)」

ラトラーター「うおおおお!」

ガタキリバ「なんの!」

ラトラーター「そいやー!」 ライオディウス

ガタキリバ「甘い! 何度お前のライオディウスを...」「受けてき

たと思ってるんだー！」「」 分身スマッシュ
ラトラーター「こつちだって、お前の分身に伊達に18年間押し潰
されてないんだよ！」

シャウタ「何あいつら楽しそう」

タジャドル「しかも、ラリー続いてるし…」

プトティラ「プトも羽根突きしたいよー…」

サゴーズ「他にはないんですか？」

スーパー1「あー、残念ながら…しかもこれ、スイカのつていうよ
り正確に言つて、スイカのお袋さんのだから…」

ZX「友達、実は本気でX先生しかいないんじゃないんですか…？」

ライダーマン「勿論、いいほつの友達で」

スカイライダー「言わないで！orz」

V3「ふつ、こんな時のためにと持つてきておいた…これが役に立
つな」

ポセイドン「何なんだ？」 Xの説教が激化してきたので避難

V3「竹馬」

ポセイドン「なんでそんな物を持つてきたアアア！？」

V3「遊ぶ以外に、竹馬に使い道があるのか！？」

プトティラ「どうやって遊ぶの？」

スーパー1「まず、竹馬を1本持つて…それでスイカの頭を狙う」

スカイライダー「スイカ割りすんな！スイカじゃないけどスイカ割
りさせるな！！」

ライダーマン「いいや、…竹馬を両手に持つて…足を乗せる場所に
足を乗せて」

プトティラ「ぷ、ぷ、ぷ」

V3「そのまま後ろに落ちる」

プトティラ「きゅー」 後ろに落ちつつ

ZX「ちっがーう!?」 プトティラ支えつつ

V1「」 スカイライダーに踵落とし食らった

ZX「竹馬は、こうやって歩くんだ」

プトティラ「歩くだけってちゅまんなさそうomO」

ZX「いやいや、バランス取るのって結構大変だし… もっと高い位置にして歩けば、もっと不安定になるけど…それが楽しいんだよ」

V3「つまりドM育成のための遊び道具」

ZX「じゃないですよ!？」

タジャドル「ま、これぐらいは簡単だな」 竹馬乗りつつ

ポセイドン「この銚で足払いしてやろうか」

タトバ「銚なんだ、それ」

プトティラ「ぷつきゅい」 ポセイドン膝カックンしつつ

ポセイドン「おうっ!？」

プトティラ「タジャ××虐めていいのプトだからね!だからプトがする!!!><」

シャウタ「いやいや、危ないからしないの!」

ZX「そういえば、凧も持ってきたんだった」

シャウタ「あんたら、ここで遊ぶ気満々だったんですね…」

ライダーマン「ちなみに私は、コマを持ってきた」

サゴーゾ「本格的に遊ぶ気満々ですね」

ZX「やってみるか、サゴーゾ」

サゴーゾ「はい。…うちって、凧買えなかったから…タジャドルに糸をつけて遊んでいたんだよなあ」

ZX「何それ逆に凄い」

ポセイドン「…タジャ風？」

プトティラ「タコはシャウタだよ？OmO」

シャウタ「“たこ”違いなの」

ライダーマン「コマは、こうやって…こう投げるんだ！」 手本見
せつつ

プトティラ「しゅごーい！回ってるー！」

アマゾン「ぐるぐる、ぐるぐる…クエエ…」 目が回った

シャウタ「せーの！」 ウナギムチを紐代わりに

ZX「そおい！」 マイクロチェーンを紐代わりに

プトティラ「ぷきゅん！」 尻尾を紐代わりに

ライダーマン「なんか間違ってるけど…まあ、回っているしよし！」

X「 ぜえぜえぜえぜえ…あれ、なんか楽しそうに遊んでるなあ

…」 アクアラ夫婦に体力の60%持つていかれた

ガタキリバ「…さつさと落とせえええ！」

ラトラーター「お前が…諦めるおお！」

サゴゾ「ひゃっほー！タジャドルじゃない風楽しいー！」

タジャドル「よっと、ほっ…！」 竹馬の足置きかなり高くした

プトティラ「お正月って楽しいね！シャウター！」

シャウタ「まあ、そうだね」

ブラカワニ「おーい、息絶えかけてるアクアから、皆へのお年玉貰
ってきたよー！」

ママン「順番に配るから、こっち来てね。プトちゃん分もある
わよー」

タトタジャガタラトサゴシャウ「…はい」

プトティラ「ぷーい！><」

ポセイドン「『息絶えかけてる』って…何処まで説教したんだあの
人ッ!？」

X「でも、効いている感じがしない…1時間すれば、元の調子
に戻るかもしれない…orz」かなり疲弊

ポセイドン「なんか…すんません、…うちの親が…!orz」
号泣

080：兄弟面接事情

フォーゼ「あえいおうおいえあー、あーあー、キターきたーkit
ta-KITTA-来たー着たーキター」

ファイヤー「ただい…うわ、何やってんのあいつ？」

エレキ「おー。今日は早かったんだな」

ファイヤー「当直帰りだし。親父も今日は休みなのか…って言うのはさておき、ベースの奴何してんだよ？」

フォーゼ「ホワツチャー！」

ファイヤー「そして、それはお前の後輩の掛け声だろ！」

メテオ「お邪魔します。先輩、この間借りた星座の本返しに来ましたよー」

タトバ「こんにちはー。フォーゼ、この間貸したノート返して欲しいんだけど」

フォーゼ「おおー、来たかメテオ！そしてダチ公！！何もないところだけど、上がっていけよ」

エレキ「こら、勝手に上げるな！ああ、お茶菓子何処にあったっけ」
ファイヤー「適当に戸棚の煎餅あげればいいんじゃないのか？」

マグネット「zzz…」 昼寝中

フォーゼ「ほれタトバ、お前のノート！」

タトバ「ありがと」

メテオ「はい、星座の本」

フォーゼ「で、どうだった。面白かったか？」

メテオ「もう最高に！」

エレキ「いつも思うんだけど、フォーゼとメテオの宇宙オタクぶりは何とかして欲しいわー父さんちよつと恥ずかしいわー」

ファイヤー「いや…フォーゼはとにかく【宇宙】って言うのが好きでシャトルだの惑星だの無節操、メテオは星座が好きな星座オタク…妙にギリギリのラインをすれ違っているんだよ」

タトバ「…俺も正直、あんま分らないんですよ、あのコンビ」

ファイヤー「で、なんで奇声上げてたんだよ」

タトバ「正直、外から聞こえてたよ…いや、メテオの『ホワツチャアー』って叫び声が奥から聞こえてくるお寺よりマシだけど。つか、初詣に言つて早々奇声が聞こえてビビりまくったよ？」

メテオ「すいません…ジークンドーをしていると、気が高揚しまくるみたいで」

フォーゼ「メテオの奇声はしょうがねーよな。で、兄貴やタトバの質問に答えると…」

エレキ「答えると？」

フォーゼ「…面接試験で失敗しないように、まずは発声練習してたんだよおお…！orz」 面接関係の本見せながら

タトバ「うわぁ、現実的」

メテオ「それで奇声上げてたんですね」

タトバ「正月早々『ホワツチャアー』という奇声でシャウタ驚かせて、ついでにプティラが真似した原因作ったメテオが言う？」

マグネット「むに…あー、『ほわちゃー！』のひとだー！！」

メテオ「orz」

ファイヤー「いや、それならさ、面接のコツをタトバから聞けばいいんじゃないか？この際」

タトバ「ええーっ!？」

ファイヤー「だって、お前の家って上に4人も兄弟いるんだろ？」

メテオ「そっか。だからタトバ先輩、面接練習しなくても余裕なんですね」

タトバ「いや、面接練習ってこの追い込みシーズンですることじゃないと思う…やるべきはまず、受験勉強からだと思う……」

フォーゼ「面接で落ちたら元も子もないだろ!？」

タトバ「そりゃそうだけどね!？」

マグネット「ぶーん!」 磁力でビリーザロッド引き寄せながらエレキ「こらー、悪戯やめなさい!」

ファイヤー「…あの追いかけっこ軍団は無視して。それでも、参考にはなるかもしれないだろ」

メテオ「4人連続で一文字高校に通っているんですし、やっぱり面接による所が大きいんじゃないかと思うんですよ」

フォーゼ「特に…緑と黄色と白の兄貴な？」

タトバ「ええー…まあ、スカイライダー先生とかからその時の話は何回か聞いているけどさあ……」

〈回想〉

★タジャドルの場合

スーパー1「それでは自己紹介を」

タジャドル「受験番号10262番、本郷町立村雨中学校のタジャドルです」

スーパー1「はい、それじゃあ…まず、自分の性癖をSかMで」

タジャドル「はい。強いて言えばM………って何を言わせるんですかッ!？」

スーパー1「タジャドルはM…と」

タジャドル「そして何故メモする!」

スーパー1「今現在、部活動をしていますか？」

タジャドル「はい。三年間、弓道部に所属して、県大会でも何度が賞を取りました」

スーパー1「弓道か…嫌い相手の尻に矢を正確に当てて、切れ痔にすることも出来るんだな」

タジャドル「は…だから質問が!」

スーパー1「得意科目は何がありますか？」

タジャドル「…はい。苦手な科目は特になく、好きな科目は数学です」

スーパー1「将来の夢とかはありますか？」

タジャドル「はい。昔から、教師になって勉強を教えるのが夢で…」

スーパー1「…今のうち、ぶっちゃけとくけど…教師の仕事って、楽しいとかそういうの超越して疲れるからな？」

タジャドル「将来を語っている時に何を!？」

スーパー1「いや、だってそうだろ。授業中に寝るのとかいるわ、隠れて携帯弄っているのいるわ、そういうのって注意しても別の授業なんかでまたやっているって聞くわ」

タジャドル「…はあ…」

スーパー1「いちいち（折檻的な意味でも）指導しているこっちの身になってほしいと言つか、俺だってあまり怒る方面で無駄な労力

使いたくないんだよなあ……」
タジャドル「（ ）の中身イイ!!」

＊ガタキリバの場合

サイガ「それでは、次の生徒…自己Appealをするでござんす」
ガタキリバ「（ござんす…？）はい、村雨中学のガタキリバです」
サイガ「Oh、Got to keep it real君である
ザンスね？」

ガタキリバ「ガタキリバ！ガーターキーパー!!」

サイガ「それではGKB君」

ガタキリバ「なにその女子ユニットみたいな名前！」

サイガ「あなたの好きな科目はなんでゴザルますねん？」

ガタキリバ「えっ…と、ええっと…あの、……強いて言えば…その、
………国語…かなあ…？」 脂汗ダラダラ

サイガ「Oh！汗が噴水のように湧き上がってGoでありんす！！
Very fantasticネ!!!」

＊ラトラーターの場合

ZX「俺事務員なのに…事務員なのに、人手足りないからってなんでorz」 巻き込まれた
ラトラーター「ドンマイっす」

ZX「まあいいや…ええと、それで…名前と、出身中学を教えてください」

ラトラーター「村雨中学のラトラーターです！」

ZX「それでは、中学時代に…」

ラトラーター「中学では、三年間陸上部で短距離走をしていました！県大会にも出て、何回か優勝しました！！」

ZX「（あ、ホントだ、内申書にも書いてあるし…スポーツ特待で受験してるなコイツ）それで」

ラトラーター「中学時代で一番思い出に残っていることは、修学旅行で長崎に行ったことですね。最初は学習授業の一環で行くことになって、退屈だったんですけど…」

ZX「いや、ちょ」

ラトラーター「実際に長崎に行ってみると、目新しい物ばかりで、特にビードロの絵付け体験は普段できないことだから…あ、ちなみにそのビードロは玄関に飾って」

ZX「俺にも喋らせてエエエ！？」

この後15分近くベラベラお喋り…否、面接で自己アピールをしていました

*サゴーズの場合

サゴーズ「（うう、緊張するなあ…）……失礼します」

スカイライダー「どうぞお掛けく…あれ、サゴーズ？」

サゴーズ「あー、スカイライダー先生ですか！確か、ラトラーターの担任の」

スカイライダー「そうそう」

サゴーズ「うわー、スカイライダー先生かあ…よかったー」

スカイライダー「まあそれはともかく、面接面接」

サゴーズ「あ、ですよ…すいません、はしゃいちゃって」

スカイライダー「一対一だからまだいいかもしれないけどな…それでは、名前と出身中学を」

サゴーズ「村雨中学三年C組のサゴーズです！」

スカイライダー「それでは、趣味などがありますか？」

サゴーズ「時代劇鑑賞です。ただ、友達には『趣味が古臭い』だの『白色だからってそんな無個性一直線の趣味ねーわ』とか言われたりしているんですけど…」

スカイライダー「時代劇といえば、この間暴れん坊將軍の再放送があつたよな？」

サゴーズ「そうそう！あれは良かったですよね…って、先生も時代劇見てるんですか！？」

スカイライダー「中の人が時代劇俳ゆ…ゲフン。まあ、昔からテレビで見たりビデオに録ったりしていて、何度も見返して……お陰様で小学校から大学在学中まで、X先生以外の友達でできなかったな…」

サゴーズ「この間の暴れん坊將軍って、
が××で…」
スカイライダー「そうそう！
で
になつて…」

マイティ「前の人…」

タイタン「…長いなあ…」

スーパー「次の人…あ、もう並んでなかった。仕方ないからそちの教室の受験者、こっちで面接しなさい」

タイマイ「はい」

その後、30分近くサゴーズとスカイが時代劇を熱く語っていました

*シャウタの場合

シャウタ（どうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう
どうしようどうしようどうしよう）
緊張しまくり

V3「次の生徒」

シャウタ「ふえあい!？」

リュウガ「落ち着けお前は！」 順番待ち

シャウタ「し、失礼します…！」

V3「やつほー」

シャウタ「…村雨中学三年シャウシャしゃしゃしゃさyささrじえ
jぽあういqm0q3@oriualhjd(ry)」

V3「ちよつと落ち着けお前」

タジャドル「どうしたシャウタああ！」 試験手伝いの立場
を利用して乱入

シャウタ「何入ってきてんだアホ兄！」 ウナギムチビンタ

タジャドル「めるとだうんっ!？」

タジャドル「 気絶

ラトラーター「退散するぞこのシャウコン」 同じく手伝い

ガタキリバ「まったくだ、何とか受かったからってこのシャウコン」

同上

シャウタ「あーちよつと気が楽になった」

V3「いつも思っていたけど、お前らの家族構成ってあんまり親と
似ていないのな」

シャウタ「…あれ、面接官ってV3先生だったんですか？」

V3「お前ただけ緊張してたの？」

シャウタ「目の前の面接官の顔が分からないくらいには」

V3「お前マジその人見知り何とかしたらどうだ、タジャドルが自
分の試験相談そっちのけでお前の面接の方を泣きながら心配してた
んだが」

リュウガ「…長すぎだろ」

オーガ「前の人長いなあ…ねえ、君もこの中学受けたの？」

リュウガ「まあ、家から近いし」

オーガ「僕は今度本郷町に越してくるから、この高校受験したんだ

「同じクラスになれるといいね」

リュウガ「そうだな……それにしてもシャウタの奴、アガリ症のクセに長すぎじゃないか……？」

この後1時間は、V3とシャウタで上4人についての話・リュウガとオーガは雑談して暇潰ししていました

＊プティラの場合

X「はい、それでは……名前をどうぞ」

ZO（X先生よくやるよ……）

J（ところであのペットに面接って出来るのか……？）

プティラ「あい！……プトはねー……ぷとちら、あう、ぷちよ……ぷぷ……ぷにええええええーッッ」

X「プティラな。それじゃあ、プティラの好きな教科は何かかな？」

プティラ「えとね、全部好きだよ！スカイライダーせんしえの授業とかー、ぶいすりゃーせんしえーの授業とかー皆好き……！」

X「じゃあ次に、プティラが学校生活を送ってきた中で、一番の思い出を聞かせてくれるかな」

プティラ「あい。……んーと、運動会！運動会でね、玉入れとか綱引きとか、色々したの……！楽しかった……！」

X「それじゃあ最後に、プティラはどうしてこの学校を受験しようと思ったのかな？」

プティラ「おじゅけん？O O」

X「……しまった、ついプティラに関係ない質問してしまった……」

プティラ「おじゅけん分らないけど、この学校にはアマゾンと遊びに来たの！でねーえつくすせんしえーとアマゾンが“めんせちゅ練習”してるから、プトも混ぜて欲しいなーってお願いしたO

「O」

X「よし、読者の皆さんに分かる説明ありがとう」

「回想終了」

フォーゼ「プロテイルが一番まとまじやね？」

エレファイメテ「「「確かに」」」

タトバ「だよー！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7628t/>

どたばた！オーズ兄弟

2012年1月10日15時57分発行